明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十二年九月一日發行毎月一回一日發行



女學世界

第九巻第十一號

九月號

博文館發行


高等化粧用
美顔水
びがんすい
順天館桃谷製
海水浴の
為に日にやけし時
あせも。に困る時
かゝる人は
一日も忘るべからざる
適當なる
化粧水
なり

十月一日より

一第十八回新柄陳列會

一懸賞課題裾模様圖案陳列

一和洋小間物新製品陳列會

一懸賞募集優等寫眞陳列

一時代風俗參考品陳列會

一寄せ裂れ見切り反物大賣出し

東京日本橋駿河町

三越呉服店

地方註文御案内書は御一報次第送呈可仕候

（振替貯金口座番號東京三〇〇番）



女學世界第九巻



第拾壹號目次

東京京橋南傳馬町

電話本局三十三番三千番 ◉ 振替口座九二九三番

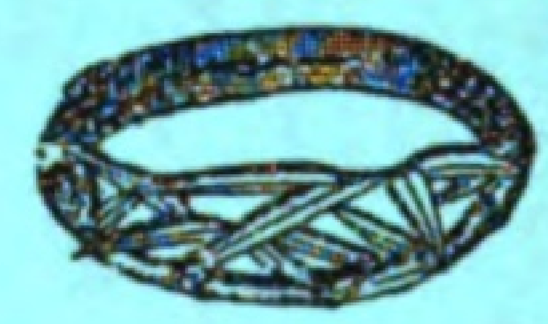
流行彫指輪　大西白牡丹

1



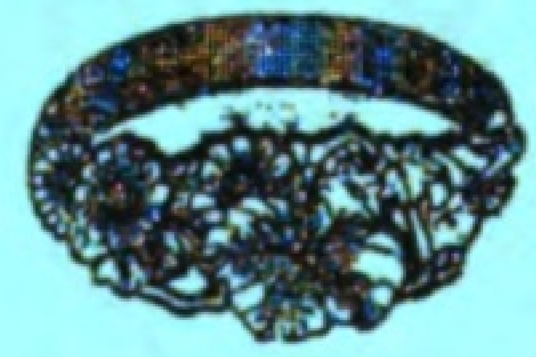
廿二金 白金
色繪柳櫻
金廿三圓

2



廿金笹ノ圖透シ彫
金拾四圓

3



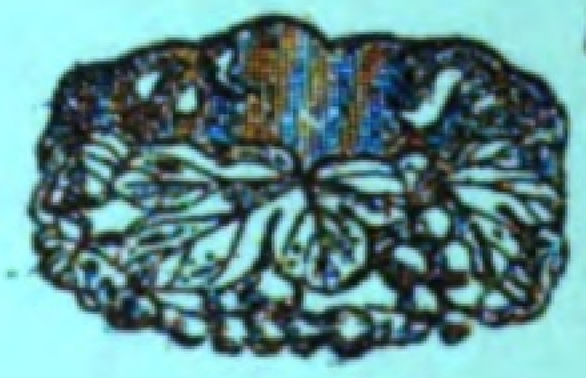
廿金 白金
色繪菊桐
金拾八圓

4



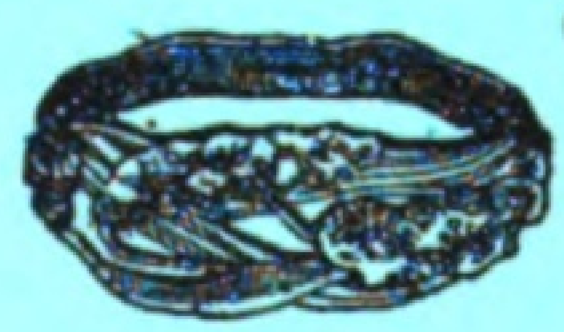
廿二金銀杏
眞珠三個入
金拾六圓

5



廿二金葡萄
透彫眞珠入
金廿三圓

6



廿二金栗穗
金拾八圓

7



廿二金菊水
ダイヤモンド入
金四拾圓

8



廿金酢漿草
金拾九圓

9



廿金水ニ撫子
金拾五圓

10



廿二金椿ノ圖
ダイヤモンド入
金廿九圓

11



廿二金白金
色繪浪千鳥
金廿貳圓

12



廿金 白金
色繪月ニ雁
金拾貳圓

女(いの一)



特製香油
本舗
東京日本橋区人形町通堺町
井筒屋香油店
電話長浪花六五番



偽物御注意
アイボリー石鹸
家庭及化粧用
とりて天下一品
IVORY

女(いの二)

女子文壇 第四增刊 大懸賞募集

家庭日記

日記は其日〳〵の出來事を書くものですが、只心覺えに書いて置くものと、少し氣を付けて書くのと二通りあります、今回本誌第四增刊として『家庭日記』を募集いたしますから、之を幸ひとして少し氣を付けた日記を書いて頂きたい、家庭日記と言ひましても、廣い意味ですから、必ず家庭的に書かねばならぬと云ふ理由はないので、皆さんが常住座臥の間から材料を見出して新しい考へ、新しい意味、新しい感興さへ喚起せば好いのです、寄宿舍に居らした處がそれを一つの家庭と見做して差支えないのです、要するに皆さんの生活に伴ふて起る出來事と其出來事に就いて何等かの心持とを明白に、誠實に、而して全力を擧げて書いて頂けば澤山です、日記以外に短篇小說、美文、新論文、書簡文、詩、和歌、俳句等も例の如く募集いたしますから、何うか今より心掛けて好い作を寄稿して下さい。

▲懸賞募集項目と賞金額

日記
- 一等 正金拾五圓
- 二等 正金拾圓
- 三等 正金五圓
- 四等 正金四圓
- 五等 正金參圓
- 自六等至十等 各正金貳圓

▲原稿は二十四字詰百行限り振假名付ける事

小說 天 金七圓、人 金貳圓、地 金五圓、(物品贈呈)

▲原稿は二十四字詰百行限振假名付ける事

美文○論文○書簡文 新體詩○和歌○俳句 天 金五圓、人 金壹圓、地 金貳圓、(物品贈呈)

(▲美文、論文、書簡文は廿四字五十行限。詩は長短隨意假名付。和歌俳句は十首迄を限る)

圖書(三寸の二寸大さにて薄紙を用ふ) 自一等至十等 圖書切符贈呈

▲投稿締切九月三十日 發表十一月十五日

投稿心得

▲投稿の封筒には「家庭日記原稿」と書き添えること▲投稿は女子に限るべし▲紙上には匿名差支なけれど原稿の片端へ住所本名を明記すべし▲原稿は明瞭に認むべし▲はがきに書したるものは一切採用せず▲入賞者には前以て通知する筈なれば其時は寫眞を送られたし▲賞金品は作物發表の翌月末に贈呈

募集發行元 東京市京橋區大鋸町 女子文壇社


口中香錠・懐中良薬
ゼム
Gem
お徳な包の新提供
新製品益用包は十錢 正味四包分に優美なる雲上形容器を添へ定價三十錢
ゼム定價
小包 十錢
大包 二十錢
小箱 五十錢
大箱 一圓
容器入 廿錢
益用包 卅錢
朝夕の風稍涼しうなりぬ。時候の變目には病多しといふ。倍々ゼムを愛して御身御要心の程をこそ……
□人込に出る時
□物事を考る時
□立働きする時
□食事する時
△疲勞を休めて
△病氣に罹らぬ
△元氣に働いて
△愉快に暮すは
ゼム常用の徳

女(いの四)

夏の椽



高村眞夫筆

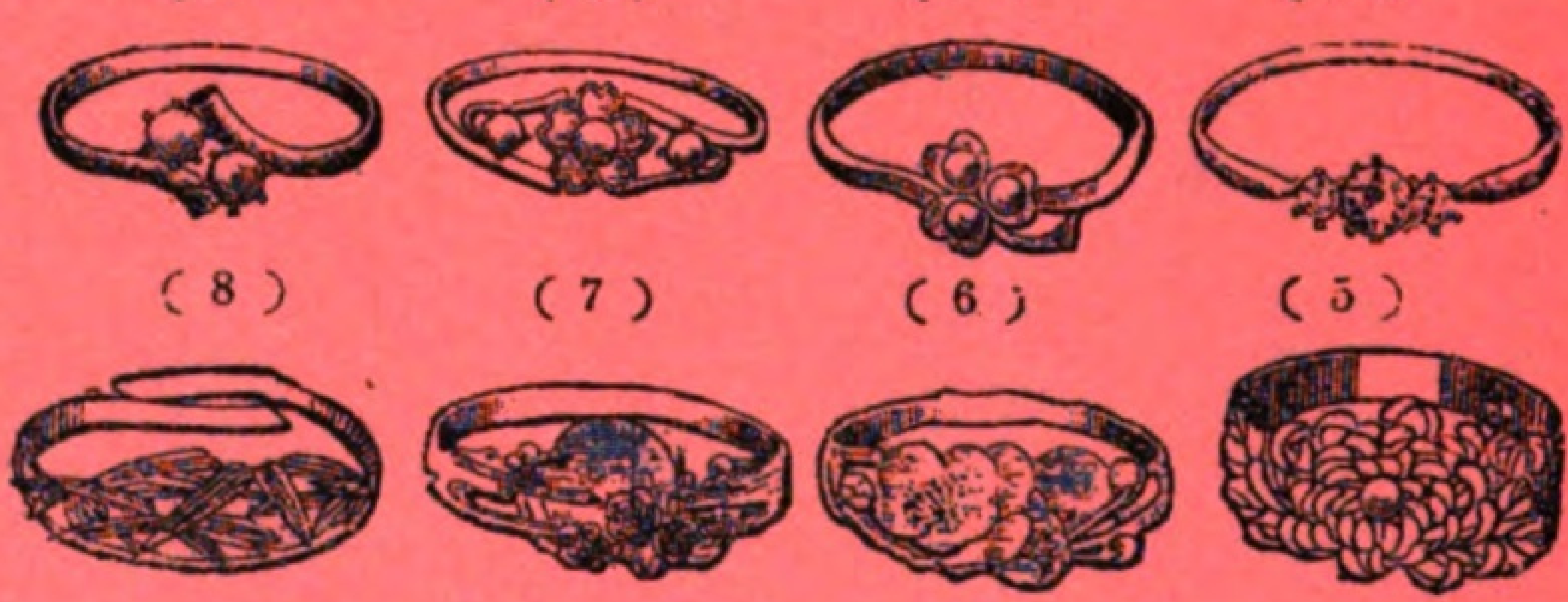
田中製版所三色版



（ろの一）

女（ろの二）

新流行指環



（1）K18 中天ルビー両端ダイヤ入 金参拾圓

（2）K18 クラブ形眞珠入 金拾貳圓半

（3）K18 横爪眞珠入 金拾貳圓半

（4）K18 眞珠入 金拾圓半

（5）K22 菊花透明 金貳拾参圓

（6）K22 梅花彫白金入 金拾五圓

（7）K22 月ニ梅白金入 金拾参圓

（8）K20 竹彫白金入 金拾圓

商品目録出來仕候（送料四錢）

今川橋
松屋呉
服店前

東京市神田區鍛冶町

白牡丹中西

電話本局二〇四〇番
振替口座一五二二四番



衛生美顔術
（一回施術料金五拾錢）

美顔術實驗有効

御化粧水
ライラック水（一瓶卆十錢 送料八錢）

にきび知らず
理容水（大五十錢 小三十錢 送料八錢）

芳香無鉛
理容白粉（一瓶卆十錢 送料八錢）

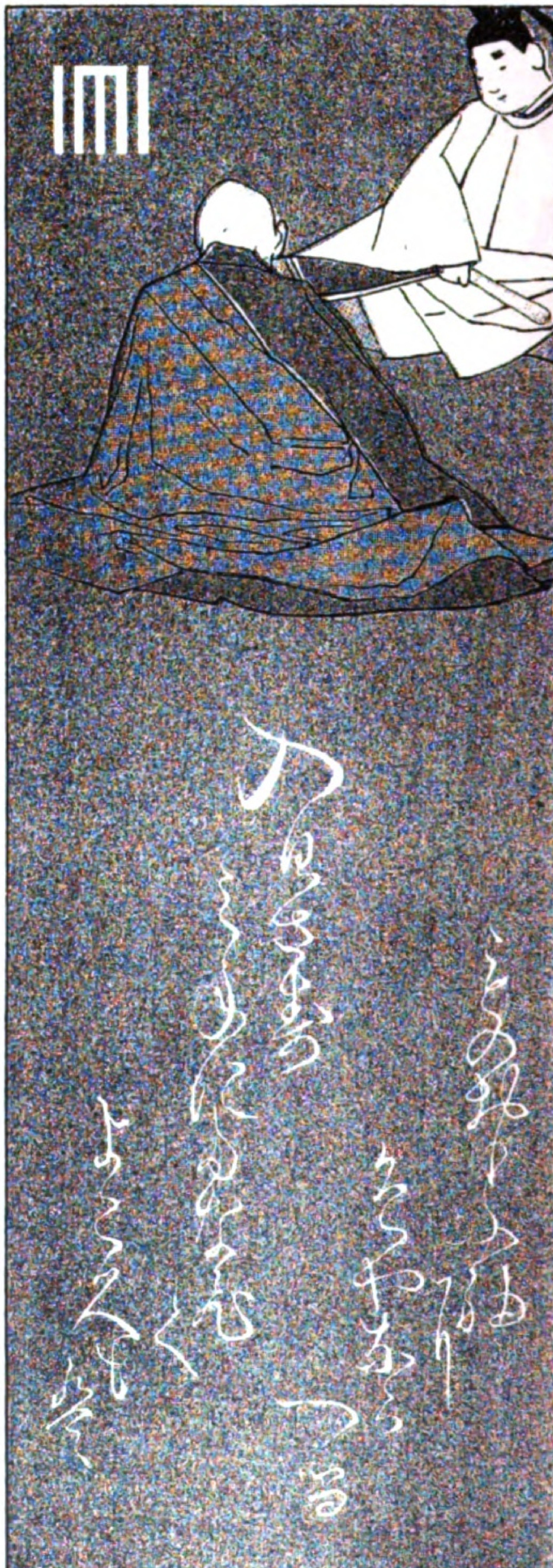
東京市京橋區竹川町十二番地
理容館本部
電話新橋三二八〇四番

朝がほ



一條成美筆

薄雲



ネッスル、コンデンス、ミルク

育兒に必要なる



最良滋養品

ネッスル、ミルク、フード

見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲勿驚……藥力最精實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞贊良藥

改良 女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉肥滿病新藥◉（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶと〳〵ふとり血太り◉肉太り◉酒太り◉水太◉顏赤◉にきび◉ふき出物多き輕症一二劑如何程の惡性も四劑連服せば色は窈窕たる美顏美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

美人となる



やせる藥

價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 四劑五圓半 送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 小宮愛生堂

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

蹄鐵印

シヤターリヨン葡萄酒

●藥用飲料並ニ食卓用進物トシテ最モ妙ナリ

●至ル處取次店アリ



發賣元 東京本町 鈴木洋酒店



家庭の養鷄

●臺所の廢棄ものにて新しい雞卵が得られます

●文明の養雞は巣鷄を用ゐず器械で雞を孵す事が出來ます

●詳細は月刊『養雞の友』にあります、御通知次第見本進呈致します

東京中澁谷三八六 尾崎兄弟飼禽場

東京早稲田 舊大隈伯爵家養鷄場

女（はの二）

如何なる婦人も見逃がせぬ大問題を見よ

婦人世界

九月一日發行 四巻拾號 一册 拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分二圓五錢

◎嫉妬は果して婦人の惡徳か……村井弦齋

▲不良少年を感化して成功せる私の苦心……櫻井圓次郎

◎御前講演の秀才を出せし家庭教育……梨本宮家令 坪井祥

◎良人と共に樂しむ私の家庭の遊戯……義雄氏夫人 高橋千代子

▲轉地修養中の女子大學夏季寮を訪ふ……一記者

△一週間斷食して水垢離をとりし實驗……實驗者 川田作子

△日本の人妻となりて舅姑に感心されし英國婦人……婦人の舅 鈴木眞

△大阪の大火に類燒して得たる教訓……罹災者 桑原直子

△東京腦病院を訪ひて婦人精神病者と語る……記者

▲九十歳の長壽を保つ老夫婦の家庭を訪ふ……一記者

◎海水浴にて溺死しかゝりし當時の實際……遭難者 尾島菊子

◎女髮結が良人を助けて成功させた實驗……女髮結 長澤常子

▲出産のため轉地療養中の西洋婦人訪問記……婦人記者

◎巴里籠城中に見た佛國婦人の働き……貴族院議員 渡正元

東京 實業之日本社 （郵便振替貯金三二六番）

女（はの三）

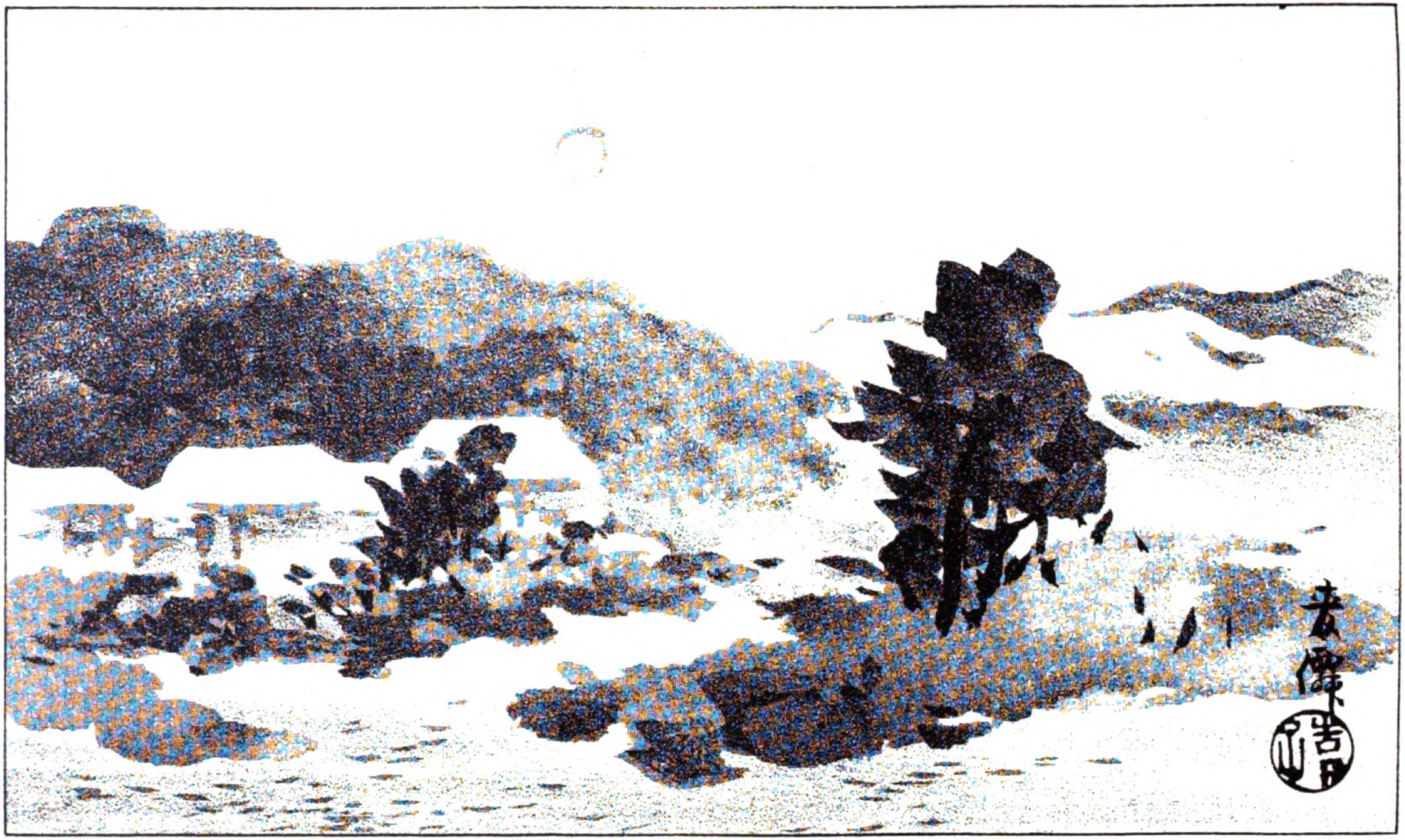
女（はの四）

ひるがほ



加藤南山筆

良夜



福田麥僊筆

婦人画報

毎月一回一日發行　九月の卷　九月一日發行　定價一冊二十五錢　郵税二錢　六冊前金　郵税共一圓五十錢　十二冊同二圓八十八錢

畫報

◉初秋の風　井川洗厓筆　彩色美人畫
◉北白川宮葉山御別邸
◉涼氣滿袂
◉この花會員の富士登山……
◉朝顔につるべ取られて貰ひ水……
◉小兒のいろ〱
◉妃殿下の御散歩
◉梨本宮兩殿下の御歸朝
◉清國の二親王妃殿下
◉貴婦人と數名家令孃鑑
◉當世婦人の風俗
◉葉山に於ける細川侯高崎男
◉北里松尾首藤諸名家別邸
◉輕井澤に於ける女子大學生…
◉御前揮毫の少年少女…
◉女流碁客と双六
◉流行の髷
◉各女學校の夏期講習…
◉島津公爵培養朝顔
◉小兒玩具
◉新郎新婦瓶華
◉其他數十……

讀物

▼家庭に清新の氣を入れよ　下田次郎
▼女に必要なる滑稽趣味　巖谷小波
▼秋の景色と衣服の色　大原鉦一郎
▼訪問日記　廣岡夫人
▼日本婦人の美點を失ふ勿れ　男爵高崎正風
▼初秋は眞面目に物を思ふ時　十五銀行頭取園田孝吉
▼臺所拜見
▼避暑中娘の家政練習　遠山稲子
▼虎の威を假る狐　大町桂月
▼新秋の好期を利用せよ　下田歌子
▼身たしなみのよい婦人と惡い婦人　泉鏡花
▼子供に持たせる玩具　高市次郎
▼家事經濟と芝居　小野崎中佐夫人
▼お氣の毒な衞生家
▼偕老同穴……
▼流行はき物の好み……
▼瀑音　岡田八千代
▼子クタイ仕立方　秦校長
▼和歌……
▼月見料理
▼育兒
▼美文九月　水穂

女(にの三)

東京飯田町四の四　東京社　電話番町二三三九


眞夏日を心
地よく海水に浴し
つゝ夏知らずに過ごす程
愉快なるはなし婦人方が御容色
の生命たる白玉の肌の日に焼けて色
避暑地の化粧と大學白粉
黒くなる恐ある忘れ給ふな是れが夏
知らずに樂しく海水浴せらるゝ
には朝な夕なのお化粧に
大學白粉を怠ら
ず用ひ給
え

前田侯爵夫人漾子



名家の令嬢



右　酒井伯爵令嬢彰子
中　松平子爵令嬢信子
左　牧野男爵令嬢雪子



衛生改良酢發賣

貳合入壜詰一本 金二十錢
送料 十二錢



本品二合は普通品の二升六合に當る

在來の食酢は腐敗し易く貯藏法に至難なるも本品は防腐性を有する醋酸を資料とせし者なるを以て有害なる黴菌を生ずる憂なく永久不變なり而かも之れを菜肉に使用して風味云ふべからず是れ本品の特點にして殊に**衛生酢**と命名せる所以なり家庭に於て御試用の上御高評を希上候

東京日本橋區本町三丁目

藥種貿易商 合資會社 **博愛堂**

電話本局長二八六番
振替口座東京八八二三番

◎產婦人科
◎小兒科

病室並ニ產室ノ設備アリ隨時入院ノ需ニ應ズ

宅診 午前
往診 午後

院長 女醫 鷲山彌生

東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院 電話番町(二三五七)

腋臭防止器

產科婦人科専門 神尾道喜氏考案

東京大學醫院の中野醫學士が、毎日電報に腋臭は藥では癒せないといふ醫説を述べられてある通り、腋臭に藥は望ないので、本器が考案されてから初めて完全に腋臭を防ぐことが出來る樣になりました、破損の虞なく、身に着けて居るか居ないか分らぬ程で、しかも能く惡臭を防げますから、一組御試用下さい、男用女用の別があります、當分何れでも送料とも**代價金八拾錢**で御送りします

東京市牛込區甲良町七番地 振替貯金口座東京壹九六〇〇番

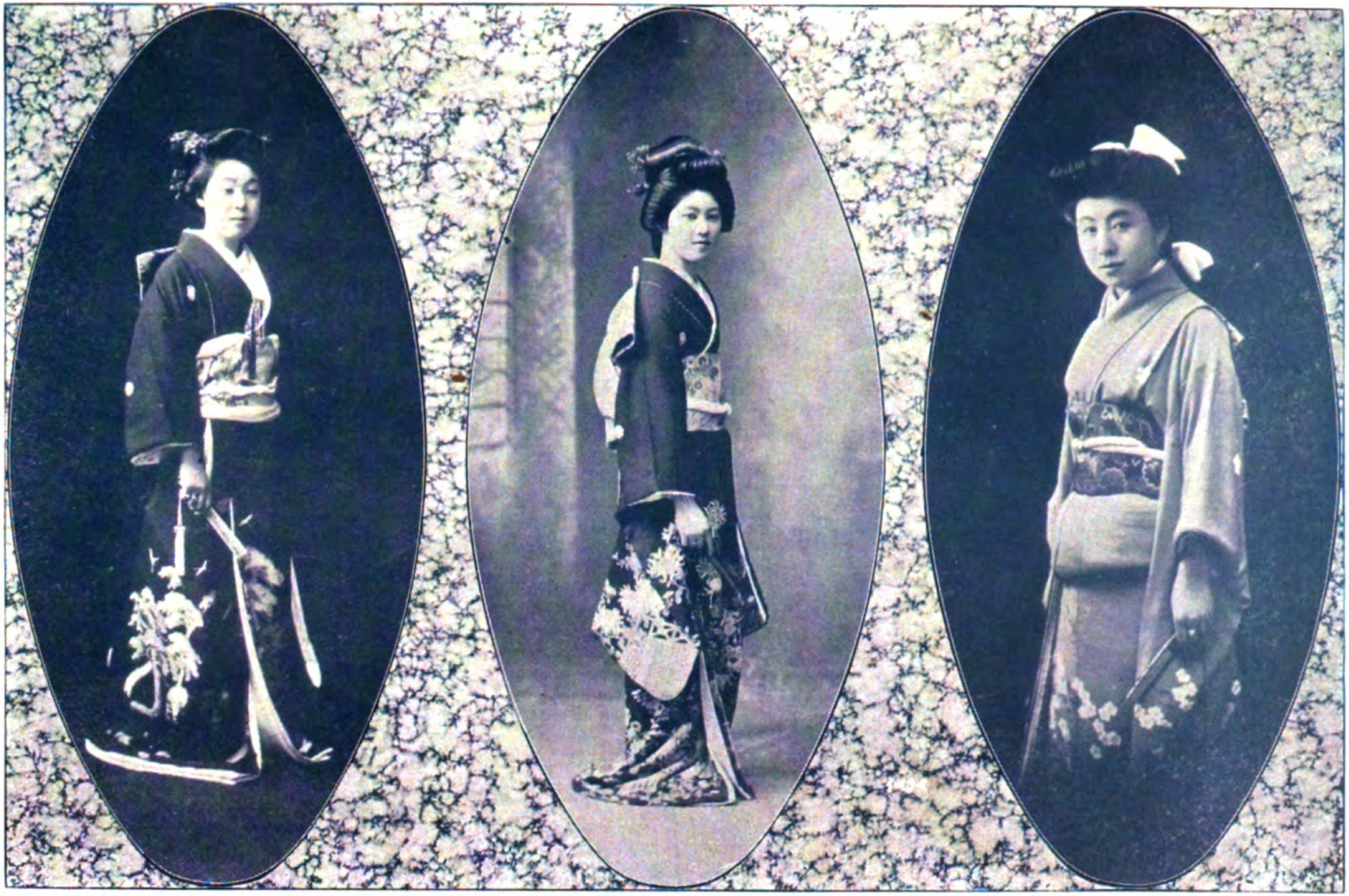
有恒社

女(ほの二)


REX
SOAP FLOATS
英國製實用浮
レックス石鹸
佛國製
ケーバ
石鹸
香水
CHIKUMA
REX
REX FLC
REX
REX
MNIUM

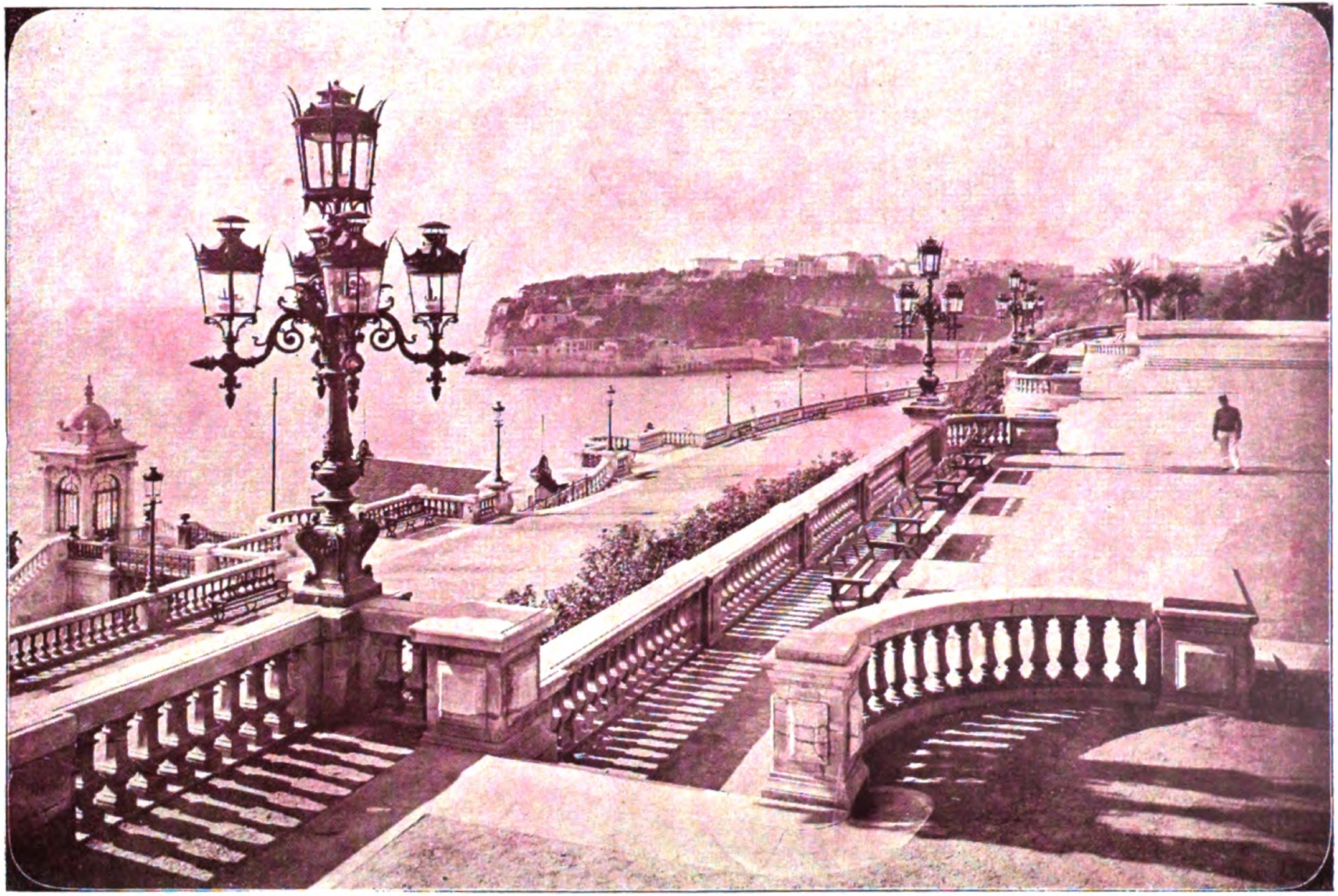
女(ほの四)

名家の令嬢



右　醫學博士岡田和一郎氏令孃和子
中　阿部泰造氏令孃りう子
左　法學博士岡村輝彦氏令孃幸子

虚榮の橋



モナコ國地中海岸の遊覧場
前方に見ゆるは首府モントカロー

高貴御用

美顔タオル



松平子爵夫人談

眞の美人となる

は常に顔面生理組織を營養し生彩を艶美にせざれば、如何なる精良高價の白粉や化粧料を使用するも到底眞の美を發揮する事はできません、のみならず知ず識ず恐るべき病に罹るものであります、此の美顔タオルには、効力偉大の美顔營養料と理學的装置（イロハ）とがありまして、誠に能く顔面生理組織を營養し、人に羨るゝ程素顔を艶美にしますから、衛生を重じ化粧に注意する方には、必須の品と思ひます。

定價

特製　壹個　金壹圓　美顔營養料二百五十日用分付

甲種　壹個　金六拾五錢　美顔營養料百五十日用分付

乙種　壹個　金五拾錢　美顔營養料七十五日用分付

市内は御報次第無料配達地方は送費八錢申受く

醫學大家の實効證明及使用法は往復はがきにて申越あれば直に呈送す

東京市京橋區新富町二丁目五番地（電話新橋三九四一番）

發賣元　合資會社　伊藤商店

振替貯金口座一八五四六番

市内は白木屋、松屋呉服店、愛國婦人代理部、大木合名會社、御園商店、徳田賞花堂等最も有名なる洋品化粧品店にて販賣す

（女への一）

關西音樂團女子部



甲了孝仙氏、同濱江嬢の組織にかゝる同團が六月十三日大阪市中の島公會堂にて演奏會を催したる時の紀念撮影


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
最上醤油之元祖
開業貳百六拾五年
千葉縣銚子町
醸造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

女（その一）

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥

サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)従來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓貳拾錢也

●らい病根治新劑

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

癩病患者の新福音 ―最新發見藥―(レプロイス)

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿状菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見を理とし基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に誤合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の惡説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、本輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本館及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續續怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者に速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割増しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

衣服洗淨

一名シヤボンイラズ



にきび 吹出そばかす

を絶對に全治し皮膚を艶麗ならしむる最新奇薬發見す

醫薬其効なき困難者は申込あれ詳細の療法書を送呈す

東京下谷區初音町日本女子美術學校前 長田

●佛國土産の最新白色新劑

色黒き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈して敎ゆ

愛隣薬院

東京大森停車場上山王



●博文館圖書陳列所

館内に設あり

洋画講義録

洋畫講義録は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に詳述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯

三宅克己先生 岡田三郎助先生 大下藤次郎先生 中澤弘光先生 外大家十數名

東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

繪画講習録

繪畫講習録は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に敎授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿す、毎月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯

川端玉章先生 荒木寛畝先生 寺崎廣業先生 梶田半古先生 外大家十數名

●小兒五かん驚風 ●蟲おさへ

登録商標 (八)

小兒蟲一切妙藥

本方 奇應丸

定價 金五錢 金拾錢 金廿錢 (遠國送料金貳錢)

發賣本舗 東京市京橋區銀座三丁目 (八) 松澤商店 (電新五三四)

賣捌は全國諸々藥舗賣藥店に特約あり

女(その三)



菊の露おしろい
白粉中の女王
卓絶せる『菊の露』おしろいの特長は無鉛、無菌、防腐豫防、細粉にして附着好く芳香高く日本人の肌に調和するものなり、と答へ得る人は『菊の露』おしろいを用ひたる人より他に知るものなし、この利を知る人は眞に化粧を解する婦人なり
煉香油パール本舗
東京横山町
平尾 店

女(との四)

蟲の音



女(ちの一)

化粧界の新福音

輕便白粉



大瓶 卅五錢　小瓶 二十錢

本品は米國に於て最新發明にして化粧界に未た見ざる處の學理を應用して調製したる無色透明にして有益無害の輕便美顔劑なり其特効は第一顔面其の他皮膚一切の汚脂を除くと同時に忽にして皮膚の艶を美麗且つ滑になし第二は使用者の手加減に依り濃くも薄くも自由自在に一種云ふ可らざる高尚優美なる化粧をなし得る頗る至便の良劑なれば貴婦人令孃方を始め一般婦人界には片時も缺くべからざる眞の理想的新化粧水なれば速に御實驗の上御高評あらんとを乞

第三百五十八號衛生試驗所の無害の報告あり

芝區愛宕町二、二　**美賞堂**

特に

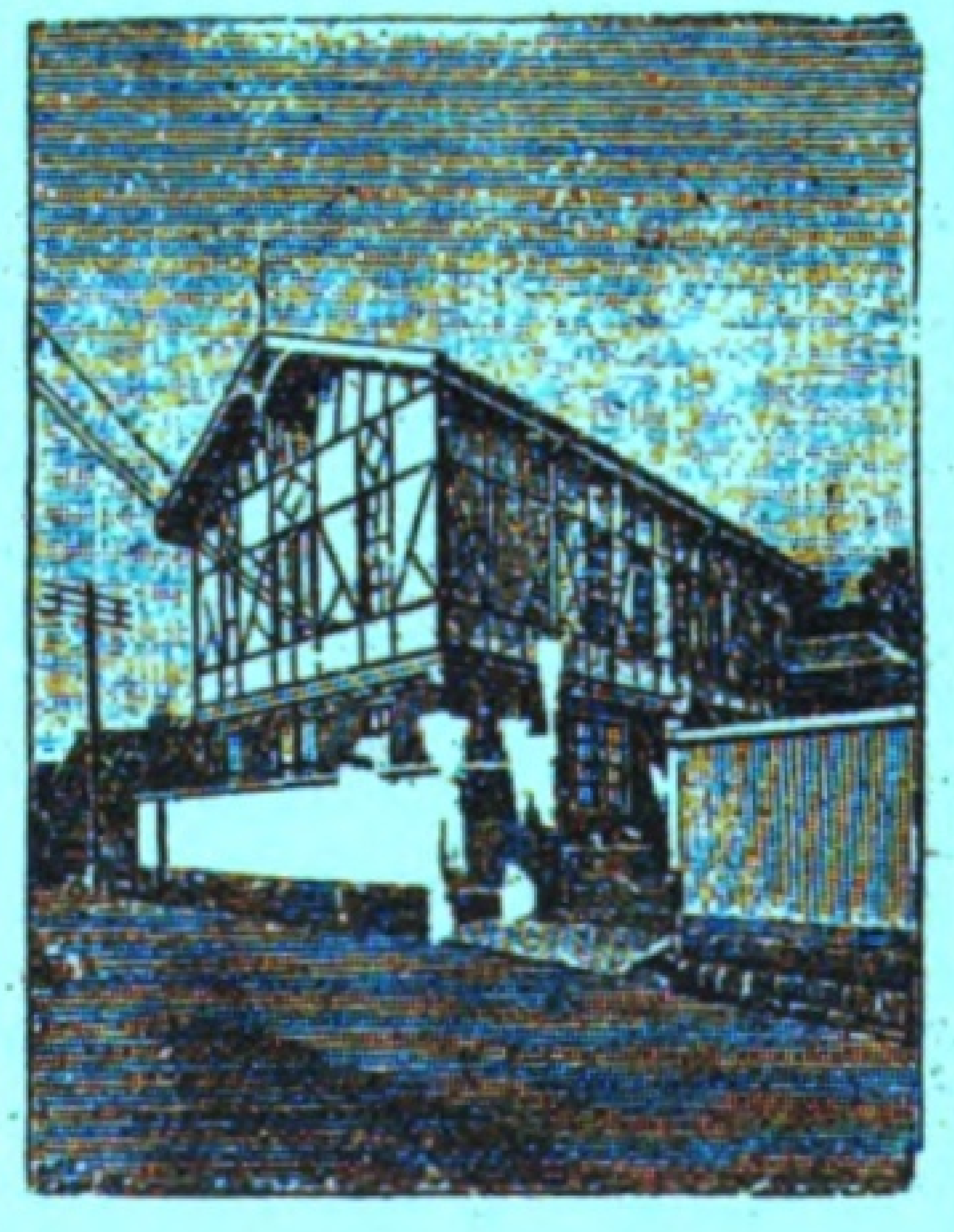
花柳病専門

慢性淋疾梅毒

診療　●午前 ●午後 ―― 日曜の夜間に限り休診

東京市本郷區本郷座東隣

羽太醫院



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

來九月六日ゟ始業　各科共生徒ヲ募ル　詳細ハ照會アレ

ちじれもくせも　一大奇法　もはへらけあい

本法は**女髪結師安部歌子女史**の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり紹介者は往復はがきにて申込あれ

東京市麹町區三番町六十七

小林濟世園

女（ちの三）

慈愛篤き親御樣は見落し給ふな

秋は來りぬ・令孃令息がたの間服と冬服とを要する季節となりぬ、此時に當り大方の慈愛篤き親御樣方は定めて弊店の名を御記憶より喚び起さるゝことゝ信じます從來の御實驗で分明なる如く弊店仕立の男女小兒洋服が價格低廉裁縫精巧、服型嶄新、出來迅速なるとは弊店が今日京濱間に小兒洋裝界の流行兒と謠はるゝやうになつた一大秘訣であります、未だ御試しなき方は此好機會を利用して此際弊店へ御注文下され、如何に流行兒が自負に背かざるかを立證させて頂き併て弊店の獨特の技倆と熟練とを發揮することに一臂の力を與へ下さらんことを希ふのであります。

●男女小兒服及びベビーボックス（嬰兒洋裝）出來合ひ品取揃へてございますから何時でもお間に合ひます

注意

東京市内御注文のお方は電話本局二九〇一番、端書なれば神田鍛冶町十七番地へ御申越し下されば雛形と切れ地見本持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたす樣謹進致します。

韓國出張は九月中旬御用御伺ひ可申候間御用の御方は京城浦尾旅館内中野屋洋服店まで御一報被下度候





〔本店〕 横濱辨天通り（電話三四四番）

〔東京出張所及地方掛〕 東京神田鍛冶町（電話本局二九〇一番）

中野屋洋服店

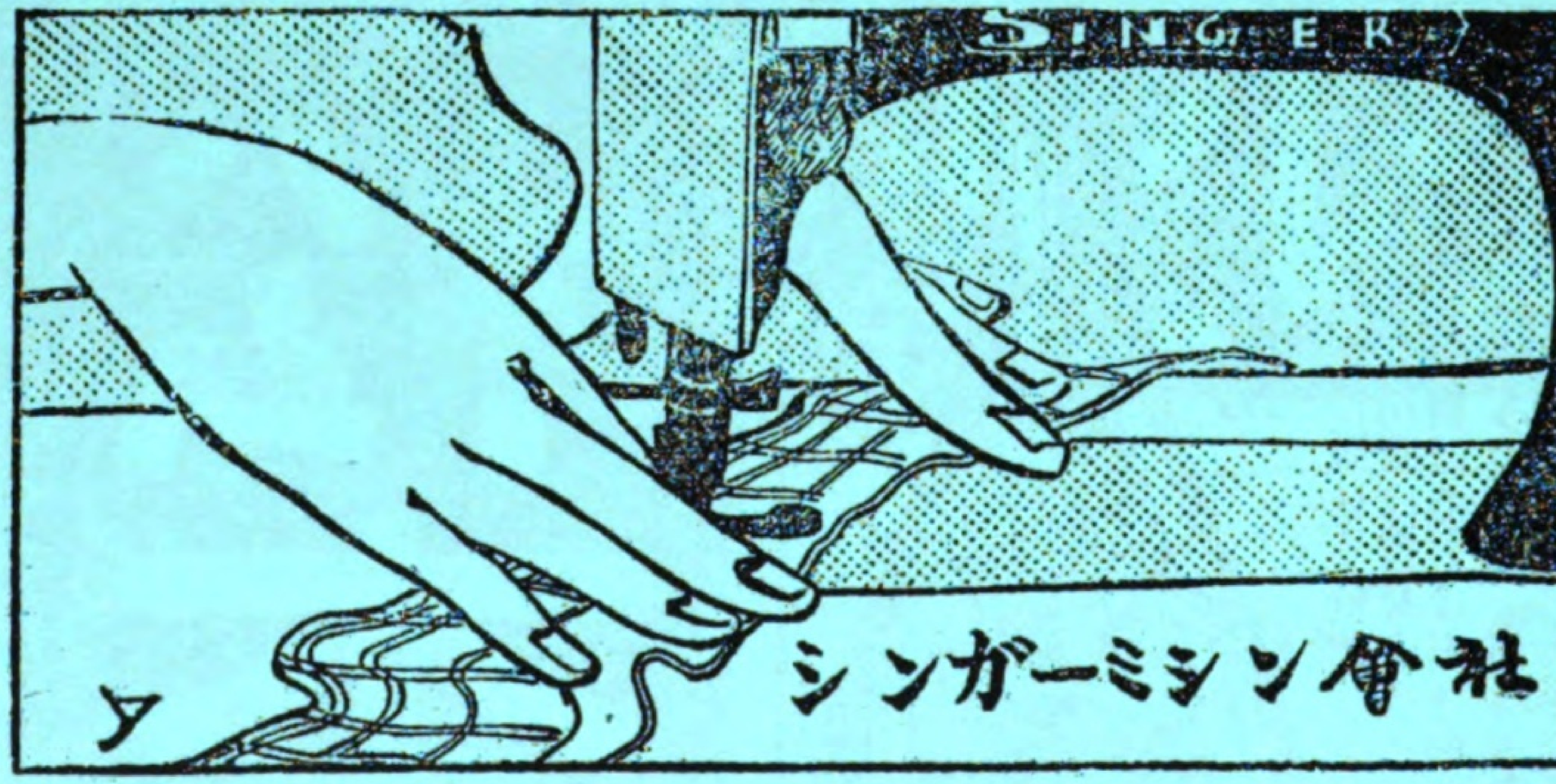
女ちの四い

輕井澤の女子大學夏季寮





上圖は三井別莊の裏山にて七月二十六日バルトン博士歡迎會を催ふしたる時の光景。下圖は夏季寮生一同が同所にて寫せるもの。



そよ吹く風の初秋に親しむ可きものは

家庭用　シンガーミシン

にして時節に有り勝ちの憂愁も散ずべし、

實益多きが上に趣味益々深し

月賦販賣

裁縫書進呈

分店の數全國内に百卅、ミシン裁縫學校の數廿有餘

横濱市山下町六十一番館

シンガーミシン會社

……▲明細書 御申越次第無代送呈す▼……

女(りの一)

九月一日第壹號發刊 口繪美麗數葉

少女

月刊

定價一冊拾錢 郵稅壹錢 ◎半年分 郵稅とも 六拾三錢◎壹年分壹圓貳拾錢

少女小說 **吉祥果**（三色刷古洞畫）……泉鏡花作

子供を可愛がる鬼子母神がなぜあんな恐い顔をして居るのでせう、此物語を讀むと其いはれが何んなに面白いか分ります

▲きりぎりすの話……西村醉夢

▲斷れし繪巻物

萬雨の土臺石 巖谷小波

琴のお稽古 今井慶松

お月様の戸籍調べ

▲小猫……横瀬夜雨

お伽芝居 **花の祭** 磯萍水

▲清き心持……一色醒川

▲牛乳嫌ひの光子さん 中山蕗峯

秋の七姫 都園女

東京京橋區大鋸町 **女子文壇社發行**（振替口座東京第壹七貳九壹）

特約大賣捌所 東京堂 至誠堂 東海堂 上田屋 北隆館 良明堂 外取次全國雜誌店

どっこいしよ、やっとこらしよ……西崎花世

いなごの飛行器 宮崎與平

▲都下各女學校の徽章

停車場の花賣 河井醉茗

▲少女ノート……

▲英語の手ほどき 西城隱士

面白い響……記者

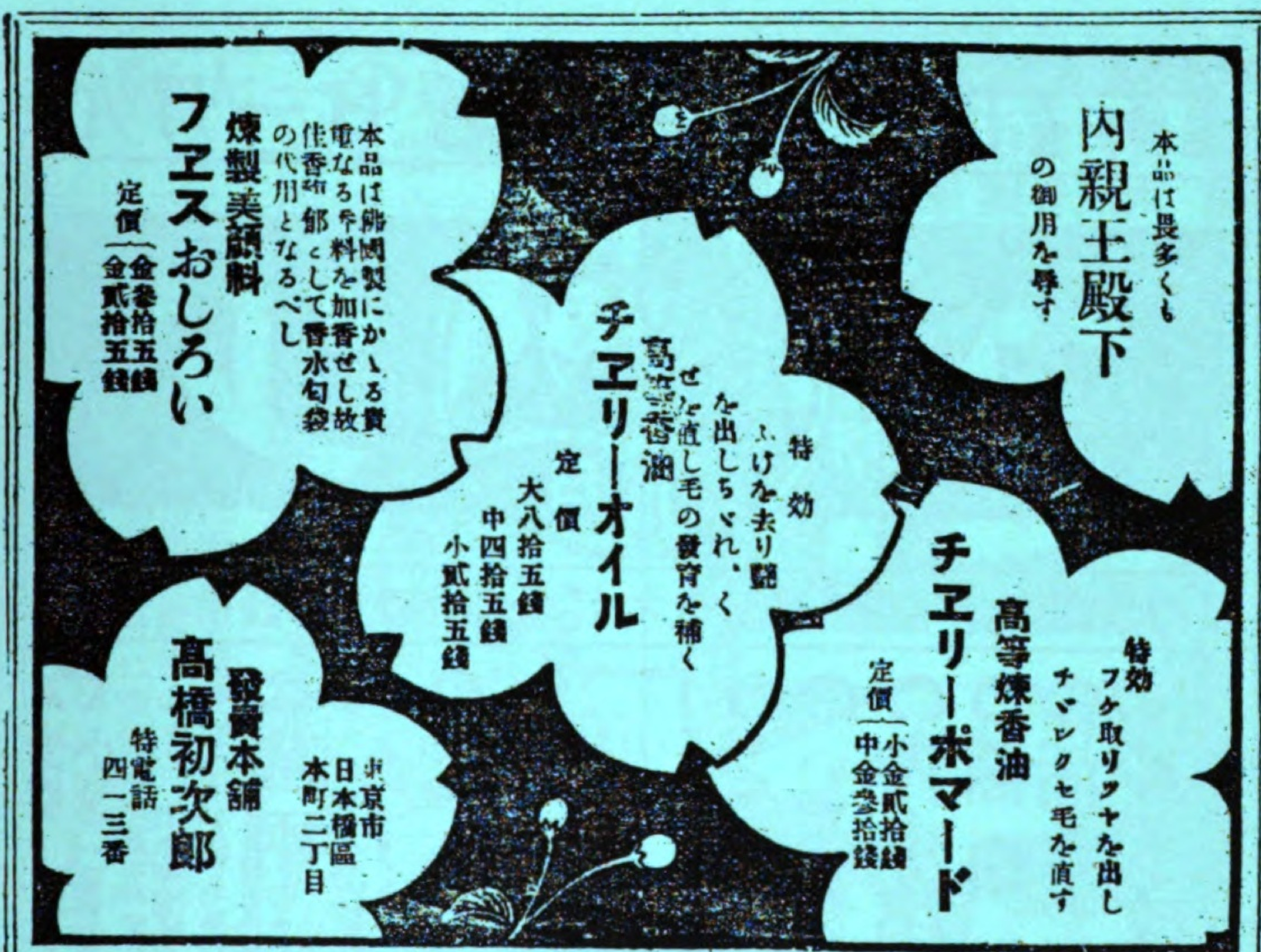
九つの豆……溝口白羊

活きた花と造り花……矢部理學士

▲新聞……

少女文壇 ◎文章◎日記◎日用文◎和歌◎俳句◎詩◎雜[illegible]◎[illegible]◎笑話◎工夫齋◎少女料理◎少女實驗談◎世事問答◎少女くらぶ

【挿畫執筆】岡野榮、山中古洞、宮崎與平、片山春帆、竹久夢二の五氏…


本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
フケ取リツヤを出し
チヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チエリーポマード
定價（小金貳拾錢
中金參拾錢
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ・くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チエリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢
本品は舶來製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價（金參拾五錢
金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
特電話四一三番


ウヅラ石鹸
持久力に富む
本舗東京横山町
天野磯五郎

女（りの四）

旅行先から



歸省中で



女（ぬの一）

幼年畫報増刊

第四卷第十二號

菊判美麗畫本

石版極彩色刷十六頁

活版二色刷十六頁

光澤寫眞版四頁

正價一冊金拾錢

郵税一冊五厘宛

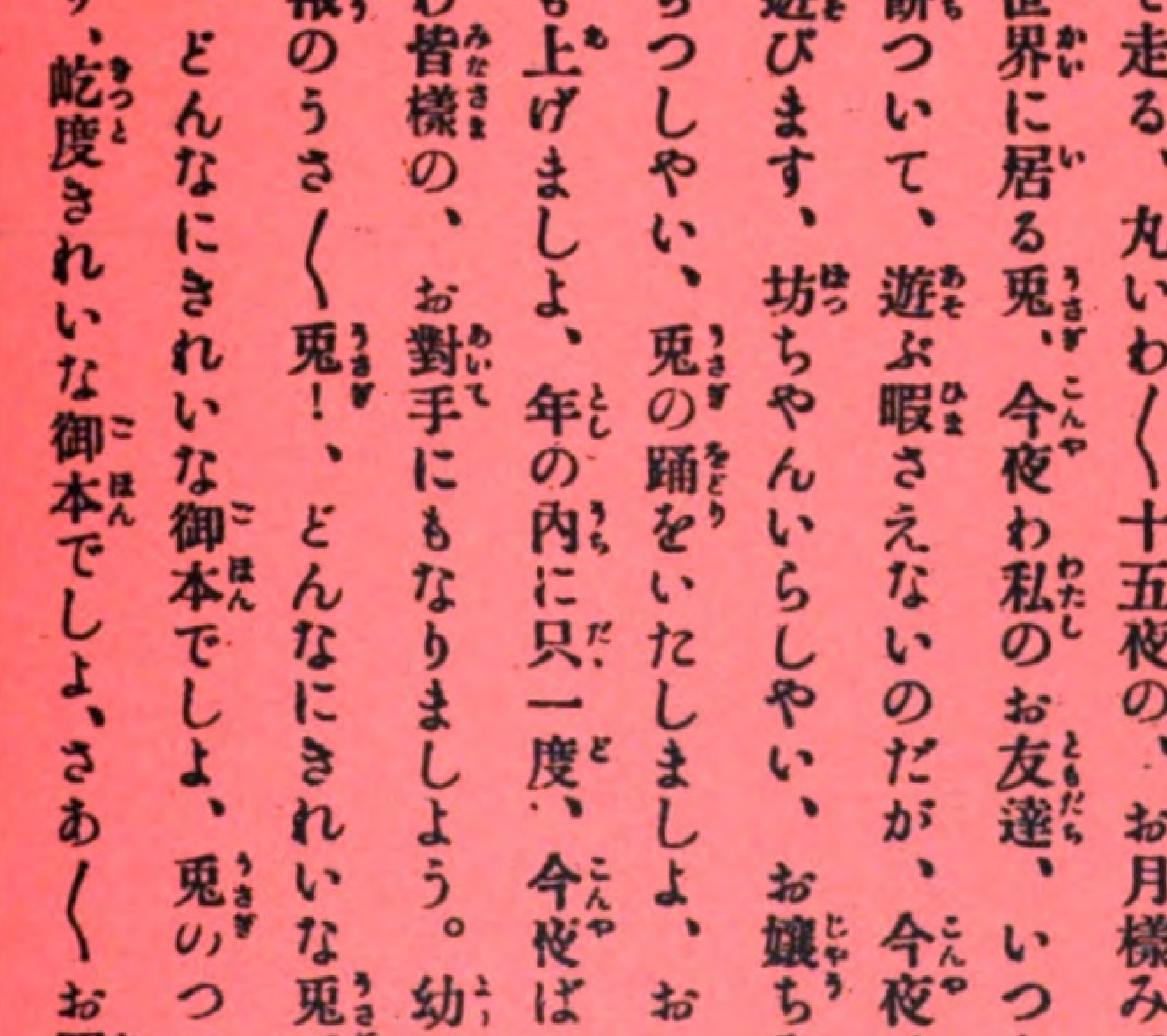
うさ〳〵兎

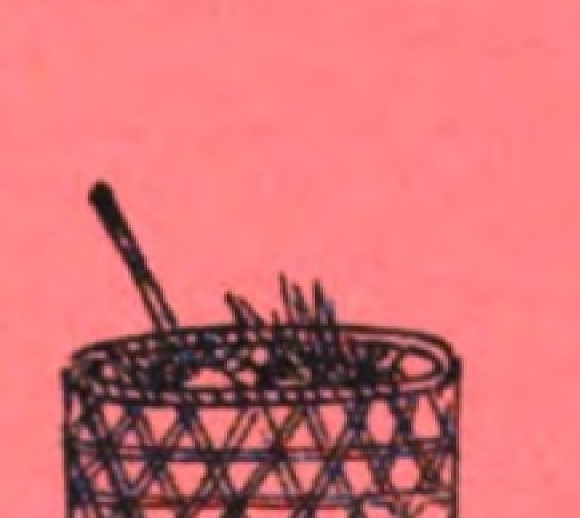
さゝなみ作

永年畫

九月十五日發行

うさ〳〵兎！うさ〳〵兎！　お前わ何を見て走る、私わ月を見て走る、丸いわ〳〵十五夜の、お月樣みて走ります、月の世界に居る兎、今夜わ私のお友達、いつもせわしく餅ついて、遊ぶ暇さえないのだが、今夜は一ばん遊びます、坊ちやんいらしやい、お孃ちやんいらつしやい、兎の踊をいたしましよ、お團子も上げましよ、年の内に只一度、今夜ばかりわ皆樣の、お對手にもなりましよう。幼年畫報のうさ〳〵兎！、どんなにきれいな兎でしよ、どんなにきれいな御本でしよ、兎のついたお餅より、蛇度きれいな御本でしよ、さあ〳〵お買なさい。





（その二）

第一巻第五號　九月一日發行　○　定價一冊貳拾錢　郵税壹錢五厘

婦人界

（その三）

東京日本橋區本町三丁目　金港堂書籍株式會社　振替貯金口座八八壹五番

第三回新學期開始

實用女學講義錄

(わの四)

●入會の最好機は來れり

九月卅日迄は入會金免除の特典あり

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的なり
▲講義　言文一致書入り假名付きにて誰にも判る
▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌　會員には講義錄の外機關雜誌を每月進呈

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

●見本つき規則書　申込次第　無料進呈

講義錄第一號は拾月一日發行

▲會員　の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費　全學期の會費は都會牛月の學費にて足る
▲入會　何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

振替東京四二一〇〇番
電話本局（三三〇〇四番　三七〇〇七番）



女學世界

九月號



婦人問題

女子の獨立自活と修養

藤井健次郎

△本質は自由開放にあり

婦人問題は近世文明の人氣問題の一つであつて、各國共に之れは喧ましくなつて居る。單に婦人問題と言ふと、其の範圍は非常に廣いもので、其の中には婦人の職業問題、婦人の政治問題、婦人の教育問題等色々の問題を含んでゐる。けれども此等の問題を他の方面から觀察するときは斯う云ふ事になります。職業問題の方からして言へば、之れは、婦人も國家社會を組織してゐる一分子である以上は、等しく其の國家社會の爲に盡さなければならぬ、さうすると從來の如くに婦人はたゞ一家庭の内に跼蹐して、たゞ夫の下に夫にたよつて其の下に服從してゐる事だけでは足りるものではない、是非とも男子と相並んで獨立の職業を求め、獨立の生活をして行かなければならぬやうだし、又男子と相並んで國家社會の爲に政治上に於ても直接貢獻する所がなければならぬやうだし、從つて其の教育も所謂良妻賢母主義丈では完全なる女子教育を施し得ないで、自然獨立の生活、政治上の活動等に必要な準備教育もしなければならぬ、と云ふ樣な性質の問題でありますから、其の方面から見ると、所謂婦人問題なるものは、或る意味に於ては所謂女子の自由開放の問題とも見る事が能きるのであります。歐米各國が今や其の決解に向つて頭を惱ましつゝある問題は、即ち此の女子の自由解放の問題なのであります。

△婦人問題の起源

今歐米に於ける此の問題の起源、變遷、及び其の現

狀等の委しい御話は致しかねますが、極めて其の梗概を言つて見ると、歐米に於て此の問題が一つの社會國家の問題として痛切に其の解釋をつけねばならぬと云ふ樣に感ずるに至つたのは極めて近世の事で、十九世紀の恰度眞中頃に彼の社會主義なるものが起つて以來の事であります。尤も此の社會主義若くは社會運動なるものは十九世紀の中頃に初まつた事ではないので、極めて古い時代からあつた事ではありますけれども、併し最も眞面目に又最も痛切に起りましたのは、先づ右十九世紀の中頃と見て差閊ありません。此の社會主義なるものは色々の主張と思想とを懐抱してゐるもので、一言にして要領を盡す事は固より能きかねますが、併し社會主義の一方面には確かに次に述ぶる樣な思想が懐抱せられてゐる事は蔽ふべからざる事實であります。

△社會主義者の主張

それは强者の權力の下に壓服せられて居るところの弱者を自由開放しようと云ふ事であります。即ち今日の產業時代に於きましては、資本家は强いもので、勞働者は弱いものである。其の强者たる資本家が產業に依て得る利益を壟斷して、弱者たる勞働者へは一毫もそれを與へない。否、たゞに一毫の利益を與へないのみならず、彼等資本家は自分の利益の爲には如何なる壓制をも如何なる虐待をも之を勞働者に加へる事を敢てすると云ふ狀態である。之れでは社會の間に强弱の階級を生じて互に相排斥する、相怨む、相嫉つ、相爭ふと云ふ樣な事が出來て、社會の不祥事が多く此處に胚胎して來る譯である。と云ふところからして、社會主義は、何うしても今日の資本本位の產業制度を破壞して今日の所謂弱者たる勞働者を自由開放して、社會各人が富める者となく、貧しき者となく、上なる者となく、下なる者となく、皆一樣に產業の利益を享樂する樣にしなければならぬ。と斯う云ふ思想が懐抱されてゐると云ふ事は疑ふ可からざる事實でありますが、其の事實と聯關して所謂婦人問題なるものにも搦

を染めたのであります。

即ち彼等社會主義者の考によれば、過去及び現在の社會に於ては、男子なるものが一種優逸なる權力を擁つて居て、女子はたゞ奴隷的に男子に服從すると云ふ位置に立つて居たのである、之れは決して社會の上から見て目出度い現象ではない、女子といへども男子と等しく命を天に受けたる一個の人格である、男子が人間として貴いものならば女子も亦等しく貴い譯合である、人として男と生れ女と生れてくるのは、これ誠に偶然の事で、其の偶然の性(Sex)の如何に依つて決して人間の上に高下のある筈はない、去れば今日の所謂弱者たる女子をば强者たる男子の壓制暴虐の下から自由にし開放しなければならぬ、と云ふ考からして社會主義者は此の問題に向つて指を染める樣になつたのであります。

△歐米諸國の現狀

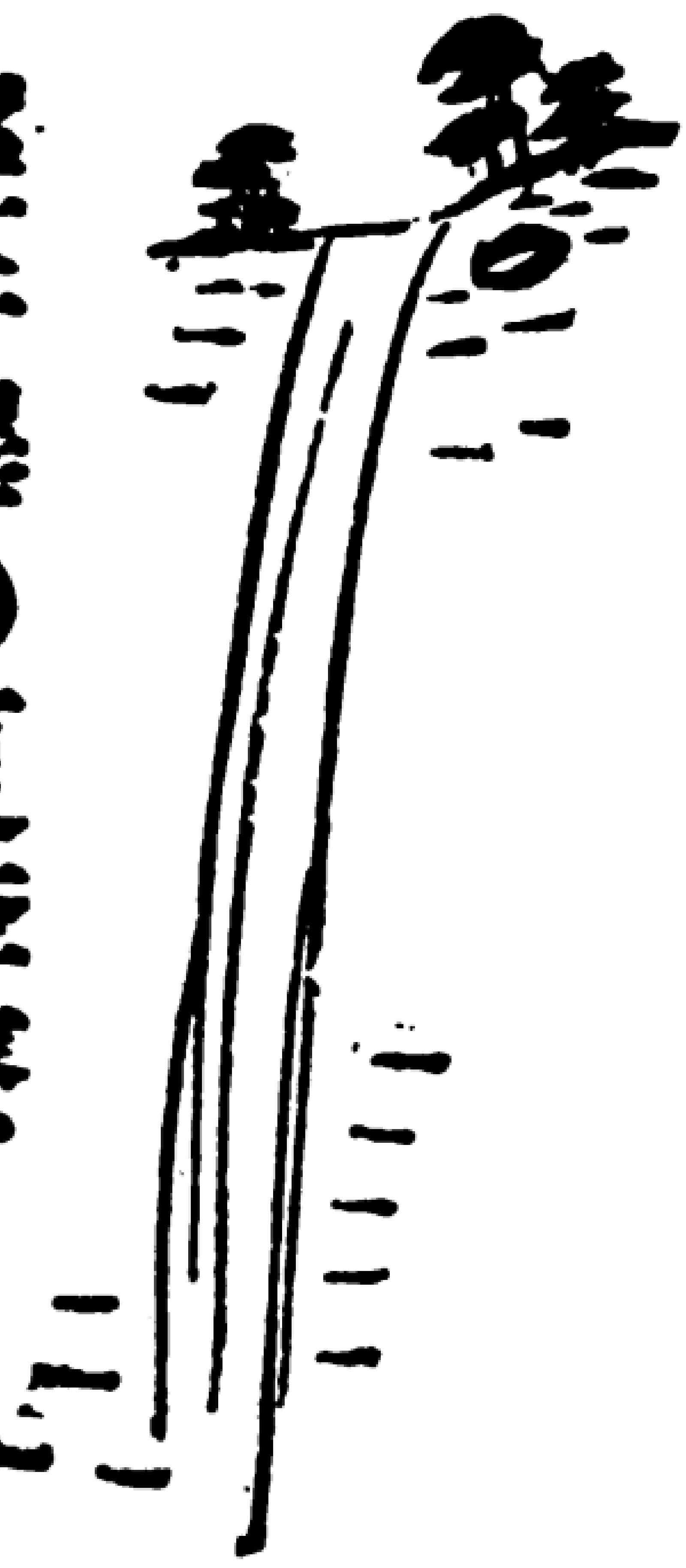
爾來歐米に於ては、或は產業方面に於て、或は政治方面に於て、或は一般社會方面に於て此の問題の決解に盡力をして、其の中には最早決解を告げて事實となつて現はれて居る事も澤山あります。既に女子にして獨立の生計を營む者が歐米に於て日に月に增えつゝあると云ふ事は現在の狀態であつて、又政治方面に於ても既に參政の權を與へてゐる處もあるし、又教育方面に於ても只だ良妻賢母主義の教育から一轉して高等專門の教育に指を染めてゐる處が澤山あるのであります。それで歐米の學者先覺の士が今以つて此の問題の決解に骨を折つてゐると云ふ事は今更多辯を要しない程明かな事であるが、尙ほ婦人の間でも例へば英吉利のウエップ夫人の如き、又ボサンケイ夫人の如き、亞米利加のアダムス婦人の如き、或は獨逸のギヂフキー夫人の如き、諾威のエレンケイ夫人の如き其の優なるものでありまして、此等の婦人は以上諸々の問題に關して立派なる著述を世に公にされてゐる位であります。

△日本に於る婦人問題

以上お話致した事は專ら世界の文明史上に於ける婦人問題の過去現在の事でありますが、扨て翻つて特別に我が日本に於て此の問題は果して存在してゐるか、若し存在してゐるとすれば如何なる研究及び其の決解が其れに與へられてゐるかと云ふ事に移つてお話して見まするど、或る見方から申せば、我が日本の文明史上には、未だ所謂婦人問題なるものが起つて居ない、從つて何等の研究も何等の決解も見えては居らないと言ふ事が能きますけれど、併し又他の方面から見まするど、我が日本社會にも既に此の問題が持ち上つて居つたのであり、又居るのであつて、從つて多少の研究、多少の決解を之れに向つて與へられて居ると申す事もできる樣であります。

近く明治の世の中になつてからの事丈を見ても、曾ては婦人參政問題の如きものに向つて隨分突飛な運動をされた樣な事もありますし、又明治文明の最大恩人の一人である彼の福澤先生の如きも、其の著女大學批評と新女大學とに於て、家庭間に於ける女子の幾分の自由解放を主張されたのでありまして、又事實としては女子が產業組織の色々の方面へ這入り込みまして男子と相竝んで職業を執ると云ふ事もありますし、又彼の社會主義者の人々は歐羅巴及び亞米利加に於ける其等の人と同じ樣に此の問題の決解に向つて大聲疾呼してゐる樣であります。斯くの如く考へて見まするど、矢張り日本の社會にも歐米に於ける樣な所謂婦人問題が持ち上つて居た、又持ち上つて居ると見て宜からうと思ひます。

從つて世の學者先輩を以て任じてゐる人々は云ふ迄もなく、又諸々の先覺の婦人達は宜しく眞面目に此の問題の性質を明かにし、其の決解に努力して、日本の國家の爲め社會の爲に光輝ある決解を與へなければならない。而も其の問題は一日を寬うすれば一日の損害あり、一年其の決解を怠れば一年其の禍を招くと云ふ樣な極めて痛切な問題であるのであります。(未完)



輕井澤の夏季寮

女子大學の山上生活團實見記

一、異人町の日本館

信州輕井澤は海拔三千八百尺、依稀たる青山に圍まれた荒野である。鎔岩の様な粗雜な地床の上に、申譯ばかり土が冠さつてゐるのだ。夫れでもやさしい草花も咲き、露も置き、蟲もすだく。どうしても往年灰と石とを降らした修羅の跡とは受けとれぬ。特に今では城西目白の女子大學の夏季寮さへ設けられてある。

七月二十一日の十二時近くこの夏季寮を訪はんとする三人の俥は、荒野の細徑を南より北に急ぎつゝある其の二人は同大學幹事塘茂太郎君に僕である。

四五町で輕井澤の本通りへかゝつた。案内書でこそ「カルヰザワ、メインストリート」だが、からしき田舍の町並みである。三百軒たらずの街に六百の西洋人がゐる處から、看板は皆な英文で記してある。但多くは恐ろしい破格英語だ。

道行く人の半分は西洋人である。大きなスカートを大儀さうに引づり乍ら歩く老婦人。丈高男、鼻曲り紳士、花の様なお孃さんなど三々五々歩を移す。腕白ざかりの金髪少年がクリケツトのバツト擔いで肩で風切つて行くのは、

「ハーロー、ジヤツク!」

とか何とか呼び止めてやりたかつた。

俥は左に折れる。すぐに野原だ。向ふから三人、紫式部が來る。路は一すぢ、忽ち行きあふ。先頭の幹事から順々お辭儀した。海草を見て大陸の近きを豫測したコロンブスもどきに解して寮にも間もない事と思つてゐると、案の條白日に輝く二階建の寮舍が現はれた。流石富豪三井の建てたゞけあつてガツシリしたものお

や。入口は二臺俥がならんで行ける位の廣さで、番兵の様に自然木の柱が立ち、右の方に Privait Property と書いた札が打ちつけてある。無遠慮な赤髯共が侵入せぬ様に豫防したもの。横濱あたりの商館で「日本人入る可からず」とあるのを逆にやつたのだ。聊さか痛快を感じた。

二、十五萬坪の別莊

俥は寮へ寄らずに一町も突きあたりの白堊の洋館の玄關迄引き込む。これが本館で三井家の時々來泊する爲めに設けられたものだ。取次出入する二間にして應接室なる西洋の間に通る。冷いやりとして閑として實に心地がよい。その内に洋服姿の成瀨校長がやあよくこそ！とばかり現はれる。この春以來の挨拶、東京が暑い話、一昨日輕井澤で大雷があつて、折ふし會見中の校長の窓の外へ落ちた珍話など、四人でさん〲語り合つた。

別室で晝食して小憩、涼風庭樹にそよぐ間を橫ぎつて、新來の三人は夏季寮へと坂を下る。

「廣い別莊ですな、何千坪あるでせう」と坂の中途で一人がつぶやく。

「何千ではきゝますまい。少くとも萬や二萬はあつた筈です」と他の一人が答へる。通りがゝりの作男に尋ねれば十萬坪だといふ。更に後で別莊守に聞へば十五萬坪ぢやとの事。聞けば聞く程大きくなる。よい加減にしておかぬと何十萬坪になるかわからぬ。

寮は白木造りの寄宿舍風である。智、情、意の泉たれといふのと、三井家の三の字、校長の雅號が三山といふのと、此の三つの理由を以て、三泉寮と名づけた調度萬端は三井の手によつて整頓されてある。どの富豪もこんな事業に金を散じて與れる樣にならねば嘘だと思ひながら竹の籬に添ふて入る。寮監の平野濱子女史が逸早く迎へて愛想よく寮監室へ導く。

「ねエ――子さん。食堂のチェアーを三脚もつてらつしやい。」

寺を了して一二人小さな疊込み椅子を持つて來る。

これにキチンと腰かけたら首實驗みたいだらう。バツが悪いと見てとつた寮監は座蒲團を命じる。寮生のものを徴發したらしく派手な模樣のを持つてくる。三人が三通りの蒲團を敷く。

茶菓に勢を得て、四人の間には雑話が旺んになつた電話ならさし向き混線する處、なか〳〵の賑かさ。廊下通る寮生も思はず立ち止まる位だ。

風涼しく窓に迫る翠色鮮やかに團扇などはいらぬ。

三、夏知らずの仙境

夏季寮は今年で四回目である。云ふ迄もなく暑中休暇とは決して晝寢の爲めに設けられたものでない。方面を更へて研究せよといふのである。

この趣意でもつて、三井三郎助氏夫人の厚意で特別の建物をこしらへてもらひ、各科最上級生の有志者を移り住ましむる事とした。海拔三千八百尺の難有みは種々の方面に現はれて、第一馬鹿に涼しい。晝間でさへ八十度前後、夜に入れば七十度を降つて寧ろ涼しきに過ぎる折もある。從つて頭腦が明晰になる。思索、研鑽には持つてこいである。

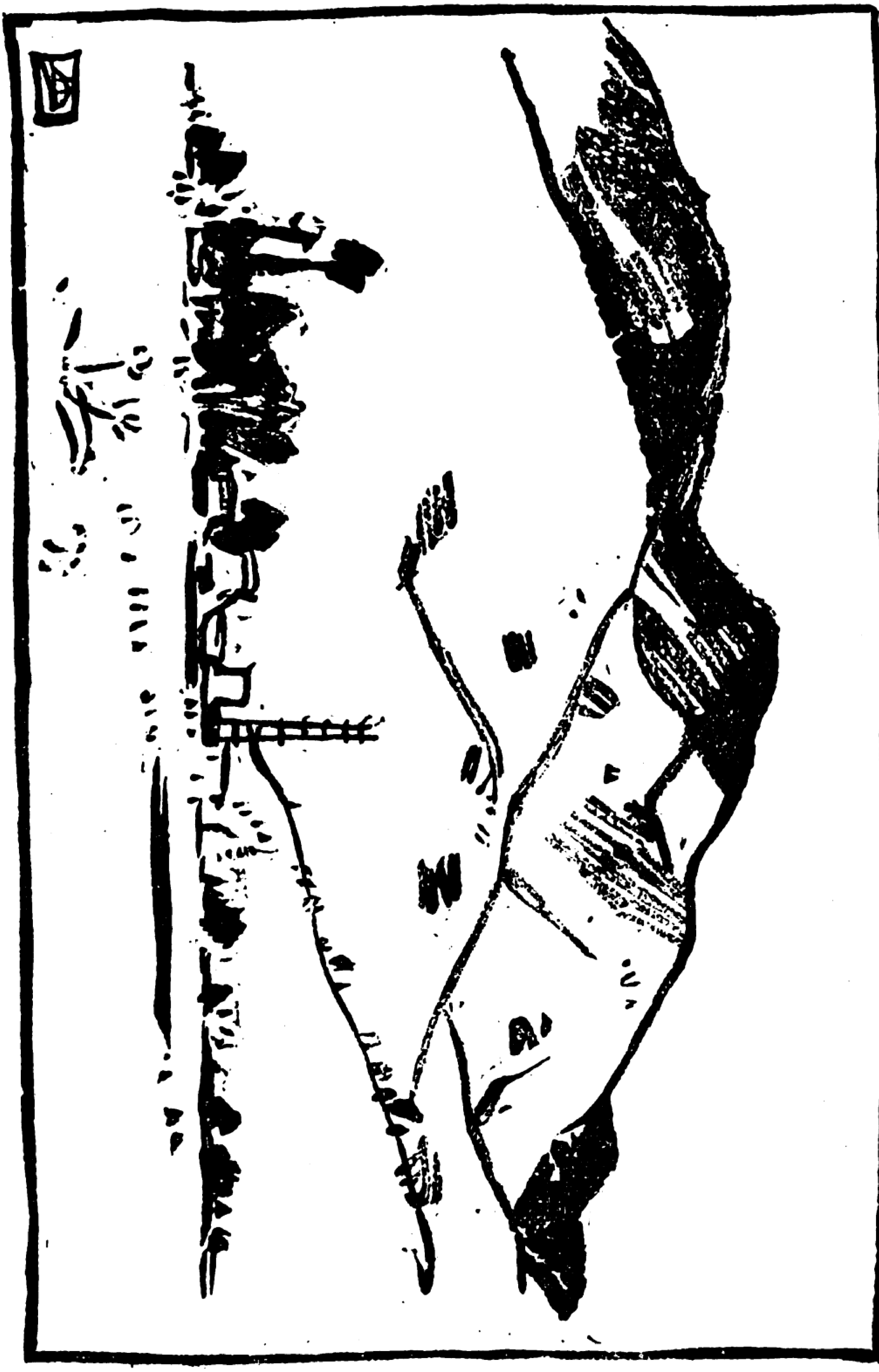
第二の御利益は一般日本人には縁遠き高原的生活の趣を味はしむる事。第三に寮生各科の者が一つ部屋に起居する處から、めい〳〵の長所を採りあつて、お互に切磋する利益がある事。僅に三週間の滯在に過ぎぬが、影響の波及する處は却々廣い。

「私は此夏スグ歸省せねばならないから輕井澤は駄目なのよ。其代り貴女よウく修養して、ホントウに眞理の泉に觸れてきて頂戴！」

「あつ、よくつてよ。」

と云ふ風に、クラスメートの分まで引きうけて入山？するのださうな。されば寮生は女子大學の代表的才媛とも謂ふを得べく、二旬の修養によつて得られたる思想は、校風の上にも少なからぬ感化を與へるのである。

本年は最初の寮生は四十五名であつた。これに寮監下女を加ふれば女忠臣藏になるわけだ。處が色々の事



麓の村

故で數人を失ひ、今では三十八名となつて仕舞つた。寮監の平野女史は獨力で妹と弟とを一人前に教育して世に立たしめた程の女傑である。英語も理科も國文も何でも出來る。女史に率ゐらるゝ夏季寮が、有終の美を爲すは當然と云はねばならぬ。

まづ部屋から御覽下さいと女史は先に立つ。

下に二タ間、二階に三間。これに三十八人を割りあてる事になると、十疊の一室に五六人は入れる必要がある。各室は左程に裝飾りなく、机はゴタ粗末な木机である。幹事が障子を開けると寮生は紅くなつてお辭儀をする。此の夏にさう〳〵紅くなつてはたまるまい氣の毒だからよい加減にして二階へあがる。

四、水汲みが一番つらい

梯子段の登り口に捕蟲網が二三本と植物採集胴亂が懸つてゐる。並大抵の女は晝寢してお茶を濁す間を、野山に馳驅して研究に資する心懸けは敬服である。

階上は三間で、十疊二ツ。二十疊近いのが一ツである。これが大廣間で、七八人も居た。三泉寮と書いた額もあり。碓氷の峰より生れ來る青嵐は淸水の如く絕えず流れ入つて、机上の白紙やゝともすれば逸し去らうとする。針もつ人も布の躍るに當惑してゐる。こんな部屋に半日もゐたら青嵐百句位何の苦もなく出來やう。皆んな勉强中であるから長居せずに出やうとすると柱に短冊があるではないか。まて〳〵一寸讀んで見やう。ハヽア雨後の月と書いてあるな。

玉とちる松の雫にいろそへて
　凉しくすめる夏の夜の月

下に何子とか添へてある。何にしても大した秀逸でもなさゝうだ。

階下に取つて返して、臺所を覗く。十二疊も敷ける板の間で、瓦斯竈の大より、フライ鍋、テンピの末に至るまで、チャント揃つてゐる。背戸の榎（だか何だかわからぬが）の下に車井戸がある。水汲みは寮生一同の蛾眉を顰むる處であるといふが、何さまさうもあらう。お洗濯の話をしてゐると、急に煮てあつたもの

が噴き出した。誰も居らぬので平野女史があわてゝ蓋を取る時々こんな事があつて黒焦げも出來るだらう。

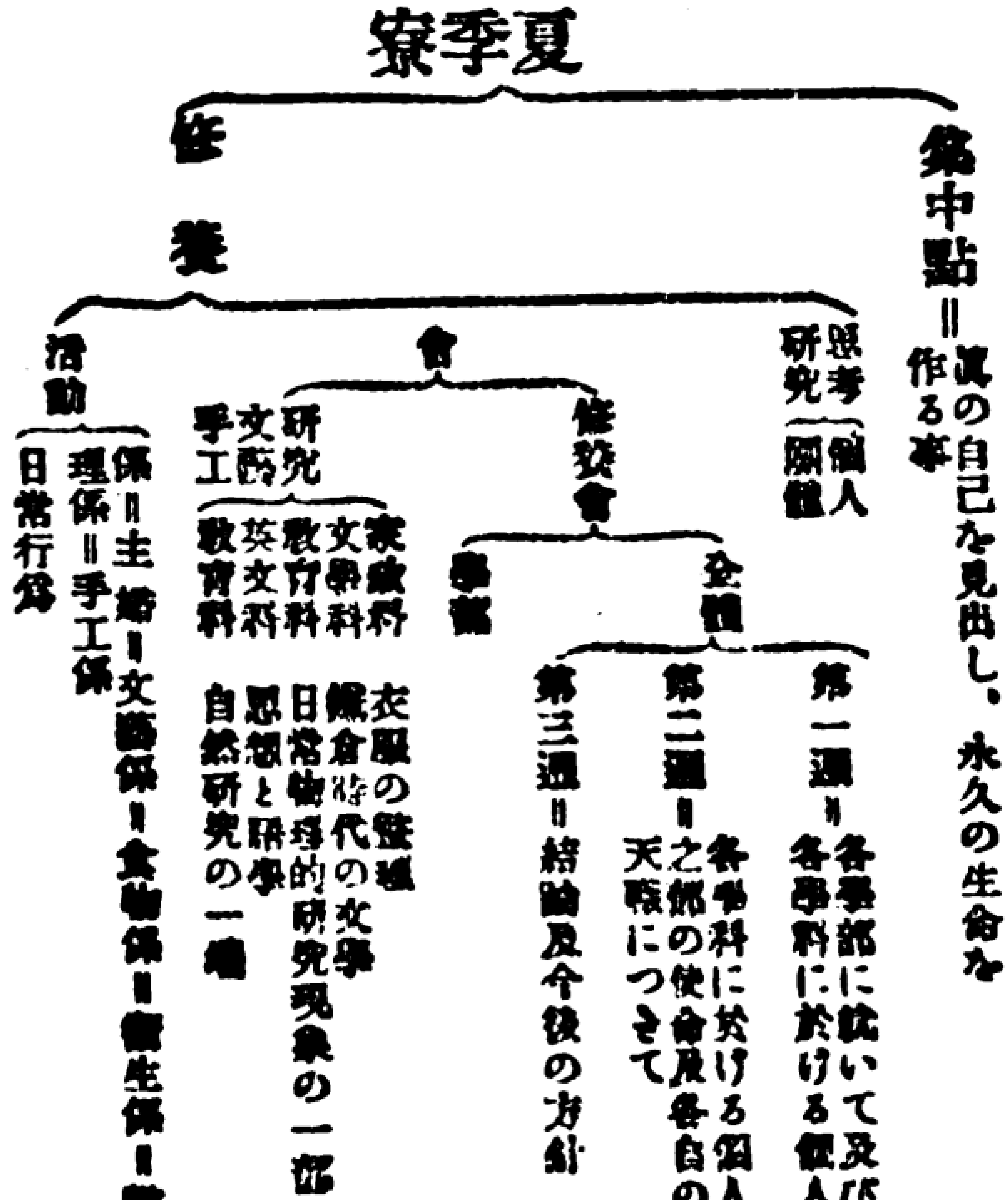
臺所の隣が湯殿である。手拭掛けに三十幾筋の古手拭整然とかゝり、板の間はチヤント乾いてゐる。鏡も置いてある。身仕舞はこゝでするのだらうな。

これだけを見て、ドヤ〜〜食堂に入る。

五、黄金蟲が二百餘匹

食堂は二十疊あまりの板の間だ。白木の長テーブルに二十何脚の疊椅子。それに細長き腰かけが二ツばかりある。これで總員四十人が一度に箸を執る事が出來るといふものだ。して何から何までかう揃へて貸して下さるのでと、平野女史が言はれる。

一方の壁には一尺に二尺ばかりのアーチ用的の額が懸つてゐて、同情と書かれてる。よく觀ると驚いたり、禪山の黄金蟲を殺して、糊で貼りつけ字を書いたものだ。試みに數へると同の字が九十七匹、情の字に百三十二匹を費してある。奇拔は奇拔であるが、序の事に虐待とか、無情とかしておいたら、一層振ふだらうと云つたら皆な笑つた。女史は辯護して、名譽ある食堂の装飾にしてやッたのですもの、矢張同情でせうと云ふ。明治の才媛連の手にかゝつたら、サゾ成佛が出來るだらう。僕は今しがた見た捕蟲網がいかばかり昆蟲を追ひ伏せたかを想像した。なほ机の上には展翅板にピンで止めれらたる蝶類がある。但これは上出來でない。



額と反對の側の壁にピンで寮生の執るべき一般方略とも云ふべき恁んな想定書が止めてある。いづれ校長の案になつたのであらう。手帖を出して寫しとる。なほ筆の序に其の横にある日課表も書き留める。

午前。五時——五時四十分身仕度。五時四十一分——七時默想。七時——八時朝食。八時——九時隨意。九時——十一時講話會。十一時——正午讀書

午後。零時より一時晝食。一時——二時隨意。二時——四時講話會。四時——六時隨意。六時——七時晩食。七時——九時講話會。九時消燈就寢。

右の内、默想は樹下或は石上に靜思して、社會に於ける婦人の地位、使命等を考へるのださうな。二十何日の間葉の戰ぎ、禽の音、行く雲を友として得たる思想はドンなものであるか。これが今夜の結論會で發表されるのである。但今夜に限つて傍聽は禁止せられるのだ。色々思ひ切つた斷案があるものと見える。

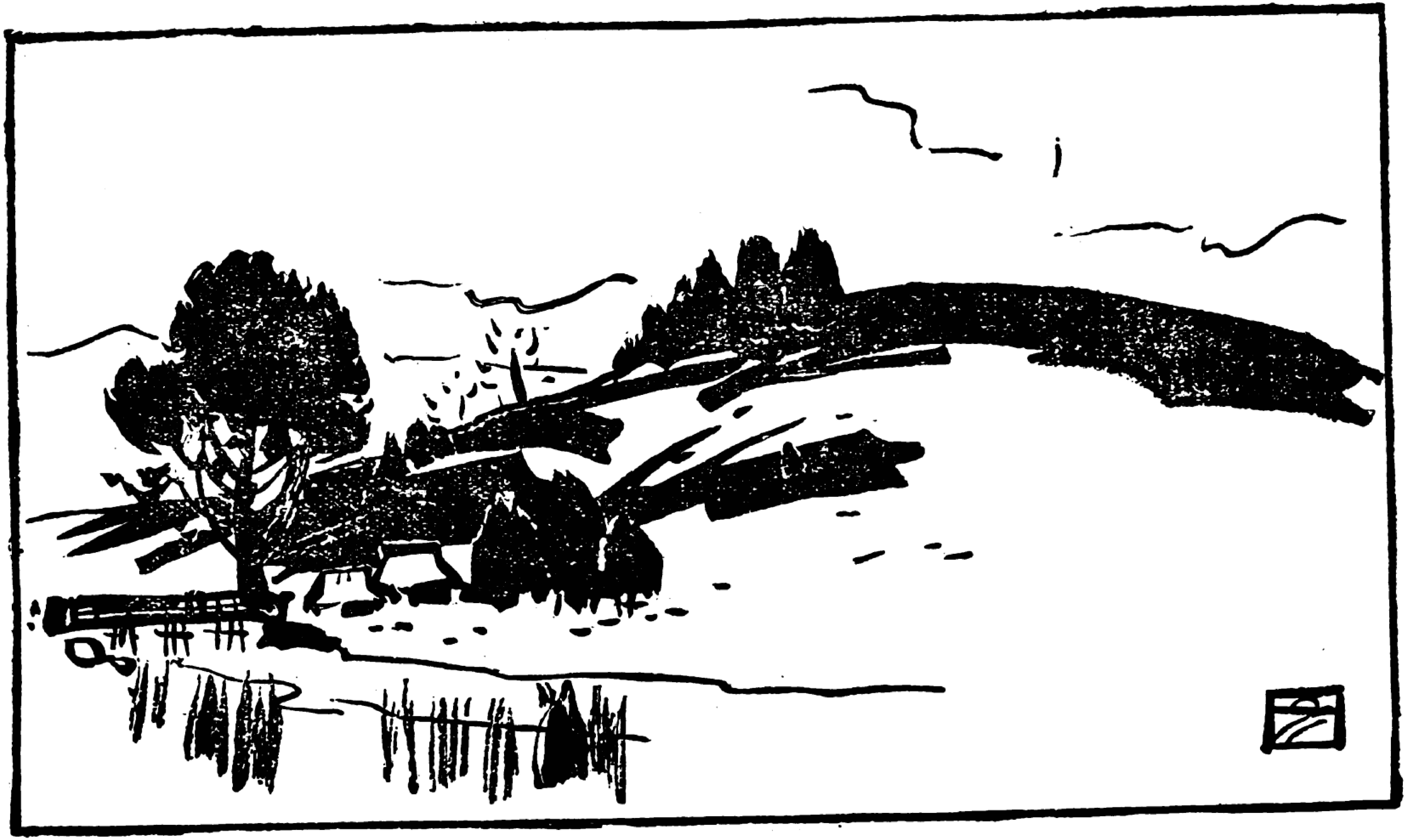
隅には大きな書棚が置かれて和洋の良著が背の文字を競はせてゐる迄も向上せやうと云ふ寮生の努力の程が思ひやられる。由來避暑に修養を怠るは吾が國民の通弊であるを、三泉寮のひとり異彩を放てるは實に心強い次第だ。無責任な推しあて了見で女子大學の惡口を云ふ先生達には無理にもかう云ふ處を見せてやるがよい。

六、安價に購ひ得たる好成績

寮生は修養の外に又た研究や實習を怠らぬのである。家政に對する研究、外客に接する實習、交代に各方面の係りとなつて他日主婦となる下ごしらへをやる若い同志集つて、アハ〳〵と日を消すのでない。現に昨日ロックフエラーの或る使命（書きたいが口止めをされて仕舞つた）を帶びたるシカゴ大學教授バルトン博士夫妻が來遊し、大いに寮生の整然たる生活をしてゐるのに感心してゐたといふ。

世の中のわからず屋はまた避暑の贅澤を鳴らすが、何しろ屋賃が無代であるから、金と云へばたゞ上野驛から輕井澤迄の汽車賃（片道だけ）と二十一日間の食費を加へて八圓だけである。海拔三千八百尺の靈的の

山の村



生活であるから、魚の臭など嗅ぎたくもない。たゞ折折の鑵詰に肉の味を賞讃するばかりだ。菓子は材料さへあれば腕ぞろひ道具ぞろひだから何でも出來る。コンなものを昨日こしらへたと持ち出したのはジャム入りの玉子菓子だ。三人の指は遠慮なく動いて大半を盡したが、後に玉子が一個四錢五厘と聞いて聊か氣の毒の感なきにあらず。

菓子をムグつき作ら献立表の中から、土用入り後三日間分を拔く。

	朝	晝	晩
廿一日（水）	さやいげんげんの味噌汁 うづら豆煮付	豆腐の田楽 菜びたし	パンのグリナースト、 プ。牛肉ソースかけ サラド（グリンピー ポテトニンジン）
廿二日（木）	あづきかけ ホワイトソースかけ 白玉なつみかん 三杯酢 大根おろし	天ぷら きんぴら。 にんじん 南瓜合煮	パインアップル、 プラオンソース煮 えび せいべん漬け
廿三日（金）	パン。ブクリーム 道明寺 ポテトーファメー 紅茶 桃ロナム	白いんげん煮付 きうり ビーナツユマ イナイソース	（魚 大根まぎ

かやうに日常生活は單純である。もし日晴れて風爽やかな時は、打つれて二十町を離れつる碓氷神社に詣でゝ「吾妻あや」の古蹟を偲び、亦或時は、寮のスグ後の小丘、アタゴ山に昇り、更に遠出しては、其形ヘルメットに似たる離山の丘岳によぢて、歸途麓の新渡邊博士の別莊にお邪魔をしたりする。淺間の裾は西洋人の所謂熔岩床で、俗に押出しといふ所、平野女史の口吻を貸りて云へば「一面に動植物なき「死の世界で、死海もこんなかと思はれる」荒凉の地である。寮生の足跡は時あつて、こゝにも及ぶ。又た「牛に引かれて善光寺參り」の諺を生みたる布引里――例の舊say張り婆が布を晒してゐた處――へも行くさうである。一時間あまりお邪魔した末、今度は校長の住家へと志ざす。

七、成瀬校長の居室

本館からのだら〳〵坂を寮と反對の方向へ下つて谷間の窪地に、白木作りの平家があつて、こゝに校長は

起居してゐる。三間もあらうか。縁に近くテーブルを置いて、厚い洋書四五部散亂してゐる。チエンバーの辭書の金文字は取つて置かれたる金ブチ眼鏡と共に輝く。

三つの空席は芝生の上に人待顔である。校長は先刻の洋服姿で、大いに落ちついて話す。いつか外字雜誌の挿繪で見たリンコルンの幕舍生活に似てるなど思ふ。雜木切り拂はれて風通しのよくなつた疎林のかなたに名も知らぬ鳥、靜かに囀じてその音は一種の韻律を帶びて居る。

こゝを辭してより二十町の坂を登つて熊野神社に詣で日本武尊の故事より名高くなりし碓氷神社に參し、清冽の清水に口を嗽いで汗を拭ひ、峠茶屋に力餅を頰張り、夕方になつてスタコラ下りた。三井家の好意で鶴屋の別莊の、華山の僞筆の掛物のある廣間を占領させてもらひ、やれ安心と息つく暇もなく、怪雲岫を出でゝ日を呑み隱し、銀箭の如き白雨、迅雷疾風、輕井澤の森に轟きわたる事二時間餘り。お蔭で月の街を賞する譯にも行かず。夜の寮舍を、訪ひもやらずに寢に就いた。

八、朝の三泉寮

明くれば豪雨は見事に晴れて、淺間の煙靜かに立ち昇り、名も知らぬ鳥は露の玉、五色に輝く樹間に啼きかはしてゐる。但、碓氷は吸ひ込まれて道はカラ〳〵乾いてゐる。

朝めし前に寮を見んと、皆で出かける。又た平野女史が應接される。寮生は部屋の掃除、食堂の準備などの最中だ。繊手に甲斐々しく水を汲み上げるもあり、箒を持つて立ち働くもある。『卿汲川流吾拾薪』——廣瀨淡窓の自炊の詩を女學生化したものは輕井澤生活である。お仕度中に飛び込むでは氣の毒と、庭から御免を蒙る旨を傳ふれば、椅子が庭に列んで茶菓がでる。話は先づ昨夜の雷から始まつて、女史は此の裏山に落ちたといふ。

例の傍聽禁止の結論會は此の騷ぎでおくれて始ま

り、終つたのは深夏二時であつたさうな。道理で食事なども遲いのだ。青天井を仰いで淺間の煙を見るにつけても又ぞろ登山慾が出る。寮生の齒には及びもつかぬが、せめて長野の善光寺樣だけはお參りがしておきたいと殊勝な話。山上生活がいよ／＼善き結末に近いたのは女子教育界の一慶事であるなど、大いに語つた。

どうやら食事時間になつた樣だから、退却に決して、昨日以來御厄介になつた夏季寮にアッデューを告げて去つた。

朝の膳に二十六個のトンネル潜り來れる柔らかき飯を供せられて九時出發。小さき車室は例の三人に歸京の成瀬校長と、一外人を加へて、五人の男子と手荷物で一ぱいになつた。

寢たり起きたりして百哩一と飛び。上野へ着いたのは午後三時半。烈日に汗はダク／＼。塵は濛々と揚る。『相顧りみて、あゝ東京はいやぢや／＼』（潮風生）

▲食事の不規律

食事の時間を主人が几帳面にまもり、子供も遊びに耽れて後れると罰として臺所で食べさせるので、子供はこれを非常の恥辱として時間を守ると云ふ彼地の習慣は、經濟の上にも仕事の上にも主婦の爲に極都合のよいことで厶いますが、日本では勤向や交際の都合に依り迚も杓子定規に行ふ次第にまゐりません。先達もある外國人の家へ參りましたところ、食時の刻限になるのに其主人が未だ歸られぬので、妻君は心配いたし、「貴女がたの御家でも定めしこんな事がお在りでせうね」と同情顔に言はれましたが、私共は習慣上同情を受ける程大して氣にも留らず、實際食時の不定は通例のやうに思つて居るのでございます。中には勤向の都合ばかりでなく子供達とゴチヤ／＼一緒に食るより、獨りで晩酌を樂しんだ方が清々してよいと云ふ主人も少くないのですから餘程事情が違ふのでございまして、此邊も日本の婦人の方が煩雜な用事が多いのだとおもはれます（井深女史談片）



私の苦學した經驗

女子高等師範學校教授　岡田みつ子

小石川新小川町の裏通りに入つて、十五番地の岡田樣は？とたづねますと「學校に御出になる先生で入らつしやいませう」とて直ぐにわかりました敎へられしまゝに狹い横丁を曲つて參る右側、やゝ奥まつて門構二階建の新らしいお家のあるのを、こゝぞと立ち寄つて御門表を見れば、たしかに岡田みつ子樣。

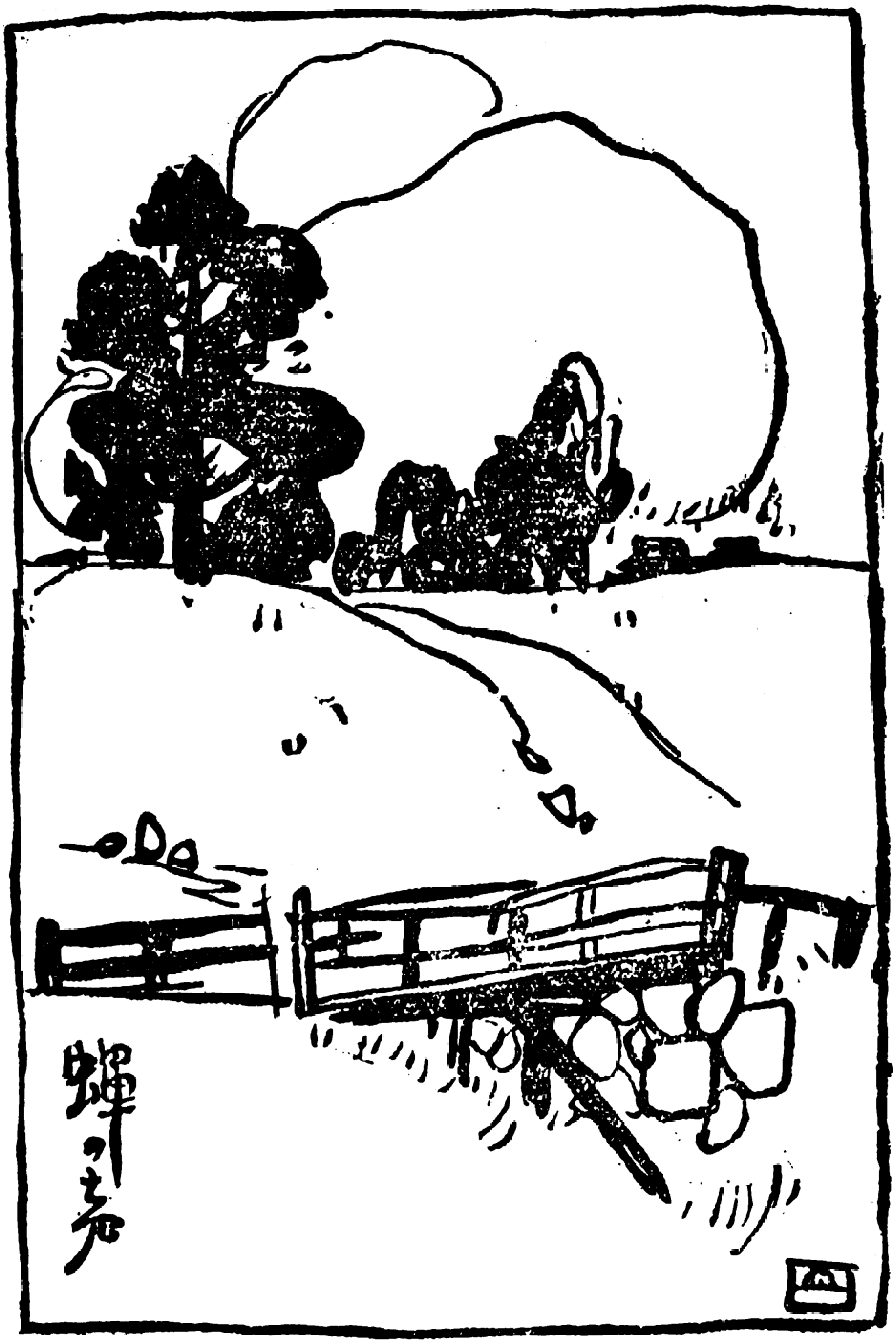
お母樣らしいお方のお取次でお二階に案内されますと、今しも厚綴の洋書にお目を落して居られます女史は、やをら向き直られて「何うぞ此方へ」と麻布の座蒲團をとつておすゝめ下さいました。南向八疊のお座敷はお掃除がよいので、一しほ明るい心地がいたします。障子によつた一隅に女史の机が置かれて、上には見事なインク壺や筆立やらが順序よく片よせられ、中央に今まで讀んで御出での洋書が閉ぢられてある。ヂッケンスの小説で御座います。そしてお机と並んだ硝子戸の書棚には美しい洋書が一ぱい。お次室の三疊は御身繕など遊ばすお部屋なのでせう、間の襖が開け放つてあるので、それとなく拜見すれば衣紋竹にお人柄な縞物のお召がかゝつて、光る程ふきぬいた桐の箪笥の上には用箪笥と鏡臺とが置き並べられ、傍の高窓の處には、栗の木か何かの枝が綠深くさしかゝつて、そよ〳〵と涼しい風を吹き入れます。

二三雜談をお交へいたした後、女史は「何うも學

彼の方の時間が多いので、世の中の事を見聞する暇が少う御座いますから、新説も感想も一向御座いません。といつても折角お訪ね下すつたのですから、何ぞお話申上げたいと存じますが、滅多な事は申されませんから、つまりませんけれど私が英語を習つた御話でもいたして見ませう」とて左の如く語られました。

△英語を學んだのは父の指圖

私の小さい時分は何しろ西洋熱が盛んで、束髪に結つて靴を穿かなければ幅が利かぬといつた風でしたから、よい家のお嬢さんが洋服を着たのでも見ると、それは〳〵羨しかつたもので御座います、從つて英語の一つも出來なければ肩身が狹いといふので、我も我もとABCのお稽古をはじめる、英語教授の看板は實にそつちにもこつちにも澤山に見受けるので御座いました、處で私の父は學問に熱心な人でしたから、人のまねをするといふよりも寧ろさういふ學問は人よりも先きにして置く必要があるといふ考で、私に英語の稽古をさせてくれたのです、丁度御近所に英語を御存知の奥さんが御住居ゐでしたから、毎日伺つてはウキルソンの第一讀本を敎へて頂いたので御座います。先生と申ても實は讀本の二か三位の處が困らぬといつた位の方なのですが、それでも大流行で夫人令孃といふやうな方が大勢習ひに入らつしやいましたから、毎日長く待たなければ自分の番に廻つて來らないといふ有様でした。其内父が氣をもんで何うも一人の先生では進みが遲いやうだからもう一人先生を願つたらよからうと申しまして、矢張り奥さんで英語の先生をして御出での方の處へ參ることにし、兩方の先生へ隔日に通つて居りました。今度の先生には少し生意氣ながらパーレーの萬國史を敎へていたゞくことにしましたが、何うも先生には少し難し過ぎると見えて、わからなくなると一寸待つて下さいといつては奥へ引つ込んでゆかれるのです。ウキルソンの方もだん〳〵進むに從ひ矢張り先生が少し待つて下さいといつては奥へ引つ込


蟬の声

まれるやうになつて參りました。今ならばあの先生は力がないとか先生にするに足りないとか申して、早速よい先生をたづねて代つたでせうけれど其時分は別にそれを氣にとめるでもなく、たゞ毎日一通りの事を敎へて頂けば、それで自分の義務は濟んでゆくといふやうな心持で居りました。

△新榮女學校に入學して女子學院を卒業

小學校を卒業いたしました時、何處か其上の學校へ入學いたし度いと存じましたが、當時高等女學校といつては一橋に一校あるつきりで御座いました。しかし其校の生徒は衣服など非常に贅澤なもので、かつ月謝も隨分高う御座いましたから、到底私共の身分には合はないと申して止めにいたし、仕方なしに築地の新榮女學校といふ宗敎學校に入學いたしたので御座います。處が入學試驗で、私は讀む事は相當に出來たものですから、割合に上の級に入れてもらひましたは宜しう御座いますが、このお蔭で非常に苦しい思ひをいたしました。といふのは私は國語漢文のやうなものは餘程いたして居りましたから、それらの學課は少々程度が高くつても、別に不都合を感じませんでしたけれども、英語には參つたので御座います。何しろ毎日朝の八時から十二時迄といふものは、全然英語ばかり、生理とか算術とかいふものは、日本人の先生が敎へて下さるのですけれど、授業にはすべて英語を用ゐられるのでした。小さい時から學校に居つた人達は讀む力はさほどになくても話がよくわかるから宜しう御座いますが、私は本を讀む事は一通り出來ても、御話に至つては何が何やらちつともわからないので、トンチンカンな間違ひばかり多く、困るといふよりは寧ろ悲しく、泣き出したくなるやうな事も度々で御座いました。それで餘儀なく學校から歸りますと夜分晩くまで字引と首つ曳きで勉強いたしたもので御座いますが、この時の勉强が私にとつては非常にためになつたもので、一級進みました頃はもうそれほど困らないやう

になつた許りではなく、英語といふものは斯ういふものだといふことがわかりかけて參つたので御座いました。其後學校は其頃の櫻井女學校と合併して女子學院となりましたので私も其方へ移つて卒業いたしました。女子學院を卒業いたしましたは、十八歳の時と存じます。其頃は文學書の片はしを習つたことゝて、誰の詩がよいなどきゝますと、もう欲しくて〳〵たまらず、帳面を買つては長い〳〵ものを寫しなどいたしましたものですが、今それを見ますと一寸買へばよいものを、よく根氣負けせずに、こんな手數をしたものだと思はれます。

△一寸した英語が却つて難しい

高等師範の英語は極程度の低いものですから、彼校に入りましてからは、皆さんの下讀をして上げる位のもので、教場では全然遊んで居るやうなものでした。洋行することになりました時、皆さんからあなたは素養があるから外國へ往つてもそれほど困るやうな事はなからうといはれ、自分もまた少しはわかる積りでしたが、さて實際になつて見ますと船へ乘つても宿へ着いても一向用が辨じないので、初めて自分の覺えて居る英語は如何に役に立たないものであるかといふ事がわかりました。私の懇意にした獨逸人に米國で獨逸語を教へて居つた人が御座いますが、其人は非常に英語の力のある人なのですけれど、或時電車に乘つて、何處で下して下さいといふ事が何うしてもいへないため自分の下りる處を見す〳〵通り過ぎて了つたと申しますが、實際六つかしい英語はわかつて居つても何でもない事が却つていへないもので御座います。私共でもシエクスピヤだとかテニソンだとかいふものは却つてよくわかるのですけれど、一寸買物などに參つた時、何それがあるかとか、釣錢を貰ひ度いとか、或はまた持たしてよこして呉れなどいふ實に何でもない事が何うしてもいへないので、何れ程困つたかわかりません。

△御飯に招ばれて空腹を抱へて歸る

彼地の學校に着きました時、學年の始めにはまだ間がありましたから、耳を馴らさうと思つて傍聽に出ることにいたしましたが、何うも先生の仰しやる事がわからないのです。それに彼方の學校では學生の席順といふものが定まつて居りませんから、少し後れてゞも參らうものなら、ずつと後の方に立つて居らなければならないので益々先生の御話がきゝとれません。しかし其内先生が氣づいて下さつて、私の席はいつも前の方に明けておいて貰ふやうになり、かつ傍聽に出て居りました學課は曾つて讀んで見てうす〳〵はわかつて居る文學史の講義でしたから、何うやら半分以上はわかるやうになつて參りました。それでもさうである、ないといふやうな語尾が明斷わからむ、人の名前がききとれないので、筆記は穴だらけで御座いました。學校以外でも人がチヤホヤいつてくれますけれど、返事が巧く出來ないのでたゞ心苦しく感ずるばかりで、ことに御飯などに招ばれた時は、先方に話しかけられるので、自分は何を食べて居るのやら少しもわからむ、よい加減にして下げてもらうものですから、宿へ歸るとまた何か食かなければならないといふ騷ぎ。御飯に招ばれて往つて、空腹をかゝへて歸るは面白いとて宿の人によく笑はれて居りました。

△英語の文章を作つた苦心

それで先生から、とにかく考を表出する丈けの事をはやく覺えなければならないから、其練習として毎週文章を一つづゝ書いて見せろと仰しやつて下さいました。其頃私が學校へ傍聽に出る時間は一週僅に二三時間のもので暇は十分御座いましたし、文章は題が隨意故、書くことは幾らでもあるので御座いますけれどさあ文章を綴らうと思ふと六づかしくて〳〵和英辭書とは首つ引きといふ有樣、それは一通りの骨折りではありませんでした。而もさうして出來上つた文章はと

いへば……、一體英文は英文の頭で書かなければなりませんのに、私のは書かうと思ふ事をまづ日本文に綴り、それをまた英譯するといふのですから、迚も見られたものではなかつたのです。先生はいつも大方こんなことを書いたものだらうといふ處で直して下さるのでした。それでも半年ばかり續けて居りますと少し彈力が出來て來たといつて頂くやうになりましたが、其内いふ事も見る事も聞くこともすべて英語ばかりなので頭の方もずん／＼英語風になつて參りました。其代り日本の文章にはだん／＼離れてしまひまして、改まつて手紙でも書かうとすると、ちよつとも筆が動かず妙な直譯的な言葉ばかり出るのです。教へた生徒などから綺麗な文章で手紙をよこして呉れると、何うしてこんなに書けるのかとばかり感心いたして居りました。しかし日本の文章に遠ざかつた丈は英語の方は本物になりかゝつたので御座いますが、其の本物になりかゝつた時にはもう歸朝らなければならないので御座いました。日本に歸りましてからはまた逆戻りといふ工合で、此頃はもう御話になりません。尤も字は始終見て居りますから、讀む力は別に減ることも御座いませんけれども、口の方は話さないのでメキ／＼退いてしまいます。

△語學の速成は六づかしい

何事でもですが、殊に英語は苦まなければならぬ學課で御座います。よく私の許へ一寸でいゝから教へて呉れといつて御出でになる方がありますけれど、時間と記憶力とを要する事なのですから、何うも一寸で覺えさして上げる譯には參りませんのです。何ケ月速成などいふ事が御座いますけれど、英語は迚も二年や三年で出來るものでは御座いません。語學は忍耐強く氣長にいたす事が最も大切で御座いますから、先生に就くにしても、繰り合せて二度稽古の出來る處ならば、一度にして長くつゞけた方がよいのです。私はある方と御一緒に佛蘭西語の稽古に參つて居りますが、一週に二三度は都合がつくのですけれど、一度と決めて了

つて其代り決して中途で止めないといふ約束をしたので御座います。一週に一時間と申せば一年に積つて見ても僅か四五十時間に過ぎませんけれど、それでもいたして居ると、どれ丈けづゝかわかつて參ります。尤も一度や二度でどれ丈けわかるといふことはいへませんけれど、一年も經つてから始めた時の事を考へて見ると、如何に進歩したかといふ事がよくわかります。語學は一年したから一年丈け、二年學んだから二年丈けわかるといふものではありません。ある程度に達するといふ事が最も大切で、そのある程度にさへ達すれば、ずん／＼わかつて參るものです。私の經驗によれば、まづ二百ページの書物ですと、後の百ページは敎へる方でも習ふ方でも前の百ページを半分も骨折らずして出來るやうで御座います。

△會話が一番やさしい

英語を習ひ度いといふ方の中にも話す事丈け出來ればよいとか、樂みに小說でも讀んで見度いとか、或はまた參考書が讀めるやうになり度いとかいふ風にいろいろありますが、目的次第で勉强の仕方を違へなければならないのですから、英語を學ばうとなさる方が、まづ其目的を定めておとりかゝりになることは必要で御座います。會話は一番やさしい方で、一年か二年もかゝれば大抵出來て了ひませう。これは少し本を讀んでから、西洋人の家へ半年も往つて居ればいゝのです其代り文法もわからず、本も讀めませんけれど、話す事丈けは客間で困らない位になれます。しかし手紙でも書きたいとか、飜譯でもし度いとなれば、ミツシリ本を讀まなければなりません。本を讀むのに大切な事は文の構造のわかること、語を成る丈け多く覺えること、この二つで御座います。





富士登山の話

目賀田男爵夫人

夫人が目出度登山をお濟しになつて御歸宅遊した翌日の事です。お疲勞れの處をお邪魔とは存じ乍ら、四時過ぎから出掛けて男爵邸を訪づれますと、御門の内に綺麗な車が乘り捨てられてある。オヤ〳〵お客樣では御迷惑だらうと氣をかねながらお玄關に伺へば、御取次の方は。例の西洋室に通されました、暫くお待ちして居ると奥座敷の方からいかにも御愉快さうな夫人のお話聲やお笑聲が手にとるやうに洩れて參ります。私の目の前にはあまり見かけぬ山にでも咲きさうな草花が二つの大花瓶に一ぱい挿し込まれて、傍のテーブルの上には赤みがゝつた凸凹の石が二つばかり置かれてある。いづれも富士山のお土產だらうと考へながらながめて居ると、やがて奥のお客樣はお歸りになるけはひがして、夫人はいともお元氣よく此室に入つて御出でになりました。

△歸京早々井戸端洗濯

お疲れの處を——といへば、なあにちつとも疲れはしませんよ。そりや山へ登つて歸つて來たのですから幾か疲れた事は疲れましたが、さういつて居つては限りがありませんからね。今日は汚い浴衣を着て、裾をはしよつて井戸端で洗濯をした處です。娘は少し足が痛いとかいひますが、私が働いて居る處を見て居る譯にもゆかないものですから、「お止し遊ばせと、女中達におさせになつたらいゝぢやありませんか」など申ましたけれど、自分がさん〴〵汚して來て、後始末は

人にさせるといふのもあんまりですからね。それに今日は掃除日で女中達も忙しい日なのですから、矢張り自分でしてしまいました。何うも布目に入り込んだ砂がとれないので、外套や靴下など幾度濯ぎ出したか知れません。先年二女が登りました時には後でこんな手數をいたしませんでしたが、お天氣のよいと悪いとでは大變な違ひです。

富士には何も面白い事がありませんでした。それにもうすつかり新聞で書きたてましたから、他にお話する事もありませんよ。何うもしつかり書かれて了ひました！。

△心地よき野中氏の家

今度の同行は十二名の婦人と、男では監督の千葉さん、國民萬朝の兩記者、寫眞師二人、大磯のピコツト姉妹のお從者が一人加はりましたから、總勢十八名でした。一行は御殿場で汽車を下りると直ぐに馬車に乗つて仁杉の大乘寺といふに參り、此寺で一泊いたして登山の仕度を整へたのですが、實に忘れられない心持のよい宿でした。庭はよし、座敷は廣し、靜かで凉しくて暑さ知らずといふ處、そして溪流を引いて沸かした風呂に入つて途中の汗を流し、浴衣に着更へた時の心地よさは實に何ともいへませんでした。お夕飯前に野中さんのお家へ御挨拶に參りましたが、野中さんの今度御普請をなすつた場所は實によい所で御座います富士山はよく仰がれるし、一方に陸軍のバラツクを、一方に何とかいふ山村を見下すなど、周圍の眺望が非常にいゝのです。あの家の作りかたは何といふ式なのですかね、實に面白い作り方で御座います。二階建で下は土足の人がそのまゝ入られるやうにと疊は敷かずに一面にタヽキにし、中央に太い山櫻の圓柱をたてたなど、實に氣に入りました。二階は八疊を中に六疊を前後に袖のやうに間取つてありましたが、其見晴しのよい事つたらありません。此室へ皆さんが上つてお茶をいたゞき、序に紀念の撮影をいたしました。



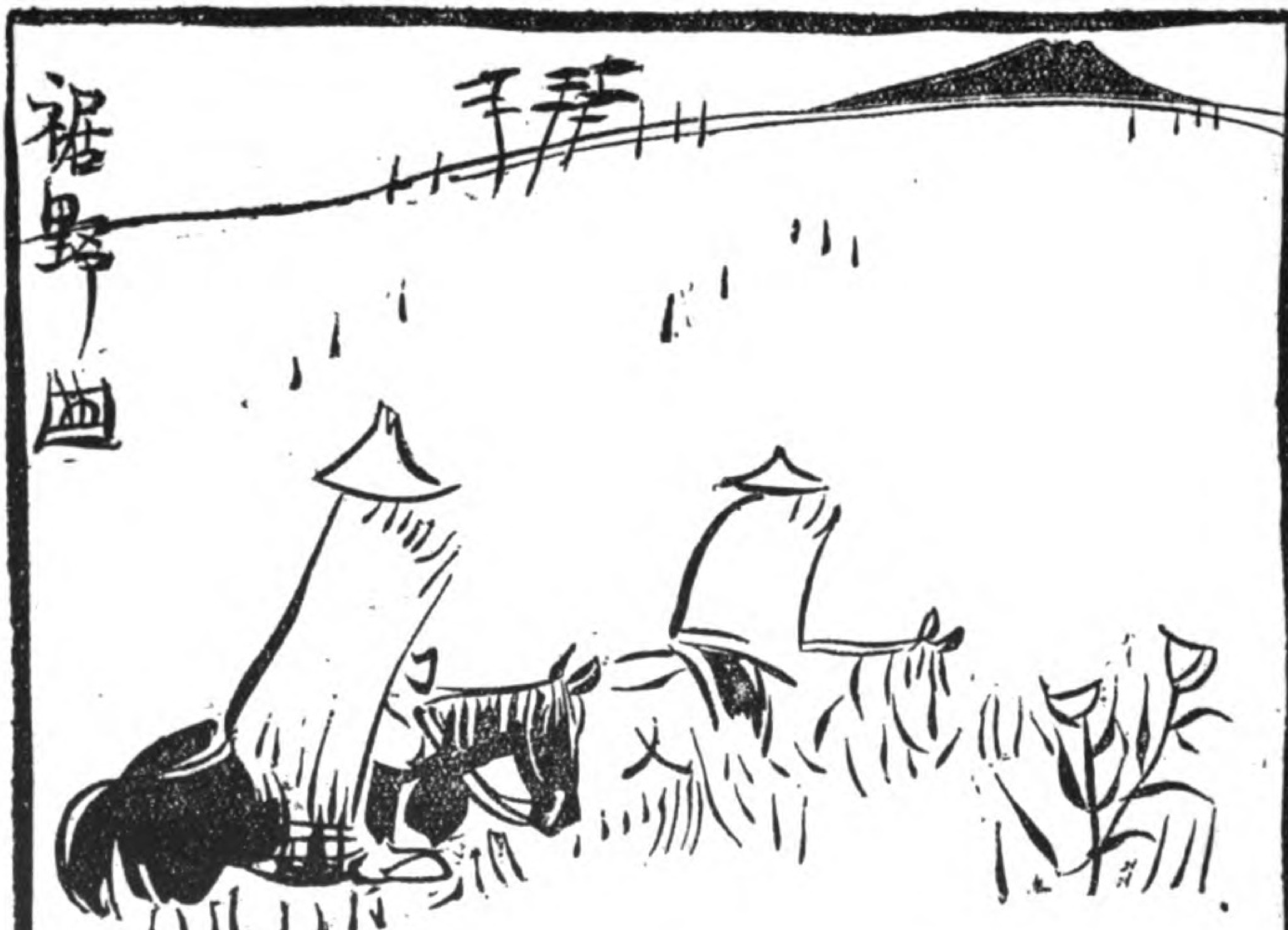
△馬を乘り出した時の愉快

それから大乘寺へ歸りて參るとチャンとお夕飯の仕度が出來て居ました。坊さんのお母さんといふ方は非常にお料理の上手な人で、御馳走の加減がよく、それはそれは御飯が美味くいたゞけました。さて食後思ひ思ひに明日の登山の樂みを語り合つて居ります處へ、この花會に關係のある人達が見舞に來てくれましたが其中に面白いお爺さんがありましてね、大分お愛嬌でした。エーエ新聞に書いてあつた通り。寢む時に二人づゝ組んだ理由は、お寺で蒲團の都合もあらうかとおもつて私がまづ娘と一緒に寢みましたので、他の人達も皆眞似をしたのです。翌朝はいづれも早く起きて仕度をいたしましたが、お寺の坊さんは氣を利かして牛乳を飮まして與れるやら、鷄卵をつけて與れるやらそれは〳〵行屆いた世話をしてくれました。卵といへは私は生卵が嫌ひですから、其朝の分を半熟にうでてもらつて腰に下げたまでは、大變登山の用意によかりさうでしたが、途中その卵がつぶれて黃味がベッタリと長靴下の股の邊に汚らしくくつ付いたには閉口しました。其朝大乘寺を出發つたのは六時頃でしたでせうが、先づ要らない荷物はすべて合力に預けてしまつて、浴衣一枚の身輕で馬を乘り出した時の心持は實に愉快でしたね。途は野中さんのお家の前を通りましたけれども、失禮して馬からは下りずに、大聲で「今から參りますよ」と御挨拶しますと、夫人が御門へ出て見送つて下さいました。そして御主人は先で私共を待ち迎へて下さる積りで、もうお出かけになつたとの事でした。

△馬に蹴られた事

それから一里松といふ處へ行つて一寸下馬して一休みたし、太郎坊に着いてまた休み、二合二勺目に到つて愈々馬を乘り捨てました。──さう〳〵私が馬に蹴られて青くなりたとか何とか新聞に書いてありましたが、仰山に……隨分書き過ぎで御座いますよ。一行

の乘つた馬はいづれも女馬ばかりで、極温順しいのですが、私の馬子はまだ十二三の子供の事とて、馬をとめる時は何ともいはず茫然して居るものですから、馬は前の馬のお臀の處に鼻を打つけたのです。それで前の馬がうるさがつて蹴つたものですから、私が馬子に「止める時は止めるやうに何とか注意しなければならないぢやないか、山へ登るには足が一番大切なのに、その足を馬に蹴られちや何うする事も出來ない」つて言つてやつた



ばかりで、青くも何ともなりはしませんでしたよ尤も痛いことは隨分痛かつたのです。それでも始終靴下をはいて居つたので何うなつたとも知らずに居りましたが、歸りに大乘寺で湯に入らうとして初めて斯樣になつてることがわかりました。

（とて示されたのを見ると成程な脛の處が黒く痣のやうに腫れ上つて、いかにもお痛たさうにお見受けいたしました。）

△下駄がけの登山は失敗

此前朝鮮の山に登りました時草鞋をはいて非常に草臥れた經驗があるから、今度は平常はき馴れて居る後齒の下駄で登つて見やうとしたのですが、富士は丁度コークスを細く砕いたやうな燒砂ばかりで、歩くとゾク〱足が埋まつて了ふといふ有樣ですから、折角の下駄ばき登山は見事失敗に終つて、私も途中から草鞋ばきのお仲間入りを致しました登るに從つて風はかなり烈しくあたるやうになりましたけれど、空がはれて居るので雲をいたゞいた富士の姿は進み乍らよく仰がれました、そして皆が元氣で、軍歌も出れば唱歌も出る、都々逸もうたはれ、端唄もうなられ、それは〱勇しくつて賑かでした。あゝいふ山へ登る時下を見るのはまことに惡いさうで——腦貧血でも起すのか知りませんが——千葉さんや野中さんが折角下を見ないやうに〱と注意して下さるので、私が「下見れば山嶽病の恐れあり上みて登れ富士の頂」とうたひ出しました處、皆がそれにいろ〱なふしをつけて六根淸淨の代りにそれをうたひながら上つて參りました。一體私はあの六根淸淨と唱へるのが嫌ひでしてね。あの聲をきくと何ですか冥土の道行でもするやうな陰氣な感じが起つて、少しも元氣をよびおこしません。それよりか「上みて登れ富士の山」てな事を軍歌のふしでもつけて歌つた方が餘程氣が利いて居ますよ。

△生れて初めての不味い御飯

七合目に泊る筈でしたけれど、割合に道が捗つたので、七合五勺まで參りて石室へ入ることになりました石室はまるで木賃宿ですね。しかし彼處へ入るともう身分も階級もいつて居られないから面白いですよ、で兎も角も疲れを休めやうといふので重ねてあるいかにも汚らしい煎餅ぶとんを出して横になつて居りますとやがて六時近くになると、霧が落ちて來て四邊は眞白全然一寸先が見えなくなりました。そしておまけに風が烈しいから一寸でも明けて置く譯に參りませんでした、其内御飯が出來上つたといふので、起き上つて、蒲團の間へ汚い食臺を据ゑたのですが、其お茶碗とい

ひお椀といひお箸といひ見たばかりでもう胸がつかへさうでした。幸ひ私はお箸丈けは用意して參りましたが、其の御飯のまづい事はまた特別で、到底咽喉に入つて往きませんでした。きけば南京米の陸稻とかいふお米ださうでしたが炊き方も確に惡いのでせう、實に生れて初めてのまづい御飯でした。仕方がないから私は醤油を貰つて沸湯を注いで飲んで間に合はせました私の身體には醤油そのむのがいゝとは、石塚左玄さんの説で、私は平生でもさういたして居りますが、成程身體に、勢がつくやうに思はれます、試にやつて御覽なさい、翌朝は野中さんのお辨當をわけて頂いたので大助かりでした。

△負さつて御來光を拜した理由

富士もこの邊まで登るとずつと溫度が下つて、野中さんが御持參の寒暖計は五十度とか伺ひました、私はネルの單衣をお腹に卷いて寢んだので、冷えることは免かれましたけれど、何うも蚤がモグ〳〵澤山に居るでの大きに弱りました。それに外面はます〳〵暴れ狂ふて、石室まで動くといふ物凄さ、皆々何うなり行くことかと心配して、オチ〳〵夢も結ばなかつた樣ですしかし野中さんが風の吹き工合を御覽になつて、これならば大丈夫と仰しやつて下さるから私は安心いたして居りましたが、果して夜明けになると少し靜まりて御來光を拜むことが出來ました。新聞には私が誰かに負さつて御來光を拜したなんて書いてありましたが、本當の事を書かないからいけませんよ。斯ういふ譯なんです。御來光といふので外へ出やうと思ふと下駄が一足もない。これはとて石室の外は隨分汚ないから何うも跣足で出る氣にはなれません。見ると某朝かの記者が今出やうとする處でしたから、チョイト〳〵と呼んで、いきなり負さつて出たのです。そして御來光を拜して歸つて來て、有りがたうとは言はないで、寒くなくつてよかつたでせう、などゝいつたものですから皆が大笑ひでした。

△風雨を冒して愈々頂上に登る

此處から上は冬仕度をして登るやうにとの事で、私は浴衣の上にネルを重ね、其上に外套を着、冬の手袋をはめて出かけました。天氣は矢張りよくなりませんでした。雨はます〳〵降り風は愈々吹き、道は險阻になつてくる。それは隨分骨が折れましたよ。八合目に達すると寺崎のお婆さんはもうこの上登れないから此室で待つてるといひ出し、山田さんはともかく從つて來ましたがとう〳〵又戻つて矢張八合目に引き返しました、私共はやつとの事で頂上まで登りは登つたが天氣が惡いので何も出來ず見えず實に殘念でした。天氣がよかつたならば、名にし負ふお鉢廻りは無論の事野中さんの觀測所なども見られて、嘸愉快でしたらうに。しかし銀明水や甘酒を飲んだ時は生き返つたやうな心持がしました。甘酒は何の石室にも一杯三錢づゝで賣つて居ります。初め汚らしいので一度も飲みませんでしたが、野中さんが此室のはたしかなものだから一ぱい飲んで御覽なさいとて、御自分も召し上るから安心して飲んで見ると、成程おいしう御座いました。

こゝで紀念撮影をしやうとて、皆なが列んでは見ましたなれど霧が深いので器械を餘程近くよせても、寫らないので止めて了ひ、それから富士神社で千葉さんから一同へ御挨拶があつて、愈々下山する事になりました。

△花に氣を取られての失策

雨も止まず風も吹き續けました、されどもう一氣呵成の勢で下山しました。此時の人の顏は實に見ものでした。髮の毛にも眉にも睫にも髭にも玉水がかゝつておまけに水涕が流れて居るといふ有樣。それでお互に自分の顏は見えないから、人のを見ては笑つて居ました。それから大乘寺に寄つて草鞋を解き、湯に入り、髮をかき上げ、野中さんから皆へ下すつた御心づくしの壽司を頂戴して、大急ぎで停車場に驅けつけ、七時三十分の汽車に乘り込んで歸京致しました。御覽

なさい。こゝに挿してある花は綺麗でせう。富士のお土産ですよ。イタドリといふのですつてね。裾野の方には此花が一面に咲いて居つて其美しさつたらありません。餘り綺麗でしたから歸りに少し持つて往きたいと申した處、野中さんがこんなに澤山爺に取らせて下すつたのです。處がこの花にばかり氣を取られて停車場へ出る間に汽車の切符を落してしまひました。仕方がないから自分でまた赤切符を買つて歸つて參りましたが、これが今度の旅行に於けるたゞ一つの失策でした。私は富士へ往つたら富士に似た形の石を拾つて來やうと思つて居ましたが、ありませんね。こんな風な燒石ばかりです。もう一つ黒つぽい石を拾つて歸つて彼方に置いてありますが、妙な事には其石がビッショリ汗をかくのです。海から拾つて來たものなれば、鹽氣で濕るといふ事もありませうが、これはまた何ういふ譯なのですかね。何か譯でもあると面白いのですが。





男女自活の精神

井深花子

▲隱居は大恥辱

米國の娘達に母親の年齢を尋ねますと、「私のお母さんは若ふございます、未だ六十五ですもの。」なぞと云つて居ります。これは負惜みで申すのではなく一般婦人の氣象が何時までも壯なので、六十五位では未だ未だ一つぱしの働き盛りとなつて居るからでございます而してどんな年寄でも隱居と云ふ事は大恥辱と思つて居り、身體が利なくなるまでは何かしら働いて世に立てゐるのです。實子が幾人あつても老後の世話にならうと云ふ依頼心は少しもございません。私の懇意に致した八十計りの老婦人は、立派な地位を得て居る息子や娘が多勢ありまして、私が參ると善く寫眞を出して見せ怡んで居りますので「貴女は本當に御幸福です子どの御子樣の御宅へ御出になつても結構な御身分で嘸お嬉しいでせうね」と申しましたら老婦人は、「子の家へ參るのも樂しみではありますが、自分の家ではありませんから此家とは比べ物になりません、私は新婚紀念のある此田舍の古家で良人と共に暮すのが一番懷しく樂しいのであります」と答へました。結婚する時から個人の財產を用意してある上に、老年まで働らきますので、親子の厄介にならず、何時までも老主婦で暮すのが理想なのでございませう。一寸考へますと親子の情が甚だ冷やかに思はれますが、決して左樣でありません。青年の子を持てる母親などは、自分の友人の家に呼ばれて面白い談話に耽つて居ましても、息子が學校から歸る刻限になると、「折角御話に實が入た處ですが、悴が歸る頃ですから御暇いたします。彼もモウ

十六で一番大切な年頃ですから私が留守のために不快な感を起させてはなりません」と云つてどんなに興に乗つて居る場合でも斷然辭し去るのです。家の息子はモウ留守番が出來るから少し遲なつても宜い位で喋舌つて居る母親とは愛情の度が違ふと思ひます。さうして子女が一家を持ちますと每年十一月の聖日に不殘親の家へ招いて御馳走を致すのですが、老夫婦は此會合を一年中の一番樂しい日と持ち構へ、幾月も前から果物のカン詰を拵へたり、孫に遣る物を拵へたりして大騷ぎやつて居ります。子女の方でも土產物に工夫を凝らし、老親を怡ばせやうと樂しんで居る樣子は却々睦しいものでございます。

△係累難

我國では親兄弟、嫁舅姑の間柄に就て、外國人が善く感服する美德が行はれて居るのは事實でございます併し此美德を發揮する方の側、即ち親を養ふ子、兄弟を引受ける戶主が己の責任として世話いたすのは立派な事でありますが、親や兄弟の方では出來得る限り働らいて戶主の重荷を輕く致さなければならぬと存じます。格別の財產もない家庭で老親も在り子供も多い上に、學費の要る兄弟とか甥姪とかゞごろ〱と徒食してゐるために、其家の主人は相應の收入があつても他に內職を兼ねなければ追付かず、遂に神經も衰弱して本業も疎かになるやうな實例も往々見聞するのでございます。尤も中流の戶主が兩親を養ふ位は當然の事でありますが、他の壯年の係累は勞働でも何んでも爲て自活勉學の道を求め、戶主の好意に報いなければなりません。働ける手足を持ちながら安閑として食客に甘じて居るのは餘り勿體ない次第であると存じます。

△士族の依賴心

我國でも農家や商家の老人は子の厄介に成らずに働らく風習がありますが、田舍の士族は食祿で安樂に衣食して居つた遺習でせうかどうも依賴心が多いやうに思はれます。尤も士族には田地や店と云ふ資本もなく

仕事も主に精神的の方ですから老年まで勞力が續かず據なく子に依頼する傾もありませうが、夫れにしても最少し奮發して例令低い生活を爲ても身體の利く間は子の厄介にならぬ考が必要であると存じます。斯樣事を申しますと日本の美しい家族的生活を打こはすやうに聞えますが、前申す通り私は唯親の方の德義を考へますので私共も唯今より用意して置くべき事を考へて居るので御座います。自分の勝手にばかり走つて親を養ふのを忘れる人に同情する次第は微塵もないのでございます。

御話が色々別道に入りますが、畢竟我國の中流社會は收入の割合に綺羅を張る傾が在りますので、主婦は却々骨折で御座います。臺所でへイ〱頭を下げる商人の方がズット財産が確で、何か御着古しの物でも頂だかしてと外見なしに御辭儀をする出入の女房さん達の內幕が却つて餘裕のあると云ふ滑稽は少くあるまいと思ひます。去りとて此風を一時に打破しやうとすれば主人の體面を損ひますから、主婦は身を節する事を心掛けて難境を切り拔けるより他、術はありますまい。せめて衣服慾を制する克己心だけでも奮ひ起して良人の重荷を輕くする考がなければならぬと存じます。



三十年前のお茶の水

佐方鎮子



▲新入生は數字の書方も知らず

今の女子高等師範學校が東京師範學校として開校いたされましたのは、明治八年、丁度私が十七歳の時で御座いました。私は其時郷里の鳥取から出て募集に應じたので御座いますが、何しろ小學校でさへ漸と明治五年頃に出來た位でしたから、當時募集に應じた人達の年齢學力が雜駁不同でありました事は申すまでも御座いませぬ。まあ生徒らしいのは竹橋女學校の方から來られた方達位のもので御座いましたでせう、あとは皆家庭で漢學などを稽古して參つた人達で、數學などは數字の書き方から習はなければならないやうなのが多いので御座いました。其代り入學試驗などは至つて簡單なものでありまして、十八史略の讀みと講義とのほかには、習字の試驗があつた位のもので御座います。この入學試驗は六月に行はれまして、百八十餘名の應募者の中から確か七十二名程入學許可があつたと思ひます。そこで生徒は九月に寄宿舍に移り、十一月に開校式が行はれたので御座いますが、この時は皇后陛下の行啓が御座いましたし、公衆一般にも學校の内部を見せることにいたしましたので、なか／＼賑かで御座いました、十二月には學校で學んだものゝ試驗が御座いまして、組が一級二級三級と三組に分かれたので御座いました。

▲駿河臺には追剝が出ました

當時の建物はたゞ一棟で、下を敎場に二階を寄宿舍にあてたもので御座いました、寄宿舍は最初寢室、自修室、食堂といふ風にわかれて居りましたけれど、其内豫科なども出來ましたので狹くなり、寢室も自修室

も一緒になつて了ひました。今日でこそお茶の水はあの通り開けて賑かになつて居りますけれども、其の頃の彼の邊はまことに靜かと申すよりは淋しい方で御座いました。駿河臺はこんもりと繁つた森で御座いましたし、往來には追はぎが出るといはれた位で、人通りも稀で御座いました、ことに夜分などは學校の窓から外をのぞきましても、燈火一つ見えはいたしませず、偶に俥でも通れば、珍らしく火影を見るといふやうな有樣でした。

▲生徒は恰度劍舞をやる樣な姿

生徒の服裝なども隨分をかしいもので御座いました男の袴を着けて靴をはいて居る もの はまだしもですが、男のやうに散髪にして居るのも御座いましたし、殊に少し生意氣な人は、袴の上に白縮緬のシゴキなどを伊達に結びまして、所謂ハイカラがつて居つたので御座います。それが入學いたしましてから程なく、學校から一定の袴――、それは小倉ともつかぬ極お粗末な縞の木綿で御座いました――が渡り、同時に髪も唐人髷に結ふことになつたのでございます。最初は髪結を入れて居りましたが、種々弊害も御座いましたので、其内にお互に結び合ふとにいたし學校から徽章の代りに渡された洋銀製の櫻花の簪をさし、根がけに白の丈長を用ひて居りました其風は餘程長い間續いて居りましたが、其後成る丈け世間の人と同じやうにしなければいけないと申す處から、年齡によりて島田とか唐人髷とかに結ふことになり、衣服の方も袴を止めて普通の帶姿になつたので御座います。

▲袿に緋の袴又は洋服着用の布令

そしてたしか十五年頃であつたと思ひます。婦人にして高等官にあるものが宮内省に出頭する時は、袿、緋の袴もしくは洋服でなければならないといふやうな令が出ましたので、教員中にはそれを調らへた人も大分御座いましたが、其頃から生徒の方も洋服を着ることゝなり、髪も束髪に結ふことゝなりましたのです。それがまた止めになつて普通の日本服を着ることになつて居りましたが、七八年前から今日の袴をはくこと

になつたので御座います、

▲毎週一度十錢宛貰つて外出

學校は矢張り初めから官費では御座いましたけれど被服としては今申上た木綿の袴をお揃ひに渡された位のもので御座いまして、他はすべて自分で着なければなりませんでした、しかし月に一度、半紙一束に筆、墨、上草履といつたやうなものを渡され、土曜日にはまた兵隊みたやうにお金を十錢づゝもらつて外出いたしたもので御座います。食費などは何の位の程度になつて居りましたものやら、賄に任せつきりで、生徒は一向おかまひなしで御座いましたが、食物は至つて宜しい方で御座いました。一週に一度は口取付の正式なお料理がありましたし、日常でも刺身とか牛肉のやうなものは始終ついて居りました。

▲規則は今よりはずつと寛やか

規則は今日に比べますとずつと寛やかでした。生徒の中には既に結婚した人も御座いましたし、結婚のために中途で退學するといふやうな人も少くは御座いませんでした。私共の組では伊澤さんの奥様などは、御主人が外國から御歸國になつたといふので中途で御退學になり、中上川さんの奥さんも早く御退きになつた方で御座います。それに師範學校といふ名では御座いましたけれど、要するに女子教育の奬勵が目的なので御座いましたから、必ずしも卒業後に奉職をしなければならないといふやうな事も御座いませんでしたし義務年限といふやうな事はもとより定まつても居りませんでした。

▲生徒は皆眞面目な家の娘

それで奉職を望む人が御座いますと、文部省や學校から適當の處を探して下さるといふ風でしたが、私は十二年に卒業いたしますと其儘直ぐに母校に教鞭をとる事になつたので御座います。そして十六年の七月から十七年の七月迄一年間は、前橋の高等女學校の方から是非に來てくれと申す事で、其方へ參つて居りましたけれど、あとはずつと高等師範の方に奉職いたして居りました。過去三十年間の事を考へて見まするど、學

校の樣子にも種々の變化が御座いましたが、生徒の氣風なども餘程變つて參つたもので御座います。開校當時の生徒は、學力に於てはとても御話になりませんでしたけれど、其代り其の頃地方から出て參る人達は、家庭で、幾分本でもよませるといふ眞面目な家の娘ばかりで御座いましたから、その家庭の感化ともいふべきものにいふにいはれぬよい處があつたやうに思はれます。

▲活潑で生意氣らしいのが歡迎せらる

しかし前にも申上げますやうな次第で、當時の女學生の風はまことに殺風景なもので御座いまして、女らしいといふ點に缺けて居りました事は事實で御座います。世間には目をつけてとかく申す人もなかつたではありませんでしたけれど、一方では一も二もなく西洋風を尊んだ時代で御座いましたから、生意氣らしい活潑なのを宜しとする傾が御座いました。私共も學校では隨分男のいたすやうな事をして居つたもので御座います。體操は兵式體操で、軍人の先生が御出でになり、駈足などは盛んにさせられましたが、雪の日などは運動場に出て烈しい雪合戰をいたしたもので御座います。

危險な交際

西洋なら客間で幾組もの男女が談話をするのが普通の作法になつて居りますが日本では下宿屋の四疊半に若き男女の差向ひといふことが普通のやうになつてゐませう、甚だしきは男の寢てゐる枕元に訪問の女客があるといふやうなことを屢々目撃しますそんなとから何時の間にか姙娠になつたといふ事實も澤山あります、ハリスさんの話に米國に往つて居る日本人は世話をするのは善いが、男女の作法を知らないで困る、三十四五になる女が病氣で休んでゐる所に二十四五の青年が常に訪れて來たさうですが、其の女の二十歳位の時には其の男は十歳位であつたのですから、二人の間は聊しも疚しくなかつたでせうが、妙な事には其の女が姙娠になつたので其れに就ては何時も往つてゐた彼の青年が怪しいといふ事になつて非常に其の青年は迷惑したと聽きました。

私の最も危險に感ずることは、下宿住居の兄が妹の監督をする事です、地方の親許では兄の監督だからと安心してゐるやうですが事實は全くその反對です、兄の許には碌からぬ友達も來る酒盛が初まる其のお酌をさせられる又くだらない談話を聽かされる、其の間に知らず識らず受くる惡感化はどれだけだか知れません。(櫻井女史談片)



嫁と姑の間柄

女子大學講師　高島平三郎

嫁と姑といふやうな問題は、西洋に於ては全然不必要の問題であらうが、家族制度の我國にありては、甚だ重要な問題である。我國では昔から嫁と姑とは、恰も犬猿の間柄の如く甚だ仲の惡いものと相場が決まつて居る。書物などを讀んで居つても、難しい字があるとこれは姑字だといふ。何故かといへば讀めにくい（嫁にくいから）だといふのである。川柳にも恁んなのがある。六阿彌陀嫁の噂の捨て處。實際お寺詣りなどに往つて年寄同志が一緒になると家の嫁は何うだ、私の處の嫁は恁うだとお婆さん同志が意氣大に投合して嫁の惡口を語り合ふものである。

斯ういふ風で嫁と姑との仲は非常にわるくいつてゐる。其のために家庭に不和を來すとか、息子が自暴自棄に陷るとかいふやうな事は世間に珍らしくないのであるが、一體これには何んな理由があるのであるか、と考へて見ると、嫁姑の間には到底一致し難い數多の點のあることを見出すのである。

▲生活の中心點

第一姑といふ字は女偏に古いといふ字を書くが如く姑は、即ち古い女である。尤も近頃のやうに七十のお爺さんが息子の嫁としても若いやうな二十歳そこ／＼の奥さんを持といふ事になると、姑も女偏に新いといふ字を書かなければ合ぬ事になるが、概して姑はまづ嫁よりも二十代も三十代も年老つて居るものといつてよ

い。處で人間は老幼を問はず同じ現世に生活して居るのであるけれども、其生活を動かして居るものは必ずしも現在のみではない。其中心點が未來にある場合もあれば、過去にある時もある。人の性分によりて或は未來の希望にのみ導かれて現在を思はぬもあり、或は現在に追はれ其日〳〵の處置にのみ齷齪して未來とか過去とかいふ事は少しも考へぬもあり、或はまた死んだ子の年を數へるといふ風に始終過去の事ばかり考へて居る人もある。この區別は年齡に依つてまたわかれるのである、まづ青年は未來に生活するもので、今に見ろ今に見ろといふ風に、常に希望理想にあこがれて進んで居る。私が曾つてある中學の生徒のノートブックを見た處が「勝敗の決は五年級にあり」と書いてあつた。これは多分友達と試驗の競爭に敗けたので、宜しい五年級になつたら取り返してやるといふ意氣込みを書いたのであつたらうが、これ等は實によく青年の心持を表はして居るものといつてよい。空想や理想は青年の生命である。これなくばよし年は若いにせよ、青年たる資格のないものである。

▲老人は過去に活きるもの

然るに追々年をとつて來ると、さう〳〵空想にばかりあこがれても居られない、先きが幾何もなくなつて來ては、今に見ろ〳〵ともいつて居られなくなるのである。それに世間でも許さなくなるから、餘儀なく現在の世間に立ち働かなければならない。而かも現在の世間に働いて居る間は現在の世間が一番面白いのであるがなほ一段年を老つて來ると、複雜な世事にかゝつらつてることが面倒になつて來る。同時に世間でもまた歡迎しなくなつて、あの人はもう化石しかゝつて來たなどゝいふ。そこで老人は愈々隱居でもして、閑日月を樂しむことゝなるのである。西洋の詩人は、人は戀に失敗すると自然に遊ぶものだといふやうな事を歌つて居るが、必ずしも失戀をしなくつても年を老ると自ら自然によつて慰められるやうになるものであるしかしいかに現社會から退いた老人でもたゞ月や花や

というふ事丈けではあまりに閑すぎて暮されない。そこで頭に浮んで來るものは自分の青年時代の事や盛んに世の中に活いて居つた時分の事である。奇妙なもので人間は實際働いて居つた時には隨分苦痛であつた事でも、後になつて考へて見ると苦しい事は消えて樂しかつた事ばかり殘る、これはまことに人間の幸福な點といはなければならぬ。もし反對に苦のみが後に殘るものとすれば、近い譬が婦人の方など再びお産をすることを厭ふやうになる譯である。で、年寄は動もすれば自分の若かつた時を持ち出して、今時の若いものは駄目だといふ。すると之れを若い人達がきいて、何うも老人は頑固でいけないとい



ふのであるが、しかし老人の過去を追憶するのは、恰も青年が未來の空想にあこがれるのと同じくもとより然うあるべき事なのである。

▲姑が見聞して驚く事柄

今日家庭に於て姑となる人は大抵五十歳以上であるから、自分がお嫁さんであつた時代はもう二十年も三十年も前の事であつて、今日に比べるとすべての狀態がすつかり違つて居るのである。其二十年も三十年も前の事を思うて居る姑の目から、今の學校敎育でも受けた若いお嫁さんの行動を見るならば、それは一々合點の往かぬ點ばかりなのは無理もない次第である。言葉づかひなどでも嫁の方では必ずしも生意氣といふ譯ではなからうけれど、姑からきくと實に驚くやうな事がある。買物をするにもお母さんそれは不經濟的ですからお止しなさいなどゝいふし、下女へものを言ひつけるには、これお三や大根を長方形に牛蒡を圓形に切つてお呉れ、などゝまではいふまいけれども、隨分これた似寄つたもの言ひをするのである。すると姑の方では家の嫁は私が昔者で何もわからないのを馬鹿にして、わざと漢語や英語混りに話をするといふ風に取るからさあ面白くない。夫婦相携へて出懸けるなどいふ事は、近頃は普通のことで寧ろ相携へて歩かないのが野暮な位になつて居るが、これらも姑から見ると面白くない息子は妻の愛に溺れて親を粗末にする。私達の若い時分は何うしてあんな眞似は迚も出來なかつた。丁度お爺さんが七十で私が六十三の時初めて二人一緒にお墓參りに往つたが、その時でさへ並んで歩くのが恥しくて、一丁程後れて從いて歩いた位だなどゝ思ふ。それでも初めの內は家のためを思ふて堪えて居るそれでも遂には、嫁の噂を捨てゝ歩くやうにもなつて來るのである。

▲合點のゆかぬ今の婦人趣味

以上述べた處は今昔に於ける風俗習慣の相違に依りて嫁と姑とは折り合はないといふのであるが、次に嫁

と姑とは趣味が違つて居る。例へば昔の女は髪形といふことを非常に重んじて、外に出る時には勿論、家に居つても毛一筋亂さぬのを女の嗜みとして居つた。ことに髪の結ひ立てなどには、高い枕をしてろく／＼安心して睡らぬ程に、苦心慘憺したものらしい。處が今日では毛が少し亂れて居る位がいゝといふ。のみならず成る丈け縮れてくれゝばいゝ位にさへ思つてるのである。かういふ風を昔風の姑から見ると、今の女は實に墮落したやうに思はれるのである。歌の如きも昔と今とは餘程趣きが違つて居る、

　妻もまた十五圓とる判任官

　　偶には起きて飯たきをせよ

などいふのはもとより正しい歌ではないけれども、かういふ風な事はだん／＼正しい歌にもよみ込まれて來やう。まあ一寸いつて見ても斯ういふ工合であるから、若い嫁と年老つた姑とを、一緒に置けば當然仲がわるくなつて來べき譯であるが、この他に尚ほ姑と嫁と



の間が面白くゆかない一大理由とも見るべきものは嫉妬心である。

▲姑より見た息子と嫁

嫉妬といふ事は單に男女の關係に於てのみ用ふべきことばではない、何によらず一つのものを二人の人が互にこれは自分に屬すべきものだと考へて居る時に、もし一方がそれを專有することになると、失つた人の方に嫉妬心が起るのは當然である。姑はいふまでもなく息子のために男女の關係から嫁に對して嫉妬を起すものではないが、嫁が來ると息子は母親を其方退けにして、何事も嫁とばかり相談をする。それで母親は息子を嫁に奪はれて了つたやうな氣がするのである風俗習慣から趣味思想に至るまで相違して居る嫁姑の間へもつて來て、この嫉妬が起つては愈々事が難しくなるばかりである。私の知つて居る家で母親一人息子一人の處へお嫁さんを貰つた。處がお母さんがやかまし、いつて成る丈け夫婦を一緒に置かないやうにする。お嫁さんが息子に御飯の給仕でもする時は、お母さんがちやんと其間に見張つて居つて、夫婦に用事以外の話しをさせない。夜でもお母さんが次の室に間の襖を開け放して寐まれるのださうである。これらは隨分極端な例で、寧ろ病的の方であらうが、これに近い例は世間に幾らもあるのである。

▲段々權威が下る樣に感ずる

なほ嫁が出來て、家庭に於ける母親の境遇が變るといふ事も、確に嫁姑間の一致を缺く一原因である。今迄は何から何まで母親の手一つに息子の世話をやいて居つたものが、嫁が來ると皆悉其方の手にうつて了ふ。息子も亦母親のいふ事ばかりはきかずに萬事嫁と相談しては事を處理する。それで母親は何うも自分の權威がだん／＼下つてゆくやうに思はれて面白くなくなるのである。其他嫁姑間の一致を缺き、衝突を來す原因は、數ふればまだ幾つもあることであらうが、まあ大體前述のやうな理由が最も主なるものであらう。

▲嫁入前に老人研究が必要

そこでこれは如何すれば救ふことが出來るものであるか、ある人は西洋のやうに別居すればよいといふ。成程それは一番簡單で文句がないやうであるけれどもそれでは折角持續して來た我國家族制度の美が破壞されて了ふではないか。私の考ではまづ差當り形式的の女子教育に改正を施すことが必要であると思ふ。今日の學校教育では前述の如な若い婦人の缺點も實は止むを得ぬ產物なのである。學校の共同教育では、人の事を話してきかせるにも、老人は如何に、少年はいかに、と其微細な感情狀態にまで及んで說明してきかせることが不可能である。婦人には第一に愛嬌といふ事が必要であるが、この愛嬌なるものは同情から湧く感情の表出であつて、たゞ笑ふといふのとは違ふから學校の教場で一二と號令をかけて、さあ愛嬌を出すんですぞといつたとて、出來るものではないのである。それで女子教育に大に改良を加へて、老人は何んな感情をもつて居るものであるかといふやうな事を敎へて置くことは甚だ必要であると思ふ。

▲年寄の心の眞底

老人といふものは若い人の氣がつかないやうな事を非常によろこぶものである。つまらないものでも少しのものでもお婆さんがお好きだから取つて置きましたとか、お年寄にはお宜しからうと思つて御目にかけますとかいはれると、殊の外喜ぶものである。ある婆さんが毎日阿彌陀樣へ參詣しては、何うぞ早く御引きとり下さいと大きな聲で願をかけるので、惡戲な小僧があの婆はいつもあんな事をいつて居るが眞實に死にたいのか何うか一つ試めしてやらうといふので、一日阿彌陀如來の後にかくれて待て居ると、婆さんが來て例の通り大きな聲で何うぞ早くお引き取り下さるやうにと願ふた。其時小僧がそれでは折角の願故只今引き取つてやるぞといつた處、婆さんは吃驚して何うぞも少し待つて下さい、この阿彌陀樣は滅多に冗談もいはれ

はしないといつたといふ話があるが、凡て老人は死にたいといつても實際は長生きしたく、物を欲しくないといつても貰ふのが嬉しいのである。若い人は斯ういふ老人の心がわかつて居つて、出來る丈け喜ばせるやうに仕向けることも必要であらうと思ふ。

△優しい美しい意味ある言葉

すべて老人には同情をするといふ事が必要である。第一年寄は身體が衰弱して居るので心持が不愉快なものであるから、若いものはそれに對して「お氣の毒だ」といふ心を持つことが大切である。私は日本の語のうちで、これほど優しい美しい意味を含んで居る語はないと思つて居る程であるが、若い人にこの心さへあらば、ある特殊の事情ある場合をのぞいて、嫁と姑との衝突は必ず避け得られると思ふ。そして年寄が物を知らないとか何とかいつて諫め立てをするのは甚だ宜しくない。常にやさしく世間の話でもしてきかせるとか或は新聞でも讀んできかせるやうにすれば、姑の方でも自然に現時代の風は何んなものであるかといふやうな事がわかつて來る。そこへもつて來てお嫁さんの方から深切に仕向けられたならば、調和せざらむと欲するも得ざるなりといふ風で、家庭の無事長久は疑ひなしである。

▽女が老ひて男子よりも早く腰曲るは、全く帶の作用に因るものにて、その重みに引かれ後に倒るゝこと無からんかと、常に前へ屈み勝になるより、遂にそれが習慣となり、早く腰曲りとはなる也。

▽美貌に世間の人を忽ち惱殺し得る女が、往々にして寡婦となり妖婦となる傾きあるは、羽の色鮮麗として光彩陸離たる昆蟲の多く毒蟲たると、其の理相同じと或人は言へり。神樣は仲々に公平なるものなり。

▽希臘の神話に、オルフオヰスといふ男あり。その妻ユーリデス蛇毒として歿す。是に於にて、其魂魄を陰府の谷より取り戻さんと力めしも、遂に能はざりければ、甚く憂に沈みて泣き悲めり。之を目にせるシレース國の女共、如何に思ひけん、あわたゞしく怒り、オルフオヰスを捕へて其肉を寸斷し、無殘にも鮮血淋漓たる彼が首級を提げて或る河に投じたり。

そうざい

◎胡瓜の酢漬

若き胡瓜を五分位の小口切とし充分に鹽を撒り五時間ほど其儘に漬けて置いて淸水で洗ひ水氣をぬき去りたるを酢の中に漬ける、酢の製法は胡瓜十本に對して酢二合の量中に肉桂の粉を小匙にて二杯位木綿の袋に入れ火上に掛けて一度沸騰させ冷した後で前の胡瓜を漬け込むと永く貯へて置くことが出來る、同じくキャベツの酢漬は普通のキャベツを細かく切り適度の鹽加減で一晝夜ほど漬け置き其儘絞り酢の中に付ける。

◎肉の黄身酢掛

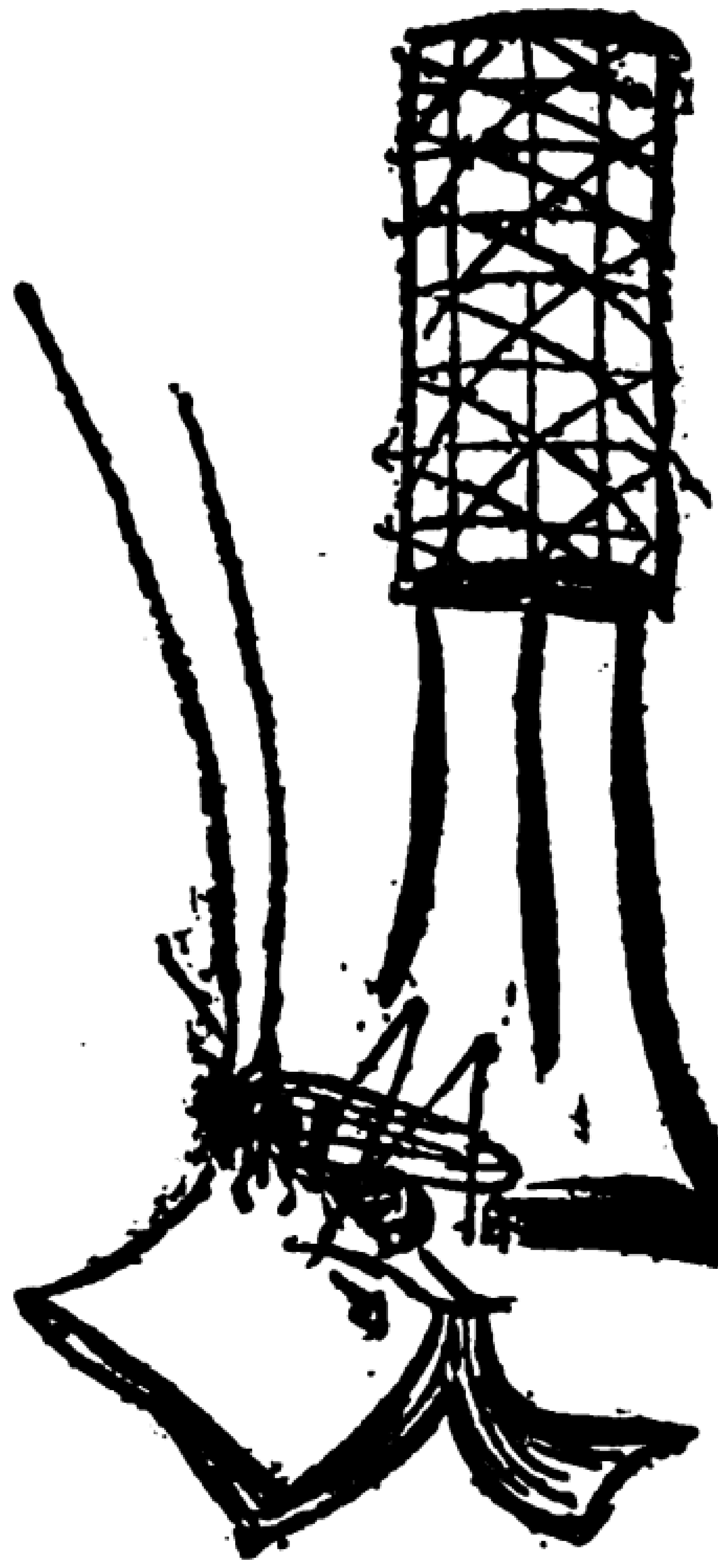
牛肉の舌の皮の儘なのに鹽を振り手にて好く揉み水で洗ひたるを鍋に入れ水を一杯にして火上で沸騰させ水面に浮び上がつた灰汁を掬ひ取り一時間ばかり煮た上周圍の厚い皮を剝ぎ取り小口より二分ほどに切つて冷えたる處を一人前二枚づゝ皿に盛り添合はせチサの葉を細く絲のやうに刻み水に晒して水氣を去つたのを附けその上に黄身酢大匙一杯位を掛けて出す、黄身酢の製法は葛大匙一杯を五勺の味淋で好く溶き其中に酢二勺を入れて火の上に掛け少し煮えたとき玉子の黄身二個を溶いて入れとろ〳〵に煮て冷して用ゆ。

◎オリブ燒

新らしい鯛を三枚に卸し小骨を除き二分位に切りザツと鹽を撒り大皿の中に平らに一枚宛並べ其上からサラダ油を流しフライ鍋を熱して兩面から煎り付くほどによく燒き一人前五片位宛皿に盛る別に南瓜の皮を剝き縱四ツ割にして軟くなるまで茹で笊に揚げて水氣を去り裏漉をして南瓜一ツにバタ大匙一杯を溶した鍋にていため更に牛乳一合を少しづゝ入れて練り鹽で味を付け皿に盛り合せ右の鯛に添へる。

◎玉子豆腐

玉子三個を煮出しの冷したもの一合に攪き合はせ鹽を小匙に三分一ばかり入れてそれをブリキ罐か丼の内側に濡紙を敷いた上に入れて蒸し沸騰するを度として二十分位程蒸し器の儘水中に冷し六七分位角形に切り山葵醬油又は晒し葱を藥味に添へて出す。



幸福なる妻の一日

翠　女

九月二十三日

もう蟲もあんまり鳴ぬ樣になつた。萩の下葉に露深う、つのる夜寒に、もう堪へられなくなつたのか、夫も日影がさすと細々と鳴てゐる。

單衣の重着をして、庭を一巡りまはる。紫苑は大かた枯て仕舞た。萩はまだ白い方が澤山殘てゐる。さわやかな秋の氣の滿ちた庭の朝景色に對て、深呼吸と云ふのを一つして見た。仰いで見れば雲の切目には水よりも淡い空が覗てゐる。氣も心も澄み渡る樣。好い心地になつて居室に這入り机によつて、昨日。旦那樣から着た手紙をまた廣げてよむ。

「久しく御便も致さず。當初の御約束に背き定ての御立腹。平に〳〵御許容被下度候。實は佐世保出發以來殊の外の艦務多忙にて筆とる暇も御座なく……。」

オホ……。嘘ばつかり。夫な好い加減な事を有仰たつてごまかされや爲ない。チヤンと聞てあるわ。ねえあなた鎭南浦に上陸なさつて、澤山面白い事がおありなすつたでせうよねえ。と床柱のお寫眞に云つて上る。

「馬鹿云へ。アハ……。御存じとは恐縮だね」と有仰り相なお顏をしてゐらつしやる。つぎをよむ。

「漸の事にて昨日の午後大湊に上陸仕り早速此手紙を認め申候。ひどい荒でね。入港前は夫は酷かつたぜ。あゝ何より書出し申可き。おゝ。今年の明月は秋も暮れなる日本海にて。故國も見えぬ大洋の、沖遙なる海原にて眺めて候。波より出でゝ浪に入る雄大なる光景を、之ばかりは御身にも一目見度存候ひし。當夜

は丁度當直にて、半夜を艦橋上。皎々たる月光の許に過して候。金龍銀蛇の美観は云ずもあれ、家郷を放れて正に幾百里。おもへば孤袖を拂ふ秋風の、いとゞとゞ身に沁みてこそ感じ申候。」

あゝ。妾も今年はお月様を見て涙が溢れた。旦那様も矢張り。——。お艦にお乘んなすつてから四月。妾ももう大分馴れて居る筈だが、どうして〱矢張り今に淋しくてならない。雨のふる夕ぐれなんぞ身にしみる樣に心細い時があるわ。旦那様なんかは大せいの中に被居るんだもの、家に被居しやるよりも賑な位だから好からうけれ共、妾なんかは明けても、くれても。ふくと二人切り、夫に、此樣な町とははなれた片田舎なんだもの淋しくて仕樣が有りはしない。早く歸ていらつしやれば好いのに。淋しくおひるもすぎた。二階で旦那様の御居室の時計が三時を打つ。少し經て來たふくが干物をとり入れてゐる。

「奥様いらつしやいますの。」玄關の方に聞なれた聲がする。ふくがお取次をする。上つていらつしやる。久米様だ。無邪氣なさつぱりした好い人。妾は此人が弟の樣に思はれて大好なの。けれ共隨分口惡で。旦那様の前ではおとなしくしてゐる癖に、よく人を冷すんだもの。旦那様の手紙なんか深う隱して仕舞つた。

昨日田鶴子様が御土産に呉れたカステイラを出す。お茶を入れる。まだやつと中尉になつたばかり、お年は確か妾に二ッ下で二十四だと思つてゐる。良人が兵學校に教官だつた時の生徒で有つたので澤山の學生の中で一番の夫の氣に入りで、久米は見込がある。學問も出來。男らしくつて其上おとなしいあれで酒を最少し飲めばなア——。と何時も云てらつしやるから、おや海軍ではお酒が不可なければ出世は出來ないんですかときくと默つて笑つてゐらつしやる。御自身も不可ない方のくせに。

久米様は見て居る中に五切程平げてキヨロリとお茶を飲みながら、

「奥様。床柱の花は紫苑ですか」

「さうですよ今朝切て入れた許りなの。」

「しほらしい花ですな。僕は秋では此花が一番好です」
「少し淋しいけれ共上品ですからねえ。人にたとへたらまづ田鶴子樣ですね。あなたはどう思つて。
と久米樣の顏を見て上げる。久米樣は火のついた卷煙草でもつて矢たらに火種をつゝいてゐらつしやる。
妾はふつと氣がついて、
「久米樣もう夫な浴衣がけで外出をなさるんぢや有ませんよ。紺がすりか、セルか何かの御單衣になさいと云つて上げる。

欲じいと云ふから有丈の紫苑を切て、芙蓉も添て上げた。夕ぐれの田圃道を倒れた案山子に袂をすつて、スタ〳〵歸て仕舞つた。田鶴子さんなら久米樣に丁度いゝと思ふ。手がるい夕げをすませて、日のくれ〳〵雨戶を操てゐると、ハラ〳〵と雨が落ちて來た。また今夜も淋しい事だらう。

二十四日

起て見ばしと〳〵と沁みる樣な雨が降てゐる。窓の障子を開て良人への手紙を書く、久米樣の袷が出來たので午後に婆を賴むで持たせて上る。久米が家を持つまでは、お前が姉にでもなつた氣で、氣をつけてやつて呉れと何日も仰有るから垢の付た物を着せない樣に始終こちらから氣をつけて上てゐる。其恩も思はないで生意氣に人を冷したりするんだもの。然しどうやら報復をする折が近て來た樣だ。

二十五日

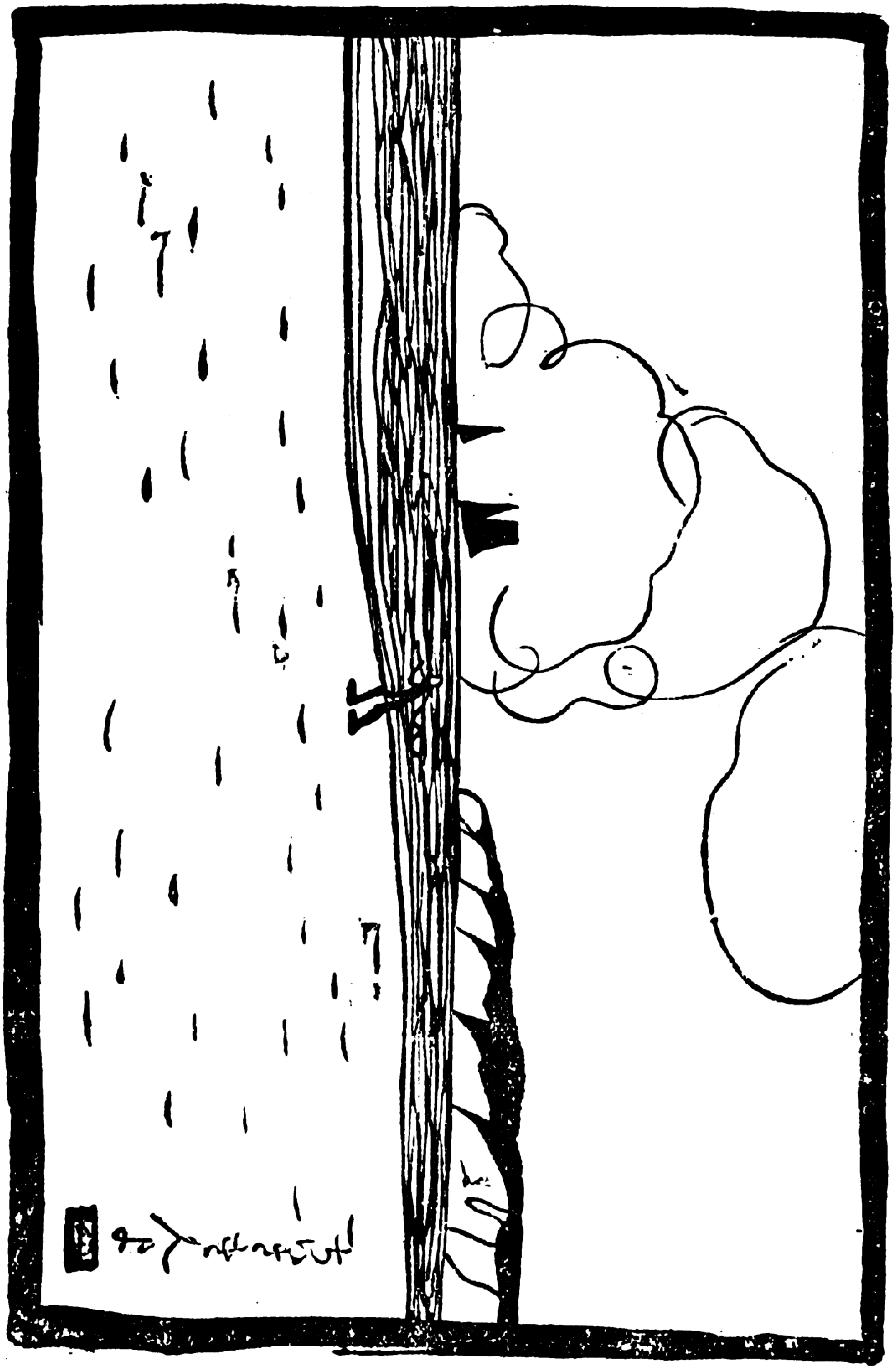
頑着でも今朝は寒かつた。田鶴子樣から自筆の忍はがきがくる。彼の人は器用な人だ。

二十六日

町まで買物に行た歸り坂の下のところで白と黑との小猫をひらう。捨られたのか、鳴ながらうろ〳〵して居たので可愛相だから連てかへる。

二十九日

秋草を見にいらつしやいませんかとわざ〳〵久米樣が誘て呉れたので、おひる前から出かけた。申分のない御天氣で單衣の袂は輕し、氣もかろ〳〵と家を出ると妾は好い事を思ついた。



「一寸ね久米樣。妾これから田鶴子樣を訪ねて行きたう御座いますからね、貴君もいらつしやい。

「ハアー。」

「面倒でも附合て下さいよと。」文句も云はせず妾は久米樣を引張て栗林へ連ていつた。用事も用事だけれど妾は田鶴子樣の阿母樣に夫となく久米樣を見せておきたいからで――。行て見れば阿母樣も田鶴子樣も家に居た。見晴しのよい客間に通されて久し振でいろんなお話をした。田鶴子樣の兄樣は先月から良人のお船に軍醫長になつて組込でいらつしやる相だ。ちつとも知らなかつた。大方良人も氣がつかないのだらう。話し半に田鶴子樣が這入て來た。久米樣が堅くなつてゐる。

「清一（軍醫長）も來年は、もう三十ですからどうか嫁を早くと思ひますけれど、本人が何分留守がちだもんですからゆつくり相談する暇も有りませんので困ります。夫もこれもおひ／＼年頃になりますし」と阿母樣が田鶴子樣の顏を御覽なさる。田鶴子樣は逃げて仕舞つた。

田鶴子樣の弟の健二樣と四人連で百花園に行た。妾は始終健二樣と歩つてゐる、と久米さんはいゝ氣で兎角田鶴子樣の方へ足をむける。いつかはぐれて仕舞つた。健二樣がお腹をすかせて、妾にせがむので、

「だつて田鶴子樣と久米の兄樣が見えないもの。あなた探してゐらつしやい」と放してやつた跡でフツと向ふの方で久米樣が萩の根方のじと／＼の處へ手を入れて物を探して居る樣子で傍に田鶴子樣が心配相に立てゐる。妾が行くと、

「妾今此邊で指環をなくしましたの。」

「さう。どうしてなくして。」とは聞も聞いたり。氣がつくと二人共變な顏をしてゐる。間もなく健二樣が來て直きしれた。日はそろ／＼傾かける。妾達はこゝに樂しい一日の散歩を終つて歸路についた。要するに今日の遊びは久米樣が何處までも紫苑孃（即ち田鶴子樣）を想て居るといふ事と田鶴子樣も又、久米樣を少もきらつては居ないと云ふ事を瞭然具象的に妾の眼に映じさせた。妾は此處で一のある決心をした。田鶴子樣等

を送り届けて、横須賀へ行くと云ふ久米様と別れて家へ歸つたのはもう燈ともす頃であつた。

「御隱居樣が御越になつて居ります」と門を開に來たふくが云ふ。驚いて奥へゆくと珍らしく高崎から實家の阿母様が來ていらつしやる。

「すみませんでしたねえ。偶に出たものですから、ツイゆつくりになりまして。」

「何ね一寸した用事なんだけれど、折角來たものだからと思ふて待てましたの。然し大そう遲くなつたから今夜は宿めてもらひます。」

「えゝさうなすつて下さい、斯樣な事なら何か阿母様のお好な物でも買て來るので御ざんしたのにねえ」と云つても追付かない。ラムプを明るくして久し振で阿母様といろんな話しをした。

三十日

眼がさめると阿母様の床は綺麗に片付てゐる。驚て起る。顔を洗に行くと建仁寺垣の傍に黄菊が一りん咲てゐる。秋だく／＼と思て居る中に、もう冬がそろ／＼來かゝつて居るのだ。

「阿母様。でも判任官では少し何――でせう。」と云つた。阿母様のわざ／＼いらしつた用事と云ふのは妹の縁談の相談である。もう彼女も三になるでね。ゆつくらはして居られないと有仰る。でも郡書記位の。別して二度目なんか可愛相ですよ。と云ひ切てやる。學問はなく共財産家で、小作を遣て、ゆつくら暮して行かれる様な處などにはどうでせうねえ。磯ちやんには氣むつかしい學者や官吏より、一そ其な方を選んでおやりなすつた方か好いかも知れない。」

「さうだねえ。と阿母様は考ていらしやる。」

「夫な處もあるんだけれどね。田舎の財産家なんぞと云ふものはね。家内の入り組むだのが多いのでね。世間知ずの彼の兒には其處の折れそれが出來まいと思ふのでね。」

「磯ちやんは少し弱手だから、何かにつけてぎしみ合のない。田舎へ嫁て、大百姓なんかで長閑りお暮しだと好からうと思ふけれど。成程世間はむつかしいもの

ですね。複雜な家庭の切盛りなんか彼人には荷が勝ちすぎる。」阿母樣は考込でお仕舞ひなさる。雨もよひの空の、軒端を吹き込む風も冷い。桒げいとうがゆらゆらゆれて、桐の一葉がハラリと落ちる。

十月二日

高崎へ歸た阿母樣から手紙が着た。お父樣とも相談の上、あの話（妹の縁談）は一まづ斷たとのこと。も一つ弟の方も矢張りお前の云つた通りにして信州へ遣る事に極めた。本人も喜で仕度をして居ると書てあるとつて廿歳の弟の信吉が、落第ばかりするのでお父樣も妾も困てゐると有仰たので、妹の話のついでに、妾はかう云た。

『信樣は頭腦の惡い兒ぢやないんですけれど。彼人は學問がきらいなんですからね。高等學校の大學のとお父樣のお考の樣なのは止して信州の叔父樣の處でも賴で工場へでも使て貰て一つ實業をやらせて御覽なすつたらと進めたので。學問ばかりが出世の基になるのではないもの。信樣のあれぢやあ學資の入れ損でもあるし。落第ばかりして居る中は亦だ何ですけれ共。自暴を起て墮落なんかしてくれては大變ですからねえ。さうして見て御覽なすつてはと云つておいたので――。信樣が喜で居ると聞くと妾も嬉しい。どうぞ是で成功して呉れゝばよい。久し振でお琴を二ッ三ッさらへる。おひるすぎ裏庭へ出てゐると、此先に建かけてゐる別莊で今日棟が上ると見て威勢の好い木遣節が聞えてゐる。

三日

はれ。風が酷いので北の窓をすつかり閉る。二百十日は靜で有たけれども、今日から吹ては何にもなるまいと思ふ。

此間買て來た毛糸を出して良人の靴下をあむ。

拾て來た小猫がよく馴れてそろ〳〵膝へ上つてゴロゴロ云てゐる。

四日

新聞を見ると電の如く妾の眼を射た文字がある。○艦の松江港入港と云ふので。もう知らぬ間に斯樣に來



ていらつしやる。お艦が佐世保へ這入たら一度は歸て下さるだらうと思ふと嬉しくて、うれしくて。いそ／＼と庭へ出て、良人の大事の盆栽類に異常はないかと一渡り見てまはる。

雨になつて、くれて仕舞ふ。郵便が二通。

五日

何時も仕立物を頼む家やが來て妻まで賑に話てゐる。ゆふべ着たお友達の手紙から思立て本郷まで行く支度をする。丁度幸の髪やに居てもらつて。一年ぶりで紅澤様といふ。旦那様が御洋行をなすつたさうで、今はお獨住み、妾が伺つた時は餘念もなくピアノを彈ていらしつた。

「お淋しいでせう。」

と云ふと、

「何のあなた。結句いゝのよ。宅に居れば何のかのと小言ばかり云てるんですもの。妾だつてまう／＼彼の人の犠牲にばかりなつては居られや爲ないものね。今までの學校時代のゆきがゝりだもの、外出もすれば、いろんな會にも關係仕様ぢや有ませんか。夫をかれこれ云はれるんだから。面白くないかほも仕様ぢや有ませんかねえ。正也の云草が可笑しいのよ。俺はお前を見違へた。ですつて。オホヽヽ。妾だつて見損なつたのですわ。」

「マア酷い事を有仰るわ。」

「ねえ久代様。親の云ふ事も聞ないで、自由結婚する様な氣まゝ者ですものね。どうして他の奥様方の様に何を云はれてもハイ／＼て男の命令に計り從ふものですかね。オホヽヽ。」

美しい手を口の傍に持ていらしつた。妾は呆て紅澤様の顔を見た計り。この前逢た時には、

「久代様。妾はラブの勝利者よ。あやかり度くば爪の垢でも——。とはまさか有仰は仕なかつたけれど夫はそれはお得意滿面でゐらしつたのに、一年立つかたゝぬに、もうかうだ。誇に滿た女の心と云ふものはかうしたものかしら。とつく／＼思つた。

相かはらず前髪がかすらも及ばぬ程美しくふくらむでゐる。米澤がすりの袷に、華美な友禪の帯をなすつたお横姿の恰好のよさ。何と云ても美しく生れたのは女の大きな／＼一德だと思ふ。

何のかのと言てはゐるものゝかうしてお友達とさし向ひになると矢張り昔がなつかしい。希望にみちた學生時代を思出さずにはゐられぬ。人の妻と云ふ重かる

可き責任も、一年二年と馴れると、實際左程にも感ぜず事ではゐるものゝ、かうなると、そゞろに其昔の氣樂さ身の輕さがしみ／＼となつかしい。

珍らしい手あみショールの手本を借りてのかへり道停留所でゆくりなくも十幾年の昔、小學校で席順の競爭をした、其くせ仲のよかつた葉山樣に出逢た。三ツ上の、今年はもう二十九。眼鏡は掛てゐらつしやる。袴でお靴の女教師姿でいらしつた。妙に妾の齒をじろじろと見て、

「石川樣。貴女は結婚して。」と有仰る。さげすむ樣なお笑顔を伺つた。白い齒と眼鏡がキラツと光る。

「オホヽヽ。分てゝ。お暇にお遊にいらして下さいよ」

とあつさり答へた。が妙に冷たい人になつて仕舞たと歎じると、氣の毒なやら情ないやら。葉山樣は、だまつてゐらつしやる。妾も何だか手持がない。其中電車が來たのでお所も承はらずに西と東に別て仕舞つた恐くこれが永久の別れなんであらうよ。

車中を隅から隅まで見渡した。縮緬の單衣羽織を召した奥樣がゐらつしやる。いゝ年をしてモスの友禪の袴下を着た女學生がゐる。妾の隣には目のさめる樣な火車の花を澤山持た、十德を着た年寄の方がゐらつしやる。片方は若い意氣な印ばんてんであつた。もう何も目にとめるものはない。電車は全速力で走てゐる。妾の思は又葉山樣と紅澤樣の上に及ぶ。結婚をして失望してゐる人と、爲ないで居て、ゐばりながら淋しく暮して居る人と何方が幸福だらうと、向側の田舍風の奥樣のちゞむだ鬢を見い／＼考へた。紅澤樣は彼な事を云てゐてもうそろ／＼さびしくなりかけてゐるんだよ屹度。今にロンドンへ自分で出かけて行くかも知れないと思ふと思はず笑が出かゝる。電車を下りて車に乘た。秋の夕日は斜に妾の車のすかし幌をのぞいてゐる。堤には萩が咲く。畔には蓼か野菊か――。煤た障子を開けて糸車を廻してゐる婆樣の半身が白い花の咲たとげのある生垣ごしに見えてゐる。葉げいとうの傍で鷄が雛子をつれて遊むでゐる。

あゝ妾も可愛らしい女の兒が一人欲しい。

六　日

はれ。○艦（良人の乘艦）乘組將校の上陸として士官連中の御愉快筋とか云ふ物が出てゐる。妾だつて船のりの妻だもの、無暗な嫉妬なんかはしない。しはしないけれど——。午後に今まで一度もいらつした事のない田鶴樣の阿母樣がいらしつた。あんまり不意なので私まご〳〵。二里の道をよくこそと見晴のよいはなれへ通ていたゞいて、さて來意を伺ふとこれが又思がけもないお話で妾は吃驚して仕舞つた。濟一（田鶴子樣の兄樣）の嫁に實家の妹をくれと有仰るのだもの『マア伯母樣はいそをお見知り下さいまして。』とお訊ねすると。

『いゝへ。實は濟一から昨日手紙がまゐりましてね。彼からあなた。こちら樣へまで御所望を申してくれと私に申て參りました次第で御ざいます。どうかあなた樣の御ちからで、お國許の御兩親樣が御承知下さる樣御骨折は願はれますまいか。』とのだん〳〵の御話。

妾は少も異存はない。ないではない大賛成だ。いづれ旦那樣が歸ていらしつたら御意見を聞いて一度高崎へも行てこやうと思ふ。

お客樣には小鳥料理の御馳走をして、今度は妾の大役にかゝる。どうしようかと思たが思切て云出て見る。

七　日

ゆふべ出ておいた手紙で、今日は乾度久米樣がくる筈。今日も御馳走は小鳥料理にしておきませう。ふくを使に出して部屋の掃除を仕舞たところへもう靴の音。座蒲團を上げて、

『實は昨日御承知の田鶴樣の阿母樣が宅へ見えましてね。』これ丈け云たら久米樣のつよい視線は忽ち妾の口許に落ちてきた。

『妹の事でいらつしたのですがね。いゝ折だと思つて妾は田鶴子樣をね。久米樣のお嫁樣にいたゞきたいと申て見ましたの。いゝでせうねえあなた——。』

流石の久米樣も、もぢ〳〵してゐる。暫くして極り悪相に頭へ手を上て、

『どうも恐縮ですな。エ、結構です。誠にどうも。』

「ぢや御承知下さるのですねえゝよう御座います。」

話はこれで片付た。おひるにすると久米樣が骨を咽喉へ立てた。玉子を飲せてとつて上げる。

久米樣は良人の書齋から小說本を見付て來て二階でよみ初めた。妾は下へ下りてお裁縫でもしやうとお座敷の障子をすつかり明放すとまぶしい樣な秋の日が流れてはいる。仕切の垣根どしに向ふを見てゐると堤に華美な洋傘が見える。

「オヤ田鶴樣だ。いゝ被布を着てゐらつしやる。オヤ妾が見えるのかしら。こちを見て笑つてるね。ハテナー。フッと氣がついて、盗足で二階を伺ふと久米樣が緣側に出て、夢中になつて手をふつてゐる。何の信號だらうと可笑しかつた。

「しかとは分りませんが、少佐（良人）は又大學の方へ逆戻りなさるも知れませんよ。」と久米樣が云つ歸つた。

八日

朝起きると夫から手紙が着てゐる。栗林清一君が、高崎のいそ樣を望むでゐる。至極の良緣と思ふ故、盡力してくれと書いていらしつた。フランチルのシャツを仕上る。

高崎へも一度手紙を出す。

九日

くもり、信州へ行た弟からはがきに一通。おとなしく每日工場へ出て働いて居る樣子だ。マアよかつた。これで四五年辛抱してくれたらと思ふ。信吉はかけがへのない實家の相續人なんだから、何でもかたまつてもらはなければならないのだ。

夕ぐれ。猫を抱いて堤に立つて、くれゆく秋を案山子の數にかぞへてゐると、電報が一通。夫からだ。

「アスゴゴカヘル。」

妾はもう落ついて居られない。猫を臺所へ投り出して部屋に歸てラムプをつけて、

筆をもつた。翌日の支度の手廻しに買物を調べて書付ておく。

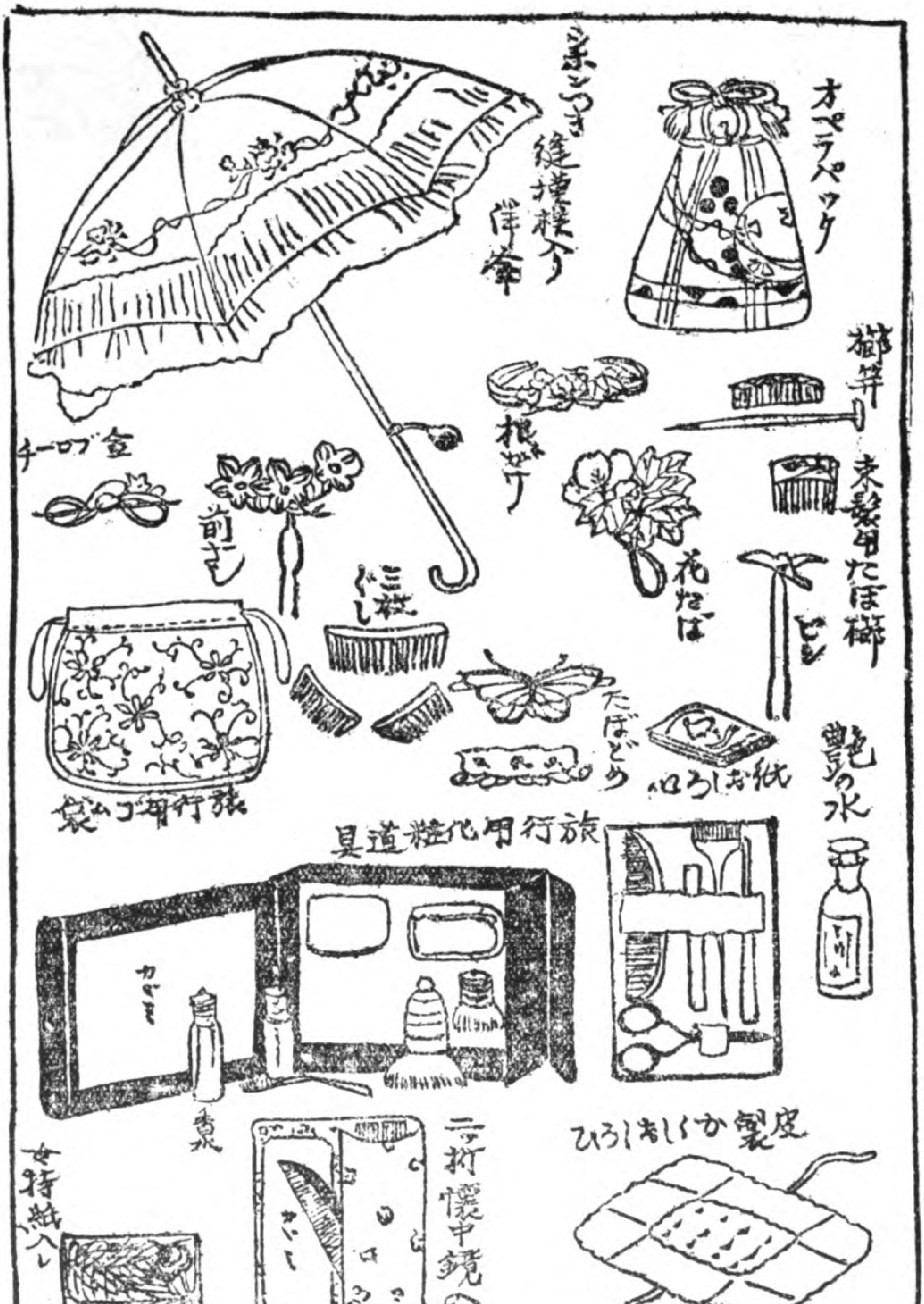
おもへば永きひとりねの、枕さびしきねざめの床に夜寒を詫るも今宵かぎり。あすの夜からは戀しい夫の傍で、心づよいまどかなゆめをば結ばうよ。

花嫁日記

今日は日曜天氣はよし一日宅でぶら〳〵して居るより何處へか行つて見んかと、夫の言葉に、まづうれしくて、御意のかはらぬ内と、いそ〳〵仕度にかゝりながら、ふと思へば、昨日はじめて丸髷に結ひし事とて、何となくはづかしくこんな風して一緒に歩いたなら、さぞ人の目にとまるだらう、いつそ、こわして獨りで結ぼうかしら、其れもなんとなく、もつたいない樣な氣がする、どうせうか等へて居るとまだぐづ〳〵して居るのか、いくら御めかししたとて、もう見てはないよと仰せらるゝに人々の手前も はづかしくて、一層このまゝで行かうと、そこ〳〵に帶しめて居ると、郊外散歩には、寫眞器持たではとの仰せにさあ、こまつた、いつも二人で出る時は私にばかり持たして、汽車に乘つても切符の世話まで私がする、どうしてあんなキャビ子の重たい器械が持つて歩かれやう、たれかつれて行かうか、さうぢやいつも留守居ばかしさせる下女を今日は連れ出す事ときめて、二人の書生に留守をたのみ家を出る。

うらゝかに晴れし空のあつからず寒からぬには、またとなき秋日和、あちこちと人々の行きかふ樣もたのしげに見える。行く先は目黒ときめ市ヶ谷停車場にいたり、汽車にのる。さて下れば名物の栗めしに兩側の茶店で客を引き入れんと皆総出で、可笑しき聲して呼びとむるを聞きながら不動尊の石段上らぬ前に目黒花壇と云ふに目つきたれば、入りて見るに思ひしより廣き園にて、芙蓉白萩の今を盛かりと咲きみだれ、盆栽もまた數多くあり、淸らかなる茶店の池のほとりに見ゆる有樣。何樣風流人の杖を引く處と見えたり。こゝにて寫眞取るには都合よしと咲きみだれし萩の中に、蟲の聲を聞き居る樣にと、むづかしき註文に、あちこちと、立たせられ、跼がませられ、又盆栽をながめる後姿など、みにくき姿も御かまひなくレンズの中にをさめられし、やがて出來上り、里の兩親に見せなば、如何ばかりよろこばるゝ事かとそゞろにうれし、下女も寫しやらんと言へば、急にすました顏する面白さ、やがて持て來しわりご、ひらきて、あたりの景色に取りあへず、あやしき腰折れ口ずさめば、夫はうち見て、何んと云ふ下手な事ぞ、其れで明治の才媛とはすさまじきものよ、と御口の惡さ、其處を去りて田の中の一軒家に子供等の遊ぶところや、松並木をゆるやかに通ふ馬子のむれなど目にふれしものを種板のあるかぎり寫して、たそがれ近く家に歸れば、留守居の書生は感心にも風呂わかして またれしに、まづ今日のくたびれを洗ひながして御土産の栗にまどゐを作りぬ。

（みどり）


縫模様入り洋傘
オペラバック
櫛笄
根がけ
束髪用たぼ櫛
ピン
金ブローチ
前さし
花たば
三枚ぐし
たぼどめ
紙おしろい
艶の水
旅行用ゴム袋
旅行用化粧道具
かゞみ
香水
女持紙入れ
二ツ折懐中鏡入れ
皮製かくしおしろい



三年後の同級生

淺 宵 花

△夢のやうな三年

夢のやうな三年! 斯う書くと何だか大層な回顧のやうだけれど、此頃私沁々さう思ふわ。學校を出てから何一つした事もなく詰らなく日を送つてゐる間に、如何してそんな月日が經つたのでせう、彼の華やかな夕榮の運動場を極つたやうに仲善しの笹川さんと漫步いた寄宿舍生活も、葉櫻の下に日影をさけながら級友と譯もない事を話合つた正午の休の樂しさも、遂昨日のやうに鮮明と目に見えるのに、卒業から最う三年になるのですもの。だけど時間の力といふものは恐しいものね、此間暫くで同窓會に行つたら、何もかも昔と變つてゐるのに驚いてしまつたわ。先生方の中でも、私の大好な杉園先生は御用掛におなりになるとすぐ御辭職になる、英語の增井先生は御洋行なさる、元の級を受持つて下すつた方ももう三四人ばかり、寮の方だつて建物の様子から內部の工合までまるで違つて昔ゐた部屋が一寸見つからない位だつたわ。けれどもそれよりも驚いたのは生徒の方の風姿よ、私達の時分でも彼の時代としては目に立つ位ハイカラでゐたのだけれど、今の方に較べたらまるで田舍者、まア束髮だつてマーガレットかなんかの新しい流行ばかりですし靴だつて思切り踵の高い華奢な形、それで長目にはいた袴の襞を一寸手に持ちながら、一足每に靴先で裾を蹴るスタイルつたら實にふるひつきたい位よ。で私、最高學校を以て自任してゐる氣概がこんな所にも顯はれて、自ら流行の元をなすのだと思つたら全く嬉しかつたわ。

それにしても私の組の方は今如何してゐらつしやるでせう、此間も同窓會の會員名簿をあけて四十年卒業としてある所を一人一人見てゐると、音樂學校の歸途だつて鳥井さんがお寄りになつて、「あら又結婚調べ？英國からお歸朝になるのがお待遠なんでせう！」なんてお笑ひになつたけど、眞に斯う姓の變つて行く人が一度毎に多くなると、昔の親しみが段々遠ざかつて行くやうで妙に心細い氣がするわ。

△もう半分は人の妻

彼の時も二人で數へて見たつけが、分明つてゐる方ばかりでも三十二人の中もう十四人も他家に嫁つてゐらつしやるのね。まア皆さんの妻君振はどんな風でせう？　其内でも御在學中から旦那樣のあつた村松さんは別として、議論家の高谷さんなどどんな家庭を作つて被居るか、何時でも結婚の話が出ると、「まア私の理想はね」つて被仰つて、夫の職業はまづ政治家、男と生れた以上は國家的經營に盡す人でなくつてはなんて御自分も政治運動位はなさる意氣込だつたが、聞けばお嫁先は商人だつて事だから乾度もどかしがつておいでのことよ。でも鰹節屋のお神さんは振つてるわね、彼の五尺二寸もある級一の背高さんが、ハイカッた束髪はよして丸髷に地味なお扮裝！　私其風が見てやりたいわ、鳥井さんのお話だと此次には旦那樣が議員にお出なさるんださうだから、自任の小鳩山夫人の活動が乾度目ざましいことよ。同じ議論家でも金井さんは軍人贔屓、何時も「名譽の軍人」が離れないものだから、口惡の日野さんが、「金井さんは廢兵院の方へいらつしやるんですつて」なんて被仰つたんだわ。彼の方も此春結婚なすつたやうだが、矢張名譽の軍人かしら、ホヽヽヽ。

それよりも高谷さんから「未婚の令夫人」といふ名をつけられて喜んでゐた龜井さん、彼の方は如何なすつたでせう。約婚の人は早大の文科の方とか聞いてゐたから、鳥井さんのお話も眞實かも知れないけれど、「文學者の妻は」つて何時も天爵論を唱へてゐらつしつ

たのに、越後の田舍で中學の先生の奥樣ぢや餘り振ひもしないわ。何時も日曜とさへなれば前の晩からそわそわして、朝は御飯も上らずに寮を出られたつけが、矢張あんなに逢ひたいものかしら。それにあの方のお粉粧つたらそりや有名なものよ、少々癖のある髮を思切た大庇にして、簪のお好みは何時も大い緋の薔薇、きまりで秘密箱からルビー入の指輪を出して出しなに左の薬指にさすんですもの。さうしちや月曜一日は思出したやうに一人でくすくすね。卒業の時も落第するか知れないつて其良人の人が鈴木先生の所へお願ひに行つたんですと。あ、同じ約婚の仲でもお氣の毒なは篠原さんだつたわ、おツ母さんが逢ふばかりにあんな苦勞して、二人共東京にゐながら稀にしか訪問も出來なかつたのですもの。それが漸く御結婚なさるとすぐ旦那樣の肺病、去年中須磨の方に行つてゐらしつたつけが幾分かお宜しいのかしら。

斯う皆さんの事を考へて見ると、器量のいゝのばかりが跨にもならないわ、其好例は男爵夫人遠山よ、女の私達が見てさへ惚々する位だから男の方のチャームされるのは無理もないけれど、まだ學校にゐる中からあんなに申込があつたのですもの。けれどもさうちやほやされると自然あゝなるものか、何も出來ない癖に私達へのあの意張りやう！ 坂田さんなぞ何時も口惜しがつてゐたわ。そして澤山の中から選りに選つて遠山さんへ嫁くと、直ぐの同窓會にはもう馬車かなんかでやつて來て、級の人に逢つても碌にお辭儀もしないつて風、恐く自分の結婚紀念の寫眞を學校に送つたのは天下に彼の人一人でせう、そりや眞にヴアニテーの塊よ。それが急にあの會社の詐欺事件で禮遇停止になつたのですものどんな顔しておいでだか、此間の同窓會の時も私顔見てやりたいと思つて待つてゐたのに……。

御養子をお貰ひの方は矢張少いのね、級の中でも乾度宮田さんと加賀美さんと丈でせう。加賀美さんの旦那樣は今御洋行中だから知らないけれど、宮田さんは眞にお可哀さうだわ。だから私法學士など大嫌。あん


写真では
ものたりないの

な溫和しい方を奥さんになさりながら、何が不足で藝者など圍ふのでせう、それに株とかで大層失敗なすつたつて宮田さん此間も泣いてゐらしつたわ。

がこんなに結婚なすつた方の多い中で尤も幸福なのは恐く島村さんと久世さんよ。久世さんは來年の春お揃ひで巴里からお歸りだつていふが、彼のハイカつた方だから乾度彼地の流行の粹を集めていらつしやるわ御器量はよし財産はおありになる、不足といつたらこれんばかりもない方。島村さんは又學校時代から落付いて「姉さま」といふ通名のあつた丈、御卒業否水戸の御本家へお嫁でになつて、今は何十萬とかの家の奥樣ですと、此間御目にかゝつた時などそりや地味だけれど一寸も隙のないお仕度で、「まア暫くですこと」なんて仰しやられた時は、此方も學校にゐらしつたのかしらと思つたわ。

△取殘された半分の級友

御結婚なすつた方に比べると、未婚の人の方がそりやまた多いわ。其内で何もなさらずにお家においでの方ばかりが私の知つてる分で十一人、尤も雀部さんなどは結婚の方へ入れてもいゝかも知れない。先日も九段でお目にかゝつたら、初頭から「此頃英國からお便があつて」なんてお聞きになるんですもの。其實御自分のペトローザルの事がいひたいのよ。其證據には私の返事も聞かない中から、又例の「獨逸にゐる兄」が初まるんですもの。近頃は折角獨逸語を勉强してゐるつて被仰るから、「まア御用意が充分ね、蜜月旅行は矢張外國」つて少し冷かすと、それをいゝ汐に澤山聞かされたには閉口したわ。そして別際にすぐ、〝reinen Mund halt〟(秘密を守れ)ですと、隨分ハイカヲな氣障な人ね。

けれどもそれより一段上手は杉さんだわ、四はれた婦人は卑怯だの、女子の開放が何とかだのつて、學校時代から噂のあつたあの醫科の人を一方に操して置いて、他にも二三人に關係をつけてゐるらしいのだものそしては筆のきくに任かせて其甘つたるい事を雜誌な

どに書くのだから惘れるわ。鳥井さんも男の方と音樂會に來たのを見たつて被仰つたが、私だつて幾度見たか、其容子つたらまるで十六七の扮裝よ、ピンクの大巾のリボンに大い花束などさして、何故あゝ變つたのでせう。あゝ變つたといへばこの間初めて聞いて驚いてしまつたのは豐島さんだわ、一體まアどうして彼樣な事になつたのでせう？　表面こそすまアしておいでだけれど、眞實は相場師とかのお妾なんですと！　級でも才媛だつたあの人が！　おゝ厭だ！　尤も家庭があんな風に亂れてゐて、平常の樣子だつてあんな下町式だつたから、矢張自然に墮落したのかも知れないけれど、高等の教育もうけたものが！　或は和田さんのお話の通り、意中の人に捨てられたとか御養子になる筈の方を御養母さんにとられたとかの自暴からといふのも全くかも知れないわだけど雀部さんも豐島さんも人なづゝこくてそして文章がうまい所など似てゐるから不思議ね。



級の中でも忘れられないのは神田の平川さん御姉妹よ、隨分異腹つてあるもの

だけれど、あんな人達私見た事がない。着物だつて何だつて宛然主從のやう、何時も姉さんが小くなつて紙の端まで妹から貰つて使つてゐるのですもの。其又妹の時子さんと來たら極の意地つ張、お父さんが學校の創立に盡力したとかで勢力のあるのを笠に着て、自分ばかりの學校のやうに豪慢ちきな顔をしてたぢやありませんか。だけど姉さんだつて私嫌ひよ、だつて餘り意氣地がなさ過ぎるんですもの。あゝして妹と同じ級にゐたのも、反て成績の惡かつたのも、全くいじけてしまつたんだわ。

御卒業後引つゞき外の學校に行つてゐらつしやるのは鳥井さん一人ね、彼の方は天才だから眞に有望だわ私の級からも立派なピアニストの一人位出てくれなくちや。それに何時も快活で淡泊だから私大好き、でも此間藤井と鳥井と姓が似てゐるからなんて心配してゐらしつたからをかしいわ。ものこそ違ふけれど次に級の異色は澤田さんね。事務員なんて聞くといやだけれど、彼の方のゐらつしやる商會は外國貿易專門のあんな立派なのだからいゝでせう。それに御交際はお上手外國語はお得意と來てゐるから眞に適任よ。此頃同じ神戸にゐらつしやる三浦さんの御手紙だと、近い内に同會社の方と結婚なさるかも知れないつて眞實かしら外交官夫人希望の彼の方も大分風向が變つて來たのね。

お手紙といへば、澤さんはどうしてあゝ悲觀的の事ばかりお書きになるのでせう、昨日だつて、今の境涯は一片のパンを得んために社會と男教師との侮辱と、迫害と、嘲笑とを泣きつゝ甘受するものだの、私にとつてはうけた學問が身を切る刄だのつて斯うですものだけど同じ教師をしてゐる方でも、佐野さんの如何にも負惜しみのやうな教育論や兒童趣味論より何だか同情が寄るわ。實際教師つてものも隨分辛らさうね、いつか太田さんがいらしつてのお話を聞いたばかりでもさう思ふわ。彼の方は家庭教師だから幾分か違ふかも知れないけれど、他人の中にはいつて他人の子を預るといふ事丈は同じでせう。太田さんなど級中第一の才

娘で、あのお家は又伯爵中でも物堅いお家、其上行かれるにも學校から特に推薦された位だのに、それでゐて毎晩部屋に歸つて泣かない事はないつて。聞けば無理もないわ、三度と同じ着物を着てお嬢さんのお伴をすると、交際上の體面に係るつてすぐお小言が來るんだつていひますもの。さうすると矢張女は眞面目に結婚して家庭を作るのが一番いゝのかしら、我を沒して總て他の力の支配に甘んずるのは何かしら屈辱のやうな氣もするけれど、それが矢張時代にかぶれた謬想なんだわ。其點から、見ると私など眞に幸福ね、あゝ今日のあたり英國から兄さんのお手紙が届かないか知ら――

(終)

實母と繼母の違ひ

繼母が子供を惡くするだらうとは誰も氣が付く事ですが、私の觀察した處によると餘り惡い繼母といふ者はないやうです私共に來てをる子供の繼母は大抵、立派な婦人です。だが其れと同時に中庸を得た繼母は決して無いもので、子供に對して冷淡に過ぎるか、甘やかし過ぎるか何れかに傾くやうです。子供が何か失策をしましても繼母だと大抵叱らない。又尠し大きな失策があつても大抵父親には隱しておくのが普通です。その心に立入ると繼母根性を起さないやうに仕たいといふ婦夫のたしなみからでせうが、其れが子供に取つて非常に惡いやうです。私の許に來てゐる或家の繼兒はその養母を充分に慕つてゐますし、父も大變嚴格な人で何處に不良の原因があるか解らないやうですが、畢竟繼母の斟酌が過ぎた爲めに子供を惡くしたのでした。實母だと子供を叱つたのがお母さんの不當であつても側からは子供が惡いやうに見えるそれを繼母が叱ると、假令子供にどんな惡い事があつても繼母根性を起してをると見られるので、想へば氣の毒なものです。それから又お祖母さんがあつて、子供が折角繼母に懷いてゐる處を「お母さんはお前を可愛がつてくれるかい」など言つて强ひて子供の心を繼母から引離す事が能くあるものです。――高瀬眞卿氏(東京感化院長談片)



大阪の令嬢評判記

活氣に滿てる大阪の女學生

月魂

△雑多な處女の扮裝

大阪程處女のスタイルの、雑多な所はあるまい。世間では東京風、京都風、大阪風と一概に云へど、東京風だつて山の手と下町とは大した相違。京都にも上京風、下京風と區別される。大阪に至ると尙ほ更甚だしい差別がある。であるから、大阪處女の風俗を語るには、勢ひ各一區劃が發揮してゐる特徴を捉へねばならぬ。その中でも、月給取の巣窟たる上町、職人の居場所なる靱、藝人の居住地なる高津は、奈何しても他郷人の寄り集りであるから、純粹な大阪處女を見ることが出來ない。さうなると勢ひ大阪の心臟とも云ふべき船場、島の內、米相場の堂島、干魚問屋の阿波座あたりのものをモデルにせねばならん。なれども二三年も住んで見て、少し眼が利いて來ると、衣服の着方、髮の結ひ振り一つで、彼れは船場の者だとか、堂島の者だとかいふことが、整然と見判けらるゝ、從つて物の云ひやう、氣風に至るまで夫々特徴が解る。

△煤煙の中に包まれた櫻色の顏

五十三次を汽車で京に着き、山紫水明に見飽き、序に浪速へと下る人等は、其昔どんどと落るは瀑の水、と唄はれし淀の河瀨の水車を見て了つて、眼一轉此方を見渡すと、幾千本の煙突倒さに淀河に映つて幾萬本となり、濛々天を衝き地を突く、黑色褐色の煤煙、一目見てさへ慄然とするに、這麼煙の中に暮す大阪の女

は、定めし白地浴衣の一枚も着られまい、嘸ぞ薄黒い顔して御座るとゝ思はんも、憚り樣。東京の淺黒い、京都の蒼白いのとはチンデ品柄が異つて、櫻色にホンノリとした兩頬、眼元口元の表情も人を魅化する力が充分ある。何故這麼煤の世界に、との不思議は誰れにもある、語る自分でさへ說明が出來ない。

△生粋の處女

船場、島の内、堂島、阿波座あたりの、所謂大阪生粋の處女の氣風は、幼少の頃より深窓に育つて、下女や小間使に、イトさん〳〵とかしづかれてゐるから、奈何しても保守的である、が極めて早熟である。妙齢になると、水の滴さうな高島田を淡泊りと細い金絲で結んで、襟のかゝつた衣紋をツンと突出した工合、眞んに錦繪其儘の容姿。殊に祖先より幾代といふやうな商家になると、よし間口は狭くも奥行がヅンとあるから、數年取引するお出入の繁き商人すら、イトさんなるものを見たことがない。江戸や京のそれのやうに、娘を招牌としないからでもあるが、家庭が絶對の保守的であることがこれでも判る。

△表情の目元は三都一

家の出入りは裏口か横口で、決して店の敷居を跨がぬ。町歩きには必然と髪を京風に結ふて、白たけながをかけた下女が御供する。繪の日傘をさしたは昔のこと、絹張のパラソルで蔽ひながら俯伏目勝、不圖視線と視線が打當つた男子は、如何に石部の硬骨者でも、籠つた表情の目元には、恍惚たらざるものはあるまい。由來浪速に情死沙汰の多いのは、テッキリ此れである。誰れが表情のない、眼元のだるいやうな京女や、權のあるキリヽとした江戸女に、命まで捨てる男が當世にあるものか。

△俗趣味の横溢觀劇が飯より好き

古き歴史を有する浪速の地は、芝居淨瑠璃の淵源地丈けに、祖先代々大阪人の嗜好は、心に感ずると云ふ

ことよりも、單に耳目を樂ましむるの一方に偏して居るやうだ。お父樣もお祖父樣も淨瑠璃が好であるから、娘にも習はす。お母樣もお祖母樣も芝居が好であるから、娘に見せて話相手が出來るやうに仕込む、と云つたやうな風であるから、娘は何よりも芝居行を喜ぶ。『私や三度のおまんまより』の俚謠のあるも有理である。又一方には、娘になくてならぬは、音曲歌舞の素養だとて、三味線、琴、踊などの稽古にかよはせる。町女は主に江戸唄地唄の兩道を掛ける。生花茶なども却々盛に流行つて居る。お針の師匠も絶えずお弟子がある。料理のお稽古も近くより流行りだした。割烹學校は一つあるが、町娘は通はぬさうな。してみると、東京から餘波を受けての流行で、永續するか、奈何だか覺束ない。

それゆゑ文藝や園藝の趣味と來たら、丸きりゼロでお話にはならん。それもその筈、元來大阪の商家は、土一升金一升とまで行かずとも、地税の高い場所柄にあるのであるから、庭園などに贅澤三昧を盡すものは尠い。餘地さへあれば倉を建てたり貸屋を建てゝ、黄金崇拜の奥の手を表はしてゐる。庭園のない家庭に園藝趣味はない。たまさかあつても、物乾臺に陳列された夜店の鉢物、作るでなく枯らすが關の山、町娘の中には虞美人草がどんな花やら、ヘリオトロップがどんな花やら知らぬものが多い。まして温室物などになると更に駄目。近い話であるが、故人團十郎の二遺女が、女優となつて初の御目見得に大阪へ乘込んだとき、ひいき筋の誰れ彼れが、端金で出來ない花籠を二女に舞臺で贈るを見て、『あんなものよりお金でやンなはる方が喜びますせ』と云つたさうなが、如何にも其の特徴を發揮して居るではないか。文藝趣味のないのには更に驚く、源氏物語と平家物語を一對のやうに話したり、伊勢物語と朝顏日記を混交したりする。和歌や俳句の出來ないは無理もないが、當世歷々の小說家の名前を持出しても皆目知らない。其癖朝日の霞亭や、毎日の幽芳はお馴染で載つた小說は缺さず讀む。脚本になつて芝居にでも上りさうなものなら、始終の筋は整然と

覺えてゐる。

以上は船場、堂島、島の内、阿波座邊で見る生粋なる大阪處女の風俗である。其家業は先祖代々の譲りもので、身代は增殖すとも減らさじと、主人番頭丁稚に至るまで、角帯前垂姿で立働くやうな家庭に人となつたものを擧げたのだ。



△今様教育を受けし町娘

天保時代の老人は既に此世を去つて、今では明治生れの兄の世になつて居か、さもなくば兩親は當世風の教育を受けた人等の娘になると、いくら場所柄でも這麼保守的ではない。頗る進取的で、出來

た娘はヅン／＼新教育を受けさせ、少し位我儘生意氣にならうとも、時勢だから仕方がないとあきらめてゐる。少し目先の利いた父兄になると、周圍のイトさん坊んちのお交際は、兎角娘を疵物にするから、學生ならば寄宿舍へ打込み、年頃のものならば結婚を急ぐ。志望とあらば吾妻の都へ笈を負はせて、より以上の修業をさせる。

斯くてピヤノ、オルガン、ヴワキオリン、何をやらしても人並以上やる樣になるが、さりとて驚く程の天才も出ない。俗曲は最も得意である。

文藝園藝の趣味はあり、繪畫などもなか／＼上手なものもあるが、之れにも閨秀畫家と申す程の人はない。裁縫、編物、生花、茶、何をやらしても女一通のことなら器用に消化す。洋式裁縫が流行り出してからは、ミシンをひねくつて居る女はある。が一度調子をくるはしたら最後、修繕にやらうともしない。

△華美な風して町歩き

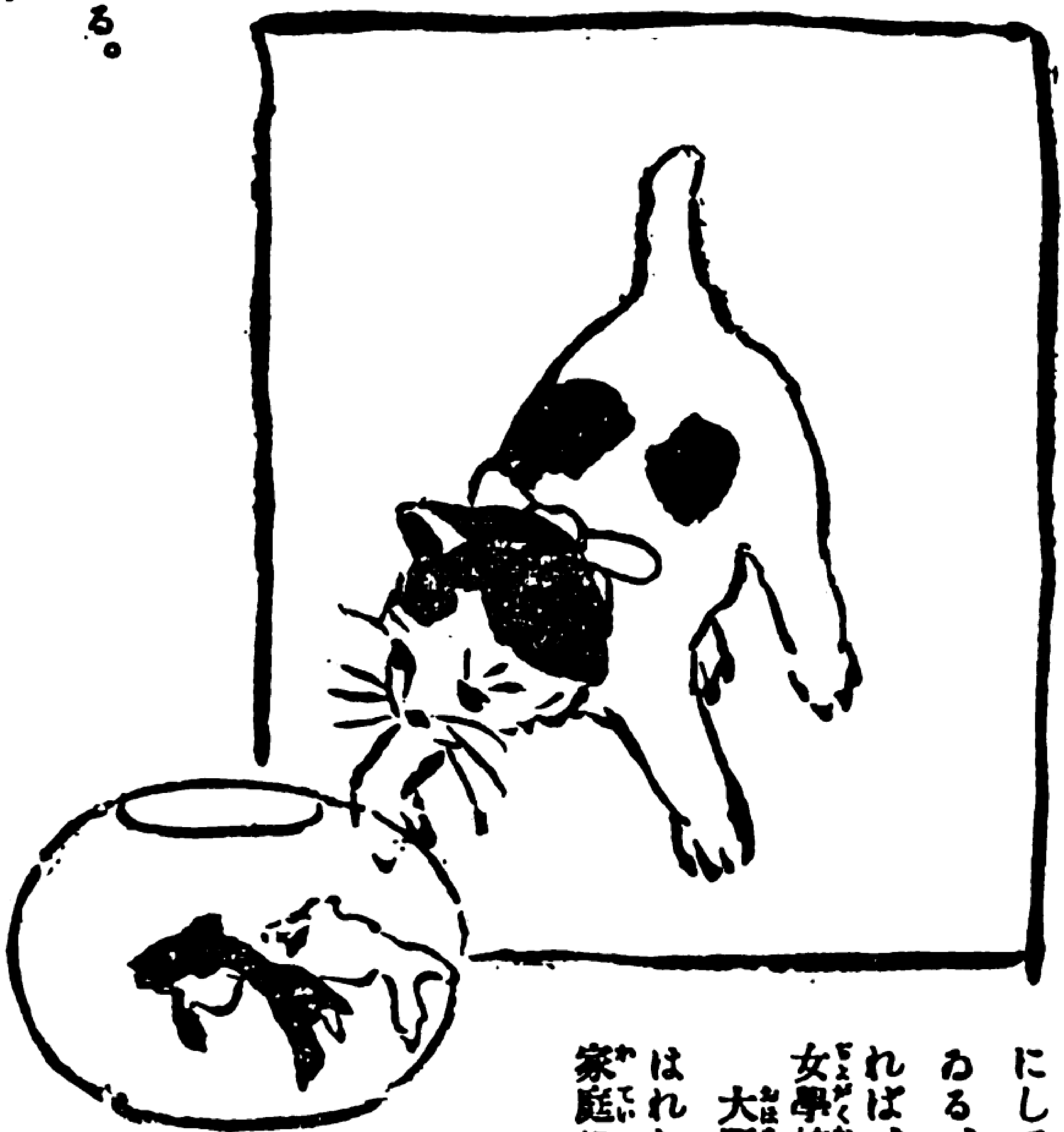
妙齡の女、と云へば直ぐヴワニチトを聯想させるは時代の風潮で、何處でも同じことであるが、大阪町娘で今樣教育あるものは、殊に其熱度が高い。金錢が自由になるからでもあらうが、學校での質素儉約は何等の効驗を家庭に及ぼさない。黌門の出入りにこそ綿服を着けて居ても、春の宵、夏の夙、道頓堀行、住吉遊び、天滿天神御靈の祭禮、さては天王寺の彼岸詣には、平素の筒袖脫捨て、三越、大丸、高島で時の流行りに後れず拵らへた秘藏の綺羅錦繡を纏ふて出歩く。

衣裳の好みは、地味な底光りのあるものよりも、鳥渡見ても眩いやうな、人目を引きつけるものをつける。襦袢でも襟でも、赤味勝の派手な色物を好む。夏でも越後上布の下から、紅物を透かして見せるといつたやうな風で、意氣で高等で、淡泊りとした扮裝は見られない。恁うなると、よし口には生嚙りの、英語交りのお喋りしても、外見は奈何しても町娘、自然動作も柔順になる、お里は脱けないものと見える。

△宗教的觀念は薄い

基督教又は佛教を根底として立つ學校に教育せらるゝものは、黄金崇拜の土地柄丈けに、兎角信念の力は薄弱であるが、英語の一科に重を措くものは前者に這入るし、地味な家庭の良妻賢母たらんとするものは後者に學ぶ。去れど總じて女子教育に依つて信者を增殖せんとする彼等の企畫は、大阪では全く不成功である。

△大阪の女學校



月給取りの棲む上町あたりは、生粋の大阪人でないから、此等の家庭に人となつた處女は、自然其趣を異にして、夫々特徴を發揮してゐる、が概して十二三歳に至れば、小學校を退いて、高等女學校に入學せんと焦心る。

大阪女學生の標本は、と問はれたら、什麽しても此等の家庭に成長した女子を採らねばならぬ。よし他郷より遊學せるものでも、寄宿舍に這入らないものは、親戚に寄食するとしても、町家には少くて上町邊に多い。

女黌は府立の堂島、清水谷、夕陽丘の三高等女學校、西教のプール、梅花の二校、佛教の相愛、

浪速の二校、個人の經營に係るものでは、大阪、金蘭會、裁縫及割烹の四女學校。それに女子師範を數へらるゝ。堂島及清水谷の二高等女學校は、關西でも有數なもので、卒業生の評判も好く、從つて賣口も良い。そのハイカラ的なること、東京の女子大學の壘を摩する位だ。女子の多くは、この二校の孰れかに入學せんことを希望してゐるが、幾千の志願者があつたとて、毎年一度の募集人員は、二校を合して三百名を超過しないのであるから、算術の篩にかけて、成丈け出來の好いのを取る。見事篩ひ出されしものは、大器晩成と澄し込む譯に行かぬ女性、まあ、仕方がないからと金蘭會女學校へ這入るか、さもなくば篩の憂き目なしに他の私營に落付く。一體が早婚主義の土地であから、少し御面相でも好ければ、二年生頃に約婚成立、四年生になるやならずに去つて了まう。ヲボンで嫁に結んだ嫁入道具を擔る頃には、入學當時の三分の一にも足らぬ人員となる。

△金蘭會と濟美館

何處の女學校でも、生徒の團體から成立つた會がある。が、大阪のそれは餘程其趣を異にして、他校の模範とすべきだ。其名稱を擧ぐれば、堂島の金蘭會、清水谷の清友會、梅花相愛の共勵會相愛會抔は、孰れも卒業生の組織せるもので、殊に金蘭會の如きは、女學校まで設立して、母校へ入學の出來ない女生を收容し、母校長監督の下に、同一の教育を施すなど、全國唯一の親切なる活動であらうと思ふ。清友會には戰捷の紀念事業として、萬金を投じて校庭に圖書館及倶樂部を折衷した洋館を建設して、之れを濟美館と名づけ、萬世に傳へんとするなど、外部にこそ活動しないが、在校生卒業生は、この機關に依つて、智識を啓發することは多大であらう。其他各校に夫々學會があつて、有益な機關雜誌を發刊し、負けず劣らず奮勵してゐるかと思ふと、囑目すべき有望なる將來を、諸姉の上に注がずには居られない。併し嫁した卒業生が、子供の

二三人も出來やうものなら、頓んと母校を顧みないのには驚くが、何處も同じです、と云はるればそれまでのこと。

△女學生の言葉

女學生の言葉は、校内では一般に東京辯を振りまくが、一度校門を出たが最後、途中で伯父さん叔母さんにでも出遇はふものなら、何時の間にやら甘たるい大阪辯と化する。家庭で下女や小間使にかしづかれる頃には純粹



の浪速語。私の懇意に爲てゐる。堂島四年生のお孃さんが、下女と對話さるゝ中で、殊に耳障りになる二三を擧ぐれば「一寸見とくンなはれ」、「何だすか」、「綺麗な者だッせ」、「どうして斯うなりまンね」、「左樣だッかヂントあきまへんな」、「一ぺん上んなアれ」、「辛度おますやろ」、「御免やすや」、これが叮嚀な言振りなのか、ぞんざいな言葉なのか、

聞く私さへチント解りまへんの●

朝から午後三時まで、江戸辯でチャキ〳〵やつてゐたお孃さんが、夕刻こんな言葉遣ひをされるかと思ふと、殆んど艶消けしの話である。併し好く調べて見ると、多年大阪に棲みながら「あれヂー」「これヂー」の江戸辯を振廻はしては、向三軒兩隣が、一向人間並の交際をして與れず、寧ろ敬遠さるゝ方に傾くから、郷に入つては郷に從へで、又止むを得ぬことである。

△堂島は質素淸水谷は華美

女學生の服裝を說くには、標本校たる堂島と淸水谷を茲に擧ぐれば足れりとす。(夕陽丘は模範的なるも創立日淺きを以て舉げず）校則に據つて夫々束縛せられて居るが、其束縛の鹽梅式が餘程異つてゐる。それだけ服裝に區別がある。今兩校々則中服裝に關する一節を拔萃すれば。

堂島――着物は綿服、掛物は紙木綿又はゴム製、履物は校内は飾なき靴、校外は疊なし利休下駄云々

淸水谷――服裝、髮飾、履物、傘の類は女學生に相應したるもの云々

堂島は品質まで舉げて束縛するからたまらない。恁うなると勢ひ質素にせねばならぬやうになる。禮節、衛生、經濟抔あつたものでない。

淸水谷は、「女學生に相應したるもの」との一句を以てボンヤリ締め上げてゐるから、振袖姿で昇校しても、「まあ、誰れさんは今日はおめかしですネ」位ですんで了まう。虛榮の强よい女性、吾れも吾れもと華美に傾くは理の當然。惡くて銘仙、それから上は限りない。殊に何か催物でもあると、遠慮會釋もなくきらびやかな物で身を飾る。同じ監督廳の下にありながら、校長の手心が斯うも異ふとは。

夕陽丘は、堂島を眞似るでなし、淸水谷を手本とするでなく、一と風變つて居る所が面白い。

約言すれば、大阪女學生の扮裝は雜多であると云ふより外ない。

女（ゐの二）

★中學世界 第十二卷第十二號 増刊★

明治四十二年度 受驗界

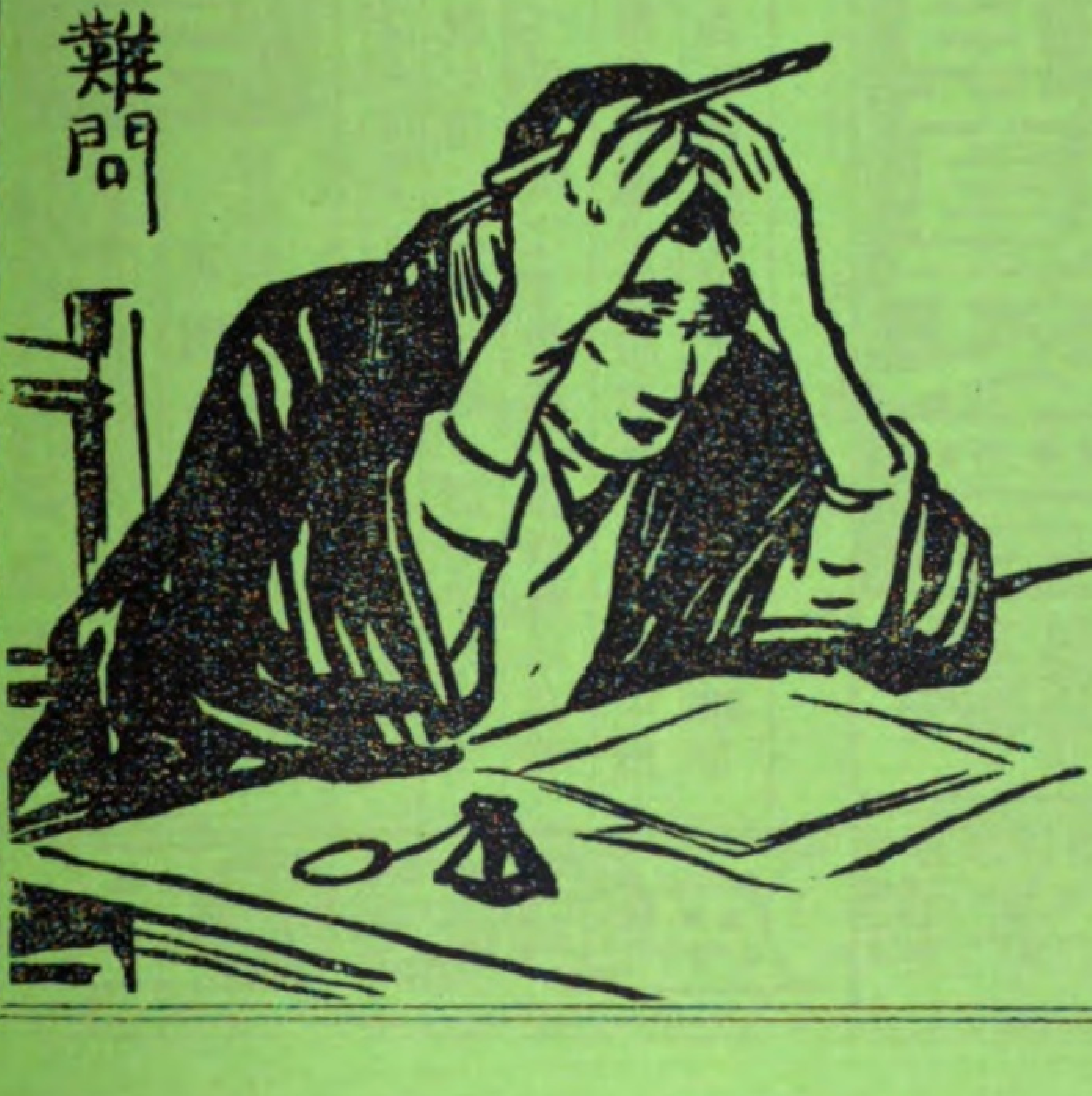
受驗記事（概要）

▼當年の受驗界總評▼高等學校試驗委員諸氏の談話
▼東京高等商業學校第一期試驗の成績
▼諸學校應募者入學者比較表
▼高等學校入學者得點表
▼一高受驗記▼高商の受驗記
▼兵學校機關學校の體格試驗
▼醫學專門學校の受驗
▼競爭試驗受驗苦心錄

試驗問題集學校別

△各高等學校
△各高等工業學校
△海軍兵學校
△水產講習所
△駒場農科大學實科
△各醫學專門學校
△東京京都蠶業講習所
△盛岡高等農林學校
△鹿兒島高等農林學校
△各高等商業學校

△東京高等師範學校
△陸軍士官學校
△海軍機關學校
△商船學校
△札幌農科大學豫科實科
△東京外國語學校
△海軍主計學校
△東京美術學校
△東京音樂學校
△大阪府立高等醫學校



洋裝菊判
紙數二百四十頁
口繪寫眞版豐富
正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

▼九月廿日發行

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇

（その四）

英語世界　第三卷第十號　秋期增刊

英作文と和文英譯

九月十五日發行
全一册洋裝菊判
舶來紙六十八頁
定價拾錢郵稅一錢

▼英作文は如何にして熟達し得べきか▼英作文の基礎は如何にして築くべきや▼英作文の練習は如何なる方法を得策とすべきか▼自由作文と和文英譯との得失は如何▼和文英譯の用意と結構は如何にすべきか▲作文と會話、文法、譯讀等との關係は如何▼復文の方法は如何にすべきか▼英語にて思考すとは果して爲し得べきとか、爲し得べしとせば如何にして其の習慣を養ふべきか▼習文としての英文日記、時文、葉書は如何に認むべきか▼本書は是等の事項に就き普く諸家の有益なる講話と實歷工夫談とに依りて詳密なる攻究を試み加ふるに外人の模範的英譯作例十數篇を選びて精細なる評釋を付す。

大懸賞英米名家署名判讀

寄稿家及講話者（ABC順）

馬場恒吾　堀英四郎　上條辰藏　元田作之進　南日恒太郎　佐川春水　武信由太郎　豐島定
頭本元貞　今井信之　勝俣銓太郎　最上梅雄　岡田實麿　鹽谷榮　高橋一知　横地良吉
深澤由次郎　飯塚陽平　岸本能武太　前田忠義　太田善男　菅野德助　高島捨太　其他數名

評釋和文英譯作家

アストン　デニング　イムブリー　ロイド　ロック　サトウ　其他數名
チャンバレン　イーストレーキ　フルベッキ　ブリンクリー　イーバイ　ベッカー

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二〇四番

女（るの五）

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當舖主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術ト學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を以て販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する禿髮丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の實藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎけ、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の癩氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズオの禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二劑增の事

●●●取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ●●●

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士

本舖 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

●●大取次左ノ通り●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
麹町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一二の二 加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹內藥局
同青山北町五 四井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
高松市片原町 新明藥局
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角 福知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り 安江洋反物店

大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 荒川長太郎
同 鐵砲町三丁目 谷田藥局
神戸元町一丁目 西村開吏局
廣島市橋本町 萬代參堂
神奈川青木七軒町 水崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 磯崎藥局

於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

ヒゲタ印醬油

宮內省御用達

千葉縣 銚子港 田中玄蕃釀造

女(るの八)

△家庭では何を爲るか

女學生生活の間は、歸宅せしとて家事を手傳ふ者は尠い。翌日の準備に忙殺さるゝからでもあるが、幾分か我儘も手傳つてゐる。一室に籠つて明日の下調べをなすは約一時間、知らざるは識らざるとなし、深く研究せんともせず。英書の輪講、數學の宿題が、明日頃は當ると思はゞ、長上の力を藉つて一時防禦の策を講じ、以て翌日「出來ません」の恥辱なからんことを懸念するのみ。餘暇あれば編物をするか、内證で小説を讀む位のことである。

△文藝趣味は存外ある

學生の小説を耽讀するは何處も同じことであるが、淸水谷一部の女生間には、盛に新刊小説が購讀さるゝ。一時は風葉、花袋、鏡花の艶物が愛讀されたが、今は史的小説や、漱石の隨筆的小説が耽讀さるゝ。變な傾向になつて來た。一番持囃さるゝ婦女雜誌は、何と云つても無邪氣で面白いことを書く女學世界だが、嫁してからは他に色々のものが愛讀される。其の中文章世界の讀まるゝのはまだしもとして、中學世界が盛に購讀さるゝには合點が參ゐらぬ。

西洋物も旺盛だ。イプセン、ユーゴーの小説は奈何の、ゾラは生粹の寫實派であるの、フローベルは寫實派の流を汲んだローマンチックである抔饒舌らるゝ。却々大したものだ。

和歌の上手な人が澤山ある。隨筆物や、短篇小説を一寸と書く人が多い。大阪圖書館に何時も四五人の女學生が、文藝物を謄寫してゐるのを見るが、未來の文學者か、或は閨秀作家の玉子であらう。

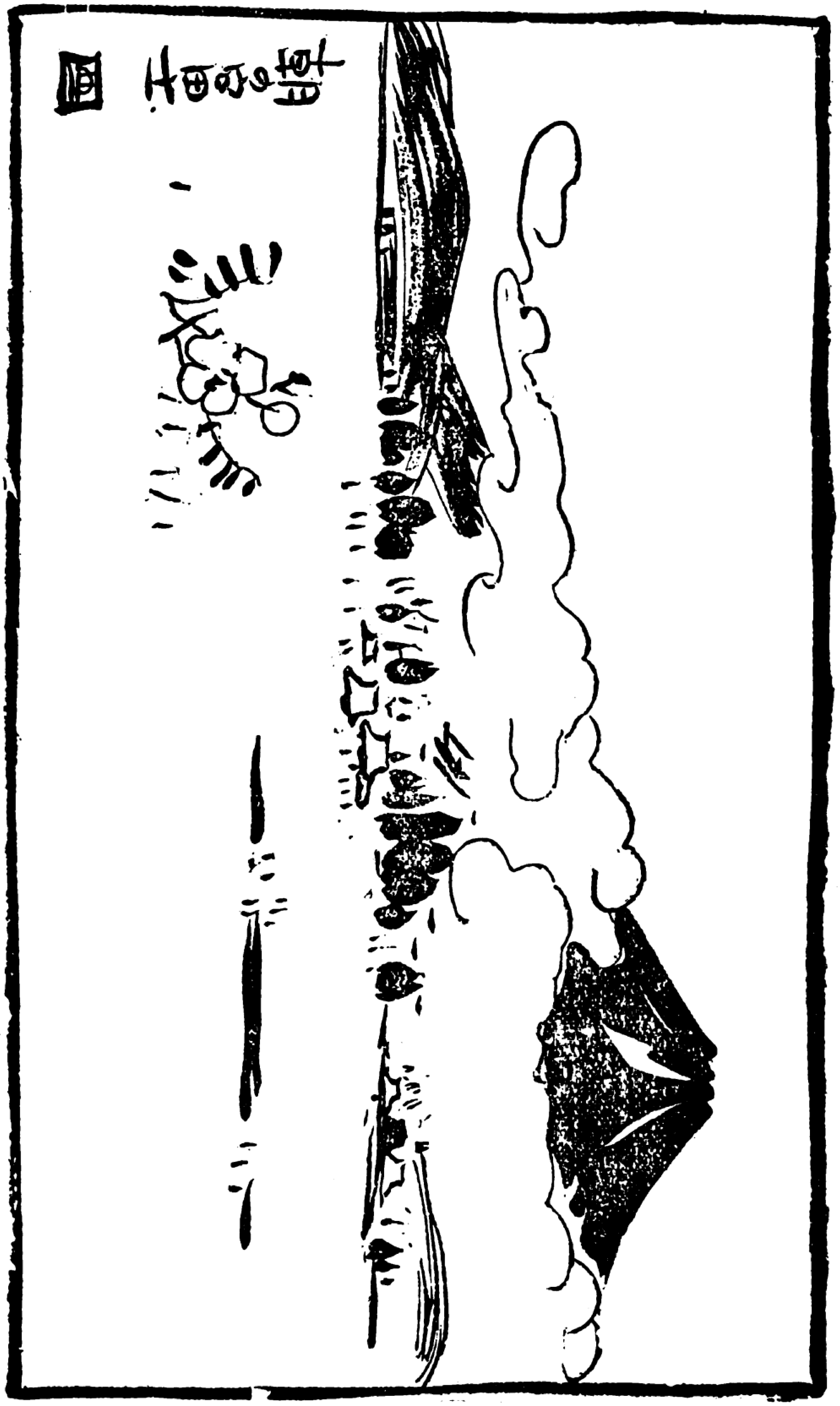
△花婿には誰れがなる

幾千の女學生中には、英語の生囓り、自然主義の生意氣物が出來ても、利益に伴ふ弊害であるから仕方がないが、此の學生時代は友達同士の交際振り、異性者に對する呼吸を呑み込んで、他日人の妻になる時に周

章て騷がぬ準備は、到底町娘の及ぶところでない。扨てそれ丈けの準備を了へてから求むる花婿と云へば、第一が京大生、次が高商生であるが、チツキリどれもこれもあてはめる譯には行かぬ。財産を望まば商家であるが、肝腎の花婿は、小學校を卒業すれば、學問は先づ是れで澤山といはるゝ坊子と來てゐるから、花嫁なか〳〵承知しない。であるから町家の主人は云つてゐる、『女に學問させるも善し惡しだッせ』と。

露西亞の女子教育

露西亞の上流社會では女子の教育は家庭教師に託するのが普通で、學校へ通はせると云ふことはないのです、中流の女子は無論皆學校へ通ひますが學年は尋常小學校三年、高等女學校九年で、其他家政を教ふる學校や、美術工藝を研究する處も澤山ありますが、尙ほ進んで大學に入つて男子と同じやうに最高の學問を勉强する婦人も少なくありませぬ、首府には女子の爲めに帝國大學が設けてあります、最初は文科と理科のみでしたが、今では法律も加へられて總じて約二千人の女學生を收容して居ります、其他女子の醫科大學もあり、常に八百人位の女醫を養成します、法理文の三大學は共に四年の卒業、醫科は五年で兩方とも政府が經營して居るのですが、學科の程度は男子の大學に比して敢て低いと云ふ譯ではなく、只男子の方にある古代文學が女子には無いと云ふだけです、而して卒業生は教育家文學者辯護士の補助(婦人は辯護士になる能はず)裁判書記等種々の方面に立つて男子と同じく社會に活動して居ますが、殊に醫師は首府の大病院の婦人科小兒科に多勢用ゐられ、又小學校の教師は悉く婦人に限られて居るのです、されば衆くの婦人は研學の門に入るに先だつて自分は將來何にならう、如何にして社會に盡さうと云ふ理想を抱いて勉强するは勿論是等は自ら生計を營むの必要ある階級に在る人で、富裕な貴婦人になると却て左まで高等の教育を享ける者なく、妙齡に達すれば何うぞして成るべく、身分の立派な人と結婚したいものであると云ふことを希望するのです、從て世に聞える程の名媛が此階級から出ることは甚だ稀です。(日本へ漫遊せる某露國婦人の談片)





女學の反面

戸川秋骨

△女學校と廣告

私達が小學校に通つて居た時分には記事論說文例といふ本があつた。作文は丸でそれに則つて作つたものだ。それで紀行文にはその劈頭に必らず、此日天氣淸朗一點の雲なしといふ文句がつき、終りは又版で捺したやうに歸てこれを燈下に記すと結んだものだ。それとは事は違ふが此頃の女學校でもよく此紋切形をつかふ。

下宿屋若くは旅館がお客を引くには色々な手段を講じる。其最も普通に行はれて而かも智想のない方法は自分の家の設備を吹聽するものである本館の特色は空氣淸涼眺望佳絕・各室みな淸潔を旨とし、各室には押入を備へ、每室特別の鍵を添ふといふやうな事を廣告して居る。そして此廣告は何處の下宿屋でもみな大同小異で、結局何處へ行つても同じである。近頃女學校のやり方を見るに、何處のも殆んど同工異曲で、結局は少しも異つた處はない。つまり何處の女學校に行つても大差はないのである。商賣は廣告にあると云ふが如何にもその通りで、大袈裟な廣告をする或る女學校などはその最もなものであらう。△△女學校といふのも大分繁昌するさうであるが、此れもアの婦人が頗る巧妙な廣告術を知つて居て。拔目なくその方面に働いてゐる。そして此れ等の學校の廣告するのは結局旅屋下宿屋の廣告と一斑、空氣淸良眺望佳絕に歸さないものはない。特に各室の戸棚に錠を下すといふやうな事をいつて居るのは、お客に安心させる點に於ては中々巧みなやり方である。

女學校の廣告者は口を開けば即ち女子墮落の事を言ひ、自分の學校では監督を充分にするとか品行に注意をして居るとか言ひ、知らず識ずの中に頗る時勢に通せず、恐らく自分でも考へて居ないまた行はれも仕まいと思はれるやうな事を主張して居る。或る人が言つた。今日女學校の關係者が頗る時勢に通せぬ固陋な事を言ふのを見て、直ちに此れを頑迷だとするのは彼等を買ひ被つた話で、彼等は頑迷ではない、實は甚だ開けて居る商賣上手なのだ。アヽいふ風に頑固らしい事を言つて居ないと女學生の原産地である田舍の正直な人達の安心を買ふ事が出來ないから、それでアヽいふ事を言つて居るのだと言つた。如何にも此れは穿つた說で、なるほど女學校の生徒たるべきものは大抵田舍から出て來る。即ち田舍の人は女學校商賣の御得意先であるから、なるほど正直なそして停滯した考の人をだまかすには、頑固一點張といふやうな事を吹聽して居なければなるまい。戸棚には特別な鍵を用ゐて居るといふ事を吹聽する必要は茲處にある。これはあまり女學校の關係者を見縊つた話であるが、私は決して間違つた見方ではあるまいと思ふ。其證據には此れ等の人が女子の危險とか行狀とかいふその口調がいつも誠實を缺いて居る。毎時も矛盾をなして居る。多くの女學校の內には左樣でないのもある。私はそれを知つて居る。併しさういふ誠實な女學校は廣告は仕ない。さうして着々其爲すべき事をやつて居る。商賣にもあまり廣告をするのは山師である。手堅い商人は無やみに廣告は仕ない。廣告をしない學校は所謂お客は少いかも知れぬが、結局は勝利を占めるであらう。私は頑固といふ事を惡いとは思はぬ。固陋も結構であると思ふ併しそれを廣告用に使ふのは恐ろしい害毒をなす。新聞の廣告にも地方の人を欺く詐僞廣告が隨分ある。まさか所謂廣告女學校のはあれほどではないとしても、結局女學校自らの吹聽を本氣にしたら飛んだ災難に遇ふ。よし個人が直接災難に罹らないとしても、全體として之を害する事は恐ろしいものである。私は此の父兄若くは女學生其人が新聞の雜報などで自分の方の長

所を吹聽するやうな學校を固く避けるやうに望む。

△再び高等下女教育

私は今頑迷固陋も惡いとは思はぬと言つた。私は實際左樣思つて居る。只眞實に頑迷固陋を保つ事が出來るか如何かゞ問題なのである。此急流のやうな世の中に於て頑迷固陋を保ち、またそれに依りて教育され世の中に立つて行く事が出來るとすれば、それは如何にも結構な事である。私は嘗て高等下女教育といふ事を言つたが、今日の頑迷らしい事を言ふ人の考は實際頑迷なのではなくて、子女を追つて下女にしやうといふのである。家事經濟、お料理の稽古、小遣帖の整理、何れも下女のする事である。華族のお姬樣なら左樣いふ事を稽古するも良からうが、大體習はなくとも出來なければならぬ事を仰山らしく學問をするのが實に馬鹿馬鹿しい、併し此れ等は所謂ハイカラな下女教育であらう。私は斯樣いふハイカラなる高等下女より、頑迷固陋なる女子教育奧樣教育を貴ぶ。古の女の教育にも臺所的教育はあつた。それは殊に昔にあつて必要であつたらう。併し昔の教育には却つてそれ以上の事が自然に說かれて居た。女の覺悟とか心掛とかいふものは最も深く敎へつけられたのである。

今日では一方に女の考へが非常に進んで居る。それは社會とか自然の大勢といふものが左樣いふ風に薰育したのである。而して今や世の進步が昔よりはさらに高尙な考を持つて居なければならぬに拘らず、只昔の教育の糟粕を嘗めて居るに過ぎぬ。否頑迷なる昔風の糟粕をすらも嘗め得ないで、心にもない事を言つて居る輕薄者流となつて仕まつた。而して其結果が高等下女教育になつて顯はれたのである。最も私は高等下女教育でも良いと思ふ。頑迷と同じ樣に本當に今の世の中に下女で通し得られるならば、それも良いことゝ思ふ。女は或は結局下女たるべきものかも知れぬが、併しそんな深い點は容易に判斷がつかぬとして、下女として教育するならそれも考への一つであらう。今日のやうに口では豪らさうな事を言ひ實際下女の教育を

施して居るのでは困る。

△自由結婚問題

自由結婚といふ問題がある。此れは私に言はせると自由であるが、また自由でもないと思ふ。一體人間が自分の身を處置する場合には、たとへ幾多の助言があるに拘はらず結局自分が最後の判者たるものであらう然らば結婚とてもさうである。自分の自由たる事勿論である。自分の自由たるべき事勿論であるそれは正にさうに違ゐないが、人間は自分で何處まで其自由を自由にふりまはし得るか、また實際ふりまはして居るか、それが考へ處である。

女の子が一本の簪を買ふとする。それは自分ひとりで好きなのを買ふ。併し出來る事なら人と一緒に行つて此れか彼れかと撰んで買ふであらう。簪を買ふのは自分の勝手で自分の好なのを買ふのであるが、なは自分で自分の自由を制限して居る。一反の衣服を買ふにしても、一寸此柄はよくて、此れは少し華手だワとか、此の柄が好いワとか、親なり姉妹なり乃至は友人なりに相談する、結局は自分が判定を下すのであるが、自分で自分の自由を制限するかのやうに人の説を聞くのが人間の常である。僅かに一本の簪や一反の太物を買ふにさへ人の意見を聞き、或る程度まで自分の自由を制限する。誰れか他人が制限するのでも何でもない。自分で制限して居るのである。果してさうとすれば大事な自分の一生に關する大事を極める場合、此を人に相談するのはあたりまへではないか。一本の簪から、衣物の柄から、進んでは髪の結ひ方から、學校の撰擇から、凡て少くとも一わたり、これを人に相談する。それも他人に强ひられての相談ではない、自から進んでの相談である。然るに獨り結婚といふ大事な點に至つてそれを人と相談しないといふのは前後矛盾した事ではないか、故に私は自由結婚なるものは自然に成立しないものと考へる。結婚の場合、人は自由であるが、同時にまた自分が制限を加へて其自由を束縛するものだと考へて居る。

併しその制限といふのは今もいふ通り他から强られてするのではないから、他から結婚を强ふる場合がありとすれば、それは勿論それをはね附る事は正當であらう。又進んで自分が結婚しやうと思つてそれを自から進んで他に相談するのを欲せぬといふ事があるかも知れぬ。否、所謂自由結婚などゝいふ問題の出て來るのはつまり此の點であらうが、私は若しさういふ場合があつたとすれば勿論相談するには及ばぬと言ふ。併し私は果してさういふ場合があるか否かを疑ふ。簪一本太物一反の場合にも相談を要したものが、そんな大事な場合に自から他と相談をする必要を感じないとは如何しても思へない。それは如何にも不自然な事で、ありやうがないと思ふ。が今いふ通り若しあつたらそれは自由にやつて差支ない。最も簪や太物は容易に人に話し得る事だが、男女の撰擇は一寸話し悪いのみならず、一方には情に驅られて相談の餘裕がないといふかも知れぬが、それならば話は別問題だ。そんなつまらぬ考は打破して仕まはなければならない。論者は或は其處が所謂自由結婚がやかましい問題になる所だといふであらうが、私はそんな事は問題とするに足らぬと考へる、實際に迂濶だといふかも知れぬが、私は人性の自然といふ處から此問題を見て右のやうに解したいといふのである。

洗濯のいろ〱

汚れ物を洗濯するに揮發油を用ふるは知れて居るが洗濯するにもゴシゴシ擦るのは地合の痛む恐れがある揮田油の効能を表はさうとするには汚れた物を揮發油に浸し固く蓋をして二十四時間放て置いて後取り出して絞れば地合を傷めずに汚れは皆除れて了ふ、揮發油の臭氣は熱で取れるから燒鏝を當てれば宜しい△揮發油の臭氣を厭ふ人は綺麗な水の中へ生の馬鈴薯を擦り崩し其の液で洗ひ後を又清水で洗つて乾かすも宜い△茶色や焦茶色の織物を洗ふには水を沸騰さして强き茶を混ぜ生温くなつてから卵を割り込んで洗ふのだ△青色の織物を洗ふには酢を一匙混ぜる△鳶色の織物を洗ふには水に珈琲を混ぜる△黑色の絹布を洗ふには水に少しの酢を混ぜアンモニア水を數滴注ぎ海綿にて擦るが宜い又水に其の中分ほどのビールを注ぎさうして海綿で擦つても宜い。


太郎坊

教育ある女の生活難

幾多の求職運動に失敗せし女の實驗談

櫻子

四百四病の其内で、貧ほど辛らいものは無いとは今迄に幾度と無く聞て居ましたが、貧と申ても程度問題で、馬車や御手車でその時々の流行物を身につけ給ふ御方でも、内心何かに飢ゑて居られます。心の貧しき者は福なりとか、飢ゑ渴く如く義をしたふ者は福なりとか云ふ樣な精神的に或は物質的に此の貧を訴へぬ者は天下に恐らくありますまい。けれども私はそんな悠長な事でなく、衣食足らず、勿論禮節を知る事も能きなくてしみ〴〵途方にくれてゐる事を茲に飾り氣なく告白して見ます。元と私の生家は富家といふ程ではありませんでしたが、先祖の餘澤で不自由もなく數名の召使さへ使ふほどの身分でございました。そして小學校から女學校と順を追て扨東京行と迄漕ぎ付けた時には既に緣談も出て居ましたけれ共、元來父は縣會や國會の議員の提灯持をして、有志者とか何とか云はれて喜び、何女だつて支那や朝鮮の經營上大に勉强して、教育に身を捧げる位の覺悟が必要だ、と言つてゐる樣な人でしたから、私は意氣揚々多くの同窓生が羨望の的となり、順風に帆を上げて女子最高の學府に送られました。

かくて、決して人に退けを取るな、と月々二十圓は缺かさず送り越される汲めども盡きぬ親の恩愛の露に朝夕をたゞもう希望の光に滿されて、實に愉快な月日を送りました。

然し天は何時迄も好運兒たる事を許しません。忽ち廻る因果の小車。餘りに時代の潮風に煽がれた父は、或る失敗が原因で、自暴自棄の深酒。遂には幽明界を隔つるの人となりました。すると父の養子なる事を常に飽き足らず思ふて居た親類の連中は、寄つてたかつて家政整理の名の下に先祖傳來の田畑をすつかり人手に渡して仕舞ひました。

落ぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞしらるとやら、立寄る親類も疎うなつて見ると三度が一度今迄繁く出入した人達も顔をそむけて通る有樣。

去れば昨日迄は樂隱居と人も許し自分も誇り、好みで建てた隱居所に風月を友として居た祖父も、世は逆になつて來た、孫達に目鼻の付く迄はめつたに年は寄せられぬと本家に歸つて何かの世話。そして力と頼む父に行かれ學資の途に困つた自分へ額面百圓の公債證書に水引添へて、此金で目出度卒業しろと渡された時には、私は感謝の涙に咽びました。

其後自分は一生懸命に勉强して、卒業後某女學校に招かれて二十圓の俸給を戴く身となりましたが、始めから女教師を志願であつたなら高等師範に行つたらうに、資格の無い爲にずゐ分の苦勞不便も致しました。それゆゑ毎月廿五日の俸給日の翌日に其半分を弟達が學資にと爲替に組むのが何よりの樂しみで、餘程の金でも清き勞働の結果であると思つて、自分をこれ迄にして下された親の御恩を今更に難有く感じました。

音樂學校や高等師範を卒業したての先生方は、御身姿も立派に手巾や香水にまで趣味を實現されて、無邪氣な地方の女學生の好奇心を挑發される事もありますが、私は大巾の金巾を四割にして自分でヘチ縫して用ゐるといつた風で、隨分みじめな姿で暮しました。其間には、新參の故を以て古株の裁縫の先生にひどく皮肉られた事もあるし、又篤學な國學の先生からは、今日此金を持て歸ると、米屋、魚屋、家主のところへみんな飛び散つて、來月の今頃迄は全く五六圓で過さねばならぬ、實にけふに限り獨身の教諭諸氏が羨望に堪へぬと、全く飾り氣の無い生活難の御話しを伺つた事もありましたが、此樣にして若い生徒を妹とも親しき友とも思つて四年目を過た春に、母親から何時迄も獨身で置ては亡夫の位牌に申譯無し、一先づ辭任歸國有可しとの手紙が毎日の樣に來ました。果ては老身わざわざ來かねぬ樣子に、惜しき袂を切り捨てゝ久し振りで家庭の一員となりました。

子として親の前に特に父亡き母親の言葉には或點は

絶對的に服從す可きもので、私は決して身分や位地を選り好んで物質的の欲望を滿足せしむるとか、自分が高等敎育を受けたのだと威張る程の世摺れた氣は毛頭ありませんでしたが、さりとて親達の意見に、盲從する勇氣も無く、且つは東京には會心の友もありましたから、一先づ上京して何かの職を求め、文部省の中等敎員の檢定をも受けて、固定の資本を得て置き度き望みやみ難くて、尊族の不贊成を强て排して、僅かの金、然かも奧樣達が占め給ふ帯占一筋にも足らぬ金を力に再び上京して友を訪ねましたが、幸ひ間も無く口があつて、某新華族家の高等子守り、即ち家庭敎師の名を以て一年を過しました。月幾枚の手當を頂戴して人樣の御飯を食べると成れば、なが〳〵鳥無き島の蝙蝠で地方の女學校に澄まして居た樣な譯には參りませぬ。そして明月の光り洩さぬ大家の大奥にも實に辛い酸い味のあるものと存じました。

一年間の御約束を無事に終へて暇を取り、それより試驗の準備もあり、高等學校入學の希望を荷つて、上京した弟を誘惑の多い下宿住居もさせ度く無いので、それから二人して貸間探しに歩きましたが、神田、本鄕、牛込と貸間の札斜なる家に就て聞て見ると、多くは美しい花の樣な御方が出て來られて、宅ではお一人の賄付の方に願ひ度いのでと斷はられました。二日ばかり足を棒にしてもなか〳〵に見付からず、やつとの事で全く國の人に見られたら面目のない裏二階の一間を借用して、自炊生活を試みる事となりました。全く水の便、四圍の境遇などを口にして居る場合ではありませんでした。そして元より國元から一厘の送金を仰ぐ譯ではないから、生活難の波は足元に打寄せて來る、嚢中日々に輕くなる心細さ。新聞の廣告に、男女事務員入用月俸十五圓とあるを見て尋ねて行つて見ると、雇人口入所の變裝したに過ぎぬ樣な人の脂を搾つて甘い汁を吸ふひげ男が、最初に五十錢お出しになれば紹介の勞を取りますとの話し、其内本人に伺はせますと體よく切り拔けて歸つたもの丶、月末の勘定が出來ぬ樣ではと氣ばかり焦つて何か職を見出し度いと奮

師舊友を軒並に訪問して事情を話しても、そんな事、いやどう致しまして、などゝ御主人自慢の世馴れた奥樣振りの挨拶に自分は煙に卷かれて退出したが、御主人の御職掌柄に望を囑して再度訪問して見ると、お留守とばかりで玄關拂ひ。器量を下げて退出しましたすぐ其足で今日敎育界で多少名をなして居る同級生を尋ね、事情打明けての物語りに、小學校でもよろしければ、お世話をします、とに角履歴書を差出して下さいと地獄で佛のうれしさに、早速調製して、賄賂では無いけれ共心ばかりの手土產を持つて頼み込んで置き、尚他にても問合し聞合して油斷なく就職の道を探して居りましたが、時期を失したのと、經濟界の不振の爲に堂々たる男子すら職無くして徒らに、池中の龍を悲しむ今日、なか〳〵這入れさうな口は一寸出て來ないのです。

或は一友人から、某博士の宅に同鄕の學生數名が寄食してゐるが、其炊事や萬端を世話して與れる人で多少敎育に經驗ある人を求めて居る故、尋ねて見よとの報に、焦眉の急の今日とて早速行つて面會して話しを聞くと、啞然たらざるを得なかつた。つまり上女中で月給四圓から五圓迄との話し、之では勉强の餘暇を與へられる氣遣もなしと、其場で斷はつて、何だか情け無い樣な、脛から突き落された樣な、不平に堪へぬ不愉快な情が、胸に湧き上りました。女學校に迄勤めた者が、今日知名の博士とは云へそこへ下女奉公して居ると云ふ事が國元に知れたならば、母の想ひはどうであらう、まさかに十の字を聞き洩したのでもあるまいと、今度は先日の履歴書を出して置いた方を尋ねて行つて見ると、何分にも先方から回答が來ませんのでと手匣を上から下へと何か探して居らるゝ折ふと自分の書た履歴書は無雜作にそこに折り込まれてありましたちらと見た自分はハッとおもつて、噫自分の運命はもう自分で開くより外はない、自から鍬を取つて掘り出す可きであると決心しました。でそこ〳〵に其家を辭して食卓にも机にも兼用のチャブ臺を力に禿筆を舐めて見ても、經驗やら感想やらがまるで小兒が玩具箱を

引くり返した様で、何處から形付けてよいかわからぬ始末。田〇などゝなまじつかな方程式に興味を持て其傾向を踏んだ私にはとても文學の眞味の分る筈もないほと〳〵途方に暮れました。

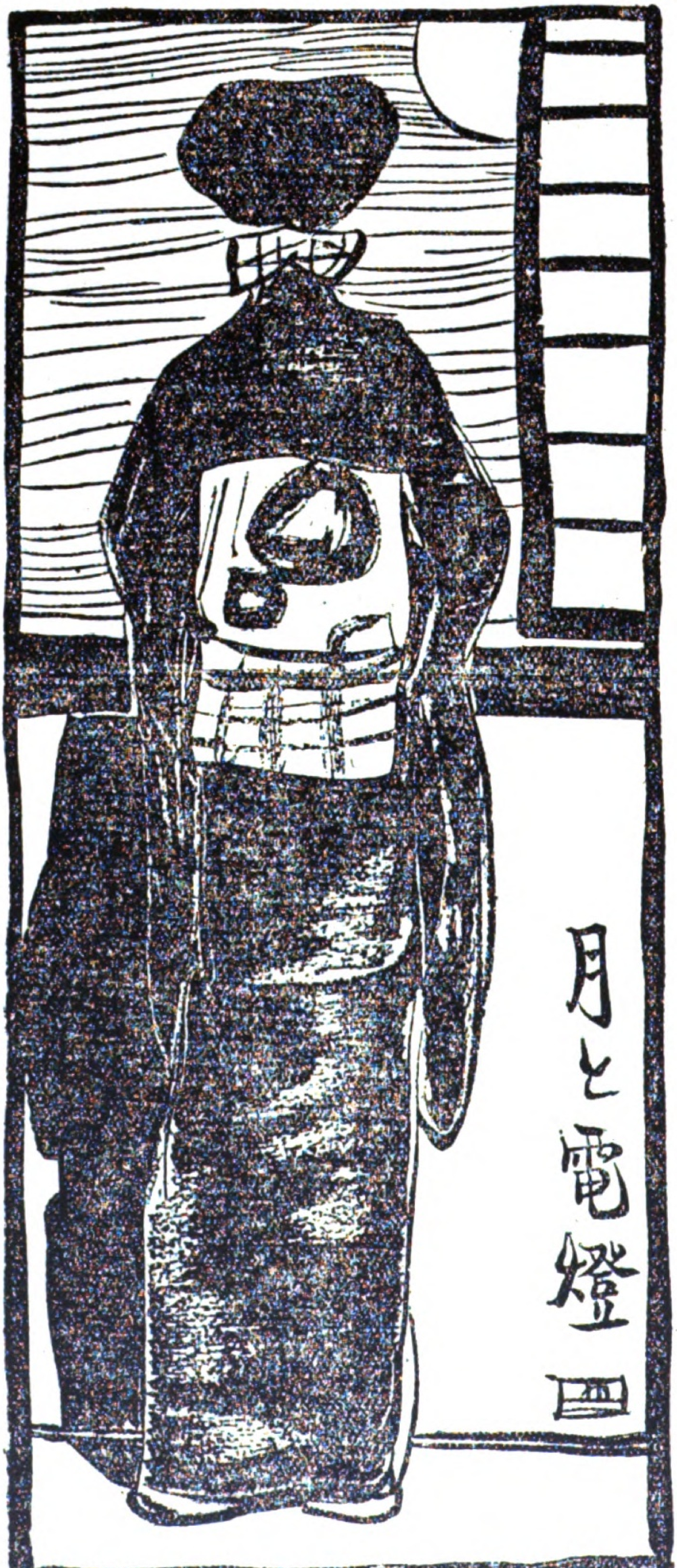
府下の某小學校に缺員があると聞たけれ共、往復の汽車賃を支辨すると收支相償ふ事が困難なので、これも中止。

昨年四月認可になつた某私立女學校へ、(應募の生徒三拾名に)志願の女教師が八十名あつたとは、一つ話しになつて居る。勿論玉石混淆で一口には申兼ますが、此廣い東京で職を求めて居る人は私ばかりで無い、まだ家族持ちで一層慘なる境遇に居る人もあるでせう。隣家に住む車夫は國元の家來筋で、ゆくり無くも出會つた時の話しに、早稻田出身で今に口がなくて困つて居る人がありますが、どうかお世話をして上て下さい、いやどうしても官立學校に限ります、坊ん様は官立學校に御入學で？　それは御結構と、話して行ました。彼は國ではランプ屋の主人でしたが、數年前に上京して始めた商賣も失敗つゞけで今の身の上電車の爲、とんだ儲けもないから、どうぞ御知り合の學生さんで新橋へ御出なはる人がおましたら、安う行ますさかいしらしてやつとくんなはれ、と見る度び合ふ度びに頼まれるのです。何處も同じ秋の夕ぐれ、今日我れ富めりと云ふ人はありますまいけれ共、一杖一笠自分の腕で此生活難の波分けて彼岸に達すると云ふ事は大抵の事ではありません。早稻田のみならず、大學出身の學士でも、故郷に錦を飾り得ずして、苦學數年、夥多の黃白と精力で買つた卒業證書も今となつては何の役にも立たぬと考へる人もありませう。それにしても巡査の妻なる人の手腕が床かしく思はれる。

こんな時にこそ世に時くめ地位の親類でもあつたなら、其引でこれ程就職に困難もせぬであらう。母親の手許に暮して居れば、流行の新形浴衣位ゐは着せて貰はれるものを、自から苦しむ今の境遇。いや〳〵決して人に頼り世を恨む可きではない。山高く水清き故山を望む其心の胸に聯つて、此炎熱の夏と戰かつて、實

熱する秋に所期が達せられる様に勉強……？　さりとて其資無きを如何にせん。

實に一時も忘れず心を悩ますものは、食と住の資であります。けれども今日は三越の陳列會に、明日は白牡丹の御立寄と、其時の召物を前日から、やれ色の配合とか何とか果ては電話でお連れの方と着物の御相談迄遊ばして、仕度三昧に自己中心で日を消さるゝ貴婦人や令嬢に自分の身を比べても、少しも羨やましく無いだけが、自から誇る點であります。





良夜の團欒

わか子

其の一

文科大學の兄様は二十日ほど前に高女の妹は五六日前に歸省、一人東京に居のこつて一高の入學試驗に蒼くなつて居た弟の勇も、昨日の朝發表になつた合格者のなかに、自分の名を見出したといふので、得意滿面大威張で歸つてきた。

我こそさきにと相競ふて集る少壯の青年が、多く失望の淵になげ歸へされる最高學府の關門を無事に通過したお歡び、今日は親子打ち揃ふての晩餐會を催ふす事にした。

うちまだから、お獻立も、お料理も、一さいお前達姉妹に委せやうと母様が仰る。側から兄さまが、おしる粉にきんとんにお芋に南瓜なんていふ御馳走は御免だよとからかはれる。

どうせさうよ、それにお團子にお萩にあんかけもして上げるわと妹が負けずに口をいふ。いゝから默つてこつちへ入らつしやいよと臺所へ引つ張つてきて、お獻立の相談。

「何にしませう。日本料理？　西洋料理？」

「折衷位な處でいゝでせう。今朝新町の姉さまから勇さんにつて頂いた鯛ね、何かに使いませうよ。」

「鯛のフライがおいしいわ。」

「さうね身の處をフライにして骨でスープをとりませう。それから肉類も一ッ入れたいのね、何がいゝかしら。」

「ロールキャベヂかミンチボールなら妾にも出來てよ。」

「ロールキャベヂにしませうか。それに胡瓜のサラダとブロマンジ位してあとは紅茶と水菓子にしませう。」

「ぢやお献立は、
一、鯛スープ
二、鯛フライ附合せパセリ
三、ロールキャベヂ
四、胡瓜サラダ
五、ブラマンヂ
　　紅茶、水菓子、

「それで出來たのね、」

「コンフラワーや胡椒バタ、玉子なんかあるからスープに入れるお豆腐とパセリと挽肉と胡瓜パンや牛乳もとらせませう。」

　で買ものをまつに云つけて淸ちやんと二人は白前掛してお料理にとりかゝる。

　ロールキャベヂは葉を一枚一枚はがして、うでゝ水にとつておき、挽肉にパン屑を交せ、鹽胡椒にて味をつけたものをさきにうでたキャベヂにて卷き、糸でしばつてバタでいため、一時間あまりスープで煮こむのわかつてるでせう。

「妾學校でストーブでやつたわ。」

「でもうちにはストーブがないでせう。煮こんだのもおいしいのよ。」

　ブラマンヂはコンフラワー大匙二ツほどに砂糖四十目ばかりを合せて、牛乳一合半（水で其の上少しゆるめてもいゝの）でそろ〳〵とき、火にかけてどろ〳〵に煮えたる時香料を加へ型に入れて冷す二ツにわけて一方へ紅とか青とかの色をうすくつけて二段にながしてもよいの。

　其の二ツはお淸ちやんに賴んでよ。あとは妾が引きうけるから。

　で自分は流しもとに立つてまな板の上に中鯛をおいてきらりと光る出刃をとる。

　鱗がパラ〳〵と黄金の片々のやうに飛んで、目がいきいきしてる海岸でなくては見られぬ鮮魚だ。

　鱗をちつて三枚におろし頭と骨は適宜に切つて强く鹽をしておき身の方は一人前一切づゝの大きさにして薄鹽しておく。

鍋を煮立て鯖の骨と頭を入れよく煮たてゝ裏漉にしてつゆは再びなべに入れておく。

骨についた魚の身をあまり細かくならぬほどのバラバラにとり皿に入れ別に豆腐の賽の目に切つたのを薄葛のなかで煮立てゝ浮上りたるを見て掬いあげ水をきつて魚と共に皿に入れる。

つゆは食卓に供する前再び煮たてゝ鹽の不足を入れ醤油を二三滴おとして色をつけ前の皿につける事にしておく。

それからさきに薄鹽した切り身にうどん粉をまぶし玉子をぬりパン粉をつけヘットで揚げて油をきつてパセリを附け合せる。

そこでスープとフライが濟んだからサラダにとりかかる松がもう胡瓜の皮をとつて種子をさつてきざみ鹽で揉んで酢につけてしぼつて居る。

ゆで玉子の黄味ばかりを鉢に入れ、其中へ砂糖カラシ鹽胡椒を入れてよくねりませ、酢にて少しづゝゆるめ、とろりとしたる時に酢を入れるのをやめて、胡瓜にかけ、白味をこまかいあられに切つて、胡瓜の上から振りかける。

それで自分の受持ちのお料理が濟んだから、食卓をお座敷へもちだして、純白のテーブルクロスをかけ、京焼の一輪ざしに夏菊一枝、ナイフ、フオーク、スプーンを兩側にビール、サイダー、果物籠を中央にほどよくならべ、緣側へは裏庭の鉢植二つほどしつとり水を注いでもち出しておく。食堂の支度を濟まして、再び臺所へいつて見ると「姉さん自分がさき出來たと思つていつてしまつてひどいわ。キャベヂがこげついてよ妾知らないわ」と清ちやんブツ〱云ひながらポツと顔を赤くして鍋をおろして居る。

「火が強かつたのでせう殘つた汁はソースの代りに上からかけるんだからスープをたつぷり入れゝばよかつたのに。」

鉢やお皿や鍋やまな板やごちや〱になつた臺所を片附順にもち出す様にして食卓につく。

焦げついたロールキヤベヂ、酢のきゝすぎたサラダ

ちと如何はしい出來であつたが父樣も母樣も少しものこさず召し上つてくだすつたので鬼の首とつたほど嬉しい。

其の二

お晝過ぎに新町の姉樣が入らつした。姉樣もう長男の辰男が五ッ實家心失せぬといふわけでもあるまいがお互にいつまでも他家の人と思へぬ。昨夜の樣な水入らずのまとゐにも姉さんが居られないのがもの足りなく思はれたが今日こそは親子兄弟一人ものこさぬ一家の團欒、お料理はまた自分の役、今宵は純日本式で姉さんの好物の、

おすし　鯛のうしほ　鱸のあらひ　うま煮　冷素麵

といふお獻立、お料理法はかいておくほどでもない平凡なものばかりだが、出來上つて食卓へならべると海老と玉子と海苔と三色盛り合せにしたおすし、ガラスの簀に雪の樣に白くなつた身をならべたあらひ、色の配合がわれながら美くしい。

姉さんが大層きれいに出來てねと仰ると食べて吃驚ちやお氣の毒樣だと兄樣の例の惡口。

「ですから兄さんに上げませんわ」と淸ちやんだまつて居ない。

食卓周圍にお皿がごちや／＼すき間なくならぶ。僕のは餘り少ないやうだなんて弟が慾ばる。

母樣が昨夜のやうなのよりやはりわたしはこの方がいゝ今夜はみんな加減よく出來たとほめてくださる。

西洋料理も上手に出來たのは甘いですがな、わかや淸などのやるのは生つかじりだから寧この方が食べられるんですよなんて兄樣どこまでも人をほめない方だ文學者なんてあんなにあらさがしばかりするものかしらん。

とはいへほめられやうと譏られやうと憤らうと泣かうと恨みは殘らぬ親子兄弟語りつ笑ひつ互に心地よげな顏と顏とを見まはし見交して笑聲絕えぬ夏の良夜、凉風靜かに庭の小ざゝを吹いてやわらかき光りをなげる新月ほのかに。

女學界の大勢

文部省普通學務局は『全國高等女學校長會議要項』中に東京府下を始め地方なる各高等女學校の現在生徒數其他に就きて今夏次ぎの如く發表せり、

	學校	定員數	生徒數
東京	一七	七一三〇	四八七九
神奈川	四	一五三〇	七八〇
埼玉	二	五〇〇	四四七
千葉	二	六八〇	四四四
茨城	二	九六〇	七九五
山梨	一	五〇〇	四二三
新潟	五	一八三〇	一四八五
群馬	二	六〇〇	四二六
栃木	三	一二五〇	一〇三五
長野	五	二五〇〇	一八九九
福島	二	八〇〇	三四五
北海道	四	一三八〇	一一五四
宮城	三	一一〇〇	一〇三六
岩手	一	四〇〇	三五〇
青森	三	六四〇	四九九
山形	四	一七〇〇	一四五五
秋田	一	四二〇	四〇七
三重	二	七〇〇	六七三
愛知	六	二二八〇	一七二八
静岡	四	一五〇〇	九五三
滋賀	二	七二〇	六五四
岐阜	三	一三〇〇	一〇〇二
福井	一	四〇〇	四二四
石川	一	五五〇	五二九
富山	二	九〇〇	六三六
京都	一一	四四九〇	二九一一
大阪	八	三一九〇	二九七六
兵庫	五	一五五〇	一三八七
奈良	二	九〇〇	八六五
和歌山	二	九〇〇	六一一
徳島	一	五〇〇	四二六
高知	二	八〇〇	八八二
鳥取	二	六七五	六三九
島根	四	九五〇	七五三
岡山	七	二二七〇	一七七五
廣島	三	一五〇〇	一〇九〇
山口	三	八五〇	七六一
香川	二	一二五〇	七九五
愛媛	五	一六〇〇	一三五四
長崎	一	四〇〇	四三三
福岡	九	三一七〇	二一一七
大分	一	二七〇	三一六

佐賀	三	一一〇〇	七一五
熊本	三	一三五〇	一二〇七
宮崎	二	四六〇	四三九
鹿兒島	一	四〇〇	三八〇
沖繩	一	五〇〇	三二一
合計	一六〇	六一、三四五	四七、六一一

以上の統計に依れば、日本全國の高等女學校數は百六十個にて、此に收容す可き定員數は六萬千三百四十五名なるを、現に就學し居る者四萬七千六百十一名なり、

更に東京のみの小別を見れば左の如し、

校名	定員	生徒數
女高師附屬	四〇〇	三七二
府立第一	六〇〇	五九一
府立第二	三〇〇	二六二
府立第三	六〇〇	五九六
府立第四	三〇〇	一一五
女子大學附屬	五〇〇	四五九
三輪田高女	六〇〇	六〇〇
東京高女	五五〇	四一六
日本橋	二八〇	二五四
淑德高女	三五〇	三〇二
東洋高女	六〇〇	二二八
奎文高女	四五〇	一九
麴町高女	三〇〇	一五一
山脇高女	三五〇	二四五
立教高女	二四〇	一三四
精華高女	二六〇	一二五
成女高女	四五〇	一〇
合計	七一三〇	四八七九

右十七校の中、奎文高等女學校が四百五十名と云ふ定員なるに現生徒數僅に十九名なるは聊か奇なり、又成女高等女學校は僅に十名の現生徒數を示し居れど是は編入試驗前の入學者數のみを掲げたるものにて同校は現に多數の生徒を收容し居る由なり、

以上の生徒數に各種技藝學校の生徒其他を加ふれば日本の女學生は優に十萬を以て數ふべしとなり、而して右の中新潟、長野、愛知、岡山、福岡（三府は別として）等は五校若くは夫以上の學校を有するは流石に教育の熾んなる地方として見るべく、京都の十一校に比し、大阪の八校は商業地の故に斯る數を示すに至りしものならんと云ふ、

各地風俗の變遷

宇和島の風俗

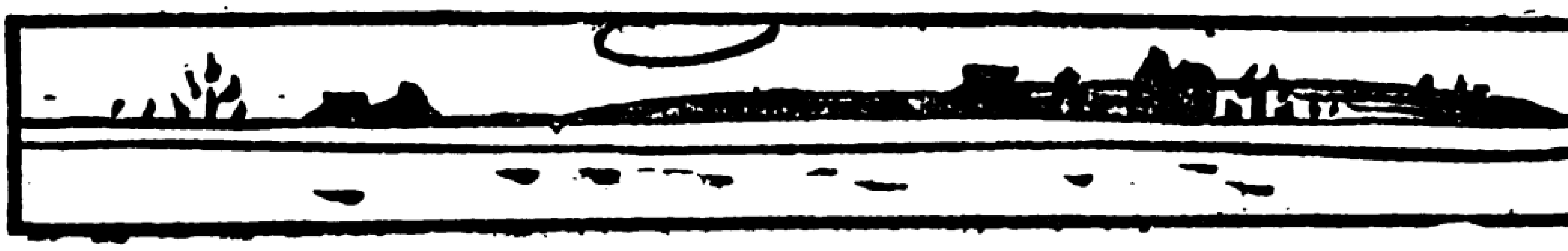
華　明　子

伊豫の宇和島。まづ知る人は知るといふ、南のはての一小都會でございます。それでも小學校の地理書に、名前だけは出て居ますから、若し御記憶に存して居たならば、誠に心強い次第でございます。

三方は聳したゝる高山に取り圍まれ、西南の一方が海に面して居る所。新任の女學校の先生が、船から上つて「まあ宇和島つて山奧だよ。きつとあの山の峽を墾つた後にあるのだらう」と思召たとやら、誠に無理からぬこと、僅か東西一里、南北二里にたりかれる平地なのですもの。それでも伊達侯十萬石の舊領地、昔を語る鶴島城山は、稍西南に片寄つて、綠の蔭濃き老松の間から、昔ながらの面影殘こす天主閣が、白う見えて居りまする。青葉色濃き此頃山の峯に海の碧、まるで深綠の世界でございます。

△人情風俗

此樣に山、海と變化烈しい宇和島の人情は、何故か、誠に温厚でございます。而も親切でさつぱりとした、ほん、お人よしと言ふ處でございます。自分の土地なかう賞めますと、何やら「穢多の正月」の樣ですけれど、一度來てごらん遊せ。直ぐご感じなるに違ひありません。又風俗と來てはそれは質素でございます。



女學校に通つてる妹が、今度新任れた校長が「おそらくは、此所の學校位質素な所はないだらう」とおつしやつたつて、先生方喜んで居らしたが、あれはきつと質素の度をこして、醜いとの意だらうなんて、笑つて居ましたが、まあお化粧などして入す方は藥にしたくもないのですもの。人生の營が此通り、花だつて知れてますわ。それでも此頃は大分東京歸りのハイカラさんがでてきた樣ですけど、まだ〳〵宇和島の土地は動きません。それといふも一つは交通機關の完備せぬ罪でせう。今一つは地勢のからですか、大變愛鄕心の強い所です。それで他所から目新らしい物が流行して來ても、一寸用ゐない風がございます。私の遊學中に友人が故鄕から、同じ遊學に來りました。所が幾ら言つて聞かしても、人に笑はれても、どうしても宇和島言葉をなほさないのでございます、なぜかつて聞きますと「をかしくても生故鄕の言葉、一つなほせばそれだけ故鄕に遠ざかるのだもの」といひましたが此友こそ、實に宇和島人士の好代表者でございます。

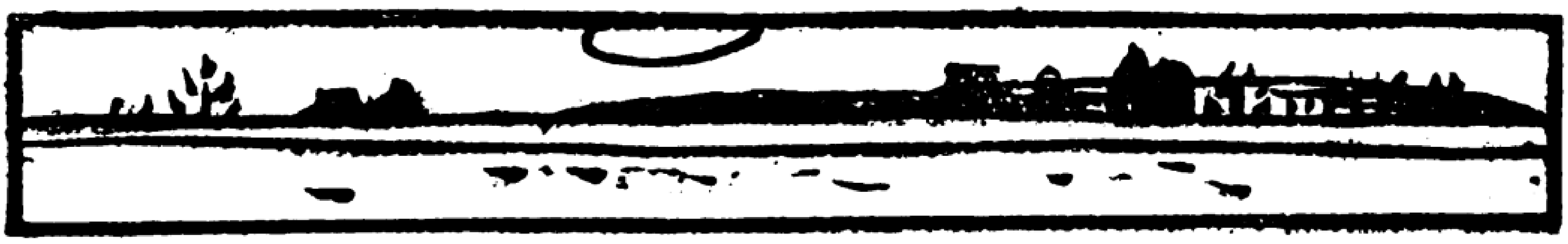
一帶此地の人は東京を非常に、慕つて居ます。殊に學生は、東京の學校でなくては駄目だ、と言つて居ます。其中でも一高の學

風を慕つて、樂譜の流行ることは素晴らしいものです。又軍人を讃敬する所です、今は中尉少尉に至つて町々になつて頂いてる位ですもの。其樣な有樣ですから軍人希望者も少なくない樣です私共の間柄でも「誰さんは海軍中尉の奥樣にお成り遊ばしたつてといつて羨むのでございます。

又婦人方は、割合好くお務めになる方で、婦人會は何日も盛會でございます。芝居などは餘りお出掛けない樣ですが、音樂會、活動寫眞等は中々大入りです。それで、堅氣の奥樣や令嬢達が、馬の脚におのろけ遊ばすなぞはない樣です。

△生活の程度

誠に低うございますとは、他國人の皮相の觀で、其實中々贅澤でございます。近郷の人が「宇和島の食ひ倒れ」と申しますが、それこそ眞を穿つた言葉でございます。然らばなぜ他國人が低いと言ふかと申しますと、無理はないのです。まあ中流が一日十五錢位ですものけれども。食品の安價いこと。殊に魚と來たら、皆樣きつと驚き遊ばすわ。平常な日で大鰯が五厘から七厘小鯛が二錢から三錢、三十錢も出せば大抵な鯛が買へるのですもの。殊に大漁の時はひどい相場です。大鯛が取替（一匝に一尾のこと）鮪が百匁八錢位です。それでもまあ七八年前とは餘程高くなつたのです。又近年鐵路汽船便があるため、生魚の京阪神地方へ送ります。



漁が盛んになつたので、其需要は大變なものです。それで自然高くなつたのでございます。

今一つ安價ものは甘藷です。前々號で槇子樣が松山でお甘藷の安價いことを御紹介でしたが、なか〳〵以て宇和島はまだ安價いのです。新甘藷の出來たてが、一貫匁價が八錢、出盛りになれば二錢位ですもの。それで貧民たちは、年中之を唯一の食品として居ます。

少しお恥かしいけど、お甘藷の蒸し立てに干鰯な添へると、何ともいへませんのオホヽヽヽ

又醤油、薪は眞とに安價い方でございます。又家賃も安價く、三圓も出せば可成立派な家がありますの。此樣な所ですもの、全體上の生活費は誠に低いものでございます。

△名　産

先づ生糸でございませう。それに次ぐのが海産物、中でも蒲鉾は一等よろしうございます。それに例のお甘藷、蜜柑、醤油、蓆今一つがお餅でございます。

△工　業　地

まづ工業を以て立つべき所でせう。目下の所では商家が多いやうですけど、此樣な不便な所では駄目でせう。數年前から、やれ

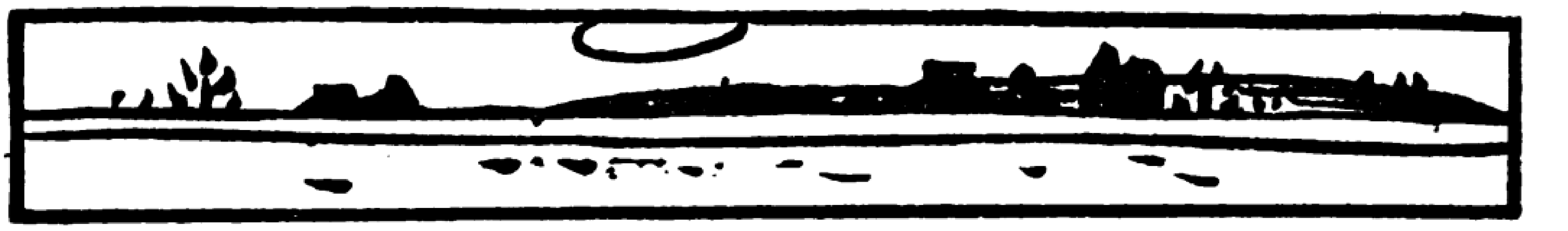
電話だの、汽車だのつて色々騷ぎますけど、何分山のあるのと大資産家のないのとに依つて何日も、立ち消えとなります。けれども電話と電燈とは、近日敷設せられるさうです。地方新聞はしきりに「暗黒なる宇和島に光明を與へよ」と叫んで居ますがまあ夫でも出來れば兎も角ですけど、やはり駄目でせう。そこへ行くと工業は有望な者でございます。「山近かければ、材料に乏しからず、川余なれば水力の便あり」と言ふ所ですもの。

殊に養蠶業は非常に盛んなもので、村落では飼つて居ない家はない位ですもの。それで從つて製糸業は非常な盛況を呈して居ます。ですから女工の必要多く、中以下の家庭では、尋常卒業を待ちかれて、皆製糸場に通はせて居ます。

其他罐詰、醸造などもなか／＼有望でございます。けれども誠に情ないことには、多く此等の資本家、活動家は、宇和島土着の人でなくて、一寸十里許り離れて居る、上灘といふ所の人が多いのです。けれども今は皆宇和島にありて、土着の人々と共に當地の發展に勉められて居ます。

△昔と今

前申しました樣に、十萬石の舊城下でございますから幾十年程前迄は、士族さん達は中々威張つたものでございました。其當時は未だチョン髷を結つて居たお爺さんがあつた位ですもの。それ



が日清戰爭後、しきりに富國强兵と言ふことを稱へて、士族も見世を張ると言ふ有樣、それでやう／＼活氣を帶びて參りました。農家は養蠶をする、製糸場が建つ、荷造りが多くなつたので、汽船がふゑると、だん／＼活動を初めたのでございます。其内に製絲場、勸商場、勸工場が出來る商店の體裁が、文明式になると、僅かの間に大進歩したのでございます。

二十年前世は立憲政治を渴望し、朝野政黨の盛であつた頃は、此片田舍にも政治の風は吹き荒み、故末廣重恭氏を大立物として戴いた時分には誰も彼も、皆政治、未來の大臣を夢みて勉强した書生も、少なくなかつたのですが、世の變遷に伴つて今は又、高等工業、工科大學、高等商業に志す書生が多くなつた樣でございます。誠に變れば變るものと、今昔の感に堪へません。

△闘牛戯

當地の人達は、遊山は中々よくします。やれ愛宕公園よ、天赦園よ舟遊びよと四季をり／＼に從つて、よく遊びますが其中で最も甚しいのが闘牛でございます。闘牛といへば直ぐ、西班牙を連想なさるでせうが。此宇和島附近では、中々盛んなのでございます。もとより西班牙のとはちがひませうけど……

一寸御紹介いたしませうか。先づ駄場と言ひまして狹谷づまりの平地を撰び、三方の山を觀覧場に、谷の平地を土俵にして。そ

ここで闘はすのです。牛を東西にわけ、大関、横綱、小結、前頭、等の階級を附け、東西より、土俵に引き出しそこで角と角とで、衝合なますのです。そして根氣の盡る迄闘はし、一方がよわつて、悲鳴を上げて逃げだすと、それで勝負がつくのです。其間に牛使の叱咤する聲、観覧者のヒイキ牛に、勢つける聲と牛の唸りと入り交り、場内まるで修羅場と化するのです。かくして勝ちたる牛は急に値上りがして、五六十圓は早くちがふのです。又負けたと來れば百圓は直ぐ下るのです。

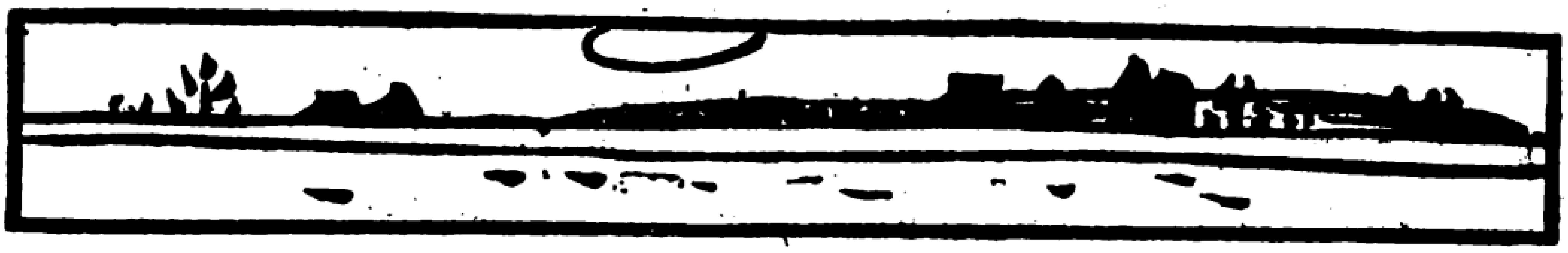
かく闘牛が盛んなので、牛の質は一等地をぬいて居るのです。それで其牛は幾何かと申しますと、大関が五百圓以上、幕下でも二百圓餘りするのです。

かゝる、野蠻な、而も殘酷な遊びにも其裏面には、非常な罪惡の含まれて居るのです。それは観覧者側で、牛に賭をするのです其牛が勝てば、相手から金を取るのです。之は近年其筋でやかましいので大分止んだ樣ですがまだ〳〵行はれて居ます。

櫻島の風俗

さゆり子

地圖を開いて見ると、九州の南端、鹿兒島灣の一隅に、小さな島が一つある。これが、その名もゆかしい櫻島で……、周圍は殆ど十里。島に御嶽と云ふ一つの山で出來上つてるやうなもの、山の高さは、三千三百尺、一寸富士に似た樣な恰好である。



鹿兒島の町からは、丁度盆石の樣に見ゆる、水清い錦江灣は、そのまゝ泉水である。(海上僅かに、一里に過ぎぬ距離)櫻島と云ふ上には、櫻の名所と思召すかも知れないが櫻の木は薬にしたくもない。昔は何でも、澤山あつたらしい。歌などが多少殘つて居る、以前噴火した時、大方なくなつたものであらう。

△米と水とが無い

島中少しも平地がない從つて小川すらない。海岸に沿ふて茅葺の住家がならんで居る至る處大小の石がごろ〳〵して居るから下駄などではとてもあるけぬ、湯治の客は草履をはくが土人は跣足で居る。

井戸は掘つても鹹水ばかり淡水は少しもない。田もないから米は一粒も出來ないが、その代り麥や甘藷が澤山出來る。これが土人の常食である。夏になれば南瓜に少し麥をまぜそれに少し鹽を入れて炊いたもの、秋から冬にかけては甘藷に麥を加へたものですまして居る。米は鹿兒島から買つて來なければならないから、まるで薬のやうに思つて居る。餘程の資産家が、病人でもある時粥にしてたべる位のもの、だから島の子供には、菓子をやるよりも、一つの團飯の方が、どれだけ喜ぶか知れない。

△温泉の奇觀

島中至る處、温泉があるが有村と古里とが有名だ。海岸の砂の中を圓形に掘つた湯壷が出來て、そこから石を集めて周圍を積んであるばかり其上に四本の柱を立てゝ、まだらに葺いた茅の屋根がおぼつかなく、青天井をかくして居る

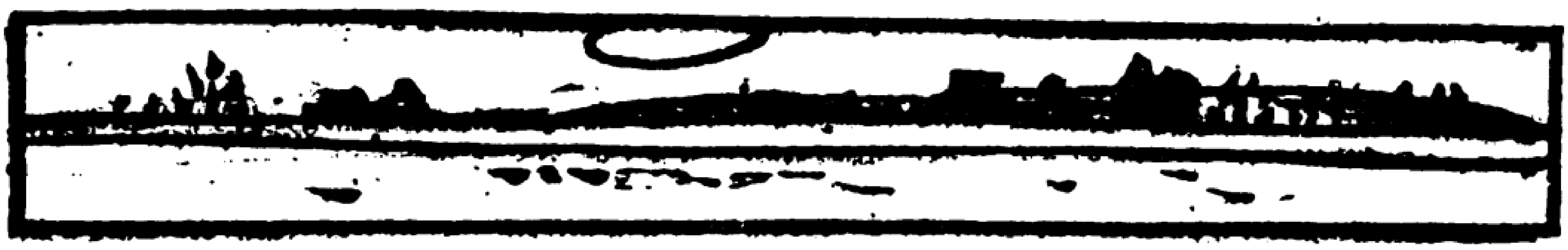
滿潮の時は、淼々たる波の中に、四本柱の屋根が浮かんで居る、潮が引くとあとには、湯壷に丁度いゝ加減の湯がなみ／＼と湧いて居る。湯治の客や土人がぞろ／＼とやつて來て、皆規則の樣に白い御服をしめて手に／＼柄杓をもつて。浴せてゐる。後で熱いで少し寒くなると、海に飛び込むまた飛び出して泳ぐと云ふ有樣であるこのごとく潮の工合で湯が湧くから時には眞夜中に湧くことがある元氣のいゝ人はわざ／＼坂道をごとり／＼と出かける。

△水船

鹽のからくない水は一滴もない所だから日に一度づゝ大隅のオドマリといふ處の水を汲みにゆく。朝早く／＼から行つて入日頃にはその船が歸つて來る。

「水船が着いたよー」と呼ぶと男や女が桶や瓶をもつて走つて來る。

瀧壺からは例の柄杓をもつて汲つて來る。一桶二錢だが、すぐ



賣れて仕舞ふ。女は桶を頭にあげて急な坂も平氣で上つてゆく。そして御米でもはじめは海水で、洗つて最後の一度だけ、淡水で濯ふと云ふ有樣、洗濯などは思ひもよらぬ。何時か、君が、宿の主人に「どうも水まで買はされるとは不自由なところだ」と云つたら、

「でも、水は安いもんですよ、一桶で二錢だから、酒なんぞ二錢位ぢやチヨツトしかありません」と澄ましたものなる程さう解釋すれば世話はない。

△男女の仕事と物産

此島では、男も女もよく働く、傾斜した石ころばかりの土地を開いて甘藷や麥や西瓜や南瓜を植ゑる。最多らしいのは大根である。殆ど一抱へある。馬に二本しかつけられないと云ふのはうその樣だが、實際である、その上この大根は柔かで、おいしいこと此上なしである。

山にゆけば、あけびあり苺あり、つはぶきがある、男も女も子供もこれをとつて、市に賣りにゆく、若い男は釣りをする。若い女は石の間の海苔をあさる。その他蜜柑、桃、煙草なんでも出來る。こんな小さな島に、ありあまるほど天然の産業がある。土人はこれを利用してせつせと働くから。邊鄙の割合に財産家が多い。

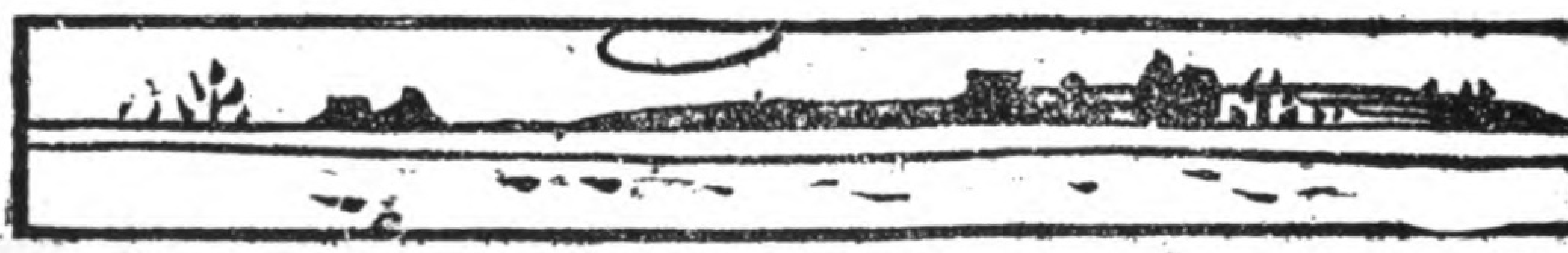
△人情風俗

人情は淳朴で太古の風がある

鹿兒島とはわづかに、海上一里、日に幾度となく蒸汽も通ふがこの島に限つて文明の恩澤？を蒙つて居らぬまづ太古そのまゝの儘がある。たゞせつせと働くばかり、廣い世間の事は何事も知らずに只一つ奇態なのは人の名前に古人の名をつける事である、鼻たれ小僧は、義經と云ふがあればべそかく子に牛若と云ふがある、出べその子に金時と云ふがあれば、目ふちの赤くたゞれた女の子に、おけさと云ふがある、なかく振つたものだ。

◎御料の洋傘

宮内省にては此程皇后陛下御料として見事なる洋傘二本を御買上げになりたるが、こは絹純白地に蝶の鱗粉を轉寫したるものにて傘地は京都四條富小路東入一井宗兵衛が拜命して造り上げ、肝腎の鱗粉轉寫は此方法の發明家たる岐阜市名和昆蟲研究所長名和靖氏によりて製したるものなり。殊に今回御料の御品は普通轉寫の法とは別にして羽翅の表裏兩面より二回行ひしものなれば、之を傘の表より見れば蝶の表見え、裏より見れば蝶の裏を見るが如くなしあり。備蝶の種類はカバ、マダラ、ギフ蝶、メイアンメイマ



イ、褄紅蝶、ムモンメタテハモドキ、木の葉蝶の大種にして何れも珍らしきものゝみなるが、其の中ギフ蝶の如きは他地方には殆ど見る事なく、曾て同縣養老瀧附近に於て名和氏の發見したるものに係り、一羽の價優に二百圓以上の高價を有するものなりとぞ

因みに云ふ、名和氏は本年春赤十字社岐阜支部總會の砌り、御臨場相成りたる閑院宮殿下へ、右鱗粉轉寫の二枚折を獻上したる處、殿下には殊に之を御感賞在らせられ、御序を以て同研究所へ成らせられ、特別標本室に於て親しく名和が標本蒐集の苦心を聞し召され、且つ鱗粉轉寫の技術を御覽ありて、彼て御用意の絹ハンカチーフ數枚に轉寫を命ぜられたれば、同工藝部員の面目此の上なく、謹みて是にギフ蝶、ツマベニ蝶、イシガキ蝶、スヂグロ、カバ、マダラを轉寫し差上らせたれば、愈よ御満足に思召され向後一層斯道の爲めに盡瘁せよとの御諚を賜はりたるが、今測らずも又此御用命に浴する次第なりと。

女學校評判記 六

三輪田女學校

河岡潮風

△生れは名高き嵯峨の里▽

吾輩は「まさ子」と云ふ名を耳にする毎に、一味の感に打たれるのである。これ別に大した仔細があるのではない。吾輩が見て以て日本女性中の快人物となす尼將軍の本名だからなのだ。

今を昔に溯る六百年前、源氏の遺孤賴朝が、蛭の子島より倔起して、時の巨人たる平氏に矢を向けた時すでに、彼の人物を見込んだのはまさ子であつた。かの怪女傑クレオパトラが、シーザーと結んで、埃及の飛躍を計つたのが僅に十七歳であつたのに較べては、彼の女は四歳を遅れてゐるが何にしても、エライやり口だ。夫れより後、巨頭公を掌中にまろめて、跋扈まで勢威を振つたのは皆な人の知る處、尼將軍まさ子の名は歴史の誇である。

由來まさ子なる名は高貴に縁の多い名で、冷泉、淳和の二天皇の后、および、後朱雀、順德兩帝の皇女、八代將軍夫人、飛鳥井大納言娘（一位の局）なんど、みなまさ子と稱せられた。

明治に入つて、まさ子なる名の才媛も多いであらうが、其最たるは、三輪田まさ子女史の右に出づるはあるまじと確信する。

女史は女流教育家として古き一人で、弘化元年一月、京都府下、嵐山の麓、嵯峨の里に生れたのである。幼にして賢こかつた事は無論の話、やゝ長じて梁川星巖の門に入つた。

梁川先生は美濃星が岡の住人「資性敏慧强記、人是を奇とす」と傳記にも書いてある。日本の李白と綽名され、慷慨家と目せられた位であるから、ヘナチヨコ詩人の亞流に非ざりし事は察せらるゝ、星巖集八卷、みな朗々誦すべきものばかり、吾輩が學生時代に、牛

鍋でもつゝくとよく歌ひ出た『雪洒ニ笠檐ニ風捲レ袂。躑躅索レ乳若爲情。他年鐵拐峯頭嶮。叱ニ咤三軍ニ是此聲』などは先生の作の一である。

女史は文章や詩は先生に習ひ、畫を夫人紅蘭女史について學んだ。粟田宮殿下には漢學を、高橋武之氏には和歌を教はつた。長じて岩倉家の家庭教師や何かもやつたが、縁あつて松山藩の勤王家、三輪田元綱氏に嫁し、琴瑟和したるも、不幸、先だゝれて、身は遺れ片身の一子を擁して私塾を開き、わづかに憂を消したのである。しかも一子も世を早うしたので、今の元道氏を養子に容れた。元道氏は無事文學士となつた翌年――即ち三十五年四月、家塾を擴張して三輪田女學校とし、殉國の英靈長へに眠る九段招魂社の裏通り、四番町の靜かな一角、二千坪を領して起つたのである。寄附を受けては學校屋となり、頭が上らぬ樣な事があつては困るとて、一錢の合力も求めず、おのれが新調すべき衣服も見合はせて學校へ注ぎ込んだ結果、今日諸君が御存じの如き盛況を來たしたのだ。

△應接室の聞書き▽

「御免。○○先生いらつしやいますか。」

今しがた放課のベルがなつたばつかり、時は七月十四日午前十時、三輪田女學校の事務所へかう言つておとづれた隱居風の婆樣があつた。

「貴女はどなた?」

「田中つて申しますんですがねエ。」

と返答して居たが、忽ち○○先生が出てきて、事務所に隣る應接室に入つてきた。そこにはかく申す某が元道氏を待つべくすでに、控へてゐたのだ。

室は日本風の八疊である。押入れもあり、床の間もある。孟子七十世孫といふ掛物さへかゝつてる。疊の上に粗製緞通を敷いて、テーブル椅子を置いたのだから頗る不調和だ。十八世紀と二十世紀とが同居する薄ぐらい部屋に、二女一男が鼎に座を占めてゐる光景を想像したまへ。

新來の二人はもとより神ならぬ身の、兎の如く耳ひ

き立てゝ、記者が聽くとも知らぬから、おきまり文句の時候挨拶を交換した後、御隱居から、

「實はねエ、一昨々年あたりの卒業生に米村みつ枝と云ふ娘があるんですが、在學中の成績操行を内々御知らせ願はれますまいか――ハアお阿父さんの職業はわかつてゐますの。大審院判事――どうか嚴重にもお願致します！」

先生は紫の袴をサラ〳〵云はせ乍ら去つた。フム嫁にもらうので調べるのだなと、心中にうなづきつゝ、吾輩は忘れぬうちに「米村みつえ、大審院判事の子」と手帖の端に書きとめておいた。

待つ事五分。

其間に仔細に御隱居を觀察した。黄ろい顔、人のよさゝうで小言を云ひさうな顔。あの眼がキラリと光り、今する様に煙草を輪に吹かしつゝ、ジワ〳〵と皮肉を陳べられたら、大抵の花嫁様は閉口頓首するであらう。不幸にして、光枝女史の報告に接せぬ間に元難氏が來て、席を捨てたから、此後の消息は知らぬ。

歸宅して念の爲め調べて見たら。

「大審院判事、從五位勳四等、米村壯宣。芝區二本榎町西町二番地。所得税額、百二圓」

……これは父君の分で、

「長女、みつ枝。明治二十一年六月生。三輪田女學校卒業」と、これは今日の女主人公の分である。

後に聞く處によればお嫁さんにもらはうとする折には、きつと一度は手づるを求めて、訊ねに來るものださうな。學校の方では當り前に有の儘を敎へる事になつてゐる。如何ほど仲人先生が嘘八百を陳べておいても、卒業成績、在學中の品行を聞けば、無慘にも剝げて仕舞ふ。いまの女學生諸姉。いやしくも嫁に行かんとする程の人は、學校時代を愼んで、品行學術ともに美事な成績を取る事を心懸けぬと、後に必ず悔あらむと、いらぬ事乍ら思ひついた通り御注意申す次第で御座る。

△官立にゆづらぬ決心▽

すでに高等女學校と云ふのであるから、修業年限は五ヶ年だ。外に一ヶ年の補習科を加へて定員は約六百名。入學は毎學年の始め——四年一ぱいは許す規則になつてゐるが、近頃では募集人員以上の志望者ある爲めに入學試驗を施す。而かも夫れが府立高等女學校と同じ日に擧行する一事が、大なる誇となつてゐる。

封建の餘弊を受け繼ぎたる極端なる官尊民卑の風は神聖なるべき敎育界にさへ及んで、お上の學校は完全なもの。私立は僞物だ。イカサマだと人も許し、自らも思つてる輩が、いまだに以て多いのは困り入る次第。されば私學は官學の落武者を收容する處。と一段も二段も低い程度に位して、得たりとしてるが滔々たる天下の習はしである。此の中に立つて本校などの氣を吐けるは確に痛快事ぢや。さるにても早稻田、慶應の如き私學の親玉が、高等學校と同日同刻に入學試驗を決行するのは、あゝ果していつの日ぞ。尫弱、潮風の如きは糖燐酸の廿人前も服用して待たずばなるまい。



入學を許されたるものは入學金二圓を收め、毎月二

圓五十錢の月謝を拂はねばならぬ。寄宿舍は食費六圓五十錢、舍費一圓である。數寮があつて、一寮十人あまりづゝ住んでゐる。普通人家を引きなほしたものであるから、玄關から戸棚、臺所まで完備してゐて實地練習には持つてこいだ。

現在學生總數は六百名弱で、學校では色々趣味ある統計を取つて、參考としてゐる。

早い話が、學生の愛讀する書籍雜誌なども各〻クラスで立派に調べがついて居て、何雜誌が一番多く入つてるなどのことは一目瞭然と分るのである。

教師は二十數名の專任教師を有し、大抵は女子で、かつ文部省の所謂有資格者だ。學校では出來るだけ優待し、その請求する教授上の器具、備附品はドシ〳〵買ふから、皆な滿足してゐるさうな。教頭は文學士、三輪田元道氏である。

△元道氏と新女訓▽

元道氏は明治三十四年に東京帝國大學文科の哲學科を出た二十三人のうちで七番目の文學士である。養母眞佐子女史を扶けて三輪田女學校をおこし、教頭として今日に到つた。氏は先年創業時代に艱苦を偕にした妻に先だゝれた時には、もとより獨身で貫く覺悟であつたさうなが、女子教育家の獨身は往々あらぬ噂を立てられやすきものである上に、眞佐子女史の心痛、二遺兒の世話など云ふ事情は、つひに最初の決心を飜へさしめて、昨年第二の夫人を娶つたのである。夫人は女子高等師範の卒業生にして、眞佐子女史の人格を慕へる人。家庭もよく治まつて行くとは他事ながら目出度い。

しかし元道氏の關する事で、あまり目出度からぬ結果を來たしたのは、近頃問題になつてゐる新女訓である。十五條みな「べからず」づくめで、下手な公園の制札みたいなものだ。元道氏曰く、「私も變にも考へるが、何しろこの類のものは、べからずに歸着する樣です「己の欲せざる處を人に施すべからず」とか何とか云ふのは無難でせうが「己の欲する處を人に施すべ

し」と云ふのは困る。自然主義を欲するから、人にも自然主義を行ふてやる……となつては、迷惑であります。先日の女訓は外國のものを參酌して試みに作つたもので、異議ある方々は忠告して頂きたい。眞面目の反對は謹んで「承ります」と辨明してをる。

潮風生つらつら按ずるに女訓の樣な大問題を、法三章的に編成せんとするは、大論文を俳句に縮めんとする如きもので、チト無理だと思ふ。夫れに、わざ〳〵「男子の寢室及病室を訪問すべからず」など〻書く事は、讀む人によつては爲めになるべき筈の衞生問答を讀んで、かへつて變な智識を增す樣な恨の皆無であるとは保證出來まい。制定委員七家の勞力は多とせねばならぬから、僕は浮薄なる漫畫繪師の樣に、無責任な罵倒はせぬが、旅順第



一圓の總攻撃と云つた風の結果であることを非常に遺憾とするのだ。寧ろ「べし」「べからず」の箇條書を廢して、先づ普通の「女小學」とも云ふ風の參考書でも作つて見てはどんなものにや。うまく當れば、三輪田元道の五字は、明治の教育史に少くも三號活字で印刷されるだらう。世の爲め、自分のため、一と肌ぬいで見られんことを切望する。

△穩健なる思想を尚ぶ▽

流石に「べからず」主義のお膝元だけあつて、本校の方針は制札文句的である。尤も、女學校などは、矢張、べからず流義の旺んな方がよいかも知れぬ。

前述の如く本校は、絶えて寄附金を募集しないから、如何に名家の兒女に對しても思ひ切つて命令する事が出來る「俥に乘つて登校すべからず」「絹布着用すべからず」「花束の簪をさすべからず」「傘には各自の記號をつけおくを忘るべからず」とは書いてなくとも、此主意をビシ／＼勵行してゐるのである。時々不意に服裝檢査の揭示が出て、晝食後各級主任が調べる。ハイカラな身なりは注意され、改めねば昇校を許されない。傘に名とか記號をつけておかねば沒收するされば、秩序は立派に守られて行つてる。

本校の主旨は、現代の家庭に適應せる、非凡ならざる婦人を養成するにあり。現代の家庭とはドンな程度なりや、是頗る六ケ敷き問題であるが、一部の人の云ふ如く、シカク解放されたものでないらしい。

無論、眼にはさやかに見えねども、時代の潮流の推移する速力は凄まじい勢で、十年でさへ百年の感を抱かす樣な當世だから、今年の是、忽ちにして明年の非となるまいとも限らぬ。

現に東京市中の電車内の婦人について一寸觀察しても、數年前の婦人は、なべておとなしく、飾り窓内の人形然と愼んで居つたものだ。たしなみが深か過ぎて、御亭主と同行でも、知らぬ顏をしてるから、第三者はツイ中へ割り込んだりして、飛んだ失敬をしたものであつた。

處が今の御婦人を御覧なさい！『車掌さん。三越はまだなの』と訊ぬるもあり、二枚一錢の新聞買ふて新ダイヤの燦然たる指さきに廣げて讀むもあり。も一ツ蓮葉は、蝙蝠傘を兩足で挾んで、その柄の頭へ兩手を置いて、その手の甲へ顎を載せてるもある。西洋婦人に感化啓發されたか何かしらぬが、隨分賑やかな表情がある樣だ。

家庭に於ける理想の主婦も、此電車の婦人の態度の如く、變つて行くたらう。しかし神ならぬ身なれば明日の船路は知らずとも、今日さへ立派にやつて行ければよい。本校は時勢に適應したる――もしくは一歩、半歩遅れたる平凡な主婦を目的としてゐるのである。大いに贊成だ。シカシ僕は、主婦は平凡な方がよいが母としては非凡でなければならぬ。本校では又た、修養の方針の基礎を授けて、容色の衰退を、才學によつて補ふ工夫をせねばならぬと思ふ。然らずんば、時勢に伴つて移りゆく事が出來ないから、彼らが姑となり老婆となつた曉に息子や嫁に『チョツ！明治の人間は



窮屈で困る！」と陰口をつかれるやうになるだらう。

△基礎堅き校友會▽

卒業生と在學生との形づくれる團體に校友會があり夏冬二期に機關雜誌を發行してゐる。六月末には十號が出る豫定ださうな、菊判で六七十頁の質素な小雜誌ではあれど、會員の爲めには思ひ出の種ともなり、發憤の基ともなるであらう。毎號卷頭には眞佐子女史の修養談、元道氏の感想錄が掲げられてある。

感想錄――は片々たる隨筆より成つてゐるが、婦人の參考になる事が多い。二三を拔けば、

◎婦人が他家に嫁ぎける後、學生時代の先輩舊知等に、書翰を發するときは、舊姓を細く肩書にするを便とす。

◎島原より來る、知人、俗謠を歌つて、曰く、「

なんと皆さん、内の嬶ゐらい
夜具と蒲團のまる洗ひ」

これ家事に上達せざる、所謂、女學生あがりの妻に心醉せしものにあらざれば、之を迎へしことを後悔せしものならん。

◎余、先年、四國へ夏季講習のため、旅行せり。宿の女主は極肥滿せし人なるが、曰く、東京の先生よ、何か書きくれと。白扇を出す。余、何も腹案なし、暫く女主の顔を見て、

ふとつたと言はれて嬉し夏見舞

と書きて渡しければ、女主、不滿の色ありき。蓋女子はいつまでも肥大を嫌ふものと思はる。

其他に文苑もある。和歌欄も、會員消息欄もある。歳月を重ぬると共にいや榮えに榮ゆるであらう。一體私立の學校は、ある程度迄聲譽を得ると、多年羨望した官立の眞似をしたがるものだ。學校の威嚴を保つといふ以外に、イヤに容態ぶつたり、繁文縟禮に流れるのである。おごる平家は久しからずの諺も想はれて笑止千萬。其愚や寧ろ憐れむべき至りぢや。

處が現今の本校は、夫れとは正反對で、萬般に及ばざらん事を懼れ恐れて力行してゐる『願へよ然らば與へらる』とナザレの聖者も言つた。三輪田女學校の現在は中々盛大ではあるが、まだ〳〵序の口である。と同時に夫れだけ豫測する事の出來ぬ將來を有してゐるのだ。



余が觀たる平塚明子

成女高等女學校長　宮田脩

森田草平と平塚明子の鹽原行は、一時新聞雜誌の呼物になつて、殆ど一代の語り草であつた。當時自分は之を單に一部の現象としてさして深い注意は拂はなかつたが、然かも明子に就いては、從來の日本婦人には無い突飛な型と見て、少しく取調べて見たいと云ふ樣な考も持つた居た。

其後自分の女性研究心が段々に增し、從つて明子に對する性格調査の興味も加はつて來たので、出來得る丈け女史の作つた脚本とか飜譯とか云ふものを絕えず注意して見て居たが、是等は孰れも至つて拙いものばかりで、自分は聊か失望した。けれども何しろあれ丈の事件を惹起した程の婦人であるから、決して簡單な性格ではなからうと思ふて、更に將來の發展如何を待つて居た。

▲

さう斯うする中に先頃本誌手紙文の臨時增刊に同女史のものしたと云ふ人生觀が揭げられたのがゆくりなくも眼についた。自分は前に懲りてゐるから餘り多くを期待せず、まづ通り一遍に覗くつもりで兎も角も讀み始めた。處が仲々讀みさしにはならない文章であつたので、思はず一字も殘さず終りまで讀んで了つた。

今迄自分が硏究した處によると、女性の知力は槪して感覺的であつて、槪念的でないのが普通である。即ち某々の部分部分を判斷することが出來ても、大局を通じて、その關係を判斷する力には乏しいものである。從つて何事につけても、知力は感情の作用に壓倒されて、往々偏狹な判斷を下さうとする弊がある。女子が議論めいたことになると、少しの餘裕もなく直覺的に

感じた處を馬車馬的に主張したり、理路が整はないで前後に甚しい矛盾があつたり、或は彼れに詳しくて是に疎であるやうなことの多いのは皆此の爲である。就中自分に關することになると、一層主觀的で明斷な公平な論斷を下すのは非常に困難な樣である。

▲

然るに右の文章によると、平塚女史は、意外にも、明晰な論理的の頭腦と、且つ之を自由に働かせ得る能力とを併有してゐるキビキビとした女性であることが確められる。文章は雄勁で、字句に拔目がなく、論脚が堂々として一絲亂れた處のないのは、巾幗者流に稀に見る處で、近來の名文といつてよい。

該文章の初めに、かう云ふ一句がある。……男は勿論ですが、女でも平生から、生死得脫の工夫はして置くべきです。從容として死に就く丈の覺悟は、何人でも日頃致して置くべきだと思ひます。……何の洒落臭いと云つて仕舞へば夫迄である。禪僧の口眞似と云へば云ふべきである。けれども文章の全體を通讀して、その所信を確めた上で、更にこの一句に立歸つて見ると星や菫に憧憬して、俳優の化粧談を學校の敎課よりも難有がる所謂近世の女流とは自ら選を異にした着眼と云はなければならぬ。

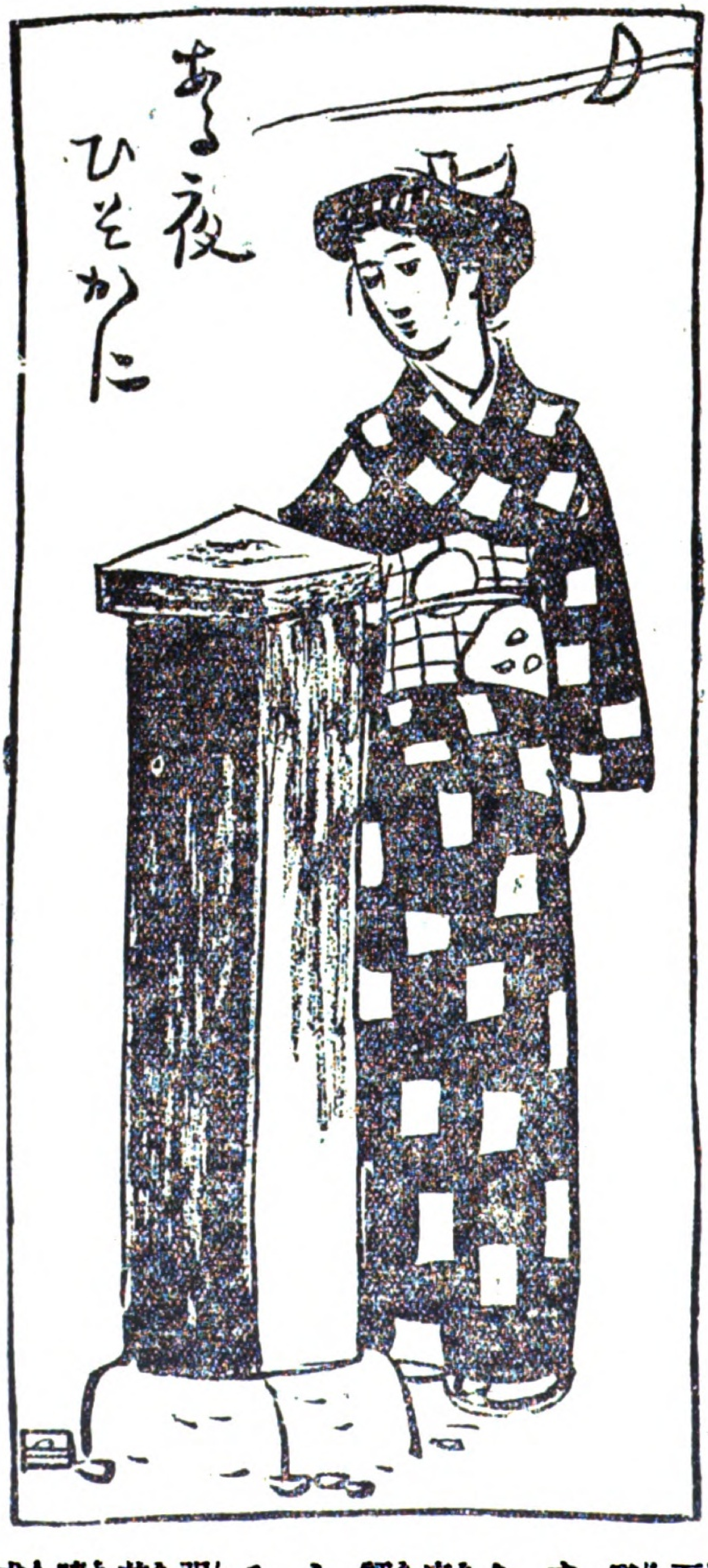
▲

又『煤烟』に就いて辯じて居るあたりを讀むと、己の責任は立派に之を承認して、而も之を客觀視していかにも冷靜に批評して居る。是も反情を以て見る人は或は圖々敷いと評するかも知れないが、今日のやうに、神經質化して居る社會に於て、誰か克く此の如くに自己を客觀視する事が能きやう。特に小我に囚へられ易い女性の、如何に圖々しくも、是程に冷靜に自分を見ることはまづ出來ない筈である。要するに女史の頭腦は、所謂女性と云ふ範疇内に律し難い特殊のものと言つていゝ。

その禪學を說明して居る邊なども、首尾を通じて如何にも明晰で、却々能く消化して居る。彼のノートを虎の卷にして、カント、ヘーゲルを談ずる若い哲學者

先生達の迚も及ぶ處ではない。當の相手たる森田君は『煤煙』の中でほゞ告白して居るが、恐らくは一寸見られぬ人物であらう。

私は平塚明子を以て、確に女子大學出身者中の白眉とするのみならず、この調子で進んだら、確に明治の婦人界に傑出する事が出來ると思ふ。故一葉女史は明治の女學史に一時代を劃した婦人である。日本の女學史に特殊の功績を遺した人である。然し一葉は何處までも女性と云ふ範疇の内に論せらるべき情の人であつた處が明子に至ると、一葉とは異なつて、餘程智的の方面に發達すべき要素が認められる。強て其の疇を求むれば、寧ろエリオットなど、西洋に現はれた特殊の婦人と較ぶべきであらう。だからかゝる女性を世間一様の準繩に依つて彼此言ふのは甚だ無理な話である。



▲

由來世間には常人の批評から超絶する者が二種類ある。一は、大人とか超人とか云ふ所謂世間の俗見以上に超絶した者即ち天才で、他は放逸無賴所謂箸にも棒にもかゝらぬ者即ち病的人物である。この二種の者は元來が既に通常人と同列に在る者ではないから、幾等慨嘆したからと云つて、到底普通の道德眼で規定する事は出來ないと思はなければならない。

平塚明子の如きは、即ち前者に入るべきもので、普通の道德眼、特に從來の女德眼を以て律すべきものではあるまいと思ふ。例へて云へば、かういふ人は梨や林檎の園に生えて而も別種の成長を遂ぐべき一本立の杉の木見たやうなものだから、之を尋常一樣に見て邪魔にするのは氣の毒である。斯る人は、寧ろ今日の社會の變り種として、必ずしも、是が發育を助長するには及ばないが、少くとも迫害を加へないで、性のまゝに成長させる程の雅量があつて欲しいものである。斯る人を何處までも發達させることは獨り本人の爲ばかりでない、廣く社會の爲にも宜いと思ふ。

併しかう云ふ人物があるからと云つて、他の人が之を眞似るのは考へものである。眞似も出來るならばよいが、本性を異にして居る者は、却々出來るものではない。

▲

兎も角も自分は今後女史が所謂開放された婦人として周圍の事情の爲に阻害せられず、愈々その天才を發輝するやう勇健な發展をなさん事を切望して居るのであるが、同時に我帝國大學などでも、斯る女性の爲に特に混合敎育を許すやうにして貰ひたいと思ふのである。





ヨ子、野口夫人を訪ふ

婦人記者

かつて御約束がしてあつたので、ある日の夕方もう火ともし頃、雨を冒してヨ子ノグチ夫人をお訪れいたしました。處は小石川小日向臺町の、通り、赤く塗つた格子のくゞり門に横文字のお名前を嵌めて玄關に音なへば、十四五歳の可愛らしい女中が出て參られました。お取次を頼んで居るうち、夫人は自ら出迎へられて、今しがた丁度子供も眠りに就きたる處なりとて私の脱いだ合羽を取つて釘にかけて下さるやら何やらして、愛想よくお座敷へと導いて下さいました、入疊の間は籐の寝臺が一つおかれてあるほかすべて日本風に飾られて、ランプの代りに風雅な行燈を用ゐて居られるなどは、殊更目に立つた。お床の間には山水の軸がかゝつて、傍には御主人のお母樣の油繪さへかざられて御座います。よろづ御質素で、ピカつかない處がいかにも詩人の御住居らしくて嬉しい。夫人は茶の薄羅紗の上着に縞のスカートを召してゞ御座いますが、御身體は瘦ぎすの、西洋人としては寧ろ小柄の方で入らつしやるのに、お顔立がいかにもお優しくて、起居物腰がまた珍らしいほど温順やかで入らつしやる故か、行燈の傍にお坐りなされた樣子は、さほど不釣合でも御座いませぬ。お話は調子の低い英語でつゝましやかに始まる。

△小さき通辯人

主人は詩作のために、鎌倉の圓覺寺へ參つて居りまして、折々歸るばかりで御座いますから、平常は私と子供と今の女中と三人丈で暮して居ります。鎌倉の方へは私も參つて見やうと話した事も御座いましたけれども、圓覺寺は禪をする處だから、少しでも騷ぐことはならないとの事でしたから止めにいたしました。何うして子供を連れて參つて、五分間でも靜として居れと申すのは無理で御座いますからね。イエ別に淋しいとは思ひません、子供が居りますし、仕事も次ぎ〳〵あるので御座いますから、……生活にもさほど不便は感じません、たゞ私は日本語が出

來す、下女は英語を知りませんので、いろ〳〵か都合が惡う御座いますけれど、これとても子供が通辯をしてくれますので、大抵の事は間に合つて居ります、ハイ子供はもうよほどよく日本語を話します、年は當年四歳になりまして、この春から女子大學の幼稚園へ通つて居るので御座います。

△一人で通學は危險

學校へは毎日女中をつけて遣します、一人で通へない事も御座いますまいが、この下の音羽の町には、下級の人が多く住んで居ります故か、誠に人氣が惡く、動もすれば惡戯をしたがりますから、うつかり一人では歩かせられません、つひ此間も惡い子供等に石を放られます處を、女中がとめてくれたとか申して居りました。

女子大學の幼稚園を撰んだ理由ですか、私が日本へ參りましたのは二年許り前の事ですが、最初方々珍らしい處を見て歩きました時、女子大學をも參觀いたしました其時　私は幼稚園長の甲賀さんに御目にかゝつて御話をいたしましたが、甲賀さんのお人柄を大層お慕はしく思ひましたので、私の子供も是非この方にお預けいたし度いと思ひ立つたので御座います、其時分私の子供はまだ二歳半で御座いましたから三歳になるのを待つて、願書を書いて出しました處、まだ小さ過ぎるとて斷られ、今年四歳になるに及んで、漸と入學を許されたので御座います、西洋人は不器用で、手工などは迚も日本人に及ばないので御座いますから、子供を斯やうに早くから日本の學校に入れて、折紙だとか盆景だとかいふことを覺えさせられますのは、誠に好都合で御座います。

△學校の母の會

私は學校の母の會といふのへも毎度出席いたしますが、お話はわかりませんけれど、子供の拵らへたものを見るのが何よりも樂みで御座います、此間も其會が御座いましたので出て參りましたが、麻生さんの長いお話のありました後で、いろ〳〵生徒の成績品を見せて頂いて實に面白う御座いました、こと

に女の子達が手づからお菓子を拵らへて、お客様方にお茶を勸めましたのはいかにもいぢらしく思ひました、子供も學校へ參るのは大好きで、ヲツトルビーポル（お友達のこと）が面白い事をするとていつも喜んで歸り、私にいろ／＼な話をしてきかせます。



△子供の無邪氣な觀察

學校では子供には成る丈け畑を與へるやうにしてくれとのお話でしたが、私も百姓は大好きですからよく子供と二人で畑いぢりをいたします、畑と申しても庭の片隅の極少しばかりの地面をそれに當てゝ、いろいろなものをゴチャゴチャと植つけて居るのですが、それについて面白い御話が御座います、いつぞやこの下の水道町で苗を買つて參つて、植ゑました唐茄子に、此頃小さい實

がなりましたのです、私は非常に嬉しく、何うかして物にしたいと思ふて居りますとある朝のこと私が家の中で用をいたして居ります處へ、子供が外から入つて參りまして「母さん唐茄子に何だか青い圓いものがついて居りましたがあれは唐茄子のために惡いだらうと思つて取つて捨てましたよ」と申すでは御座いませんか、私は惜しさも惜しく、可笑さも可笑くて暫くは何の言葉も出ませんでした川の柳を取りて參つて庭に挿して置きました時も、子供が驚いた顏をして、參つて「母さん柳に毛蟲が澤山ついて居ります」と申しますからオヤ／＼と、思つて往つて見ますと、柳の芽がだん／＼大きくなつてボサ／＼開きかゝつて居るのでしたが成程子供の目にしては毛蟲とも見えるであらうと可笑う御座いました。

△一番の仲好

エ、私と子供とはこの世の中で一番の仲好で御座いますとも、つい先達迄はこの御近所に私共の子供と同年位のお子さんがありまして大變仲よく遊んで下すつたのですけれど其お子さんは先日朝鮮の方へ往つてお了ひなすつたものですから、もう此頃は非常に淋しがりまして、學校へ參るよりほかは一寸でも私の傍を離れるのを嫌がります、今日も餘り雨が降ります故、學校を休ませました處、「お母さん今日は何處へも入らつしやらずに何うぞ私と一緒に遊んで下さいと」賴むので御座います。

△希臘式の一雄さん

私が英語を敎へに參る處で御座いますか？御近所の佛蘭西人の處と、三菱庶務部長の莊さんの御宅とへ上りますが、自宅へも小泉八雲さんの遺子の一雄さんといふのが、毎週水曜日に來られることになつて居ります、一雄さんとはお目にかゝらない久しい前から八雲さんの著書の上でもうお馴染になつて居りましたが、逢つて見るといよ／＼懷しい處のある好きなお子で御座います。お父樣が希臘人で入らつしやるからでせうが、一雄さんの顏は全然希臘式に出來て居りますね、そしてさすがはお父樣の子で、

大變想像力に富んで居り、文學趣味深く讀書ことにストーリーブックのやうなものを好んで讀みます私も一雄さんから日本や支那の面白い御話を、大分聽かして貰ひました。

△一雄さんが鵞鳥を飼ふ

一雄さんはまた非常に動物を好きで、いろいろなものを飼つて居りますが、其中で鵞鳥を飼つて置く理由が面白う御座います、私は鵞鳥は嫌



ひですから或時一雄さんに何うしてそんなものを飼つて置くのですかと申しました處、一雄さんはこんな話をしてきかせました、一雄さんが羅馬の歷史を讀んだ時、ある大將が夜半に寐込みを敵に襲はれたが、飼つて置いた鵞鳥が非常に騷いだので目を覺し、危い處を助かつたといふ事があつた、そこで一雄さんも盗人の番人には犬よりも鵞鳥の方がよからうと思ひ付いて飼つたのだといふので御座い

ます、私が「しかし鷺鳥は何うも後から追ひかけて來るやうな氣がして氣味が惡い」と申しますと、一雄さんは「それが即ち私の鷺鳥を飼つて置く所以ではありませんか、ですから私は晝は鷺鳥を籠に入れて置き、夜になると外へ出して置いて、盜人が來たなら直にかみ付かせやうとするのです」と得意になつて答へられました。

△可愛い虎ちやん

夫人が女中をよんでお茶をいひ付けられましたので、お女中はお茶と今里燒の大皿に取り分けたお菓子とを持ち出て、一々叮嚀に主客の前に配りましたが、其起居物腰のしとやかな事は寧ろ驚くばかりで御座いますが、夫人のお躾なのか、お女中の心懸けなのか、いづれにしても珍らしい事に思はれました、夫人はお茶を召上りながら

さう〳〵

と思ひ出されて、

「一雄さんが此間猫を持つて來てくれました、今子供と一緒に寐んで居りますが、一寸出して御目にかけませうか」

といはれ、襖を開けて次の室の靑々とした蚊帳の中から茶斑のいかにも可愛らしい小猫を抱いて來られました。

「名はトラチヤンといふのですが、子供が此猫を大好きで、一寸も傍を放しません、私がもしこのトラチヤンがほんとうの虎になつた時には何うしますかときゝますと、虎になつたら俥に載せて上野の動物園へもつて往きます、けれどまた猫になつた時には再び家へ連れてかへりますと申して居ります。」

△朝顏孃への附文

夫人はまた違棚の上から御主人が二三週前に出版なされたといふプリメレッチ（巡禮者）といふ書物を取つて示され、表裝を日本風にし、綺麗な日本畫（歌麿の美人繪でした）を添へたのは英米に販賣するのを目的としたからであるといふやうな事を御話になつた後、次のやうな事も語られました、

「私が野口を知りましたのは、かの「日本少女の米國日記」を書く少し前の事でしたが、野口がかういふ散文を書いて見やう（それまでは韻文ばかりをつくつて居たからです。）と申しました時、私は「それには難しい事で御座いませう、第一あなたは男で入らつしやるから」と申したのでしたが、徐々彼日記を書き出して、毎日少しづゝもつて來て見せてくれますと、實際女といふ事を忘れて、全然男の言葉になつてるやうなことが屢々あつて、幾度となく訂正したことで御座いました、彼書を出版いたしました時、世間では眞實の日本少女が書いたのかと思つてラブレツターを寄越す人が大分あつたので御座います、ポルチエといふ人は記者ですが、其人など何でも朝顔孃を探しあてなければといふ意氣込みで、隨分奔走したとの事でした。

「私も文學は好きですけれど、何ういたしましても、夫の仕事を手傳ふやうな事は出來ません、たゞ夫の原稿の誤字をなほして、タイプライターにする位のもので御座います」。

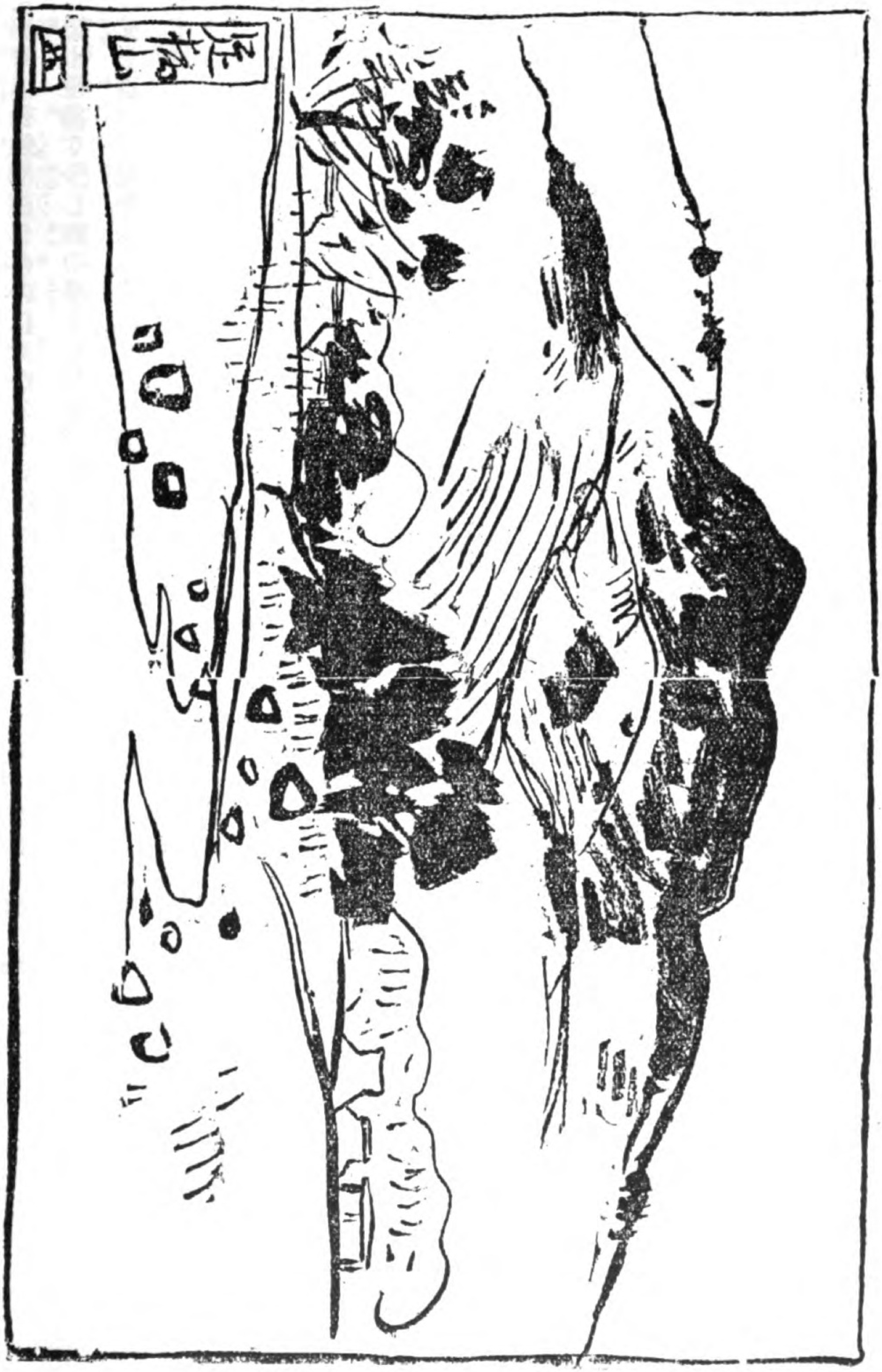
あまり長くなつてはと思つて、そろ〳〵お暇を告げかかると、夫人は笑ひながら

「あの私のお菓子を輕蔑なすつたんですか」

と仰しやるので、氣がつき、なる程これは失禮と恐れ入つてお菓子を頂戴する、夫人のお手製なさうですが、なか〳〵結構でした。

◎枝豆料理

枝豆の豆を莢から取つて三合程を擂鉢で好く擂り、葛粉一合五夕を水三合にて溶き豆と共に擂り合せて裏漉にした後弱火の上で杓子で鍋の底をかきまぜ粘氣の出づるまで火を通しブリキの箱の底に濡紙を敷て其上に一面に流し入れ二三時間冷して箱より拔き大きさは適宜に賽の目型に切り小丼に盛り合せ汁に山葵又はおろし生薑を添へる、合せ汁は醤油味醂煮出しを等分に合せ一寸煮返したるを冷して用ゐるのである





艶書に答ふる手紙

玉露女

火の神の御車ぢり〳〵と近より來まして夏ぎらひの君を苦しめ給ふ頃と相成候。

　瘠せ瘠て重きに堪へず夏衣。

　夏にやせ戀に瘠たる男かな。

御いたはしさは去る事ながらやがて來む秋の時趣妙想君が天地となるべき仕度と精々御辛棒被遊度一重に念じ上申候。

さても去年文月御卒業の將に前日ふりはえ給ひしを始めとして昨日のそれまで御玉章は積りて三十三通封筒の幅と同じ程の高さに重ねて今更に御心の程御禮の申上樣も無之存せられ候。隨て私よりたゞ一通の御返し言さへ參らせざりし罪の程も何とも恐ろしう感じ申候。

さらば今は包まず心中申聞え度。變り者の寢言御氣にさへられず御一笑被下度候。

君が君の持ち給ふすべての物を代へても只管に妾が愛を得むとのたまふ。其御志千萬有り難くは存じ候へ共。私元來甘い事は大嫌ひにて別して立派な殿方の御身に戀の愛のと熱中したまうはあたらしう存じ奉り候。

女のたゞ女らしきのみなるにさへ物足らず覺ゆるに男の男らしからでは何の甲斐か候べき重々しう雄々しき男の床しうこそ候へ。

大阪冬の役終れる時豐臣方の運命を双肩に負へる木村長門が家康の御前に血判を迫るや。二十歳に滿たぬ彼

が意氣は老將軍を呑み盡して雙髮動かず並居る諸臣皆肅然として片唾を呑みしと申すには候はずや。

『主税は死を決めて居ると見ゆるの』

『まこと天下の大罪を犯したるもの一日も早く御仕置に遭ひ奉りて亡君の御側に參りたいと心得まする』。

『ぢやが……假令御上の御心があつても……助からうとは思はぬな』。

『御意に御座りまする父を始め四十六人の同盟如何程忠義を勵みましても私一人中途で身を退きたりと申せば弓矢の恥辱此上もあるまいと存じまする』

『さて〳〵健氣なる心。……ぢやが内藏助一人切腹せばそれで亡君への忠節は足つて居るではないか』

『これは又存外の御詞。君恩は父子と雖別々の義と心得まする。父は父の恩義私は 私 の恩義。互に恩義を報ずる心でござりまする』。

あはれ元祿の昔十五歲の少年が覺悟はかくも候ひき。世は文明の光輝き人は高等の教育を受くる現代に生れあひ 候 幸多き我等が其持てる魂は祖先の血を受けて今も皆鐵と固く玉と淸らに候はむか?。否、否。六尺の大和男兒が三十歲の星想を浮かれ過して一筋の後れ毛に心勞してチックを付け香水をかくるはまだしも。床しかるべきをみなへしの。これはまたデカタンとやら自然主義とやらの露すひてあられもなう荒べるを。命とばかりあこがれ給ひて御空の星に憂をこめ。野末の菫に涙を流し。惜しや有爲の御體も崇高の學才も次第次第におとろへたまふ口惜しさよ。功成り名遂げて後にこそ美女のやわ肌に眠りたまへ。志成らずば生涯を石の枕に過せしとて男兒の面目は足り申すべきに徒らに浮雲の甲斐なき一生を送り終る御方の御心中計りがたう存じ上候。

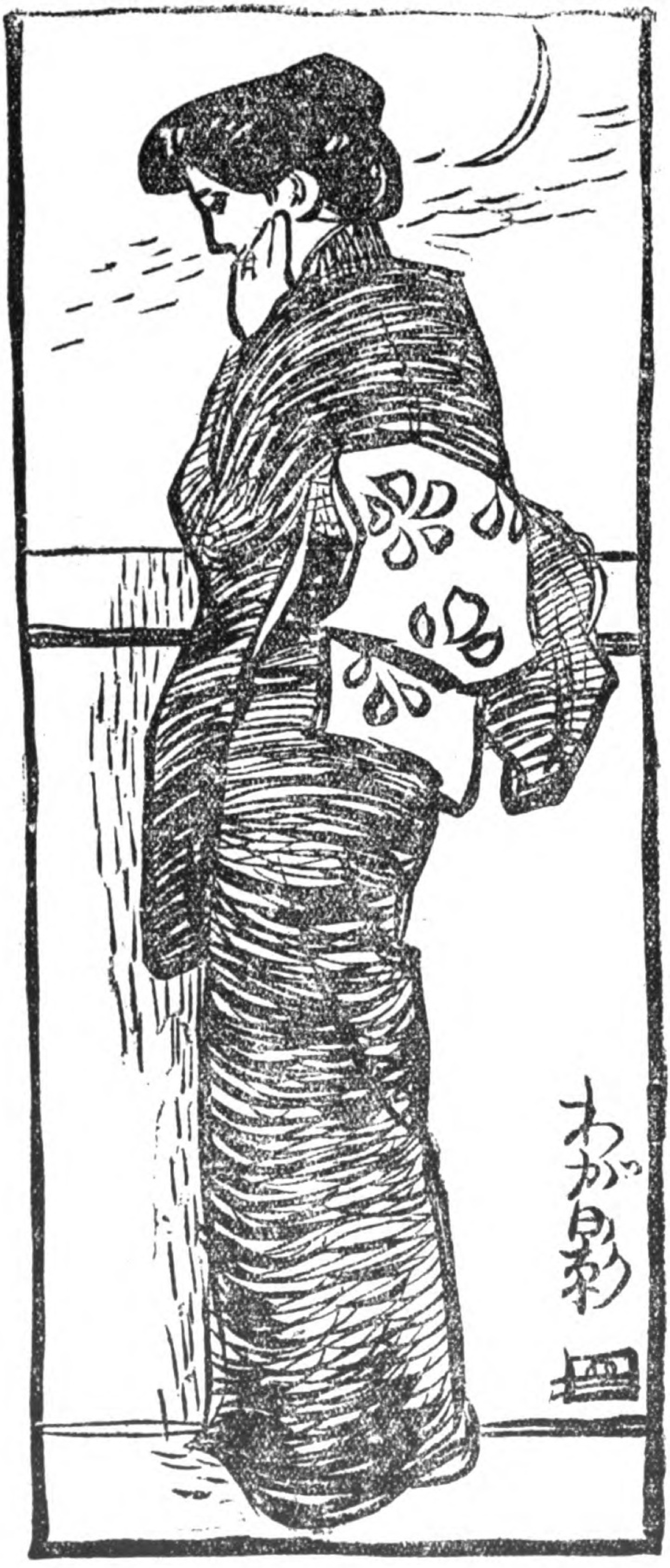
　いたづらに我は死なじと人は云へど
　　名もなき墓の多くこそあれ

なか〳〵世路はけはしう候ものを。まして世には私よりも。はるかに美はしうはるかに高き姫達も候へば。今日よりは君が尊き御腦を私如き女の爲めにふさぎ給はでひたすらに御技倆振ひたまひ大なる御 志 を御立

て被遊度。それのみ伏して御願申上候。さても分をこえし御無禮の數々何と御詫び申上様も御座なく流石御心ひろき君も如何ばかり御立腹被遊候御事かと恐縮致し候然其御腹立ちがやがては御奮發の御動機ともなり奉らばたかゞ私一人何となり候とも更に差支これなくと思ひ切つて右申上候。何卒御判讀被下度まづは御返事に代へて。かしこ

七月二十日夜　玉露

誰様





新式和歌作法（二）

停　春

△和歌は我邦の詩歌中で、最も短かい詩である。

彼の片歌の如きは文字の數から云へば十七字で、三十一字の和歌より短かいに相違ない。然しながら片歌は名詮自稱片歌で、問若くは答の一方だけを歌ふに止まり、其問答を合せて之を旋頭根本歌にしなければ、一首の完備した歌には成らないのである。

倭の高佐士野を七行く媛女ども、誰をし覓かむ。（大久米命）——問。

かつ〴〵も最先立てる可愛をし覓かむ。（神武天皇）——答。

あめつゝちどりましと、何裂ける利目。（伊須氣余理比賣）——問。

媛女に直に逢はむと、吾が裂ける利目。（大久米命）——答。

と云ふ如く、片歌は、問若くは答だけで、十分に完備した一首の詩歌をばなさない。其を二首合して旋頭歌にし、

須々許理が釀みし御酒に、吾れ醉ひにけり。事和酒咲酒に、吾れ醉ひにけり。（應神天皇）

水門なる葦の末葉を誰か手折りし、吾背子が振る手を見むと、我ぞ手折りし。（萬葉集）

と云ふ如くに自問自答し、若くは自問自答的詩式から轉化した章法を用ゐ、其處で初めて首尾整ふた或る詩味が歌へるのであるが、之れでは和歌よりも餘程長いものになる。

△俳句と和歌

然らば俳句の方は何うかと云ふに、是れは十七字で已に立派な詩を成して居るが、然し完全な文法上の語式を具足して居ないものが多い。言換れば或る詩味を表彰する詩語を符徴的に使用するのが通例である。

荒海や佐渡に横たふ天の川。(芭蕉)
梨の花月に書よむ女あり。(蕪村)

と云ふ類が皆其れで、荒海やとか、梨の花とかと云ふ語と、下の佐渡に横たふ天の川、月に書讀む女ありと云ふ句とは、全く文法上の連結を有して居ない。或は

落花枝にかへると見えて胡蝶かな。(守武)
鯛は花は見ぬ里もあり、今日の月。(西鶴)

と云ふ如き句でも、胡蝶かな、今日の月と云ふ語は、矢張り符徴的に使用されて居る。若し之を文法上完備のものにしやうとならば、必ず何等かの助辭助語が其間に加へられなければ成らない。

處が和歌に成ると、之れとは違ひ、全く文法上の完備した語式を有して居る。否、時としては詩として有すべき相當の修飾をさへ具へて居る。試に

久方の光のどけき春の日に、しづ心なく花の散らん。
(紀友則)
櫻花さきにけらしな、足引の山のかひよりみゆるしらくも。(紀貫之)

など云ふ和歌を點檢するに、文法上何等の缺くる處もなく、且つ久方とか足引とか云ふ樣な或る修飾さへ有して居る。

だから、文法上完全な形式を具して居る我邦の詩歌中、一番短かいものと云へば、則ち實に和歌でなければ成らないのである。

△想美の精粹を歌へ

和歌は詩である。そして最も短かい詩である。此の要件を充たすには如何にすればよきか。

一握の小把手を以て能く蜒蜒として走る汽車を止めることも出來れば山の如き軍艦を動かす事も出來る。天地間には想美の精粹があるから、和歌は此の把手を握り此の美を歌はなくてはいけないのである。領を把

て衣裳の全體を振ふ如く、把捉して歌ふ所は小想美であるに拘らず、爲に動かす所は天地の大詩趣である。彼の人を動かす春色多きを須ゐずとか、天地を動かし、鬼神を感ぜしむと云ふのは卽ち此事に外ならない。

△詞美の精粹を以て歌へ

和歌は極度まで煮じつめ、最早一字一語も拔き差しの成らないと云ふ精粹の詞美を以て、精粹の想美を歌はなくては行けぬ、でなければ短詩の特色は到底發揮されるものではない。

△想美と詞美との調和

想美と詞美との間に全き調和を保たなければ其想美は十分に發揮される譯には參らない。のみならず、其調和は詩としての調和、卽ち節奏を有しての調和でなければならないのが詩の常である。

△想美を把捉する方法

和歌の構成法は、自ら三段に分れる。第一が想美を把捉する方法、第二が詞美を組立てる方法、第三が想美と詞美とを調和させる方法、此の三段である。

傳へ云ふ、竹田出雲が大内裡大友眞鳥を作つて近松巢林子の添刪を乞ふた時、巢林子は病褥に在て、之を讀ませ、兄弟が身替りに成つて居るを知らず、二人の妻が互に自分の夫と思ひ違へて爭ひ、後其始末を聞て驚く所に至つて、彼は忽ち笑ひを浮べ、此處ちや〱見物はとうに仔細を知つて居るが、人形は知らずに爭ひ、さうして驚く、こゝらが大に見物の悅ぶ所ぢやと言つたと云ふことである。出雲は後此の趣向で假名手本忠臣藏を作り、勘平は親の敵を討つたのを知らずに切腹し、見物はこれを知つて殘念がり、爲に大評判を取つた。

これは外でもない、巢林子がよく詩美の急所を知つて。之を把捉すべき一手段を出雲に敎へ、出雲も大に悟入する所があつて、巧に詩美を把捉したからである。和歌は、浮瑠璃とは詩美の把捉し樣に違ふ所があるが、把捉し工合はほゞ同じで、必ず其急所を握まなければ活きた和歌は出來ないのである。

想美の把捉し樣に、直覺的把美術と、研究的把美術

とがある。

△直覺的把美術

直覺的把美術の第一は、半ば天才の特權に屬するが、又人格、識見の養成に由ても、之を得ることが出來る德あるものは言ありで、彼の在原業平や西行法師の歌は上手であると云ふより、人物がよく、人格が高い所から、從て氣品も高いのである。白川樂翁の歌なども、政治家だけに少しく理窟の勝つた所はあるが、人物識見が顯はれて居て如何にも氣品が高い。例へば

こての上にふりし世しらで、厚衾かさねて夜はの霰とぞきく。

厚衾かさねても猶さゆる夜に、みちゆく人のこゝろぞきこゆる。

と云ふ類を誦して見れば、經世濟民を心とし、天下の憂を先つて憂ひ、天下の樂を後れて樂む人の歌であることが、よく分る。或は福田行誡師の

ひれよるもいそがしげなり、いろくづの浮藻の下も浮世なるらむ。

いたづらに枕をてらす燈火も、思へばひとのあぶらなりけり。

あまりにもみつれば缺ることわりを、忘れ顔なる秋の夜の月。

など云ふ類も、色なき墨染の法衣の袖に、慈悲忍辱の心を包む高僧大德にして、始めて歌ひ得る歌であることが知られる。言あるもの必ずしも德あらずと云ふから、中には人物不相應な歌を詠むものがないとも限らないが、只掩ふことの出來ないのは氣象で、これが歌に顯はれて歌の氣品と云ふものになるので、人格が下劣で、よく氣品の高い歌を詠むと云ふことは迚もなることでない。歌人の歌と偉人の歌との明に違ふ所は實に此の點に在るのである。歌人の歌は、歌を學べば或は學び得られるかも知れぬが、偉人の歌に成ると、人物識見を養はなければ、到底學び得らるべきものでない。

歌品の養成と云ふことは、詰り人格の養成、識見の養成と云ふことに歸つてこれは教育全體の目的に屬す

るから、其方で十分勉めなければ成らない。天分の厚薄に至つては、何共致し方がないが、識見も、人格も、天才以外に、或る程度まで、教育に由て養成し得られることは、事新しく言ふまでもない。

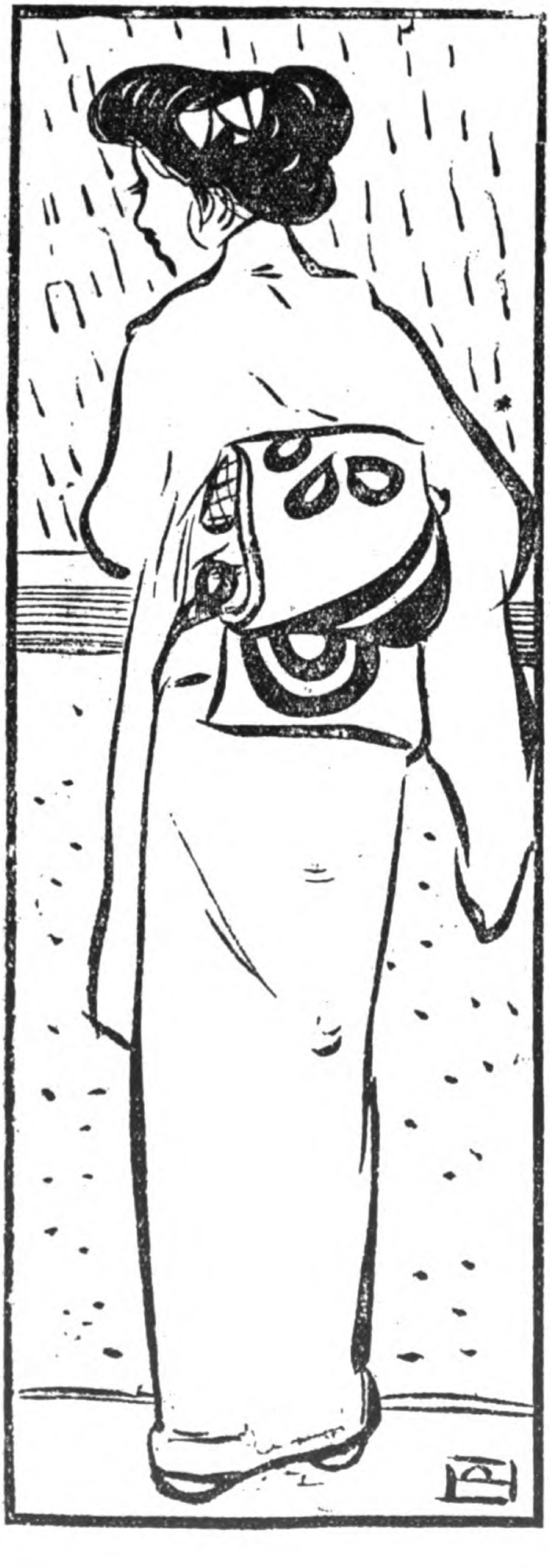
直覺に悟入すべき想美把捉術の第二は、詩想の養成である。而して名詩歌を多く諷誦するなども、其一方たるを失はない。昔雨森東洲は、年八十一に及び、始めて和歌を學ばうと思ひ立ち、先づ古歌を熟讀するがよいと云ふて、古今集を一千遍讀で、其から始めて自分にも作たと云ふことである。頼山陽は、史記の項羽傳などを自ら寫して置いて、文章を書く前に必ず一度朗讀して、其から文章を書いたさうである。歐陽永叔は、作レ文無ニ他術一、唯讀レ書多則爲レ之自工と云ふて居る。室鳩巣なども作文は讀書に在りと云ふ主張を持して居た。文のみではなく詩も同様で、和歌に限らず、支那の詩なり、西洋の詩なり、澤山に諷誦すると、知らず識らず詩想が養はれて、精神の何處にか潜で居る詩想が、諷誦する所の詩想に觸れ、油然として勃生して來る。此處だと口に說明することは出來ないが。何時か詩美の急所が分つて來て、其詩美を把捉する術も何時となく、直覺的に悟入されるものである。

東洋藝術の習得法は、從來何れも此の直覺的悟入法を用ゐたもので、橋本雅邦が、嘗て

畫をかくのも弓を稽古するのも同じ理窟で、先づ始めは嫌といふ程巻藁を射らればならぬ。それでチヤンと體がきまつて、然る後に的を射れば、必ず中るに決まつて居ます。畫も矢張り此道を行かればならぬ。先づ體が出來て、それからの事であります。しかし、斯ういふ風にやつて行くと、一向に目前の進境が見えぬから、多くは駄目なことだと思ふけれども、それを積み〳〵して、馬鹿な様な下らないことを幾年も〳〵もやつて〳〵、其上で出來上つたものは、必ず何處かに好い所がある。(中略)學問や才智を以て、如何しても眞似の出來ぬ所が則ち有難い所であるから、其處を出すには、其馬鹿な下らない事をして、無駄といふものがなければ出來ませぬ。

私は雪舟蕪村が殊に好きであります。此人達の描いた畫は、形相を外にして、胸に一點の邪念がなくて、誠意一つで以て、これを筆紙の上へ寫すのであるから自然と神至り筆從ふと云ふことになります。

など語つたことがあるが、これも矢張り直覺悟入の



法を說いたものに外ならない。藤原俊成は「寒夜のさえはへたるに、ともし火かすかにそむけて、白き淨衣のすゝけたりしをうへばかりうちかけて、紐むすびて、そのうへにふすまをひきはりつゝ、そのふすまの下に桐火桶をいだきて、ひぢをかのをけにかけて、たゞ獨閑疎として、床のうへにうそぶきてよみ給ひける」とか、何時も「蘭省花時錦繡下、廬山雨夜草菴中」の句を朗誦したとか、「藤原定家は、南面をとりはらひて、ま中にゐて、南をはるかに見はらして、衣紋たゞしくきて案じ給ひき」とか、西行は「一期行脚にいでゝ、うたをよみしゆゑ、行道して案じ、あるひは北面の戸をほそめにあけて月のかげを見」などして詠だとか、いろ〳〵な傳説があるが、詰る所は、何れも詩思を養ふ所以で、直覺的に詩美を把捉する一方法に過ぎない。

新開地に於ける婦人の生活

小島官吾氏夫人の話

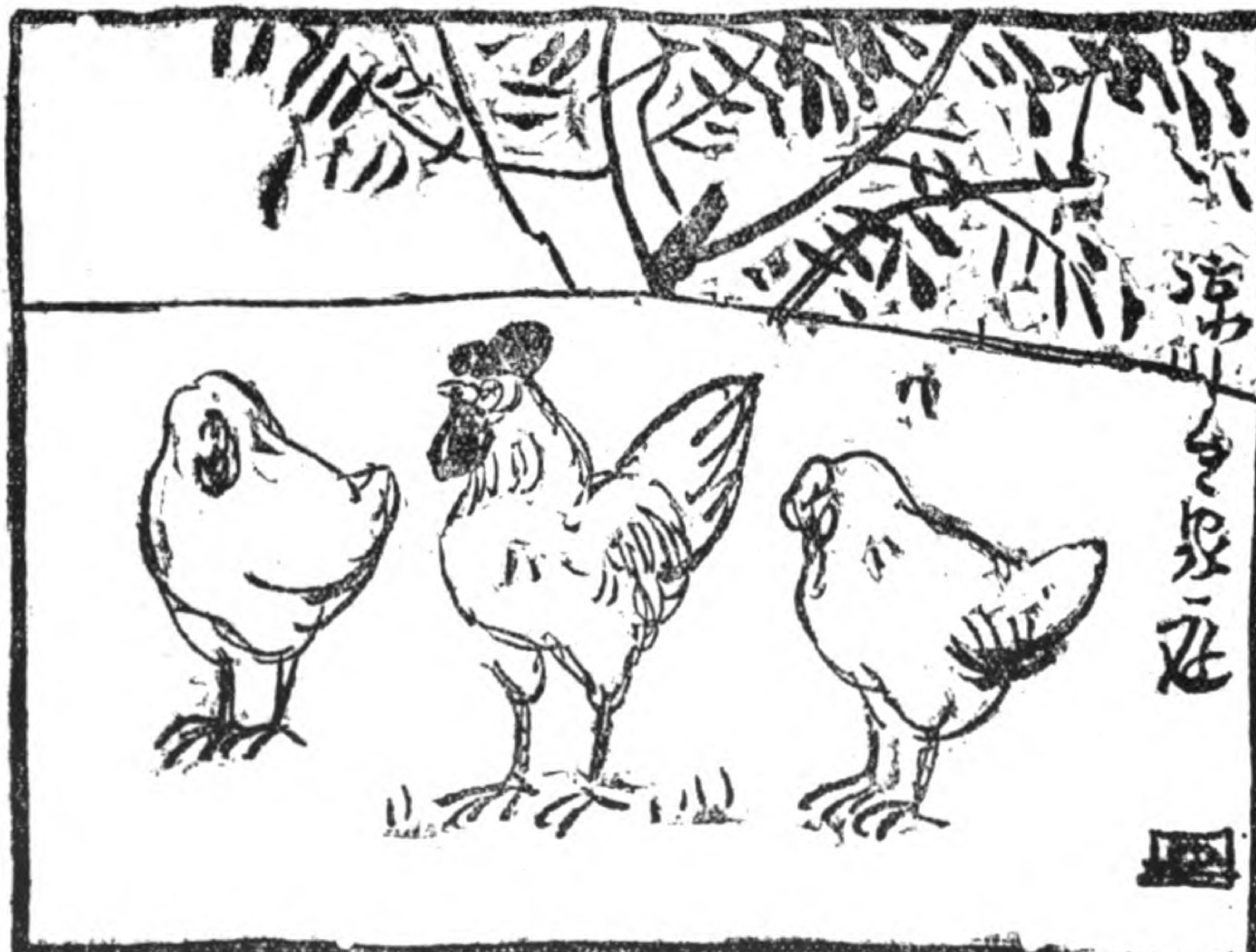
△田園生活のたのしみ

私共は彼地に參つて三十三エーカー餘の地所を買ひ求め、それに馬鈴薯、甘薯、落花生、苺、其他種々なものを試作いたしましたが、いづれも非常に好成蹟で御座います。尤も彼地の畑は砂八分といふ地面故、畑の附近に井戸を掘り、樋を以て配水をするので、動もすると水が斷れて了ふことがあります。それを私共では二年續けてその水を斷らしたので、大變違ひましたがそれさへないと非常に利益を收めることが出來るので御座いました。苺などは鷄卵程の大きさのが一株に三四百位はなります。それを四エーカーの地面に作りましたが、(一エーカーは我が四反十八歩餘に當る、四エーカーは苺畑としては極小さ方なり)、盛んに熟する頃は、一日十人位の人を入れたのでは迚も摘みきれぬ程で、毎日二頭曳の馬車に山のやうに積んでは市に送りました。苺の熟する頃は、丁度學校の暑中休暇なので子供も一緒に出て摘みますが、パピイなどの美しく咲き匂ふて居る中に、雲雀の囀聲をきゝながら、終日働いて、夕方箱づめにした苺を積んだ馬車が町をさして遠ざかつて行くのを見送り、さて家内揃ふて家に歸る時の心持は實に何とも言へない愉快なものでしみ〴〵と田園生活の樂しさを感じます。

△果實の形狀風味を自由に變へる

只今は丁度果物の一期が濟んだ所で、用達かた〴〵歸朝つたのですが、今度向ふへ往つたら葡萄の栽培をしやうと思つて居ります。彼地の葡萄は日本のと違つて、實を採つた後は直ちに莖を刈りとつて、新芽を生長させるやうになつて居ります。また棚をかゝず、地びたを這はせて置くのですが、それでも實は澤山になります、そして收穫して了ふ迄雨は少しも降りません

から、蟲がつくとか腐るとかいふやうな心配はありません。彼地の雨期は十一月から翌年の三月迄で御座いますが、三月に晴れ上つてから五月頃にまた一寸降ります。之れは作のためには大層よいさうです。そして雨期の間に十二吋立方尺の雨量があれば、極上作だといはれて居ります。亞米利加に於ける果物の栽培法は實に驚くばかり進歩したもので、形狀や味などは自由自在に作り上げます。現に此處にある葡萄なども近頃の發明の方法で作つた種子のない葡萄です。しかし葡



萄作の最も上手なのは伊太利人で、亞米利加の人は遙かに及ばないと申ます。次に野菜作りの上手なのは支那人です。日本人は支那人に次いで野菜を作ることが上手で御座います。亞米利加では支那人の入國を拒んで居りますけれども、其實支那人は米國にとつて甚だ大切な人なのです。

△一生涯奥さんの衣物のために働く

ローサンゼルス市には、メイン街、スプリング街、ブロードウエー街の三大通りがあつて、其中ブロード

ウエー街は一番繁華な所で、種々大きな建物があるのですが、殊にハンブルグといふデパートメントストーアの如きは、一町四方もある大建物で御座います。且つそれは單に建築が大きいばかりではなく、デパートメントストーアとしては最新式のもので凡てのやり方が實に目醒しいもので御座います。處が其處に飾られてある品は、九分九厘までは殆ど女のもので、それを見に行く婦人達がまた大したもので御座います。彼地の婦人は朝起きると醜い姿をして一生懸命に働きますが、午後からは是非とも下町の方に出懸けなければ、承知が出來ぬといふ風です。それも實際用達に出かけるものは甚だ稀で、多くはたゞブラ〳〵散歩するのでまづ自分の衣物を見せに歩くやうなものですが、さうして歩いて居るうちにまた、氣に入つた着物でも見付かると、旦那様におねだりして買つてもらふのです。ですから彼地には生涯妻君の衣物のためにばかり働いて居るやうな夫が少くはありません。着物を見せに下町に出懸けるやうな婦人は、雨の降る日にはまた下着のレースを見せたいのが目的で出て參ります。晴天の日は如何に下着を見せ度くても、まさか裾を端折る譯にも參りませんから、雨の日にこそとスカートを高く持ち上げて、立派なレースの五枚も十枚も美しく重なつて居るのを、之れ見よがしに歩きます。

△他家行きの衣物は一枚づゝ

彼地で夜會へでも度々出懸ける婦人になると、一週間に一枚位づゝ衣物を拵へると申ますがその御下りの衣物は女中に與へた所で用立ちませんから、其部屋にズラリと幾枚もかけ並べて置きます。しかし中等以下の婦人になると、他家行の衣物は大抵一枚づゝしかもつて居りません。日本のやうに銘仙だとか、風通だとか、お召縮緬だとかと幾通りも揃へて置くといふ事はなく、たゞこしらへ重ねて數が多くなる位なものです衣服は注文してこしらへさせることは滅多にありません。彼地の衣物を賣る店では、二十代の人の着る分、三十代の人の着るものと分けて、それを更に幾通りも品

を變へ形を違へてこしらへてありますから、如何な人が買ひに往つたとて、何れかゞ合はないといふ事がないのです。それに注文をしてこしらへますと、少くとも十弗位は違ひます。奢る人になると巴里あたりへ注文をしてこしらへさせることも御座いますが、それを取り寄せてからまた十弗も二十弗もかけて直させますから非常に高價のものになります。

△様々な流行

彼地の人の化粧の仕方は、普通まづ顏を洗つてクリームをつけ、頬紅をさして其上に白粉をはたくのですが、眼を大きく見せるために緣に入墨をする人もあります。爪とりや足の形直しなどいふ商賣が繁昌して居るのを見ても彼地の人のお洒落の仕方はなか／＼行屆いたものだといふ事がわかりますが、從つて手袋や靴の吟味も八ヶ間敷いもので御座います。手袋は成る丈け堅いのをはめるのがいゝのですから、スベ／＼する粉をつけて無理にはめるのです。衣服で氣にするところは袖のふくらしで、肩のあたりをふくらますのが流行るかと思ふと、今度は肘のあたりをふくらますのがいゝとなる。其内また手首の邊を膨らますのが流行するといふ有様です。それから面白いのはホクロの流行で御座います。ホクロはつまり顏に愛嬌を見せるためにつけるのですが、或は眼の下につけるのがいゝだの或は口の傍が宜しいとかいふ工合に流行するのです。それは大小種々出來て居て店で賣つて居りますから、お望み次第のものを何處でも勝手な處につけられますお尻の様子にも流行があつて、眞直に後の方へ出たのがいゝとか、横に出た方が粹だとか色々な事をいつて騒ぎます。今年はなんでも後の方は眞直にして、腰の兩側の曲線を美しく見せるのが流行なさうです。

△髪かたちと帽子

髪の結ひ方にもいろ／＼流行が御座いまして、今年は鬢を非常に膨らして結ふことが流行ります上の方は自毛をば小さく平たくまいてしまつて、其上に丁度毛

タボを三つ並べ合はせたやうなものを載せて、ピンでとめて置きます。そして少し洒落れる人になると其載せたもの丶間から後の方へ少しばかり自毛を引つぱり出し、綺麗に縮らして垂らします。日本ではかもじといへば一様に黒いのですけれど、彼地では茶もあれば白もあり灰色のもあるのですから、かもじやに參つて見ますとよい年のお婆さん達まで之れがいゝとか、それが似合とかいつて、鏡の前は大騒ぎで御座います。

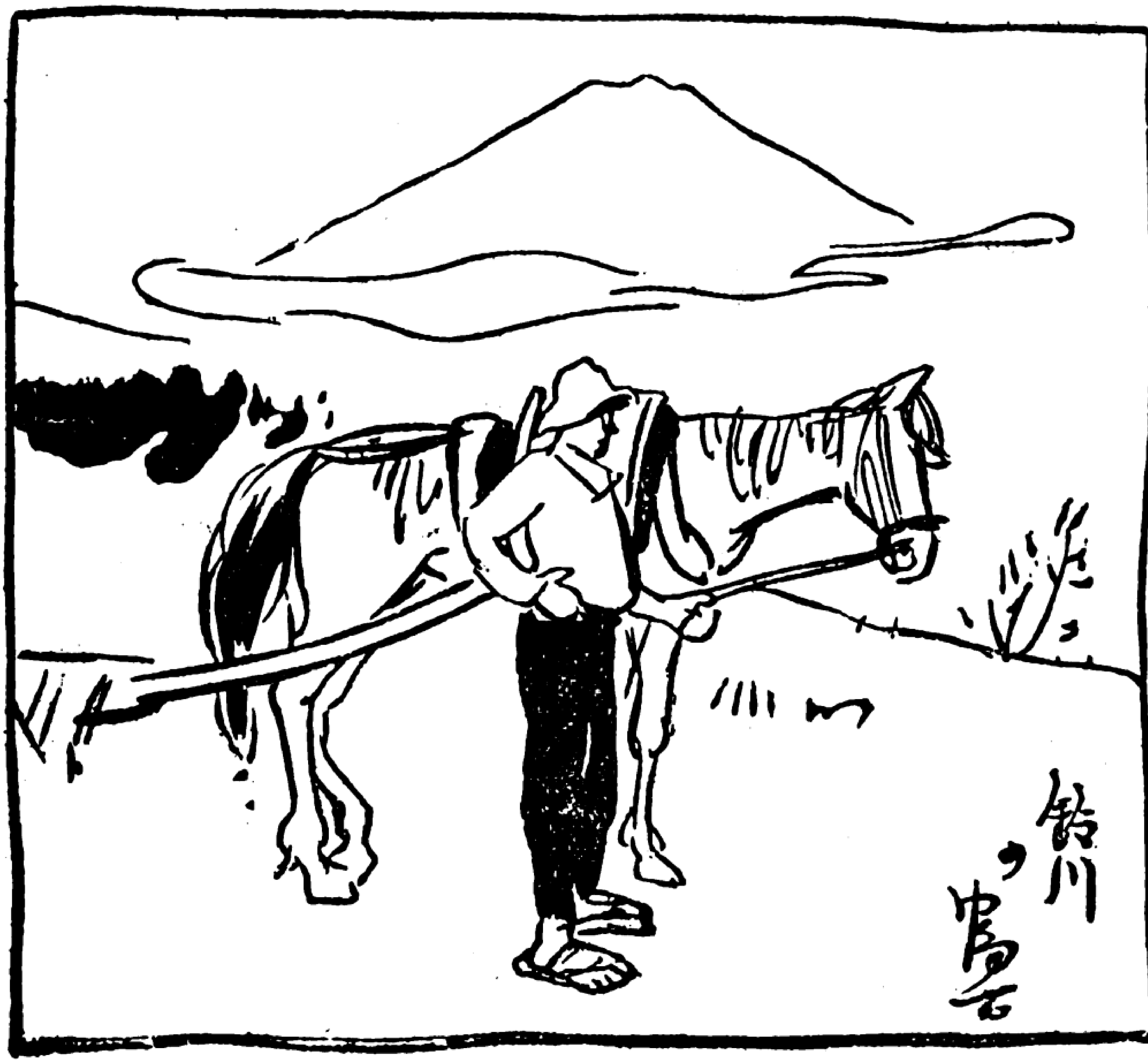
彼地にも矢張り髪結がありまして、其處へ參るとまづ髪を洗ひ、直ぐそれを電氣の風で乾かして結つてくれるのですが、中の方を叮嚀に縮らした上へ、それを亦た逆に撫いて一層ちゞらし、其上に周圍の毛を巧くかぶせますから、いくらでも見事に膨れるので御座います。

彼地に居ります。女の子など毛を縮らさずに戸外へ出すと、丁度日本で朝寢くたれ髪をかき上げずに居るやうなもので、まことに見つともないのです。毛を縮らすには普通鏝を用ゐますけれども、本當は夜寢む時に濡れた紐で幾所となく髪をしばつて置くのが一番で御座います。帽子は一時非常に大きいのが流行いたしましたが、近頃ではもう廢れて、ずつと小さいのを用ふるやうになりました。裝飾は矢張り駄鳥の羽ですが、今年はそれを途中で一寸ひと結びして後に垂らすのが流行ます。駄鳥の羽には非常に高價のものがあつて、何時ぞやデパートメントストーアに一本千四百弗といふのがありました。

△高等棟割長屋に於ける奇觀

彼地に高等棟割長屋とでも申すべきものがあります細長い大きな建物の中央に廣い廊下が通つて居つて、其兩側に壁一重を仕切にして幾つも部屋が出來て居るのですが、部屋と申しても一間といふ譯ではなく寢室、食堂、客間、湯殿の四間位から成つて居るもので、家具は布巾の果に至るまで一切備はつて居り、共用の僕や電話等もあつて、身體さへ入れば立派に世帶がもてるといふ實に簡便な仕組みに出來て居るので御座います。このアパートメントには、主に通番頭とか

會社員とかいふ人達の若夫婦が、世帯道具を揃へるのも面倒だからまあ子供でも生れるまでは手輕な生活をしやうといふやうな譯で住んで居ります。子供のある人はいけないといふ譯ではありませんけれど、子供でも生れると八ケ間しいとて隣房から苦情が出ますから引越すのです。この高等棟割長屋は、つひ私共の居る近所にも御座いますが、此處の夕方はなか〳〵奇觀です。午後から下町へ出かけて



ブラついて居つた妻君達は、夕方に夫の歸宅らぬ先にと周章て歸り、チャンとお化粧を直して省窓から顔を出して夫の歸宅を待つて居ります。そして二町位先で電車を下るのを見ると、もう手招きを初むるやら大騷ぎで私共には實に可笑しく見えます。

△婦人の自慢好

彼地の婦人はお客を招んで御馳走でもするやうな場合に食堂に出ると決して給仕にもの

をいひません、もし何かいひつける事があれば目でするといふ風なので、給仕は大變難しいと申ます。それは私の家では主婦がかれこれ指圖しなくとも平常の躾がよいから、これほどよく行屆きますといふ事を客に示すためのださうで隨分自惚が强い方です、自分の娘を人に紹介するに、大變によい娘だといひ、物を人に贈るとて大變よい品だといふが如きは、もう何方も御承知で御座いませうが。私がさるお婆さんの許へ遊びに參つた時、お婆さんは切りに死んだ夫の自慢をして夫は私と結婚する前、さる立派な病院の醫員であつたが、決して往診といふ事をしない人であつた。處が私が十四で大病にかゝつた時、姉が往つて泣くやうに賴んでくれたので夫は初めて往診といふものをした、しかも其の初めて往診をした夫は私の許に三日もつき切つて治療に手を盡して與れたので、病院などでは不思議がつて騷いださうだが、それは全く私を愛するためであつたと、さも〱自慢らしく鼻うごめかして、夫は少しも笑はない人であつたが私に對して丈けは笑つたとか、夫は實に美男子であつたとか、それは言葉を盡して話してきかせましたが、米國の婦人は大抵こんな風で御座います。

△三百弗の收入なければ女中を置かず

彼國の婦人は遊ぶこともよく遊びますが、働くことも亦實によく働きます。家庭をもつても三百弗位の收入がなければ女中を置かずに妻君が獨りで一切の事をして居ります。婦人の職業としては、タイプライター事務員、女教師、音樂家、割に金のとれるのは商店の賣子で、わけても衣服と帽子の賣子は步合を多く貰ふので割がよろしいさうです。それから少し品は惡いやうですけれど、收入の多いのは髮結、爪取り、仕立屋だと申します其他素人品販賣所とでもいふべき委託販賣所があつて、夫人方の内職ものは、お菓子でも手細工品でも、何でも其處へ持つて往つて賴みさへすれば、賣つて與れるといふ處が御座いますが、これは日本などでも始めたらよいと思ひます。彼國の人は子供の時

分から金といふ事に頭が向いて居つて、學問をするにもまづ金の取れることを目的とする。これは日本でも多少さうですけれど、米國はまた特別で、金の澤山とれる仕事があれば、學校を中途で止める位の事は何でもないと思つて居ります。彼地では男の子は十八、女の子は二十歳を過ぐれば、親の仕事をしても金を貰はれることになつて居るさうですが、其年齢に達しませんでも、親の仕事をして小遣を貰つて居る子供が澤山御座います。ある時大變身分のよい家の子供が自動車の掃除をいたして居りましたから、何うしてそんな事をするのですかときゝますと、この掃除をすると、お父さんから毎月八圓宛私にくれますからと答へました。一體に勘定高いのが米國人の特質と見えます。彼地の巡査は酒、煙草、ハンカチのやうなものは、平常でもたゞで貰へることになつて居りますが、その巡査さんが、クリスマス近くになると、普通の家からも心附を貰はうと思つて、わざ〱お世辭をいひに參ります。お巡査さんばかりではなく、郵便配達などもクリスマス頃になると、ずつと叮嚀になつて來るのです妙な風俗でございます。

米國には日本の事情の餘程委しくわかつて居る人も御座いますけれど、中には隨分わからない人も御座います。貴婦人ともいはるべき人が、妙な模樣の縮で、丁度百姓が着る襦袢のやうなものをこしらへて日本の着物だといつて得意になつて着て居るもあれば、掛物を一ヤード幾何で賣つてくれるかときく人もあるのです。ある家では蒔繪のしてある便器の中へパンを入れて居つたといふやうな事もありました。彼地で一番よいと思ふことは、病人を大事にすることで御座います病人運ぶ馬車と申ますと、美しい立派なもので、一寸も搖れないやうに出來て居るのですが、もし路上でこの病人の馬車に逢ひますときは、何んな人でも先きを爭ふ譯に行かないので御座います。それから町の四つ角には必ず一軒藥屋があつて、夜通し營業して居るなども實に嬉しいことで御座います。しかし醫者が往診をするに、妻子を引き連れて出掛けるなどはいさゝか感心の出來ない事と思ひます。

質素に暮らす我家の餘德

齋藤美子

私の家は累代の舊家で奢侈は祖先から家憲として固く禁じて有ります。

子供の生れた時緣の近い親戚で初衣を着せてくれる習慣ですが生れたての赤兒に澤山な立派な着物は不要ですし、且恁う申しては失禮ですが外樣で頂いたものよりは自宅で選擇したもの丶方が氣に入りますから初着は自家で一重拵る丈で親戚からは成るべく代價で頂きます。其お金は其子の物として銀行へ積んで置きます。雛や五月幟も懇意な所は別として母の里や親戚からは矢張りお金で頂きます。

桃の節句は優に美しく、菖蒲の節句は勇ましく、共に大いに祝ふべきですが、只徒らに澤山飾り立てるのを以て誇りとするやうなのはいけないと思ひます。宅では質素なお家へは實用的な切地の類を贈ります。

子供も幼い中はさほど、衣服の必要も有りませぬから縮緬を二重拵へやうと思つた時は一重にして後は他の絹物位に止めて置いて豫算の殘金は貯金します。

一體私の家は養蠶地故宅でも澤山いたします。上繭は俗に磨きと稱へて悉く賣り拂ひ色付きや屑繭は糸に繰いて機屋で縮緬や羽二重に織らせたり自宅で絹や太織にいたします。織り上つた品を京都へ遣つて友染などに染めますと三越や白木屋の陳列場に有るのと一寸も違はない立派な者が出來ます。

私の母は衣服に趣味を持ちます故常々色々に工夫して美しい縞や絣を案出して機屋へ頼みます。織り上つたものを見ると色の配合も柄合も申分ないので斯道の機屋もその巧みなのには驚きます。常服は下女が織ります。其故私共の着物は半以上は家で出來たもので、蠶の時一生懸命働いて得たものだと思ふと着て居て誠に愉快です。

私など今でこそ多少着物も出來ましたが二年前未だ學生々活をして居る頃まではろくな着物は持ちませ

んでした、其でも別段欲しいとも思はず衣服には誠に冷淡で母の着せてくれるもので滿足して居ました。あんまり衣服についてあれこれ云ふ人は淺ましいと思ひます。

幼時銀行へ預金して置いた初着や雛の代金が二十年後の今日利子のみでも丸帶や三枚襲が優に買はれる程になつて居ます。あの時初着にしてしまつたなら、今ではヤツト襦袢位にしか成らなかつたのでせう。

私の家では私たち姉弟のお小遣は定額を月始めに渡されて必要品は各々其中から仕出します。足らなくしても先取りは許されませんからなか〳〵無駄物は買はれません。自分でお金出すのだと思ふと自然買つた品は大切に致します。

其れから獨立自營と云ふ事は社會の一員として生存して行く上に大層必要な事ですから幼い弟や妹たちも、出來ない事は格別、出來る自身の用はみんな自身にいたさせます。

又勤儉力行の美徳を養成する一手段として用事をさせては其勞力に對して相當の報酬を遣ります。而うして常に仕事に興味を持たせて安逸に耽る事を避けます。

私はルビーやダイヤを輝して以て誇りとする人の氣が知れません。それは誰だつて働くよりは樂をした方がいゝでせうし、汚い着物よりは綺麗な方がいゝでせうなれど、人の身の上には佳い事計りは有りません、若も何かの機會でお金の必要が起つた時簞笥の底を拂つて質屋へ持つて行くより、用簞笥から預金帖を出して銀行へ持つて行つた方が遙にましでは無いでせうか。

斯う云つても私は決して、拜金宗でもなければ金錢萬能主義でも御座いません。たゞ體面を崩さない範圍内で働きもし節約もして不時の要に供す丈の準備をなし餘裕あらば慈善事業などに散じたいのが理想です。

知人の或る牧師の令夫人は下女の二人位は置いてもいゝ位置に居ながらあはれな出獄の老人を引き取つて

夫れを召し使ふ丈、數多い來客の應接からお子供衆の世話から家事萬般を一人で切つて廻されます。御服裝などの御質素なのは驚く程で、お子樣にも決して絹物などお着せなさいません。誰れでもこの夫人を訪問するのに絹物などは氣恥かしくつて着て行かれないと申します。

出來ない位置で質素にするのは當然ですが充分出來る身分で恁んなに質素勤儉の生活をなさるのは眞に悟り得た方とでも申すのでせうか。先天的の人格も御座いませうが清い温い信仰の力に依つて益々お心が磨れるのでせう。

私もエマーソンの「人は生活を簡易にして思想を飽くまでも高尚にすべしと」云ふ金言を座右の銘とし、この金言の實行者たる夫人に鑑みて忘れても儚い虛榮に憧憬れるやうな心を起すまいと常々修養して居ります。

滿洲の風俗

△滿洲での生活は思ひの外に樂である。それは物價が廉いからで、現に日本酒は戾し稅が取れるといふので、丁度酒造稅を引いた丈け日本內地よりも安い。煙草も無稅だから驚ろく程安い。

△米は聊か高いけれど、其れも取立てゝいふ程ではない、但だ家賃丈けは隨分高いが、雜貨なども決して內地より高くはない。

△支那の絹物類も、內地よりは二割以上、物によつては三四割も安い、だから大抵の家では夜の物に支那緞子などを用ふるのが例で、婦人の着地などにも殊に支那絹が多い。

△支那人の商賣に勉强するのは驚ろく程で、肉類野菜物などは月々勝手元から用聞に來る、其れに日本式の通帳などを配つて置く、夫の遣方は全く日本式で、而して品物が割合に廉い。

△小賣商賣では支那人が着々日本人を壓倒して行く、彼等は資本が豐かで廉價に仕入る便宜を持つ上、低い生活に安んずるから掛りが少い、日本人は悲いかな其樣は往かぬから、到底彼等と競爭することが出來ぬ。

△野菜や果物や、鷄肉や鷄卵などは多くジヤンク船で芝罘其の他山東省方面から入込む、之がまた廉價なものだ、鷄卵一個冬分でも小賣が一錢夏分には五厘位ゐ、他は此の割である。

産婦の爲に大切と思ふ事柄

産婆　西尾きやう子

▲分娩時の灌腸の利益

御産に向つた時は灌腸を致して直腸内を清潔にして置く事が一番大切で御座います。それを致しますと、第一無駄痛が無くつて、御産を早く致します。第二胎兒が産道を通り易いから滅多に胎兒に過ちがありません。第三滅多に産婦は創傷を受けません。第四胎盤が下り易う御座います。第五出血が少くて肥立が大層良いので御座います。從つて貧血の危險も無ければ、御産後血の道の起るやうな事も御座いません。分娩時の灌腸は此五つの大きい効能があるので御座います。

▲灌腸を誤解された某華族

或華族の奥方が御産氣附かれました時、私は強て灌腸をいたしましたので、御主人が「彼樣に痛がつて居る處を、平生嫌いな灌腸を無理に爲るのは如何云ふ次第だと」御尋ねになりましたから、私は灌腸の効能を悉皺申上げました處、御主人は「ア丶左樣云ふ譯か、己は又産の時に便通でもあると御前が汚くて困るから灌腸を爲て置くのだらうと思つたと」仰やつて笑はれた事が御座いました。私は多年の實驗上、分娩時の灌腸の効能を切に感じて居りますので、灌腸を許して下さる奥樣方には衷心から感謝して居るので御座います。「西尾は分娩時の灌腸と云ふと丸で命でも助けて貰つたやうに難有がつて産婦に禮を述べる」と皆樣に笑はれる位で、「灌腸さへ爲せて下されば頭の一つや二つ打れたても厭はないよ」と何時も弟子達に申して居るので御座います。

▲早く産婆を呼んで頂きたい

産婆が間に合はぬ位な事は輕い御産なら別に心配はないやうに思召か知れませんが、分娩時の處置に依て

御產後に大層影響を及ぼす事が在りますから、成る可く產婆を早く呼んで頂きたいので御座います。前申上げた灌腸なぞも已に胎兒が產道へ下てからでは致し惡くなりますし、無理に致しても効能が御座いません。其他總べて大切な消毒なども倉卒の際では充分に行屆兼ると云ふ種々な不都合を生じて參ります。早く產婆が參つて居りますと例令難產でありましても前々から應變の處置も出來早く產科醫を呼んで手當が行屆ますので案外安々と分娩が出來る事が多いので御座います

私は嘗て横位置の御產に出遇つて困つた事がありました。是は私が預つて居た妊婦ではありませんでしたが、御產がむづかしくなつてから急に私を呼んだので御座います。横位置なぞも早くから處置致せば容易く直り、若し困難でも專門醫を招けば無事に濟むのですが、最早手後れになつて居ましたから如何する事も出來ません。兎に角母體が心配だから產科醫を呼んで與と申しましても良人が躊躇して居りました。其內隣近所の誰彼が斯樣健劫な產婆を返して先の產婆を呼べと世話を燒いた樣子で、良人は頻りに私を追立てました。私はせめて前の產婆に遇ふて引渡して歸りたい、胎兒は所詮駄目であらうが母體だけは何卒助けたいと存じ色々と頼みましたけれども、良人は喧嘩腰になつて追立てますので仕方なしに歸らうとして駒下駄を履きかけた時、フト御金の事に心付いて「私に任せて與れゝば私への禮金は勿論の事、御醫者其他の諸掛り一切御迷惑を掛けませんが如何ですと」申しますと、良人は急に顔を和げて承知いたしましたので早速專門醫の來診を乞ひました上、大學へ入院させ恙なく分娩を濟ませましたが、手後れの爲胎兒は遂に助りませんでした。斯樣事は無敎育な下等社會に有勝な事で御座いますけれども、相應の御家でも產婆を除り早く呼ぶのを恥のやうに思ひ、我慢の出來るだけ控へて居られると云ふ風が往々御座いますのは誠に殘念な事と存じて居ります。

▲御產支度と分娩具

華族方の御産支度も、私の事ですから通例の分娩具を御用意願ふだけて、大して仰山な御支度は願ひません。唯先様で御産前から看護婦を御雇ひになつて御置になるのと、晒木綿なぞも消毒した物を御求めなるる位な違で御座います、當今は一般に分娩具を御求めの方が殖えたやうですが、二階借の方でも之を買調へて置かれるかと思ふと、家屋敷持の方でも調べて置かれぬと云ふ工合で、是等は貧富よりも頭腦の新舊で違ふので御座いませう。分娩具は産蒲團、居直蒲團、脱脂綿、ガーゼ、紙、晒木綿等一切揃つて三圓から七圓位まで〻御座います。尤も殺菌綿、殺菌ガーゼ、消毒藥は私共の方で必らず持參いたしますから、分娩具を御求めになるのは御都合で如何でも宜しいと皆樣へ申上げて居ります。産蒲團を持つて來て與れと申す貧家へは悉皆取揃へて參りますが、時としては産蒲團を其家で即席に作る事も御座います。夫は新聞紙十枚位敷て灰を其上へ置ならし、更に紙を灰の上へ並べて布を掩ひ、四方を綴ぢますので、是れでも結構清潔に間に合ふので御座います。

▲私を試驗した獨逸の妊婦

一昨年御産の御世話いたしました獨逸の婦人は、露西亞人の妻君で、神戸に住んで居たのですが、總領の下が三四人育たなかつたので産婆や産科醫を選ぶのに便利な東京へ出て御産を爲るのだ相で、初めて私を呼んだ時私を試驗するのが却々嚴重なものでした。此婦人は日本語が少しも分りませんけれども、何か醫書を手に持つて分娩時に於る手の消毒、用具の消毒なぞを精細に質問いたし、私が通譯に答へるのを聞いては喜んで居りました、處が最後に通譯が「初生兒の眼を開ける器械を持つて居ますか」と尋ねましたので私も不思議な問だと存じ「其樣器械は持ちません」と答へますと、婦人は左も失望したらしく、此産婆を斷つて了はふかと云ふ顏付が見えました。其時私はフト心付て「初生兒の眼は消毒のために分娩當時に五十倍の硝酸銀水を一滴づ〻點眼いたします」と申しか

けますと」硝酸銀と云ふのが分つたと見え通譯も待たずに手を打て大層喜び安心した様子ですが。是は通譯が婦人の質問を解し違へた滑稽で御座いました。夫から臨月まで十日目に一回位づゝ私を呼んで診察いたさせ、分娩の日取りなぞ嚴重に尋ねて居りましたが、幸ひに私の豫定通りに分娩が在りましたので大層私を信用して呉れたのです。此婦人の衛生思想は却々發達したものだと存じました。

▲西洋婦人の分娩時

何國の御婦人でも御產の時の様子に變りは御座いませんが私の手がけました二三の西洋婦人は良人に對して產で遣ると云ふ權利を現はすやうに見えました。御產の時良人が側に居りませんと大層怒ります。而して廣い寢臺の上に良人と共に臥して居り、烈しい陣痛が起りますと良人に犇と取縋り聲を擧て泣きますので良人も矢張一緒に泣き陣痛が去ると互に手巾で涙を拭き合て居ります。若い助手なぞは、之を見まして極り惡がつて居りますが、私は「是が本當の夫婦の情で良人は妻君に對して此位の同情が無ければならぬ、良人が御產を嫌つて家を飛び出すなぞと云ふのは不都合千萬な事ですよ」と助手に申し聞せて居るので御座います。

▲支那婦人の產時の奇習

支那婦人の御產は丁度日本の昔風で坐つて產むので御座います。此習慣を頑固に守つて居りますから、陣痛の微弱の間は私の申す通り横になつて居りますが烈しくなつて參りますと、如何程止ても起上つて困るので御座います。夫ですから支那の妊婦は、私の申す事を守られるか否かを確めなければ御預り致さぬ事に定て居ります。一體彼地から連れて來た老婢達が却却御產に干渉いたすので、折角產婦が従順になつて居りますのを、イザと云ふ場合になると老婢が產婦を起して了ひ誠に迷惑する事が往々あるので御座います。而して胎兒が出ますと老婢が直に產婦の髪の毛(產の

時は髪を解て居ります）を産婦の口中へ押し込み胎盤の下る呪をいたします。日本でも昔は胎盤の下る呪に、髭の古いのや、ぼろ布で拵た汚い匙の柄や、流の隅にある汚いたはしを産婦の口中へ押し込んだり、御亭主が鍋蓋で産婦の腹を壓したりする奇習が御座いましたが、是は汚い物を口中へ押込れますから産婦が嘔吐を催したり、腹を鍋蓋で押れて苦しいはづみにいきみが付て胎盤の下りるのを促したものと見えます。

▲胎盤の下る時間

變事さへ無ければ胎盤が二時間位下りなくとも心配はありません。二時間餘になればクレーデ氏法を以て出して了ひます。又子宮から胎盤が離れて膣内に止つて居る場合には十五分乃至二十分の内に前法で出して了ふ、但し出血のある場合には時間に係はらず出さなければならぬと申す事を講師から聞て居りますので、何時も此規則に從つて處置いたします。先達或邊僻な處へ御産に參りましたが、私を呼んで下さるのが遲かつたので已に兒頭が産道に入つて居り例の灌腸も出來ず倉卒の間に胎兒は出て了いました處、宿便が溜つて居た爲に胎盤が却々下りません。其内に多量の出血が始まりました。私は邊僻の處ですから、萬一の爲に氷塊と赤酒を持參いたしたので、應急の手當が出來腦貧血だけは漸く防ぎ、早速電話を專門醫へかけましたけれども、夜中と云ひ遠方の事で却々御醫者が見えません。産婦の出血は減じながらも未だ止らず、クレーデ氏法（腹部を壓す法）で胎盤を出さうとしても頑固に着いて居つて却つて子宮口が出て參るやうでしたから心配で堪らず。危急の場合已を得ませんから私は嚴重に手を消毒いたし漸の事で胎盤を出して了ひましたので、出血は良い鹽梅に止りました。此時御醫者が來られ道を間違へて深夜二時間も探し廻はられたのだ相で、診察の上色々手當をされました。幸に最大危險を免れましたけれども、産後膀胱に異狀を起して唯今以て惱んで居られるのです。産婆が早く參つて灌腸を致して置けば胎盤に就ての心配なぞは滅多に

ないものと存じます。

▲流產と死兒分娩の豫防

流產や死兒分娩の原因は樣々でありますが、梅毒の關係が隨分あるやうで御座います。一寸申上げ惡い事ですが、少し御自由の利く殿方は兎角此御病氣に罹られる事が多く、又御婦人にも先天的に此御病氣のある方が御座いますので、何れにしても斯る御夫婦は御不幸な次第で御座います。併し御緣あつて御夫婦となられた方々の相方の身元改めを致した處で、唯御夫婦間の感情を害ふばかりで致方のない次第で御座いますから、私は假令御病氣が分つても決して明白に申上げません。夫で私は斯樣方々に惡阻の際から臨月まで續けて善い服藥を御爲せ申しますが、効顯が却々著しく五度流產して六度目が双胎で在つたのに係らず安產して丈夫に御育ちになつたのもある位で御座います此藥は或專門醫の御處法で御座いますが、貧窮の人には處方箋を頂いて原料を藥店で求め廉價に服藥の出來るやうに周旋致して居ります。

▲双胎兒を得て奮發した人

双胎兒を產のは恥のやうに思つて居られる方が多う御座いますが、私の世話いたした西洋婦人なぞは、双胎兒だと良いがと申して之を望んで居りました。西洋では双胎兒を產む位の婦人は極めて强壯な證據となつて居るからで御座いませう。全く双胎兒を產む程の體質なら大に誇つても宜いので、恥どころでは御座いません但双胎兒は早產を豫防し、赤兒の保育に一層の注意を拂ふ事が肝要であります。双胎兒に就て面白い御咄が御座います。小石川に居る極貧の車夫の家內が分娩の際、私が參つた時は最早產み落した處で、赤兒は假死して居ましたので、早速人工呼吸を施して蘇生いたさせましたが、亭主は大層おこつて『他人の家の三疊敷を借りて漸と食や食はずに居るのだから、死で產れて幸ひだと思つたのに、餘計な眞似をされて厄介物を背負込んで了つたと』申して私に喰て掛りまし

た」私は詫るやうにして赤兒の養育を頼んで歸りましたが、其翌年は双胎兒が產れたので亭主がどんなに怒るだらうと存じました處、追々子供の可愛さが分つて參つたものと見え、是迄酒と賭博で始末にゆかなかつた男が、双胎兒を設けてから魂を入れ易へて稼業を勵み、其年の内に狹いながら一軒借家いたすやうになりました。是等が本當の子寶とでも申すべきで御座いませう。

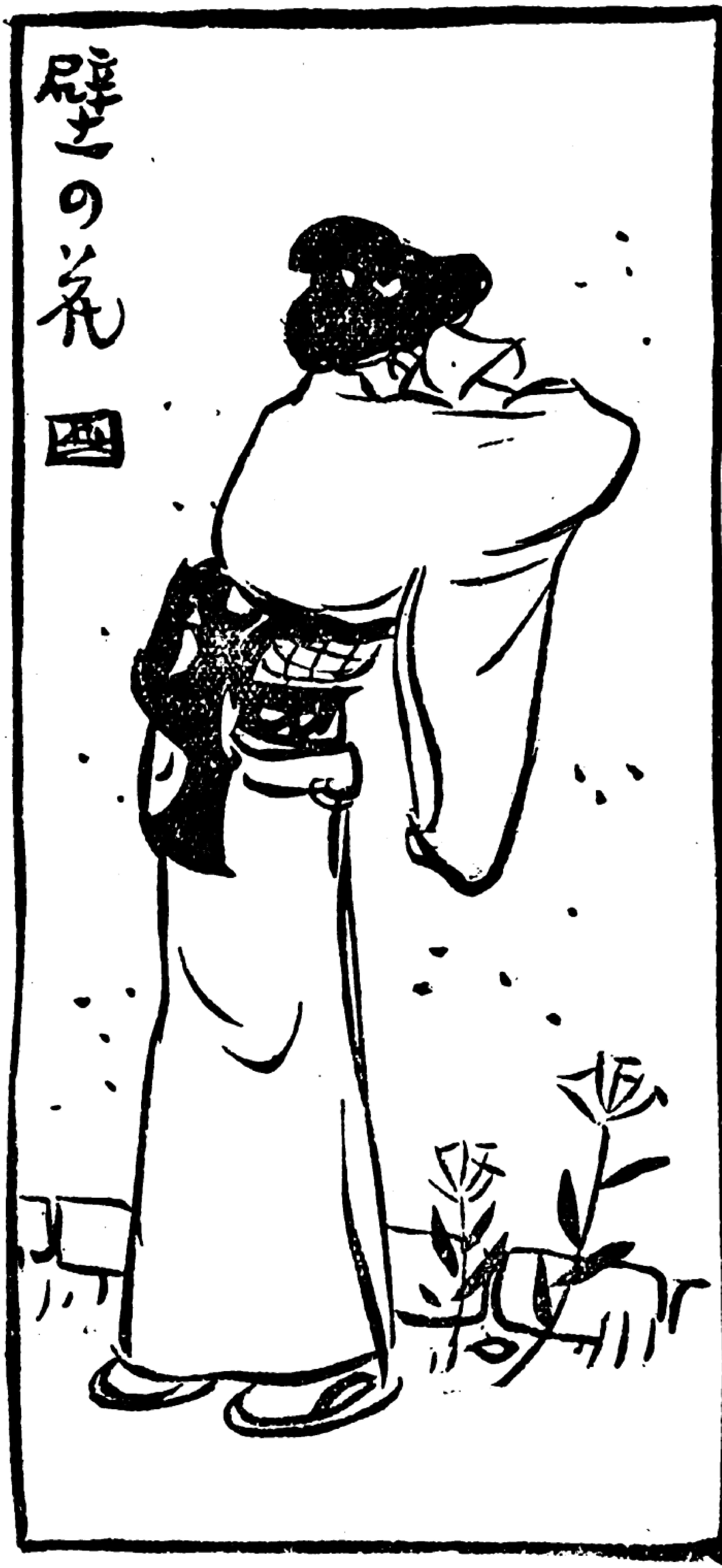
▲妊娠中の運動感心な女優

妊娠中の運動に就ては其方々の習慣に依つて一概に程度を定められませんが、甚しい運動でさへなければ平生の通りで別段障害がないと考へます。私は三崎座へ出勤する染八と申す女優の御產を二回取扱ひましたが、此女優は腕利の立役で且勉强家ですから臨月まで出勤したいが如何かと私に相談致しましたので「平生慣て居る仕事だから臨月まで勤ても宜しからう併し飛だり跳たりする役だけは控へた方が宜いと」申した位で隨分身體を使つて居ましたが、皆安々と分娩いたし子供も極丈夫に育つて居ります。此女優は商賣柄に似合ず老實〳〵しい性質で、子供は皆自分の乳で育て、朝は早く起て良人（俳優）の出勤する世話や子供の世話をいたし、夫から自分の身繕ひを爲て樂屋入を致します、而して裁縫が餘程上手で御座いまして、家族の衣類は決して人手にかけません。良人は商賣柄で折々艶聞もあるのですが、染八は一向頓着もせず。勤を勵む事を專一に仕向けて居る處など誠に確乎としたもので御座います。斯樣風で始終快活に暮して居る上に、よく產婆の申す衛生法を守りますから、御產も輕く、御產後の經過も非常に良いのであらうと存じます。

▲必ず二人の助手を連れて往く

私は先樣の御身分に係らず、どんな御家へでも御產の時には助手を二人位連れて參りますので、西尾は御大層だとか、產婦を弟子の御双紙に使ふとか仰やる御方もある相で御座います。私の宅には免狀を持つた

實地見習生が平均十人位居りますから、交る〳〵連れて出なければなりませんので、御双紙にすると仰られても致方のない次第で御座いますが、御產の時は一人でも手の多い方が萬事に行屆き且其御家の女中を煩すより助手を使います方が私の方にも御產婦の爲にも餘程利益があるので御座いますから、是は先づ兩爲と申して宜しからうと存じます。夫から弟子にも禮を心付なければならぬと思召す方があるか知れませんが、實際弟子の方から少々の御禮金を先様へ差出しましても手傳はせて頂きたいので御座います。私は產者、分娩具一切產湯の薪まで持參するやうな貧家の御產でも必らず助手を二人連れて出ますので御座います。



秋の八千草



避暑がへり

秋　雨

△夏の葉山

何れにあるも夏は夏なり、汗の流るゝと、樹に蟬しぐれするとは天下到る所の夏の產物に候得ど、日頃、都會の煤煙を吸ひ、かの轣轆たる音に老人子供を威しつけ得候自働車の音を耳にする都人士が、偶、忙中の閑日月を見出て、時に海濱に半日の太公望となり、折り／＼山泉に明治の膝栗毛を催すは必ずしも彼の宏壯なる別墅に札ビラ切つて質朴なる村人を軟化し、明媚なる自然美を俗化するの徒を羨やむにあらで、むしろ午睡の暇を惜しむの雅人がそこに清淨なるオゾンの氣を吸ひ、かしこに綠蔭の翠滴を手掬ぶの快を知れるものゝ擧と存候。

新橋驛より二時間餘り、逗子停車場に下車すれば車も、馬車も待設居り候、即ち十五錢の賃を投ぐれば腕車は葉山の入口日蔭迄送りくれ候、去り乍ら風光を以て鳴る森戶迄は、まだ五六町の上り道に候。行く／＼田越の川風に先づ吾が袖を重れ、誰が家ぞ繞ひめぐらせし垣づたひ、嫉ましき弦の琴の音に聚する爪の主をしのび、逗子と葉山の境なる物凄き迄道くらき切通しの坂を過る頃は、家無うして只松の聲、波の遠音の耳を掠むるのみ。



島に於て寂しさの餘り、ふと「早く歸つて頂戴な」の名文句を思ひうかべ初むらしく瞼の重うなるを覺ゆ、これ等みな何れか思出の種ならず候可き、此の切通しを越ゆれば即ち葉山の天地にて候。

△風景の葉山

湘南の風光一として瞳の奥に映ぜざるものなきが中に、取り別けて山水の美の兼備なる點に於て、比較的他の勝地よりも不便なるより知名の人士多く從て俗客の餘り入り込まざる點に於て、まづは理想的の勝地と指を屈し申す可きか。されば名物、古蹟、等特殊の葉山としては御紹介す可きものはなく候得ど、風景の葉山としては駄辨を弄して稱するに吝かならず候。

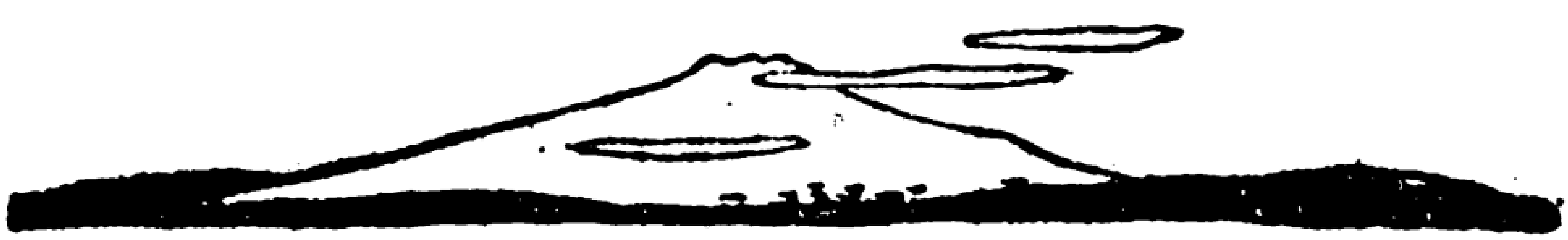
見渡す一眸限りなき長汀曲浦、はるかに雲の間におぼろなる有波の山影をのぞみ、眞鶴、大磯、江のしま、の翠巒は七里が濱の濱を促がして逗子を洗ひ、やがて葉山の沿岸に訪れ申候。遠來の濱を迎えて渚の松は、千年のみどりの笑を湛へて美くしう答へ候もあれば、遣る方なき悶々の情を吐露して憤激奔騰するもあり、或は朝に夕に染め上げし水浴の子等が鹽ふく背を見せてるやまやと鳴る砂礫もあり、狀は一ならず候得共、他所の濱のごとく穢しからぬと、水の澄めるは少なからず快を覺え候。

△浴　場

浴場は三ヶ所位になり居り候得ば、大磯などの如く混雑せず、加ふるに漁家の子の濱にあることも稀に候得ば不潔なることは毫もこれなく候、從て浴場の設備とては別にこれなく、各別莊より直つる濱に參蓆、葭簀などにてお揃の脫衣小屋が立ち居る丈けに候。旅館日蔭の前と、同館やの前なる森戸海岸と、長者ヶ崎の岩かげと位に候、しかし最も便利なるは森戸に候可し、最もうるはしきは長者ヶ崎に候可く、最も氣の置けぬは日蔭の海岸なる可しと存じ候。海に飽きて麻裏を森戸明神に移さば、松に漉されたる潮風冷たう頰を撫り、岩に膝うちかけて千貫松を凝視すれば鶴の如く、龜の如き形して、俚俗、傳ふる所の往時賴朝公千貫を以て此の森を購ふ云々の古事を示し居り候。

△人情風俗

立ち入つてさぐる程の風俗もこれなく、土地の人は存外溫和なるものに候、親切なるは田舍人のなべての性に候得ど氣のあらきも又漁家の通例に候を、此處はシームと靜まり返つて路傍に裸體で遊ぶ子等は一人も見當らず候。夕陽富士のうしろに隱るゝ頃、波うち際に下り立ちて愛誦の詩を微吟すれば、何時の間に、子を背負ひたるやさし氣の姬、見もしらぬに、頭を下げてゆくなんど、づるき都人などの思ひも寄らぬ處に候。さり乍ら別莊を以て埋まれたる土地、却て質朴なる土地の人を見ること少なく



矢張り洒阿然たる扉蝶、肩で風切る都人の多きは黃金の世、是非もなき次第と觀じ申候えど町並も人も野鄙なることは無論これなく、上品といふ點よりは湘南一帶のうち當地を第一と存じ候。ことには、

御用邸のしつらへもあることなれば、惠みの露にうるほふ旦人、かくある可きは無論の事と推せられ候。

旅館も前述の二軒が最も聞えたるものにして費用も暴利は貪らず候。かつ、旅館としてのみにあらず料理店をも兼ね居ることなれば、此の點に於ての不便は感ぜざるのみならず、風味もさまでわるくはなく候。

△濱邊に見る避暑客

何故か大人の遊泳は女子に於ては絕無に見うけ候。實になりたくなきは、俗にいふ貴婦人、とり度くなきは年に候よ。潑溂として跳ねまはる十四五歲の令孃に在つて始めて海濱の生活の甲斐はあるなれ、あとは、見榮坊のしくじりに過ぎず候。

△町の夕に見る避暑客

落日の影うすれて、軒每に岐阜提灯のほのめく頃一と筋道な辿り行けば、某別莊よりぞろり〳〵と出で來る七八人、と思へば琵琶歌微吟する兵兒二三人、夕暮れの森戸橋上は欄干人なもて

鈴なりの有樣に候。

さろほどに彼方の庭園、此方の軒より一發十八錢の花火が連發せられ候。しかし野次馬のなき所なれば、花火も張合拔のしたる樣して何處の闇にか消え去り申候。

それよりは遙かに江のしまの夜を見ろ方、いかに美くしう候はん。惠比壽屋の電氣は明らかにこゝ迄光りを見せ申候、其他平塚茅ヶ崎大磯國府津あたり漁火點々、微醺を帶びて滄浪と四つ手を投ぐろ人を思はしめ候。

△需　要　品

一寸したろものならば間にあはせ得ろ店も候へど槪してそれらしき處もなく候、倶樂部といふも候へど、それは名にのみ、これ丈けの土地ならば一奮發して景氣のよき店にても開かばと思はれ候ひしが如何のものにや。

魚類はおほかた潑溂として生けろものなれば、これは何不足もなく候。返つてお魚に飽きろ位に候、殊に海老は名物とて、好きな人ならば三度食膳に上すことを得候。しかし存外野菜は少なき處なるが如く候。

△よそに見ぬこと

は、遊戲場のなき、美人が多く見うくろ、のそれ。



女髪結となりて夫を醫師に仕上げし婦人

婦人記者

埼玉縣小川町に、此頃花々しく開業醫の披露をした松本馬次郎(四十)と云ふ人があります。早くから東京へ出て、當時本郷にあつた濟生學舍に入り、良い成績で卒業されたのですが、愈々開業醫の試驗となると、兎角運が惡くて毎度不合格に終り、今年五月免許狀を得らるゝ迄に、學説に於て六回、實地に於て八回と云ふ度々の失敗を重ねられたさうであります。此間屈せず撓まず奮鬪を續けられたのは誠に感心な事ですが、玆に尙ほ感心致しますのは、氏の令室の長澤つね子と云ふ人で御座います。

何試驗に拘らず此頃の樣に受驗者が多くなつては、物が出來るからと言つても必ずしも、試驗が通るものとは限りません。松本氏も其爲に右の如く度々失敗を續けられたので御座いませうが、彼れこれする中に最う學資が續かなくなつて參り、止むを得ず中途で一時日本橋區龜島町の醫師橋爪助信氏（六十二）方へ身を寄せられました。此時に恰度つね子も、素より餘裕のない身の上で、矢張り同家に奉公をして居たものですから、間もなく橋本氏の媒酌で兩人はこゝに夫婦の約束を致しました、之れは今より七年前の事で、つね子が二十歳の年で御座います。

扨て松本氏は恩人橋爪氏に對して必ず醫師になつて見せますと誓ひ、つね子も亦屹度妾が學資を續けて見せますと誓つて共に同家を出で、芝區愛宕下町の或る家の二階を借りて一緒に住居ひましたが、何分少しの貯蓄も無い事ですから、先づ明くる日からの活計に困ると云ふ樣な次第。そこでつね子はまだ經驗も無い女髪結の仕事をはじめて、色々苦勞をし乍ら夫の修業を助けて今日に至つたので、今度の松本氏の成功は全くつね子の内助の功によると迄言はれて居ります。ことに長き年月の中には、良人の度々の不合格に、親類等

より、迚も末の見込みがないから今の中に別れよなどと、數々勸告もあつたさうですけれども、更に應ずる氣色もなく、益々夫を勵まして遂に此の成績を見られたのだと申しますが、實にゆかしい婦人ではありませんか。

つね子さんの現今の住居は、同じ愛宕下町の一丁目にありますが、二階住ひの昔と變つて、今は既に一家を構へ、四人の梳手さへ抱えて、仕事はなか／＼繁昌して居ます。と言つても職業柄家は勿論立派ではありません。愛宕下町の電車道と高架鐵道の中間位にあつてたゞあの界隈によく見受ける低い二階造の古るぼけた妙な長屋の一區劃に過ぎません。

「女髪結」と筆太に書いて、尚ほ其下に「朝五時より夜十時迄」と割註をした看板の下をくゞつて格子戸を開けると、室の眞中に、直ぐ鼻の先のつかへさうな處から奥の方へ、各々相當の間を置いて、ずらりと四ツばかりの大きな鏡臺が竝べられて、殆んど家中を占めてゐるのは、此の職業の家にはありがちの事ながら、一寸異樣に見えます。

「むさくるしい處へ能うこそ御いで下さいました」と挨拶されたのは本人のつね子さんで、御仕事最中と見え、白地小格子縞の單衣に巾狹の帶を胸高に締めて、如何にも甲斐／＼しき姿。しかもものごし何となくしとやかで、此の社會の婦人には一寸見られない氣品があります。

年取つた婦人の客が一人、鏡臺の前へ坐つて梳手の小女に髪を取らせ乍ら、「お師匠さんも隨分苦勞をしたわね」と言ふのを他所に聞き乍ら、記者と話して居たつね子さんは、「もう教育も何もありませんし、特にこんな職業ですから迚もお爲になる事はありませんが」と謙遜し乍ら色々と應接を續けられました。

「結婚したのは最う七年程前になりますが、其頃主人は前期の試驗だけは兎も角も取つて居りました。それで後期の方をも何うか早く取つて呉れる樣にと思つて、結婚後早速此の愛宕下町へ移つてこんな仕事を始めたのですが、此の邊には唯の一人も知人があるでも

なく、ことに最初は他人のお二階を一室借りてやりました樣な次第ですから、お客と申してもほんの一日に一人か二人、それもあれば上々の方で、全く無い日が多う御座いましたから、隨分心細い事でした」

「ハイ其樣云ふ事が彼れ是れ半年位は續いた樣に覺えて居ります。――七月に其處で始めて、翌年の二月に只今の此の家へ引き移つたので御座いますが、此處へ移つた頃はぼつ〳〵お客樣も來て下さる樣になりました。」

「何しろ一向經驗がなくて始めた事ですから、今でも上手では御座いませんが、ことに其頃は銀杏返しと申しても、たゞ毛を束つてちよこつと先の方を曲げて置くと云ふ位のをかしな仕事を致しましたので、思へばほんとに噴き出しさうで御座います。」

「それでも何うか斯うか今日迄支へて來られたのは全く皆樣が引立てゝ下すつたからで御座います。今此處に居らつしやる方なども最初からいらして下さるのですが、もう何れだけ御心配をしていたゞいたか知れません。」

「お客樣ですか。……くらう人では烏森の人達、素人では此のぐるりの人達ですが、ぐるりと言つても少し遠方の方が多い樣で御座います。何分私はちつとも外へ出ませんから近所には少しも知り合の無いのにお客樣は皆抱えてある子供達が馴れて行く先々で親しくなつて來て下さるのですから、自然遠方の方が多いので御座います。」

「私の外へ出ない事を言つたら、それは隨分ひどいので御座います。直き此の近所に日比谷公園が出來たと言ひましても、まだろく〳〵見た事もありませんし、お湯へ行くのでも夜遲くこそ〳〵と出て行きますから、近所の人達はあそこの家の人は跛足か何かだらうと言つてゐると云ふ風評さへ聞きました。」

「いゝえ、別段深い理由があつて出ないのではありません。一つは私が平常餘り氣分がすぐれないからでもありますが、何しろ主人は此の職業を大變嫌つて居りましたから私も成るべくまあ小さくなつて居や

うと思ひまして……。」

「ハイ主人は随分氣にして居りました。夏の暑い暑い日でも、仕事してゐるのが外から見えるからと言つては、障子をすつかり立て締めて仕舞ふんですから、此處に居る子供達は是迄随分苦しめられた方で御座います、又友達などが時々遊びにいらしても、決して此室を通さないで、皆裏から二階へ上つていたゞきました。ほんとに嫌やだつたんで御座いませうね。」

「子供達は子供達で一向無頓着ですから、外へ行つては妙な俗謠を敎はつて來ては家で仕事をし乍ら時々歌ふのですが、それが又大變に嫌ひで、何時も叱られて居りました。」

「ハア、それはもう始終苦しい事ばかりでしたが、さて恁うして試驗が通つて見ると、もう何も彼も忘れてしまひました。……いゝえ全く皆樣のお蔭で御座います」

「エヽ、身體は壯健な方ですから、能く勉强は致しました。午後の五時頃から夜九時頃迄學校へ參ります外は、滅多に外へは出掛けませず、殆んど書物を讀み通しで、夜は十二時前に決して寢んだ事はありません。」

「そして一度試驗中にインフルインザに罹つた事がありまして、熱が出て非常に苦しみましたが、それでも推して參りました。其時の熱度が三十九度で、私共なら身體がひよろ〳〵して迚も起きては居られません。主人も今日ばかりは全くつらいと申して居ましたのを、ナニ試驗ぢやありませんか、そんな事位が何んでせう、試驗の爲に斃れたら其れも本望ぢやありませんか、などゝ勝手な事を申して居た事ですが、此時ばかりは實際氣の毒に思ひました。」

「しかし試驗と云ふものは全く分らないもので御座いますね、恁んなに勉强して、今度こそは必ず及第に違ひないと言つて居たのが不可なかつたり、かと思ふと今年の樣に何うも不可ないと言つて居たのが案外善かつたりするんですもの……。今年は次の日は非常に善かつたさうですけれども、最初の日が不可なかつたから、先づ見込は無いと言つて居ましたので成績が發

表されて及第だつたと聞きましたけれども、私は例年の失敗ですからそんな氣休めを言つてもいけないと言つて決して眞實にはしませんでした。けれども、乾度嘘僞ではないから自分と一緒に來て見よと主人が申しますから、それぢやと言つて尾いて文部省へ參りますと、成程そこへ確かに書き出してありました。全く意外で御座いました。』



「其日には主人の知人も丁度其處へ來て居られましたが、家内を携れて免狀を貰ひに來るやつがあるものかつて大變に笑はれました。』

「ハイ、開業したのは主人の郷里で御座います。私もいづれ參る積りで御座いますが、何分此處にある子供達がまだ一人前になりませんから、此の人達が獨り立ちのできる迄今暫く此の儘で居たいと思ひまして……。』

秋のおとづれ

蟲の音

△蟋蟀（きり〴〵す）　いなごに似（に）て色黑く翅あり角（つの）あり立秋後夜鳴（よるな）く其聲（そのこゑ）つゞれさせと聞（きこ）ゆ。

△竈馬（いとゞ）　きり〴〵すに似て髭足長（なが）くせいも高（たか）し竈（かまど）のあたり抔に居（を）るものこの聲（こゑ）ころゝんといふが如く淸美（せいび）にして、松蟲に次（つ）ぐ。

△松蟲（まつむし）　又（また）きり〴〵すの類（るゐ）にして聲（こゑ）甚だ優美（いうび）なり、夜羽を振て鳴（な）く其聲（こゑ）ころりん、ころりんといふがごとし歌（うた）には人を待つによせて詠（よ）むもの多し。

△鈴蟲（すゞむし）　是（こ）れも又（また）蟋蟀の類（るゐ）松蟲に似て色眞黑く首小く尻大きく聲（こゑさ）冴えてりゝん、りゝんといひて恰も鈴（すゞ）をふるがごとし優美にして松蟲（まつむし）に劣（いと）らず、これも神樂（かぐら）の鈴、驛路の鈴（すゞ）などによせていふもの多（おほ）し。

△轡蟲（くつわむし）　促織（はたおり）の類にして翅（ふねあを）青く腹黃なり其の聲（こゑ）恰も馬の轡を操（とる）ふに似（に）たり。

庭草の露のかすそふゆふくれに
　夜深き蟲の聲ぞ悲しき　　鎌倉右大臣

山さとは秋やちとせのまさるらん　　家隆



れのひせしのゝ松蟲の聲
露はおき風は身にしむ夕くれを
　なのが時にやむしの鳴らん　　俊成
籠のうちに聞しにもにす鈴蟲の
　なのがすむ野の夕くれの聲　　通村
我はかりうき夕かとおもひしを
　暮てそむしも鳴初にける　　景樹
ふり出て鳴蟲の音やおのが名の
　すゞろに秋の哀そふらん　　千蔭
こほろきの鳴くや縣の我宿に
　月かけ淸し訪人もかな　　眞淵
木幡山夕霧立ぬしかはあれど
　馬社あるらし轡蟲のなく　　契沖

寒けれど穴にも鳴かすきり〴〵す　　丈草
寺に寢て線の高さやきり〴〵す　　二柳
明る夜やまた長かれど鳴いとゞ　　諸九
松蟲とあとまきになる野かな　　車來
松蟲や夜毎に聲をあらためる　　葛三
さはがしく聞えて遠し轡蟲　　雄讃
聞なれて鳴れば淋し轡蟲　　闌鳥
鈴蟲の鳴そろひたる千草哉　　桃妖
鈴蟲のなくやころ〳〵露の玉　　曉臺
鈴蟲の一つさへるや蟲の中　　巣枝

荷鋤題秋
一楊風涼如在舟　時蟲啾唧暫無休　水痕山影渾岑寂　月落園

秋草

萩は其枝ぶりなよくとして幽婉の姿に富み朝露夕露はた虫の音この花ありて始めて無限の情趣を覚ゆるなり桔梗、女郎花、芒、刈萱、藤袴、萩を合せて秋の七草といふ。

神風の伊勢の濱荻折ふせて　萬葉
旅ねやすらんあらき濱べに

萩の葉にやとりをかへつ秋くれば　永好
風を風の古里にして

我宿のものなりながら萩の葉の　中文
音こそ秋の便なりけれ

一村の萩の盛りに埋もれて　景樹
垣根の井戸は汲れざりけり

露とだにならん隙なくふる雨に　景樹
濡るゝはかりの秋萩のはな

我宿の垣根あれぬとおもひしに　直好
萩は花こそ咲まさりけり

秋風の松をしらふる度毎に　直好
岡への尾はな袖かへすなり

花薄まねく交野をわけくて　有功
天の川原に秋はきにけり

女郎花匂へる秋の武蔵野は　貫之
常よりも猶むつましきかな

我ならで人に逢ひ見ぬ女郎花　景樹



生るはあれし垣根なれども
白露や心をくらんをみなへし　顯輔
色めく野へに人かよふとて
露にふし風になびきてをみなへし　通村
身を心ともせぬすがたかな
心せよ露の光のかゝるかやの　通村
末葉みたるゝ野べの秋風

魚つりの刀さしけり萩の露　闌更
夜着かりに船から來るや荻の聲　樗室
刈とりてもとのみたるゝすゝき哉　几董
高ければ高い風吹くすゝき哉　二柳
鼻の上をたゞしまれけり女郎花　涼菟
夜あらしをつぼむ桔梗の莟哉　露川
壺中に切ていけたる桔梗かな　蒼虬
こぼるゝにつけてわりなし萩の露　鬼貫
白萩やいざよひの闇をちり初る　青蘿
藤袴屏風の端にも見し花か　道彦
片枝を上て通りぬ萩の中　白雪女
痩てゐても寺はうれしや萩の月　鷺秋
こぼれれば見ごたへもせず萩の花　樗堂
馬洗ふ淵に散るや萩の花　歌窓

秋花七種錦成叢　恰似仙宮蕋蘂宮　只有鶏冠在員外　出墻壁立背西風

月百姿

三日月　辛ふじて見得らるばかりの纖細なる月にて夕月夜ともいふ。

山の端にあかす入ぬる夕月夜
　いつ有明にならんとすらん　公實

今しはしおもかげ殘れ三日月の
　ほのかにみゆる夕くれの空　大納言典侍

待宵　十五日の前夜明日の明月を待つこゝろにて宴を張るをいふ。

月かけは山の端出づる宵よりも
　ふけゆく空ぞてりまさりける　大藏卿長房

望月　今宵仲秋の月に限り一年一度の明月なり。

わきて猶今宵名高く見えてけり
　秋もなかばの望月のかけ　政長

いつはあれど今宵最中の秋の月
　わきてよにゝぬ影のさやけさ　淳房

十六夜月　いざよいは休らふ意にて日沒後しばしありて出づる故に斯くいふ。

またしても見しくれことのならはしに
　更ぬとおもふ十六夜の月　後柏原院

立待月　十七日夜立休ふて山の端を出づる月をいふ。

うき雲の猶きえのこる山の端に
　ほのめくかけや立待の月　西行

居待月　十八日の月、坐して待つといふ意なり。

まとゐして待なん月にからにしき
　たゝまく惜しき今夜ならまし　雅章



臥待月　十九日の月なり、月の出は次第におそくなり臥して待つといふ意なり。

更過るほとはあらしと敷妙の
　枕とらてやふし待の月　後土御門院

廿日月　廿日に見る月なり。

住よしの岸なられとも山の端に
　はつかの月を待ぞ久しき　雅世

十三夜　陰曆九月十三日の月にして秋深く氣冷へ月色いよいよ寂寥の趣あり。

風も猶浮雲はらへ秋の月
　ふたゝひすめる名を思ふ世に　通村

山月　高嶺の月、或は山の端を離れて登る月の趣などいろいろあり。

天津空きよき夕の秋風に
　山の端のぼる月を見る哉　前大政大臣

尋ねくる人も有なはみわの山
　いかに待みん秋のよの月　通村

野月　武藏野の如き茫々たる草原の中にて澄みさゆる月を見るなど。

見るまゝに心ぞうつる秋萩の
　花野の露にやとる月かけ　雅徑


せみ
くも
あぶ
はち
とんぼ
かたつむり
ねたろ
かねたたき
いなご

をきわたす露も果なきむさし野の
　　草はみながら月ぞうつろふ　　爲量

●田月●

月にやはほすともほさん白露の
　　をくての小田の秋のをしれは　　爲家

●河月●

久方のあまてる月のかつら河
　　秋のこよひの名に流れつゝ　　山階入道

●江月●

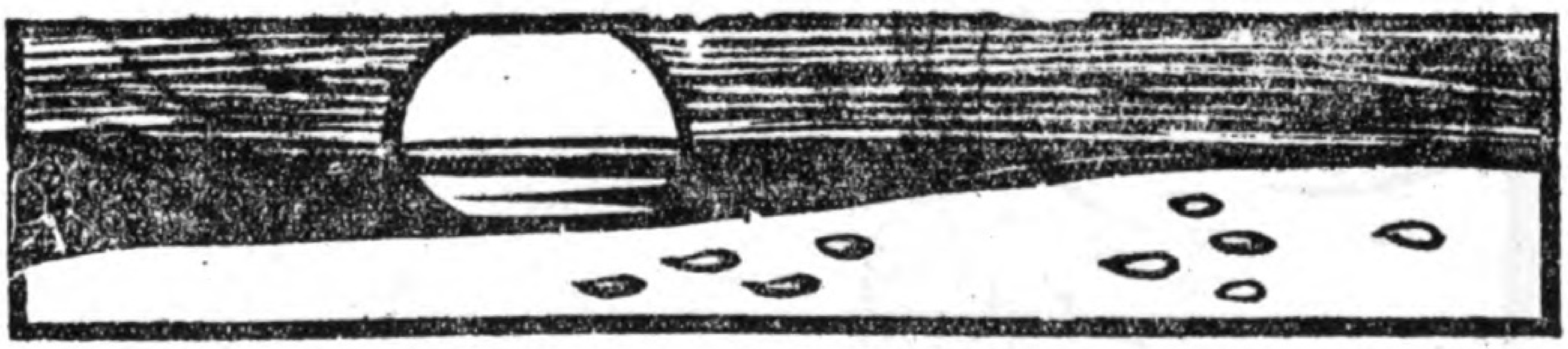
くもりなき影もかはらす昔みし
　　まゝの入江の秋のよの月　　爲隆

●海邊月●

海原やよせ來てかへる白波に
　　光そへたる月のかけ哉　　運村

月の宴

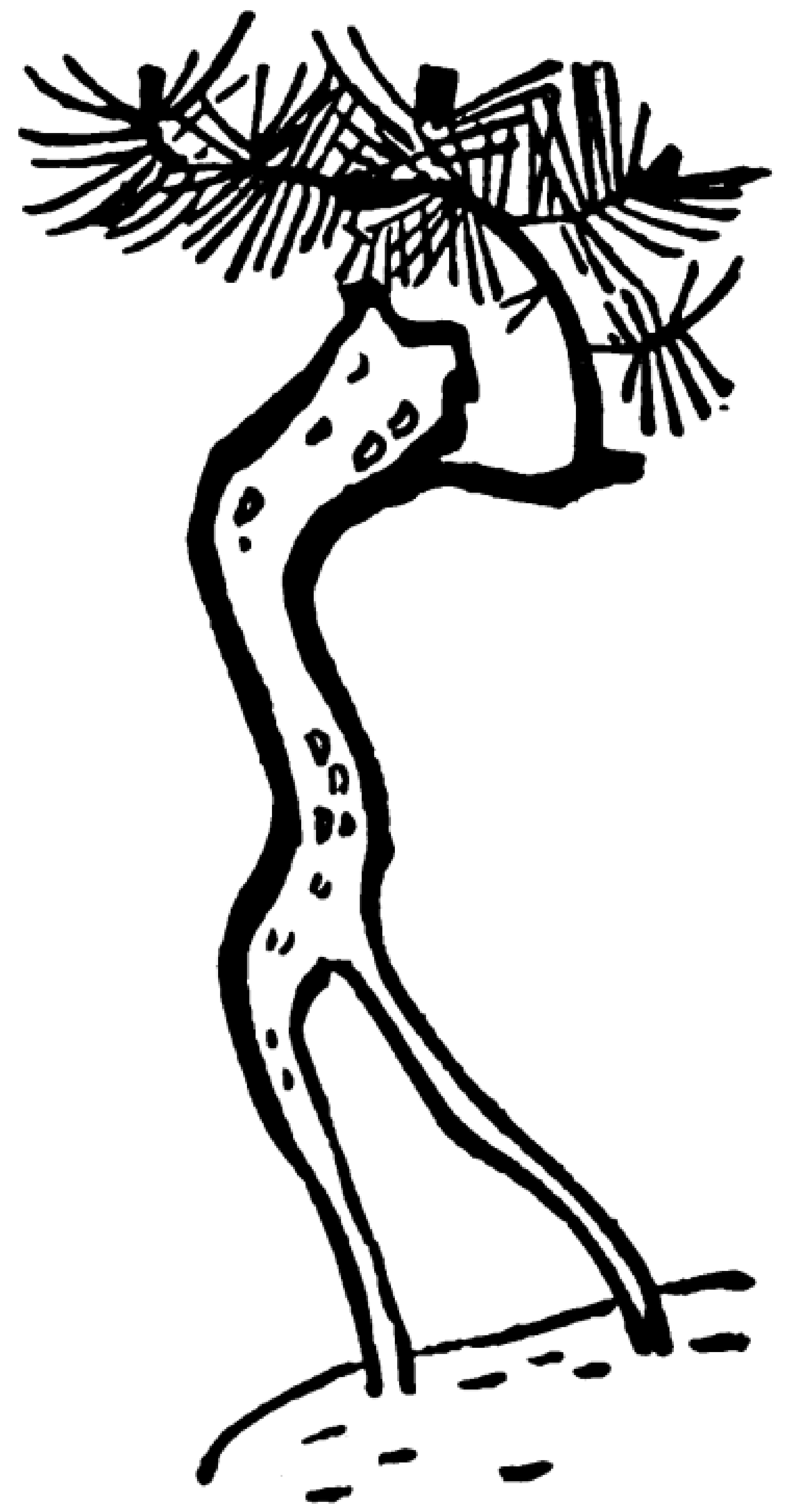
三日月、望の月、伏待月、朧月、有明の月など見る人の心によりて、いづれあはれならぬはなけれど、古來春月の朧なるよりも秋の月の澄みわたれるを賞し、和漢とも中秋即ち陰暦八月十五日を一年の名月と見立てゝ、歌人騒客の吟咏となりしなり。



十五夜は即ち秋九十日間の最中の月にして夕の月、三五夜の月、中秋の月など詩歌に吟咏せるもの多し、民間にはこの夜月見團子をつくり、枝豆、栗、柿、などを供へ瓶に薄及び秋草花を挿し、御酒をかざりて月前に供し老若男女互に物語して興じ遊ぶいと奥ゆかしきものなり。

月待といふは二十六夜待の事にして、俗説に陰暦七月二十六夜の月の出には三尊の彌陀現はるといひ傳へ其靈光を拜まんとて月待するをいふ、東京にては今も猶各所の高臺にて今夜月待するものあり。

蓋し此夜の月は下弦の弓張月の、横に平に出づるものにて左右の角の光まづ雲表に映る、其光ちら〳〵と見ゆるや否や月直ちに顯はれ登る此間早き事眞に電光石火の如く認むるもの稀なり、要するに月の形凹なれば雲の表に二條の光線を望みて瞬時奇觀を呈するなり、これ必らずしも二十六夜に限らず下弦の月の出には多く見るべし。三尊の彌陀の顯はるゝなどいふは元より佛者の捏造せる虚説なれども、自然の美觀なればこれを拜まんとて待つも又風流心の一端なるべし。



避暑地としての小田原

花香

○

東海道列車を國府津に捨てゝ更に西すること二里許り、數年前まではおなじみの鐵道唱歌にも國府津降りれば馬車ありと、酒匂小田原とほからずと歌はれた其の路を、今はすでに電車が通つて居りますから三十分餘りで小田原に着します。此處こそ北條氏以來世に知られたる小田原城の所在地、また大久保加賀守が十萬石の城下で、今は湘南勝地の一として、また箱根、熱海湯ヶ原などに赴く人々の通過しげきを以て人口僅か一萬の漁村も今はなか／＼の繁昌を呈して居ります。

西に連るは足柄の山々、東は酒匂の磯に續き、南は名に負ふ相模灘を隔てゝ伊豆の大島の影をのぞむ其の一帶の海濱は名さへをかしき御幸の濱。

大磯鎌倉等の如く海水浴の設備こそ行屆いては居りませんけれど、神代ながらのそのまゝに、松の老木の緑濃き御幸の濱の白き砂を、汐煙り立てゝ丈餘の浪の洗ふ壯觀さは、いかなる名畫も及ぶまじく、いかなる詩人もうたふことは叶ひますまい。

小田原城はいまも猶町の西北隅に、お濠の水さへ蒼蒼と昔のまゝにそびえ立つて、畏くも常宮昌子内親王周宮房子内親王兩殿下の御用邸と遊ばされ冬の寒さを避け給ひ夏は暑さを此城にお忘れ遊ばしたのも幾とせかで御座いました。さればこそお手づから御撮影遊ばした御寫眞の中に、とりわけ小田原の怒濤は御秀逸のよしに承りましたのです。

また閑院宮御別邸をはじめとして、山縣公、黑田、

佐々木雨邸、黒木伯、清浦子、野村子など貴顯紳士の別莊も少からず伊藤公もまた此の地をいたく愛せられ松の琴きくみゆきの濱邊に宏壯、華麗なる建築をされ滄浪閣と命名して美しき風光を樂しましたのでしたが後また大磯にも滄浪閣を設けられまして今は持主は代つて居ります。

○

人氣はどうしても元が漁村の事なのであらいのは勿論で御座います。澁紙よろしくの肌色を惜しげもなくあらはした漁士どもが、魚市場に集つて話し合ふのを聞きますとはじめての人は喧嘩とまちがへる位で、それらの女房達が子供に物を云ふにしても叱りとばすと云つたら好いか、どなりつけるといふのであるか迚もきかれたものでは御座いません。

そして濱はいづこも同じ習ひの、夏になりますと大抵はあかゞね色の裸體のまゝ、女どもでもゆもじ一つか肌ぬぎで、それで井戸端會議に出席もすれば金棒引いて歩きもする、誠に不作法千萬なもので御座いますけれどもまた其の内にも漁師道徳ともいふ可き一種の制裁が有りましていかに荒々しい者達でもめつたに爭ふことも無く殊に信仰心の厚いことは思ひの外で御座います。もしそれ日の出前の散歩がへり、漁士町の一角に暫く佇むで居りましたら多くの漁師や女房達、またいとけない子供までが煙りののぼる線香を持つてはだしで急ぐのを見受けませうこれ等はいづれももよりもよりの神佛に朝の信心に出かけるのです。素裸體のまゝみ佛の前に額づいて、一心に祈願をこめるなど濱ならねば見られぬ圖で御座いませう。

また裏町などを通りますと直ぐ目に付くのは家毎に軒毎に、廂の下に赤い紙を張りてそれに墨くろ〴〵と鎭西八郎爲朝の御宿とかいてあることでこれはほうそう除けのおまじないとて他の地でもすることですが土地がらだけに征夷大將軍源頼朝御本陣などはなかなか振るつて居りませう。

これはかどなみと申すほどでは御座いませんがさて何のおまじなひになりますやら……

○最初にも申し述べました如く此の町は近年非常に開けて參りましたし、また今年は歴史地理學會の講演會が開催されましたので各地より入込む人多く、各旅店、貸別莊などいづれも滿員客止めの盛況で御座います從つて都の風は限なく吹いて大抵の品物には不自由をいたしません、西洋小間物化粧品、書籍雜誌、洋食與服物、其他何でも東京仕入れでなほ御叮嚀にもシヤパン商會のロシヤパン賣りまで朝に夕にパン〳〵とあの不調子なうり聲



を張り上げてとほる位で御座います。

けれど土地の者でないと見てとるや定價の二割增ぐらゐにふきかけるのは誠に惡い風習でこれは是非改良せねば土地の振、不振にもかゝはる事と思ひますが、矢張り人氣の惡いとでも申すのでせうか。

また此の地に參つたものはせまい町の兩側が殆ど藝者屋だらけなのにも驚くことで御座いませう。

ふたば、丸梅本などゝ粹な家號の御神燈をぶらさげた家の中に棲息するその人數はこの小田原だけで常に八九十人、時には百人の上を越すこともあるので御座います、け

れどうしても野暮ですね、御當人達はスッカリ東京を眞似たつもりでも紫繻子の帯側がみえたりなんぞお里が知れていやになります、一寸夜など町へ出ますと派手な浴衣に半巾帯、團扇片手にだらしない姿でぶら付く女の多いのに驚かれませうこれ等がいま云ふ藝者なのである人が「東京のおさんどんの樣な女」なんて云はれましたがまさか……新橋邊の落武者も二三人は居る樣です。

次に多いのは料理店でこれは東京から料理人を呼ぶ家もあり相當の品は頂かれます。

○

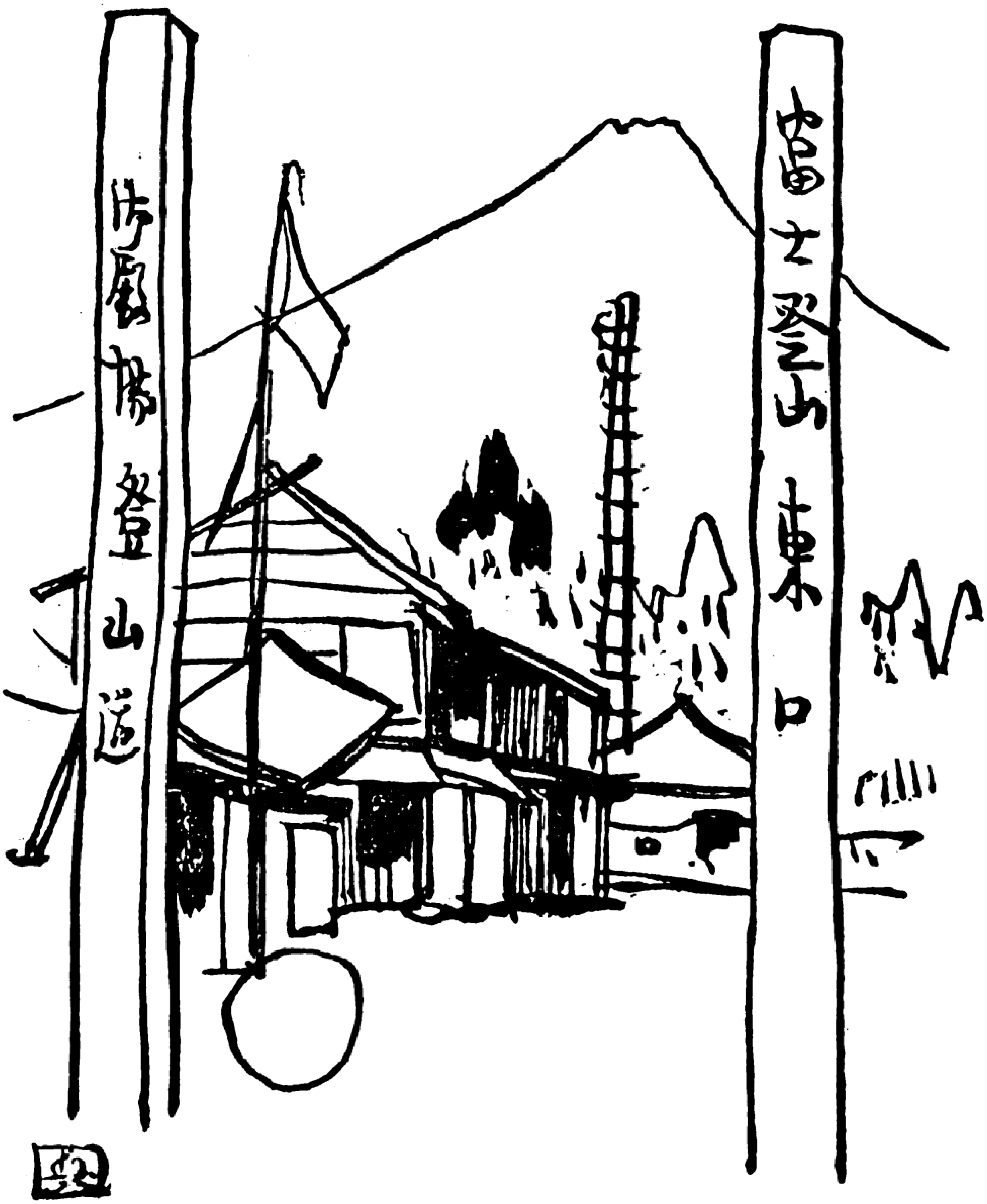
朝は濱にあじの山を築き夕の漁ではまたまぐろ、さはら、むつ黒鯛などゝ市場にかゝる魚の數は少なからぬ額で御座いますけれど、それ等の多くは箱根、熱海湯ヶ原、東京などへ直ちに氷詰めとして送られますので非常に安價に得るといふことはできません、まづまぐろの刺身一人前十二三錢くらゐ、その代り量が多い樣に思はれます。鰺、かます等の小魚は朝の網で上りますと小賣した殘りは皆開きにして主に東京に送り出します。ですから今日東京の御臺處の片隅で、女中達のお茶漬のお菜になる干物は、昨日湘南の海から上つたものなので御座います。

あぢ三寸位のもの十尾	五錢より七錢ぐらひ
むつ一尺位のもの一尾	三十錢ぐらゐ
さはら同じく	四十錢ぐらゐ
かつを同じく	二十錢ぐらゐ
かます五寸位のもの十尾	二十錢ぐらゐ

以上に記しましたのは大抵毎日漁のある魚の普通の價で、不漁の時とかまたは大漁のあつた折などには變化のあるのは云ふまでも御座いません。

今の今まで四十錢位したものが舟が入つて大漁でもしたら急にそれが半値に落ちる、またこれと反對に漁があると豫想して居たものが不漁などの時には忽ち幾倍の高値にかはる。ですから、海邊に住む者はよほど氣を配つて求めませんと僅か十分間でも非常な差を見るので御座います。

魚の價の出ました序に宿泊料の點も一寸申上げませうまづ上等旅館ですと一日一人前一圓五十錢から二圓止り普通の處が一圓でこれならばまづ二品くらゐはついて出ます、また御幸の濱の養生館では御飯付一日宿泊料五十五錢副食物は別に



好みの物を注文してそれはその日の相場に依る樣になつて居ります、貸間は八疊一間一ヶ月十五圓止り位で夏場でなければずつと下落ります食費は一日一人につき五十錢から八十錢ぐらゐまづ避暑、避寒の地としては贅澤な方では御座いますまい。自炊ならば經濟の上手下手に因る

ことは無論で御座います。

○

此の地を訪ふ者の必らず詣でねばならぬのは縣社報德二宮神社で御座います、此處は皆樣御承知の通り二宮尊德先生の御靈のとこしへにしづまります處、前に稻田のそよぎを見渡し後に木立のしげみを負ふた吹く風清き丘の上に御座いましていつも參拜人の絕ゆるひまなく御用邸の兩宮樣さへ折々お成り遊ばされたと申すことで御座います現に御社の前には兩殿下御手植の樟變らぬ緑りの色深く、詣づる人はいづれも崇高森嚴の氣に打たれて先生の德を憶はないものは御座いません、梅に名を得し小峰公園は町の南はづれを占めて年毎に都は未だ蕾さへふくよかならぬ如月はじめ既に滿開の香さへゆかしく遠近より杖ひく人も少からぬので御座います。

町からは少し隔つた早川村の石橋山に遊べば賴朝が梶原に助けられた古を想ひ古い戰の樣を偲ぶ十字町の本通りにはやいらうの八つ棟とてこれも東海道名物の一なりしとか昔高麗より傳來の透頂香といふ萬病の妙藥ひさぐ舊家の外郞藤右衞門といへば知らぬ人なき家のいしずゑ昔ながらのゆるがぬ作り土藏の棟は八つに別れて今も人目を引いて居ります。

○

此の地の風習でおもしろいのは每年一月元旦もほのぼのあけの日の出前に風さへ凍る、海原に乘り出し棹の先に松をつるしたのを持つて魚釣りのまねごとをいたします、これは其の一とせの幸さき祝ふ緣起なので御座いませう、七月十六日の夜は濱に大かゞり火をたきましてから無緣佛の供養施餓鬼をいとなみます、この時には無緣のとうばをいかだに組んだりなどしてこれに火を放ち海に流すので御座いますが星かげ淡き暗の海を、波にゆられてたゞよふ樣は烏賊つる夜半のいざり火と共に淋しい美觀で御座います。

また同じ月の二十六日の夜は二十六夜待とて濱は非常な賑はひで御幸の濱邊一帶に氷水、ゆであづき、花火おもちやなどの店が出て一寸まあ東京の場末の御緣

日くらゐは大丈夫それで漁士の子供達は手に手に線香を入れた箱を持つて同じ様なこゑ張り上げて「線香よーしかね〱」とうり歩きます、これを買つて火を點じたものを或は圓形に或は花形に人さま〲の思ひ付のまゝに砂地の上にたてめぐらし、その中に坐つて御月待する習ひなので御座います、これも以前は舊暦の

都なる友へ

ゆめ圖



七月二十六日にいたすのでしたが近年はたゞ暦の上ど新暦七月二十六日に行ふ様になりましたからある時はゆめより淡き新月の時も御座いませうしある年はかげまどかなる望の夜に相當する時も參りませう白波たかき磯邊にいでゝ夜半にのぼる二十六夜の月をまつてゆかしい習ひで御座いますのに……惜しいことゝ存じま

した。

○小田原名物小峰の梅干、しそまき青づけいろ／＼と柚餅めしませいかの鹽から、かつをのたゝきも候ふぞと客よぶ店の第一は美濃屋吉兵衞とてのれんの古い家でしたのを、近頃になつてめき／＼と賣出し店の構へもとりひろげて美濃屋を凌ぐ位になりましたのは、ちん、、りう亭とて、流れに枕す何とやらの亭などゝこれも由緒ある舊家なので御座います名に負へる小田原提灯は影もみられず却つて箱根細工のいろ／＼こそ、お土産には缺かれぬ一つで御座いませう。

よしなしこと

屋那畿

内藤千代子樣

よくまあ大膽に、あゝも御書きに成つたものと感服いたし候。一種人をチャームする獨特の御筆あまり過ると御縁談に御さわり無くやと御案じ申候。濃艶なる八重櫻。古代紫の矢飛白と退紅色有職模樣の厚板を大きく立矢の字に奴元結ピンと結んだ文金の高島田、水のたれる樣な鼈甲の櫛に蝶の前差しと透彫の平打一本。

黒柳吉子樣

御敏腕御達筆、拜見して目の廻る樣、田舍者はたゞ／＼感じ入り候、花ならばホワイトロース。ブローチ燦めく白襟引つめて、白絽に墨繪の長襦袢に、お召は薩摩上布、最新流行の綾浪織の夏帶心もち下にお締めなされ、其間から細い金鎖もほの見え、油毛の無い、どこからどう卷くのやら分らない少し長手の束髮に、寶石入りのピン一つ燦めく。

夕顔樣

源氏物語御愛讀の君と察し參らせ候、寫實風のは筆、情に、殊に、細かき御觀察、讀むものた深き印象を與へられて、餘りするどき御筆は豈夫御兩親樣の御噂には有るまじく、想像文か、さも無くば御知り合ひの御うへに御半、朝日にはゆる白牡丹。前の廣い前髮に、髮の澤山出た、大輪の銀杏返し。御根掛は翡翠の五分玉、薄い黑鼈甲に金銀象眼入りの御櫛、お召ものは、御納戸色絽縮緬に、麻の葉に寫生風の蝶を大きく出した江戸褄模樣、絽襦袢に菖蒲の刺繡のおみ帶胸高に、御胸も御手も金色燦爛と輝やく。

秋雨樣

すつきりと、垢拔のした、讀で心地のよい江戸つ兒風の御筆、とても素人の片手業には有るまじく、御本職と見た目は僻目か、私はこの方の御作大好き、いつも四五度はくり返し候、花ならば、水仙。思ひきり前髮の出た束髮に金緣眼鏡セルの單衣に金波織のおみ帶しつくりと、野暮ならず粹氣ならず、五分の隙なき佳人を連想致し候。



氣の弱い娘の述懐

白百合女

◎朝みんなの浴衣を洗濯した、一枚づゝでも多勢だからなか／＼骨が折れる、ゆすぐ時には腰が折れさうになる、まるでお華さんの道行を見たいだとをかしくなる、お晝頃までかゝつてやう／＼ほし上げた。

◎午後は例によつて御病人の枕元で縫物をひろげる、相變らず重寶様の御用が引きつゞき絶えないので、居たり立つたり、ちつとも落ちつかない、これでは仕事のはかどり様がない五分か十分置きに氣がへりななまるのだもの、毎日毎夜の事ながら、今更の様に情なくなる、一日二日の事ですら病でれるのはつらいものだに、十年と云ふ長の日月一つ所に臥たぎり、何一つとして御自分では御用が足りないのだから、お氣がいれるのも御無理はないと感ふと、お氣の毒で胸が一ぱいになる。それにしても此處の家にはどうしてかうも不幸のみつゞくだらう、十數年前に父上が病のため三四年引きこもられた事がある、それ以來は絶えず次から次とかなしいことばかりが押しよせて來る、その時は幸に父上の御病氣が御全快になつて、やれ／＼うれしやと息つくひまも待たずに、母様が床におつきになつた、父上のおはじめになつた事業は失敗に終る、家計はだん／＼困難になつて來る、それから幾星霜を經た今日になつても、依然たる有様。父上が過去五十年間事業と云ふものは一朝一夕にして云ひつくせるものではない、寢食するへも忘れる程に苦心惨憺せられたその報は果して何があらう。曾て我家が盛んであつた頃は、知ると知らぬのけじめなく、此處の門をくゞるを名譽と心得て居た位であつた、然るに今日此頃のやうに、我家は淋しい晩秋の姿となれるに、人は正直なもの昔の恩もあらばこそ、今は影さへも見せぬ、父上の高き德をしたつて尋れて來たのならば、盛んな時にはこずもあれ、衰へて悲しみに沈んだその時に尋れて來て慰さめてくれてこそ誠ではないか、それと云ふのはつまり一般の人情が、只もう私利一方に傾むいて、他をかへり見るいとまがないのだらう、落ぶれて袖に涙のかゝる時、人のこゝろの奥ぞ知らるゝとは實によく穿つて居ると思ふ。

◎こんな事を思ひながら仕事をして居ると、私の所へ端書がきた、はて誰からだらうと裏をかへして見ると、やれ／＼同窓會の招待状だ、あゝいや／＼美服の競爭會みたいな會に、なんで私なんぞ出席が出來るものか、まばゆい樣にはでやかにおよそほひになつた皆様の前へ、こんな見すぼらしいみなりをして出るに忍びない、さもなくてさへ、我から肩身をせばめて居る所へみんなして目引き袖ひきまして、冷やかに迎へられるを、いやだ思つただけでもぞつとする様だ、會話のたれと云へばいづれ三越がどうの、白牡丹よ、天賞堂よと、もうそんなお話でもちきりだら

う、さもなければ、御自分の御家庭の御自まん話だらう、ちつとも面白くはありやしない、とは云へ五年の間同じ學びの窓に親しみ合つた友だもの、何でお目にかゝり度くない事があらう。

◎あゝいつもこんなものがくる度に煩悶しなければならない、人はよろこんですぐにその時の服装などを考へたり、お話のたねをさがしたりして、その日のとく來れかしと祈るのであらうに、自分ばかりはどうしてかうなのだらう、えゝ憎らしいと、罪もない端書をさいてしまつた、私が同窓會にも運動會にも同級會にも遂ぞ出席した事がないので、みなさんはさぞ變な人とお思ひになるだらう。

◎皆さんはよく學校時代を此上もなく戀しがつて、もう一度あの頃になつて見たい／＼と、よくおつしやるが、私にはちつともそんな感じは起つてこない、それは順境にお育ちになつて、試驗位を無上のくるしみと心得ていらつしやる方々のおつしやるお言葉だらうが、自分の過ぎこし方を顧ればみな涙のあとのみだ、丁度私が小學校へ入學したその年の夏だつた、父上が御發病、間もなく御靜養のため一家擧つて逗子へと移るその時私は學校を引かればならぬ身だから、一人東京にのこつて、叔父様のお家のお世話になる事となつた、あの時のお別れのつらさかなしさ毎日夜になつて、體がやすまると共に、しみ／＼さむしさを覺えて一人ランプの下に泣いては、叔母様にしかられた、始めの内こそ叔母様も隨分やさしくいたはつて下さつたが、日數が立つにつれ、次第に邪魔者あつかひにされが、あゝもうその時の事は云ふまい、ともかくも最も無邪氣な遊び盛りの少女であつた、私が此時から世の憂き事を知りそめて、妙にいぢけた人間になつてしまつた。

◎父上の病氣がなほつて、一同歸京したのは、十一の時だつた。あゝあの時はほんとにうれしかつた。これから先の一家團欒の樂しさを想像して云はん方なき幸福を感じた、然しその時はもう御母様が病床におつきになつた後だつた、寢がへりさへも、食事さへも、みんな人手によらなければ出來ない、よい亘母様だつたのに、御氣丈な方だけに、一返りならず氣をいらつてやかましい事ばかりおつしやる、いぢけて居る私の擧動が、一から十までお氣に召さず、毎日叱られてばかり居た、前に抱いた樂しい／＼想像は、まるでめちや／＼に破られてしまつたのだ、十四の春にはとも角も女學校に入學する、さてそれからの五年間は隨分みじめなものだつた、夜になつて少し勉強しやうと思ふと机にばかりかぢりついてちつとも用をしないとか、裁縫をしないとか叱られる、その上父上永の御わづらいで、家計に困しくなつて來て居る、そこへお始めになつた事業は面白く行かぬ、その上に人のために家具衣類に至る迄人手に渡ると云ふ窮狀に陷つて居るので、紙一枚つかふさへびく／＼して居ると云ふあはれな始末、實にお話にならない、お友達はみなそれ／＼樂しい御家庭の人世の憂き事など露程も御承知なく、只無邪氣に愉快に、たわいもなく嬉々として、日を送つていらつしやるのを、見るにつけ聞くにつけ、ひそかに涙に袖をぬらした事が幾度あつたか、人にはその心中を見せまいと、强ひて無邪氣を粧ひ、面白さうに遊んで、見やうとあせる

が、ともすると片すみに引つ込んで物思ひに沈み度くなる、運動會が來る同級會が來る、遠足がある校友會がある。着物はない、帶は色があせてしまつた、靴は破れる、あゝどうしたらよからう、みなさんは着物はどんなのにしませう、おそろひのリボンを買ひませうのと、只もう夢中になつて嬉しがつて居らつしやるのに、私一人はちつともうれしくもをかしくもありやしない、只本をひらひて勉强するだけならば、もう少しは學校へも安心して行けやうにと思つては、人知れず泣いた、着物なんぞは何うでもよいとは、誰しも口では云ふがなか／＼さう行くものではない、たとへ自分はそれでよいと思つても、友が目引き袖引きして、こそ／＼さゝやいて居らつしやるのを見ては、氣の弱い女の事、何でうれしい心地がしやう、穴あらば入り度いと思つた事が幾度あつたらうもういやだ／＼一層の事學校なんぞやめてしまつた方がいゝ、さうしやうかしらとまで決心した事もあつた、家へかへれば祖母樣の御きげんがわるいあゝつまらない／＼と、少女心の一筋に、寢る床の中で、枕もしとゞに泣いた事が幾度だつたらう。

◎こんな工合だもの、學校時代の樂しい思ひ出があらう筈がない、戀しいのなつかしいのと云ふ氣は、藥にしたくもありやしない、五年の年月は涙の内に過ぎ去つてしまつた、學校を出てまづ安心と一息ついたと同時に、父上がまたもや病の床につかれる事となつた。

◎家計はます／＼苦しくなるばかり、あゝ何時になつたら、不運が去るのだらう、永らへばまた此頃や偲ばれんと、云ふ事があるが、永らへてまた此頃を偲ぶ樣な時が私の上にも來るのかしら、こんな思ひをするのはもう／＼こり／＼だのに。

◎をや／＼とんだ處へ考へがそれてしまつたものだ、何時の間にか四時になつた、弟や妹が學校から歸へつて來る、俄かに目の覺めた樣に賑やかになる。

◎夕食後雨戸をしめる時、今更らの樣に荒れはてた庭をつく／＼とながめる、昨日迄錦をかざつた紅葉ももう色あせて風もないのにばら／＼と散つて居る艶な姿に人の目を奪つた櫻も、昔の面影が何處にあらう、何たるさびしい景色だらう、二三羽の鳥が西の方へ飛んで行く、今宵は何處へ宿るつもりだらう、庭中に一人松は昔ながらの常磐の色を示し、いとも雄々しげに立つて居る、驕る者は久しからずとか、こんな草木の上にもかゝはつて居るのかと妙に感心してしまつた。弟はもう試驗も近づいたと云ふので、机に向つてしまう。

◎妹等は病人のそばでしきりに學校のお話をして居る、その内に唱歌が始まる、私も一緒になつて歌つてやるとよろこんでます／＼聲はり上げて歌ふ、ほんとうに子供は可愛いものだ、どうか弟や妹達には苦勞をさせ度く無いものだ、九時が打つとみんなねてしまふ、母上と私は十一時迄仕事をして居た。

◎床へ入つて早く寢やうとするが、どうしてもねられない、夜中に度々起きるのだから、少し早く寢なければと氣をもむ、もめばもむほど目が冴えてきてしやうがない、森山さんの事が浮んで來る、と共に涙が出て

來る、いくら思つても甲斐ない事ながら思ふまいと思ふほど、なほ思はねば居られなくなる、あゝ。

●今頃は異境の空に何していらつしやるか、あの方が大學にいらしやつた時は、度々父の病床を見舞て下すつては、その都度趣味ある精神上の話を父からお聞きになるのを喜んでおいでになつた、父も今の書生には珍らしい立派な人物だとほめていらつしやつた、私も親しくお話した事こそ一度もなかつたが、影ながらあゝあんな立派な方に身をさゝげる事が出來たらばと、人しれず思つて居た、それが計らずも、數多い女の中から、ふつゝかな私を、何と思し召してか、是非にと望んで下すつたさうだ、それを聞いた時の心は實にうれしいとも有りかたいとも言葉にはあらはし難い程だつたが、然しそれに應ずる事が出來ぬ運命とは、ほんにほんに情ない運命の神はどうしてかう私にばかり無慈悲なのだらう。

◎數多いお友達の中に私程不仕合せな人は一人もあるまい、みなさんのお目度いお話を伺ふ度に、口でこそおよろこびを云へ、内心はうらやましいやら、ねたましいやら、一種不愉快な感じが起る、まあどうしてこんな心になつたのだらう、自分は馬鹿だほんとに馬鹿だ、そんな事なくよくよ思つて居られる體かどうか考へて見るがいゝ、祖母様と父上は御病氣、母上さへも今は永年の御苦勞に此頃めつきりお體が弱つておしまひになつた、手にかゝる弟や妹達も居る、私が居なくて何とならう私が居なくては一日もやつて行けないとは母様が何時も仰しやるお言葉だ、思へば我一家に於ける私は、責任が實に重いのだ、こんな事に心を寄しゆて居られる場合だらうか、また他に考へる事は澤山ある、どうしてこんな餘計な事ばかり思ひ浮ぶのだらう、もう思ふまい〳〵と決心して斷やうとする、けれどもだめ、決心しやうと思ふ矢先からもう雑念が頭をもち上げる、あゝ殘念〳〵實に殘念、どう思つても口惜しい、腹が立つ頭をかきむしり度くなる、涙がほろ〳〵出る、寢返りばつかりして居る。

◎もしやうなつたらと、はかない想像をゑがいて居た頃には、また前途に何となく一點光明の輝やきを見出した樣な氣がしたが今となつては全くたよるべき光明が消えて、眞の暗となつてしまつた、何時迄この暗の中に捨てられて居るのだらう、青春は老い安し間もなく我世の秋もこやう、木枯すさぶ冬も來て枯れ果てるのを待つばかりだ。

◎あゝはるか彼方の空がなつかしい、また奥様お持ちにならずに澤山遠き異郷にはる〳〵と御赴任遊ばしたのが、何となくうれしい樣な氣がする涙は遠慮なく頰につたはつて枕をぬらす、外では風がさ〳〵と木葉を鳴かして居る、物淋しい、ます〳〵淋しくなる、一時がなつた。



煩悶より脫離せし女

ゆかり女史（投）

▲魔の囚俘

私は二十歳になる今日まで、此頃の樣に愉快に樂しい家庭の人となつた事を覺えません、昨日の暗黑、今日の光明、心の持方で斯も人の氣が變るものかと感ずるにつけても、世に心の病ほどいやなものはないと熟々感じます、私は今になつて見ますると、腦神經衰弱と云ふ病魔に魅れて居たのです、何してさう云ふ魔に附纏はれたか、又どうしてその魔の手の囚はれより脫れましたか、世間には隨分私と同じやうな心の狀態に在て、獨り悶え、獨り苦しんで居られる御婦人も多からうと思ひますから、こゝにいさゝか私の過去をお話し致しませう

▲憂鬱の初期

私の父は古い文學士で、母は私を生みました翌々年に逝りました それより幾程もなく後の母が出來ました、此事は私が學校に行くやうになりましてから、誰からともなく聞知まして、それからは母との間に、薄紙のやうな隔が出來ました 私の學校の成績は、小學校も優等で通し、女學校にも良成績で入りましたが、一年許立ちました處何した譯か記憶が惡くなり、人中に出るのが億劫になり、人に呼ばれても返事するさへ懶く、心は妙に沈んで何とはなしに悲しくなり、涙が自から零れるといふ風なので、お友達には除外者にされ、母からは疎まれ、父には好く叱られるやうになりました、それを情ないと思ふにつけて、憂鬱の深處へ漸々陷るのでした。

▲繼子根性

以前は、父母の叱言も善意に解釋して居りました私も、今は繼子扱ひにされるやうに感じ、異母弟妹からは、他人視せられるやうに思はれ、奉公人さへも自分を侮るかのやうに見え、只々世の中が情けなくて仕方がありませんでした、從つて今まで戀しいとも懷かしいとも思ひませなんだ亡き實の母が慕はれ、涙の中に妄想にのみ耽つて居りました、これが世に申す繼子根性なのでせう、然し、當時はどうしてさういふ氣になつたか自分では分りませんでした。

▲身體の變化

其後は、何事をするにも不快で、焦燥たり、拗たり、隨分兩親を困らせました、夜は安々と眠られず、頭は重く痛みを覺え、耳は鳴り精神は朦朧して學校へ行くのも厭になり、人樣との對談さへ面倒になり、遂には食事の箸を取るさへ懶く、身體中が倦怠く、間さへあれば一室に横になつて居る有樣でした、何故に斯うなつたか、自分で原因を考へる氣も起りません、曾て讀みました書物の中に「吾れ勉めて笑へり、人は其笑の如何ばかり苦しきかを知らざるなり、又人は云ふ、山河の美はしきを

見よと、知らず人生の恨み結ばれて此胸に痛みあるもの、何の暇ありてか自然の美を探へん」とありましたが、此文が私の胸中を言ひ盡してくれたやうに思はれ、いつも口に讀返へすといふ風でした、此やうな調子ですから、學校の成績も良かりさうな筈はなく、一昨年學校を卒業するにも、お慈悲で及第したやうな譯です、父はお前のやうな者はお嫁にもやれない」と嘆息され母は、妹や弟の前で「姉様は狂人だから相手にお成りでない」と戒める程で私はそれを聞く毎に、只もう死にたいやうな、情なさを痛切に感ずるのでありました。

▲病ひの昂進

眩暈、不眠、頭痛、憂欝は益々嵩じるばかり、自分でも精神病に罹つてゐると自覺して何となく身内の血が氷るやうに感じた事も度々で した狂躁、短氣、もう腦は惑亂するばかりで病的感念が第二の性を作つてしまつたのですから、とても自分の力ではかなひません、いたづらに煩悶の月日を送つて居りましたが、不圖去年の十二月、森下幽堂氏の心理治療法が神經病に効驗のあることを承りて早速同氏に書面で照會しますと、病氣の事を一任するなら必らず全治せしめやうとの返書があつたので、父にも相談し、その承諾を得まして、翌日早朝氏の治療研究所へ參りました

▲一道の光明

心理治療研究所は下谷龍泉寺町で私の參つた時は、既に病人が三四名待合室に控へて居ました、私はそこに待合せて居て自分の順番の來るまでは、何だか恐ろしいやうな、氣がして一種の感想に打たれました、やがて順番になつて、一室に入り所屬醫師の診察を受け更に森下氏の施術室に導かれました、氏は熱心に施術にかゝりましたが初めの事とて何か心に不安が兆して何うしても眠る事が出來ませんでした、すると氏は『病を癒さうとの一心にならぬから眠られぬのである、そのやうな事では病は癒らぬとても駄目だサアお歸りなさい」と申渡されましたので、私は落膽の餘、其場に泣き倒れましたが、實に私はその時の落膽が甚だしかつたので一層一思に死なうかと思ふ心がこみあげて來ました、で挨拶して歸らうとしますと森下氏は呼留め「貴女は死なうと決心したのではないか、それは顔色でチヤンと讀めてゐる、然し、死と云ふものは开な容易いものではない、日々の新聞を賑はす煩悶病者の自殺今の貴女位の煩悶程度ではない、肉體の病狀や苦痛を感ずる位の餘裕あるものでは、まだ自殺の域に達する事は出來ぬ貴女は、それだけの覺悟が出來たのなら、ナゼ癒さうと云ふ方に一心を向けぬか」と心を洞察てのお諭しに、私は心の迷霧忽ち晴れて、再び椅子に復り今度は死ぬるつもりで一つ施術を受けませうと願ひました、二目度には其氣になつたものか、かゝるのが早く、直に催眠狀態に入る事が出來たのでございました、其間に森下氏は種々な暗示を與へて下さつたさうで、これは後に聞きました、さて其日は其まゝ歸宅し、いつものやうに夜の十時頃床に就きますと、直に睡氣を催ふして、安々と寢てしまひ、目を覺す

とう朝でした、こんなに安眠した事は近年にない事で、私は霖雨の後に久し振で天日を拜んだ樣に嬉しうございました。それと同時に耳鳴は止り、頭痛は消えたやうになくなり、精神も爽快を覺えました斯うして私は蘇生の端緒に取着たのであります。

▲病氣の平癒

其翌日から五日つゞけて通ひ、病氣はスッカリ快くなりましたが、繼母に對する心の病根はまだ除かれませんので、家に居るのがまだ厭でたまりません、五日目に其事を森下氏に話すと、「貴女の阿母さんは眞實の阿母さんではありますまい」とのお尋れに、隱さずに打明ますと、「其精神上の病根を斷たれば再發せぬとの保證は出來ない、が貴女ばかりの心の病根を斷とも、阿母さんの心が舊のまゝであつては何にもなりません、これは阿母さんにもその心の病根を斷つ必要がある」と云はれ、「少しお話したい事があるから、阿父さんと同道で來て下さい」とのお話に、歸つてから父に話しますと、父は一人で行かうと其翌日出かけました、治療所でどのやうなお話があつたか知りませんが、二三日して母は父と同道で又ゝ氏の施術を受くる事となりました。氏は母にいかなる暗示を與へられましたかは知りませんが、それからは、苦い顏をして居た父や、曇り勝な顏をして居た母は、まるで變つたやうに笑み輝き、私にもやさしくなり、私も心から母に懐くやうになり、家庭は夕立雲の晴れた後のやうに、春風和樂の域に入りました、私の煩悶は、何だか昔の事のやうに、自分ながら何であんな詰らぬ事を氣にしたものかと不思議に思ふ位です。

私は全く、ヒステリーに取附れて居たので病が嵩じたら行末どんな事になつたか知れなかつたでせう。

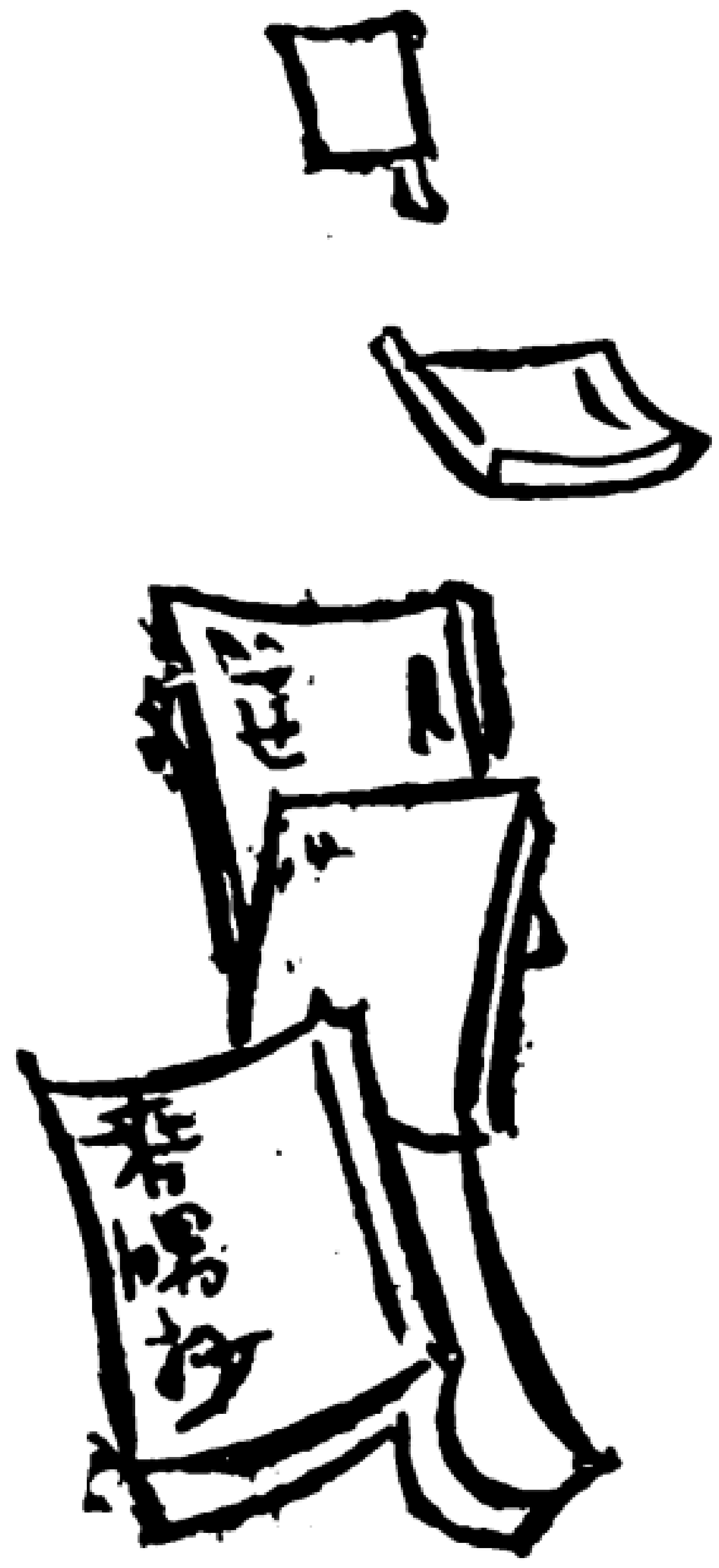
参考

催眠術は西洋に於ては既に數千年前より行はれしもの〻如く當時治術者覺術師等これを使用し來りしが前世紀の終に至りて種々なる實驗行はるゝに至れり、さて斯道の大家ベンハイムの說によれば、催眠術はあらゆる疼痛の治療に効あり、殊に器官の病症變化に基かざるすべての疼痛、頭痛、齒痛、神經衰弱、ヒステリー性の病、小兒の遺尿、夜間驚起、口吃、及び病性熱情等に効能あるものにして又教育上にも惡習慣、惡癖、(手淫、盜癖、虛言癖、怠惰等)を矯むるに用ゐて一時或は永久に除去することありといふ、故に醫師は其治療法の一つとなり、心理學者には精神現象の研究に裨益する所ありといふべし但し右はすべて立派なる人の施行する場合にして惡德者は往々これを利用して汚行をなすことあれば決して猥りに試むべからずといへり右にて凡そ催眠術が近世科學の上に如何なる地位を有するかの一斑を知るべし。

秋のおとづれ



和歌



一等 ○ 岐阜 梅子

たれかきて瞳をとぢよ走らんとする若人の瞳をとぢよ。

評 うつろひゆく女の嘆きをうたひしものか。「たれかきて」の一語ことにめでたし。

二等 ○ 京都 赤松梢子

月によし嵯峨は名どころ露一里小倉に歸る朝月によし。

二等 ○ 福島 すみれ子

戀すとは若き女のならはしと思ひてわれに親むや君。

三等 ○ 千葉 加瀬きく子

紅ばらをいさゝか笑ひ恥らひつかざす新妻うつくしと見ぬ。

三等 ○ 千葉 百合子

恨みては泣きてはなほも都戀ふる田舍少女をあはれとおぼせ。

三等 ○ 兵庫 今井敏子

沙あみて乙女がかへる磯松の木の間に淡う三日月の影。

秀逸

○ 下總 岩瀬不二野

朝ぼらけ野中にかほる白百合に紅さゝばやと思ひつるかな

○ 大分 瀧ふみ子

ながき日を片時去らぬ思ひ出に思ひ疲れて日は暮きぬ

○ 愛知 てる子

もや晴れし池の蓮のさゆらぎにしばし動かぬ朝月の影

○　伊勢　阪倉すゞ

葦の花を分けつゝのぼる舟白し笠縫ゐたり月かたぶきて

○　信濃　靜子

きぬぐの露萩原の蟲の音や君が行手に月傾きぬ

○　牛込　平塚白百合

いそ一里松原ゆけば君が家は夕顏垣のほのに浮びぬ

○　麹町　名もなき花

おもひねのゆめもむすはぬ手まくらにひゞきてさみし玉たれのおと

○　備前　山内千春

蚊遣火にむせぶと見せて面そむけ涙そと拭く嫁いぢらしも

○　大分　田中美代子

雨晴れて夕陽ににほふ海面に浮ぶ白帆の美しきかな

○　山形　白鳥折枝子

眉細きうたゝね人がうなじなにゆれてこぼるゝ白百合の花

佳作

○　東京　夕ほし

ふと知らずれ返りうてば床の間に百合は萎れり母の情の

○　岐阜　梅子

山の風七尺ぬけるむらさきの紫宛を吹きてわが袖に入る

○　臺北　武井豐子

鞭うけて動く牛馬のやからともおもひ給ふかわればかなしむ

○　牛込　平塚白百合

ほの白う物に這はるゝなびえして野川流るゝ夕野のまなか

○　福井　稻澤靜子

爪なで給へて爪を小箱に納むとき小萩ゆるぎぬ秋風ふきて

○　神戸　福本いち子

さながらに曇れる鏡拭ふごと夕立晴れ行く茅渟の海面

○　伊賀　川村哲子

青月夜岐阜提灯のいと淡きほかげに匂ふ夕顔のはな

○　岐阜　梅子

あなうれしわれは少女よ白ゆりに口づけて見ぬ化粧の小欄

○　同

もの怖にちゞの思ひを釘づけて處女といふもあはれなるかな

○　能登　栗倉一子

み佛の瞳の玉をあやしみて由緒たづねし昔戀しい

○　　芝　甲斐おり子

雛君のふりのみそでに玉ちりて白萩ふかき秋の夜の月

○　　越後　岩木芳子

あかつきに蓮のはにおくしら露をすゞりにうけて歌かく妹よ

○　　岩代　露草子

石と石のあひに萌えでし草のごといつかかれなん日を思ひ見ぬ

○　　神奈川　飯田白露子

煖爐の火かげ淋しき窓先になき子を慕ふ夕ぐれ時な

○　　埼玉　長島雅子

水鳥の沙にとゞむる足あとと思はざりけりこひのまよひぢ

○　　長崎　天野春子

落日や紅葉の影を見て濱の眞砂に歌かきて見ぬ

○　　麹町　牧野銀杏庵

のゝしりて別れし宵の月かげにやゝ似しものと涙ぐわしも

○　　長崎　松村登美子

月ならで訪ふ人もなきかの山にたがすさびにや箏の音きこゆ

○　　下總　月沖ゆり枝

曉の草の家近く梔子の花さく丘に君を思ひぬ

○　　尾張　前田みのる

ふところに錢よみて行く花賣の少女を見たり黄昏の街

○　　伊豆　紅花

われ夢にうこんの蝶の羽にのりて月の殿より銀砂子まきぬ

○　　靜岡　櫻波

石竹花手折りて岸に拾ひくれば流れてうつるとこ夏の花

○　　讃州　岩崎ふじ

輕やかに動くとおぼゆわが心湖水の上の雲ならなくに

○　　飛騨　埋木

たゞ一人月にうかれてさまよへばやさしきしらべかすかにもれつ

○　　北見　日浦さと子

涼しくも若楓さしたる黒髪の人は渡りぬ野のまろ木橋

○　　佐渡　萩野

山寺の鐘の音長う秋の野は夕霧閉ぢてたそがれ初めぬ

○　　豊後　吉眞靜子

はた／＼とはためく鳥の羽音にもいたくおのゝくわれなりしかな

○　　上野　川村哲子

夕立のくまなくはれて露の上にしば／＼やどる月ぞさゝやけき

○　　徳島　西野花びし

思ひつゝたゞこのまゝに果てむ身は花にやどかる露妬ましき

○　　大阪　太平晴子

ふりすぎし葉末に殘る露の上に涼しくやどる弓はりの月

○　　神戸　西尾紅涙

湯あみしてそゞろ歩きの小川べに一本見出ぬ梔子の花

○　　神戸　松風

去年父と濱べにたちてながめてし月は照せどあゝ夢の世や

○　　愛知　白菊女

山姫の衣ほせしや高山の峯より谷へかけし瀑布つ瀬

○　　小石川　野ぎく

思ふことありげに又も默さまゝに灯にむかひ居ぬ少女ふたりは

○　　東京　小峯花子

秋雨のそぼ降る夕力なく失意にやせし人ぬれて行く

○　宮城　鈴木ちとせ

静かなる雲とほのきて花白き野を遠りゆく君が門出を

○　伊勢　岩田信子

たゞひとり海邊に立ちて沖を見るその束の間の心安きよ

○　相州　中田雪子

夕立のなごり涼しやせんたんの葉すゑの露に月のやどりて

○　大阪　青山なか子

面白きせみの初聲きゝつけてあゆみかれたる松の下みち

○　本所　高木すゑ子

我が袖をゆふべの風にまかせつゝ入る日ながむる里川の上

○　大阪　安藤とよ子

ある夕べ御名を呼びてつと胸に罪をおほえぬ人妻なれば

○　岡山　物部まさよ

若草の屋根まで萌えし古寺の壁に夕日の影ぞ殘れる

○　星野　いれ子

暮の鐘しづかにひゞく大御殿御堂の屋根に鳩のむれたつ

○　香川　衣絵すゑ

風の日は風を厭ひぬ風の日はやゝ風あるをよしと厭ひぬ

○　大阪　はな子

情ある君がみ文を頬にあてゝひとり泣きいる秋の夕ぐれ

○　紀伊　柳子

清きわが心の玉に傷つけしごとく悩みて今日もすごしぬ

○　羽前　稲毛なほ

老いませる母に進められ三年振暫時手向けぬ父の御墓に

○　京都　妙子

死するともおもはじとのみちかひしなよべみし夢にまたもまどひぬ

○　備前　包雨

いと清き心の水もわら涙のたちたつまゝに濁り行きつゝ

○　松山　稲井せい子

美しう映えし夕日を面にうけて白萩みだる野を行きし時

○　岡山　加藤白蓮

網を引く聲のみ近く聞ゆなり霧立ち込むる曉の海原

○　下谷　露の玉

何となく脳巻れし思ひして忘がれぬ只夢の其人

○　岩代　堀田和子

美しきふたりがなかは白玉と紅との如し相ふれぬこと

○　大阪　峰村愛子

しら衣の寢すゞしきおん君は風を召しぬ七夕の宵

○　東京　富美子

うつくしきもの盗人とうたはれて御心ひめてひとりほゝゑむ

○　豐後　加納豐子

島夕べ波にゐませる我母の慈眼に似たる星二つ出ぬ

○　備前　山内千幸

葉おもて池の面にうく蓮のへを朝の氣きよく涼風わたる

○　中河内　紅葉

月影をやどして庭の柳垣に笑みかたむくる夕顔の花

○　秋田　花子

入千草の生ひ茂りたる荒城の跡をもてらす夏の夜の月

○　福井　寛久江

人の身はもつれに似たり悲喜といふ紅と青との二色の糸の

○ 信濃 赤津樺子

なつかしき君のみ手とり嬉しごと語り暮らしぬ夕べの夢に

○ 仙臺 南もり子

思ひ出の夢の數ほど百合摘みぬ月明りする夕ぐれの野に

○ 下總 穂子

高殿に月の光のみちみちて青き田十里ことごとく見ゆ

○ 門司 吉川津留子

一とはけにぼかせし如き頂の山嬉れしくも梅雨晴れの窓

○ 長野 淺輪久子

はつ螢逐ひし昔をしのびつゝひとりほゝ笑む黒川堤

○ 埼玉 關口貞子

見そなはせ君にまゝげしこの胸や御庭に咲ける白百合の花

○ 大阪 近藤つるよ

夕立の露のまだひぬ桜か枝にすゞしくやどる夏の夜の月

○ 大阪 村瀬くに子

月もなくあたり小暗き青やみに三つ四つ五つ星のきらめく

○ 名古屋 千石樺子

紅き花今日も咲き出ぬなつかしや戀しき君のこゝろのまゝに

○ 京城 中尾鶴子

誰ならでその人ならで誰か知るなとめの胸に咲ける戀草

○ 靜岡 根岸眞子

ぬかづきてみ堂に秋の雨をきく萩はらはらとなえし身なれば

○ 美作 青木公子

うすものゝ衣よそをひて少女等の笛吹きをれば月は昇りぬ

○ 長崎 ゆづりは

秋の色流れ来ぬらし墨川の柳葉ちりて鮎やせにけり

○ 小草子

若かりし十五の胸にほりつけし君がみ姿永久にわすれじ

○ 澁谷 中村千代子

幾飾の風を賑らす大阪の月影いとゞさびしらに見ゆ

○ 下總 瓜生竹子

母上の手助けとてか少女子の桑摘む姿いといじらしき

○ 長野 いれ子

うたゝねのさめて目にいる家のうち床の花いけものめづらしき

○ 芝 ふさ子

窓に見る海まろやかに下りてくむ水和し相住むところ

○ 四谷 道子

あなうたてこの世の魂を奪うてかみ空にのぼる香のけぶりは

○ 美濃 酒井とみ子

晩夏の日きらゝに照らす不毛の野を默してすぐる二人の男

○ 本郷 松本春子

いとゞなほ涙ぬらせとやうつせみの浮世のこゑに身をしぼりつゝ

○ 尾張 霜田みのる

雨上り苔地をうつ靜かなるひゞきに胸のさびしみを聴く

○ 四谷 味方とう子

見廻せば母らしき顔弟にさも似たる顔蒼白き顔

○ 三重 塚本花子

見るかぎり青き海原青き松なにとはなしにもの思はるゝ

○ 京都 田中みどり

乙女子や如何なる夢路辿るらん新緑もゆる野にうまゐして
○　中河内　西村千代子
夕立の名残や草に露ちりて松ヶ枝涼し夏の夜の月
○　大阪　青山なか子
今一度おとづれ來ませわがやどに若葉なたれにうたかたりせむ
○　伊勢　光子
月青き光りのなかにつゝまれて語りあひし夜もありしが
○　芝　笑子
樹のにほひ秘む靜寂の森にたちて日に凋落の春をなげきぬ
○　小石川　高橋まつる
美はしく咲く萩の上にもる露を友待つ窓に數へても見つ
○　長崎　井手せつ
敗殘の士に似たるかな紫陽花のうつらふ色に秋風ぞ吹く
○　岩代　堀田いち子
わすれんと思ひつゞけて夢のそのつかのまをたのみて老ゆる
○　秋田　阿部かつ子
日ぐらしは森になき出づ監獄の赤き煉瓦に入日照り副ふ
○　三重　角田千代子
ふと笑らひふとまた沈むありし日のありし思出そと浮びつゝ
○　仁川　伊崎志加子
打みれば月は殘りて空高く雁なき渡る初秋の朝
○　京都　森　小糸
雨すぎし庭の木の間になく蟬の聲より落つる露の白玉
○　長野　石上麗子
眼にひろき園を歩みて限りなきよろこびに惱む人と生れまし
○　長崎　天野春子
兄君の病癒りし夢の朝心さわぎのせられぬるかな
○　大阪　梅村愛子
春日野や杉の樹立も神さびて小鹿群れゆく奈良の朝ぎり
○　京都　いく
ゑの具皿洗ふさゝ川紅に片側染て流れ行くかな
○　山形　羽毛光子
清水湧く峠の茶屋に休らひて眺め涼しき山の端
○　大分　是永古満子
月見草かつて語ると見し夢の中なる人の面影にして
○　埼玉　關口貞子
烏羽玉の闇をかすめてほのかにも香を送りこす白百合のはな
○　佐賀　岡本そめ
今宵しこら入給ひといたはりつ出で行くまどに望月の影
○　北見　信太英子
濃緑りの森を流るゝいさゝ川夕ばえになく牛のむれかな
○　長野　いれ子
こぎゆきて腕たゆきまで漕ぎ行きてあの大波の中にきえなん
○　神戸　上田輝子
ゆめのごと思ひけるかも師の君はまだ世にいます心地のみして
○　姫路　きん子
月高くあたり靜かに夜はふけぬ今宵も夢のむすぼれぬかな
○　大阪　門脇久子
秋の野に亂れて咲ける八千草の花の色そふ露の白玉



短文

(甲)　つれづれ

紀伊　松島双葉

琴かきならせど音はさえやらず、文くりひろぐれど　晴れぬながめの窓の下には、それさへよみうみて、いとヾやる方なしと、かこち給ふ仆もおはさん、さてもふりくらす長雨に夫が好みの羂絆濟も秘藏の椎茸もみな黴にはなしはてつ、かはりの衣のまだ乾かぬに袂も裾も泥にして歸り來る子　ぬぐひてもぬぐひてもたえぬ猫の足あと、げにいひしらずもかこたるゝかな、お國なまりときれい好みで其名の通りし隣の葉君、今しも何やらん聲高う女をせめ給ふはまた例のなるべしと思はるゝに、さてもかのつるべにゐがける銀の蜘脈、かの君の見ましかばと、よそながらきづかはれて。

(乙)　渡守

東京　若葉

「オイおぢいさん一服頂みたいな」、行商人らしい若者が小屋の中に入つて來た、渡守は「へイおぢさ出すからチヨツクラ待つて下せえ」と呑氣さうに煙草をスパ／＼させて居る。

「お前さんは此處に幾年居なさるれ、私が四年ばかり前に此の地に來た時も確かおぢいさんの船に乘せて貰つたと思ふが」と若者が云ふ、「アヽア十八年になるだよ、今年で」、「ホー隨分だれ」、「だから未だ若い時分毎日學校の行き歸りに乘せてやつた子供がえら　大きくなつてしまつてらあ、此の村長さんだつておらが毎日世話してやつたヾ」と大分是かお自慢らしい口振り、「サア出しますべえ」とやつとの事で腰がたつた。

(丙)　病院

四谷　櫻子

此間も院長先生はもう二三日とおつしやつた、今日伺ふと亦もう二三日一體いつ出して下さるのだらう？　もうきず口もすつかり肉があがつたし、退院してもちつとも差支なさうなものを、アヽいやだ／＼、あきてしまつた、早く家へかへりたい、入院してからもう一月中になる、あの時芽ばえだつた胡瓜からもう七つも實をとつたと云ふし、私がまいた朝顔も此間から咲いたと云ふ、アヽどうかして早く見たいベツトの上にころがつて雜誌をとりあげて見ても、此頃は一向よむ氣にならぬ、今日も誰か來ないかしらと起きあがつて廊下に出てみたら　後から隣室の何とかいふ奥樣が、大きな荷物を車夫にもたして、青い顔に溢れる樣な笑をたゝえてさもうれしさうに出ていらした、あゝ退院だ、と思ふて憎らしいほど羨ましかつた。

墨堤の夕

本所　木村歌子

こゝ業平の君が名殘をとめし言問の里に、月が繪いた櫻の影踏む雛人三三五々、艶なる人に送られ給へるゴム輪の君が金紋三輌音もなくスーツと過ぎ行くに、薫風一陣、我等四つの袂は徒らに飄へりぬ。「出ますよー」と長く呼ぶ船子の聲は、其昔我子を慕ひ來し梅若の盲目の母が涙注ぎし竹屋の渡なり、「誰」と答へて若者三人ハメ〳〵とかけよれば、水棹のしづくは玉とちりて靜けき川面に銀波ゆらぎぬ。（秀逸）

たより

麹町　月見草

姉上が御考案か、水の流れいと清く、渚に咲ける月見草を直間々々にほの見せ、下に亂るゝ常夏の、とはに變らぬ色も深き、そが側に、蛍の香高うわざとの御なぶり書。

頃日の雨に玉川の水增して候、夏草二つとも咲きて候へど、半ば涯りていと哀れ氣に見うけ候、おひまもわらば御救護に御光來たまはり度候、今年は美しき御學の主居まさゞるに花も人もかこち居り候、参らしうも月わかき夜去年の日を思ひ出して、なばしまより　常夏（秀逸）

可愛いゝ兒

東京　美子

或田舍の茶店に腰をかけてゐると、可愛い四つ位の男の子が向ふからヨコ〳〵かけて私のそばへ來た、左の手には大きな紙の袋を持つてゐる此邊の子供のやうにもない、色の白い眼のくり〳〵とした所はほんに私の氣に入つた、唐縮緬の腹掛して……、「坊つちやん」、「母さんは」、「れんれ」……

上に上がつたと見ると　今の袋から大きなパンを五つ六つ出して食べてゐる、それとみた大きな〳〵ブチ犬がのつそ〳〵とそのそばによつた子供は小さい片れを犬に與へて置いて　又それを一つ〳〵袋に入れ始めた、犬はいま一つといふやうな顏してゐたが、ふいと手を出して大きなのを一つ咬へてムシヤ〳〵食べはじめた、子供はあはてゝ犬の顏を見たが、やがて私の顏と犬の顏とを見くらべて、につこり笑つて急いで袋を持つて奥へ入つた、あとにはまだパンが一つ殘つてゐた。（秀逸）

十年後

福井　澪子

私がまだ漸う八ツになつた春、綺麗な花が咲き揃つた時、私の一番上の姉様はお嫁にゆかれた、季子で可愛がられて居る私を、いそがしいので誰もかまつて吳れないので不平滿々の私や、盛裝した姉樣が嫁く一時間計り前に緣側に立つていらつしたお姿は、今も尙目の前にチラつく、お嫁さんとは着物きて綺麗でなか〳〵いゝものだ、自分もあんなになつたらいゝ事だらう、とは當時の自分の考であつた、十年は夢の間にすぎた私もお嫁にゆくことになつた、けれどもお嫁に行くのはちつともいゝとは思はれない、ならばいつまでも娘で居たい、姉さんは今は三人のお母樣で居られる。（秀逸）

風變り

近江　吉田ろく子

四郞平といふ若者は働蟻もつて朝も晝も夕も一寸の休みもなく働く、「オイ働き者の若い衆御前は名を何といふえ」ときけば、「わしや四郞平で

がんすアヽ……」と言ふ、年三十二いまだ一度も妻をめとらぬ、近所の婆さんは「四郎さあいヽ加減に嫁さあ貰はれえかよ」といへば、例の鍬と鎌をひつぼなげて、耳までまつかにして我家へにげゆき、蒲團かぶつてねてしまふ、大切の惣領があんなではとおやぢが心配して、となり村のお花坊を漸く納得させた、さていよ〳〵貰ふ當日となつたら、「いやだあいやだあ〳〵〳〵」といふて仕方がない、がことわる事も出來ぬからついに舍弟の嫁に貰ふ樣になつた、實に風がわりの男で。（秀　逸）

火　送　り

伊豫　山口たけ子

白い顏に白いゆかた、其の人ごみの中からおしろいの香がぼつと鼻をつく、橋の上はもう見物人で埋められさうにもない、やがて松明の光りがちらほらと見えそめた、四方八方の田道から五つ六つづヽ、數は次第にふえる、何とか言つて呼ぶ子供の聲が聞えた、やヽあつて何百と云ふ松明が川岸をならんで通つた、火影が水にうつつて實に美くしい、松明はだんだん川下へ行く。（秀　逸）

歸國の前夜

豬苗代　宇月する

今朝から五六軒暇乞に歩いたので身體はすつかりつかれてしまつた、机の前にすわつて、ホッと一息した、なつかしい家に歸るのだと思ふと嬉しくて〳〵胸がをどる、故郷の有樣が活動寫眞のやうに代る〳〵目にちらつく、トン〳〵とはしごを踏む音がした、誰だらうと思ふ中、下女のお松どんが立つて首ばかり出した、そしておせじやら冗談やら、一人でしやべり立てた、いつもながら面白い女である。（秀　逸）

白　日

大阪　木村花子

眞夏の日光に照されて赤煉瓦の面は燃てゞも居るかのやう、硝子工場の裏にドヽ……と、エンヂンの響が重苦しく乾切つた空氣に反響する、凝乎と耳を澄ますと、鉛のやうな響の絶間に、齒車のキー……と轢る音が人の呻吟と絡んで洩てくる、瞼を合すと、紅蓮の焔に照され、仁王の樣に突立つて急がしく立働く職工の姿が、あり〳〵と浮んでくる、世の壓迫にえ堪へないで、皮膚の細胞は延切つても、尚、生の執着にかられて呻めきながらに儚ない努力を續ける。と想像が止度もなく浮んで、私は云ひ樣のない胸の苦しさを覺えた、そして急いで夏草の徑に踏出たが其でも、ドヽ……と云ふ音が地響を打つて聞える、其度に私はふいと振返つて見た、煙筒の黑烟は呪う樣に渦まいて居た。（秀　逸）

溫　泉

日本橋　澄子

朝、姉樣のお聲に、ふと眼を覺すと、ゴウ〳〵と流るヽ水の音がすぐ耳に入る、遠くの山で鯛がないて居る、夢心地に手拭さげて二階を下りて行た、すれちがひに廊下で昨夜おそくまで騷がしかつた三階の人にあふ髯のはえた大きな人だ、手水つかつて一號室に入つた、玉のやうな湯は絶えず噴きこぼれて美くしく波をうつて居る、湯ぶねには入ると、ガラス窓から秋のうらヽかな日が斜にさして、足の爪まではつきり透いて見える、風は上氣した頰を吹いて實にいヽ心地。（秀　逸）

白　い　花

長崎　田中やす子

船がおす棹に、舟は男松女松の小島の間を巧みに進む、沖から吹いて來る風に髮を翻らせてゐると何處に夏があるやらと氣分が清々とする、島には名も知らぬ白い花が美しく今を盛りと咲き亂れてゐて、風が吹く度ぴへラ〳〵と水の上に散る、海には小さな魚があちこちと群をなして泳いでゐるのがすいて見える、遠くを見ると島の影から白帆が出たり隱れたりする、船頭は「い丶景色でせう」。と宛も此の海は自分の領地の樣な面色、私は「あ丶」と答へた、實に歌も畵も及ばぬい丶景色である。(秀 逸)

蜘蛛の糸

愛知 もと子

ある朝蚊帳を結ばうと蚊帳の端に坐つた、窓から吹きこむ朝風におくれ毛がかろく頰をうつ、あ丶い丶氣もちうつとり……ヂー〳〵ヂ丶〳〵〳〵といふ音がしきりに聞える、「おや」と思つて外を見上げると、蟬が大きな蜘蛛の巣にか丶つてしきりにもがいてゐる、そしてもがけばもがくほどなほ糸がまきつく、あ丶してつかまれてしまつた處へわるがしこい蜘蛛が糸の上をすばしこく走つて來て 蟬の生血をすつてしまうのかと思つたらたまらなくかはいさうになつて來たので、いそいで巣へまはつて巣をはらつてやつた、蟬は二三度羽ばたきしておぼつかなくも草の中に這入つたが、夕方見たらもう影もなかつた。

雨上り

牛込 平塚白百合

一雨降つた多摩の川面は、岸邊がさ丶にごりして、蛇かごにすがつてゐるなでしこが、水にあらはれて、ゆら〳〵動いてゐる、空はまだ雨をこめてゐるのであらう、向岸の森はぼかしたやうに薄くなつてまるで遠山を見るやうである、漁夫が水に下り立つと、左手に持つた網はサツト水にひらめいた、上つた網には銀のやうな鮎が潑溂としてゐる、川風が吹き上げると雲をもれた日は波に金鱗をたゞよはせて 漁夫の足元へよせてくる。

望月の夜

東京 夕ほし

机の上にありては詩集を汚すと、從兄にいはれてから、引出しの奧深く思出の數と共に葬つておいた詩の花——忘れもしない夏の夜、菊盛樣から送られたものを、二とせ後の今宵、堪へ難きなつかしさにかられて手にとつた。

四六判で蝶が二匹飛んでゐる淡泊した表紙。一枚、一枚に美しい香が籠つてゐる。中の影は、夢のやうに浮んで來る。うつとりと、望月の空を仰いでゐると、遠くで鳴いてゐたと思ふ波の音が漸く近づいて聞える、白い月の光に中腹を照らされてゐる帆掛船が唯一隻、動いてゐるやうな動いてゐないやうな。あつ波が……二人を波つて行く。ハツと思つて我に返ると、じつとしてゐられない程、胸の動悸が烈しくうつて、今にも心臓が破裂しさう。

執行猶豫

長野 萩元眞壽美

私の大事の〳〵プチが昨日雛鷄をとつたとて、兄樣大そうな御立腹で、打つやら蹴るやら心任せになすつたので、プチはぐつたりしてしまつた私が色々に御詫をして命だけはとりとめてまあよかつたもの丶、いくら

いたづらをしたとて、叱つて居ればやつぱり家内だもの、あんまりだ、かあいさうにからだが痛むのだらう、今朝はめつきりやつれて見える、首につけてある執行猶豫と書いた巾の廣い札は兄様が面白半分になすつたのであらうけれど、随分可愛さうなわけだ。

親の愛

大阪　山田芳枝

一昨年の春、生れた靜男は日に増し可愛らしくなつて行きます、私の一家はこの靜男のある爲にどれだけ愉快に面白く日を送るか分りません、お姑様はこの子の出來てから以來日に二度づゝの御参詣を一度にして子供のお守をして下さる、下女が一寸でも日向で遊ばすとか、私が少し粗相でもさせようものなら、それこそ大變、ヤレ腦膜炎が起るとか風を引くとかとなか〳〵やかましいことです、主人だつて以前は毎晩碁打にかこつけて三日に一度は必ず家を明けたのに、この子のお蔭でフッツリお足が止まつてしまひ、近頃は遅い時儀が附いてはとお止め申すもお聽き入れなく、坊のよろこぶ顔を見るのが樂しみだと云つてお歸宅の節に何か彼かお土産を持つてお歸りになる、そして御飯が濟むが否やすぐに靜男を抱いて近所を御散歩、夜は一日のお勤めでお疲れであらうに靜男を膝の上へ乘せていろんな手眞似をしたり口眞似をさしたりされる、またその眞似るのが可愛らしいと云つて　頰のお口でキッスをしたり抱きしめたりなさるので果は泣き出すのです、私もその通り少々からだの工合が惡くつても、寂しいことがあつたときでも一度靜男の笑顔を見たら何も彼も忘れてしまひます、本當に可愛らしい靜男、私はいつそ喰べてしまひたいやうです。

暴風雨

豊後　山中和加江

暁からの暴風雨が、晝になつてもまだ歇まぬ、雲に掩はれて薄々とした空を、木の葉が散々になつて飛んで居る、風の唸り、雨の音、夫等が一とつに電線や樹木に鬪つて、更に一層の淋しい響きが鳴る、何處かの塀が倒れてどつと云ふ音がした。

かくれんぼう

[illegible]井　澪子

キャツ〳〵と可愛いゝ笑聲がする、縁から見ると、ルイスさんの赤いリボンであらう、朝顔の中で蝶々の樣にとんで居る、裏の戸をあけて、芝生へ中身を出した今五ツになつたロンさんは桃の木にもたれて、ワンツー、スリー、フォー……と大きな聲でかぞへてゐる、ルイスさんは私を見て、とんで來て、私をつれていつてかくれんぼうをしませうと言つた。

温情

本所　あい子

アゝやつぱりこゝは姉様のお家だ、今自分は母様のあたゝかい御手に抱かれてゐる夢を見てゐたのであつた、姉様はたとへ陰ではよくして下すつても義理ある兄様に對し自分の　身内の者をさう〳〵お世話なさる事はおつらからう、アゝ勿體ない、世間には自分より不幸な人が澤山あるのに、と思ひかへして襷かけてお座敷の掃除にとりかゝつた。

お見舞

[illegible]　しちつゆ

「須磨！須磨！」と低調に呼ぶ驛夫の聲に、私は徐ろに車から下りた。麗しき家並の町を、洋傘を輕くかざして過ぎると、紫紺の色の淡路島に三つ四つの眞帆片帆が白く、淡く濃く彩る茅渟の海の波は畫の如う、右手の高からぬ山々は緑鮮けく、横に曲りしてゐならぶ老松の下には踏むも惜しき白き沙がすうと限ない、麗かな空工合、清々しき沖の風、足の運びの遲きに氣附いて急いで行くと、左手の門構への雅かなお邸、名札には「清水花子」、あゝひたすら姉さまと慕つてゐる花子さんは、あの御病氣でこゝにと思ふと得も言はれぬ思ひがした。

初丸髷

東京　千鶴子

媒酌さんが歸つて後、私はこわ〳〵合點をした、母はすまあ……とばかりで胸がどき〳〵してきた、そして鏡に寫る自分の顏はいつしか眞赤になつて居た。夫とお姑様の勸めにより丸髷に結ひしものゝ、今更責任のいよ〳〵重くなつた様な心地がして取わけ何やかと氣を配る事の自分ながらをかしく思つた。やがて五時を告げし頃、玄關に夫の靴音がした私は何となく間が惡く、とつおいつして居たが、限りがないから思ひきつてお出向に出た、すると夫は直にナア！……とおつしやつてお眼は私の頭上に注いでいらしつた、私は恥かしくつて〳〵お歸り遊ばせも口の中手をついたまゝしばしは顏を上げ得なかつた。

琴の音

金澤　恭子

月見草のあたりに繁き蟲の音が聞え、木の間ごしにちら〳〵洩るゝ月の光は淋しさうである、草叢の夜露がしつとりと重れ草履や着物の裾をぬらした、昨日移つて來られた新夫婦の住居には優しい琴の音がする、鷹狩の曲だ、私もあの曲は得意だつたに、アヽ今はもう手にした事もない

文才

岡山　貞子

「女學世界が來てよ」、と妹の菊子が持て來た、あらさう……と一緒に雜文のページを開て見たが自分の名は相變らずない、又だめだ、情ないほんとに憎らしい、捨てたくなる、けれ共矢張り未練があるので何度も何度もくり返して眺めて居ると、お口の惡い兄樣は「又沒書だらう珍らしくないや、一度でも出たら何でも奢つて上げるよ、へゝゝ」て彼方へいつておしまひなすつた、ほんとにどうして、私はこんなに文才がないのだらう、兄樣に馬鹿にされるとは情けない。

寂寞

前橋　渡邊松子

散歩に出かけて二三丁程行くと、跡から「母あさん」と言つて六ツ七ツ位の孤の子が馳せて來た、私の袖を捕へて息をきり〳〵「あのれ——母あさん」と又何か話出さうとするから、私母あさんではないですよと云ふと、私の聲を聞いて急に袖を放して泣き聲立て又「母あさん」と言つて元來た方に馳せ行つた、何と可愛らしい孤だらう、あの子の母なる人と私の後姿が能く似て居るものと見える、あゝ私もあんな子供が有つて今の樣に跡からすがりついて來てくれたらと考へると急に物淋しくなつて子供の馳せ歸つた跡を眺めて思はず吐息をついた。

戀しき夢

靜岡　千五百

何時の間に斯んな所に來たのかしらと、氣が付いてあたりを見廻すと、廣い〳〵花園の中に立つて居つた、一面に優しい百合が今を盛りに咲いて居つて實に美しい、本當に天國に來たのかと思つた、と何處かでちいちやん〳〵と言ふ聲がした、見ると母様が花の蔭から淋しく笑ひながら手招ぎして居らつしやる、あゝ母様！と言はうとしたが聲は出なかつた！急にけたゝましい音がしたので眼がさめた。

朝顔

能登　千代枝

朝まだきに、めづらしくも姉君に先だちて庭を散歩せしに、まがきの朝顔の赤や紫の色さまぐ〵に咲きいでたるが、目も覺むるやうに美くし、いつも中ばしぼみたる時に見るを、今朝は蕾のまだ全く開かぬのさへあり、いと嬉しくて赤きを折りてかんざしにさし、白とうすむらさきを小さき瓶にさして姉君の机の上におきまゐらせしに、いとほめたまひて、美くしき繪あまたたまひぬ。

幸爺の話

麻布　豊島清子

昔召使だつた田舍の幸爺が、野菜物を呉れに來て、兄様と話すのを聞いて居ると、お前様ハア決して女なんぞに迷はつしやるな、俺が隣の息子め、東京で若え女に騙されて、到頭惡黨に成つちまい、今ぢやア赤え着物を着て居るだア……女はかぼちやと同んなじこつて、面アまづくても味はれえだよ、心掛せえ宜けりやア、それが何よりだからな。

女學生

麹町　しのぶ

・伊勢崎銘仙のあらい〳〵縞衣に、御納戸カシミヤの袴、髮は〇〇院式の廂髮、巾廣のリボンをピンと結んだ其スタイルは、何處から見ても廿世紀の女學生。

院長さんが何んなに八釜しく言はれても、之許りは止められぬと見えて思ひ切ての華美好み、贅澤と云ふ言葉を聞くのは多くは斯かる女性の口からである。

折にふれて

牛込　園江

眞人に子供がほしい〳〵といはれる度に身を切られる思ひがする、子供を持たない婦人は眞の愛てふ事に、かけて居る、といふが、自分も其一人であらう、子供のある家庭は、花園の様に美しいが、自分は殆んど墓場の様な淋しい生活である。

月見草

信濃　赤澤梅子

靜な晩だ、山の端が少し明るんで來たと思うと、白い月は涼しさうにあたりを照らし始めた、月見草はよい匂をはなつてゐる。川のほとりには河風の聲が聞えて身に沁みる様である。

悲しい思

相模　五月雨女

皆様の御作を、拜見する度びに、羨しい、口惜しい思ひが、胸にせまる何故私には作る事が出來ないのでせう、作れない書けないその悲しい思ひなりと書き現はしたいと思つて居る〳〵其内にもう、他の人が同じ様な

貝殻のしかも美しいのを御寄すになるそれを見ると、嬉しい思ひが急に涙をうるほす。

夏の夕

東京　無名草

今お夕飯をすませて妹と二人縁に出て涼で居ると、お隣りの二階からお琴の音が聞え出した、節子さんのおすさびだらう、曲は六段、私は直ぐオルガンの調ひをはらつた、妹はハモニカを持ち出して來た、そして途中から合せた、一曲終つて妹と互に顔見合せてニツコリ、そよ〱と吹き入る風に軒の風鈴がチリン、〱〱。

卒業して

埼玉　船津千代子

今春學校を出た私は、學資の補助を受けたといふ、叔父様の心配のしがらみを弱い身のふみ切る事が出來ないでこのまゝ、此處で數ならぬ身となつた華やかなるべき十八歳しかるべき十八を、私はこんなに老せてしまつた、都が戀しい、都へ行きたい、けれど私には母様がある、「辛からうが少しの間の辛抱して」と朝夕慰めて下さる年老いた母様がある母様を捨てゝ何處へ行かれやうぞ、最う〱都戀しいなぞ夢にも思ひますまい、これもかうした運命に生れ來たからあきらめるより外は無い、あの天使のやうな里の子供を相手に一生母様のみ側で暮しませう。

逍遙にして

四谷　蓮子

狭い道を辿つて漸く明るい道に出た、光を湛つてゐた藍青い藻の水は横

にスーッと立つて居る振り返つて、初めて左右の足の麻痺したのを自覺した、……北の薄暗い窓に向つて、好む頁の上に目を落す、水を開らてはじめて夢から醒めたやう、……私は何時も窓際にして刻々と過去の一頁を増して行く。

一時間

名古屋　岩島柳蛙

愈々明日から休暇だと思ふと、何んだか愉快で愉快で立つても坐つてもなられない。嗚呼何たる長い一時間でせう、而れども四十五の日、千百三十五の時間、此中授業。時間や食事の時間を引き去れば、殘るは僅か四五百の時間に過ぎない、此時間が武雄さんや美いちやんと樂しく遊ぶ時間である。
嗚呼どうか此時の一時間を今の如うに長い時間にしたいものである。

涼風

水戸　水戸紅露

お湯から上つて庭に立つと、涼しい風が絹ずすりと化粧した頬を撫でゝ浴衣の長い袂をひるがへし、その餘りは軒の風鈴を吹いてチリン〱とならした。
築山の陰から飛び出した螢を追ふて裏の川縁にでると、五六匹の螢がフワリ〱と嬉しさうに舞ふてゐる。

蓄音器

門司　川上龍子

蓄音器の主人は、れぢんを器械にかけて、喇叭を道路の方に向けた、通の人は一人止まり二人集つて其前に黒山をついた、見渡すと種々の階級

の人が集つてゐる、鼻に髯を蓄へたパナマ帽に洋服姿と云ふ紳士もあれば後鉢巻の仲仕もゐる、妙齢の美人のとなりには日に焦けた印度人のモデルになる様な漁夫もゐる前の方では子供が一ツトに、口を開けてあふむいてゐるなど其對照は實に見物である。

汽車の中

埼玉　中山嗣子

乘込んだ隅の座へ小くなつて腰をおろすと、直ぐ前に歸省らしい學生が三人他愛もなく喋つてゐるが目に附いた、其前の爺さんは大きな包を抱へて隣席の媼と話してゐる、窓から覗く者もあれば、煙草をふかす者もある本を見る者、話す者、種々な階級の人が一緒になつて、丁度小な社界の様だ、下車する者乘車する者、時々に一人や二人の移動はある、貴孃何處へ？と問はれた時は、もう二時間ばかりも去つた後であつた。

櫻ん坊

河内　中島鹿子

濃紫色の櫻坊が、鈴なりになつてゐる櫻の木の下で、茶店の爽作爺さんは、せツせとわらじを作つてゐる、彼の茂みの中から、四五人の子供がめい〱手頃の竹を持つて、ニヨツキリ現はれたそしてしきりと爺さんと、櫻坊とを見比べてゐたが、果は一齊に竹をたゝき出した。枝を離れて實は霰の如く落ちて來た爺さんの禿頭にも五つ六つ當つた、流石の爺さんも、閉口して、ズル〱と、むしろをひきづつて、今度は櫻の木に影に行つて「ナン〱ひどい事をしをるぞ。」とばかり、むしろの上に落ちた實を、一つ〱拾つてたべてゐた。

螢狩

岩代　木村つね子

五月雨の晴間を妹にせき立てられて、裏の田川に螢とりに出たが、一匹も見えぬ、氣とる聲や、自轉車のあかりに度々ばかされる、つまらない歸らうと云へば、妹があらつと騒ぎ立てた。

まつ黒い森の中から、螢がいくらも〱つれ立つて出てくる、それで次第に流水に沿ふて飛び、堤の草葉に隠れ、早苗の葉にやどる、こちらに飛んでくるのを、うちわ高く待ちかまへても頭上を高く、ぬけて行く小さな籠を軒下に眺めるよりも、かうして見てゐた方が餘つ程樂しいと云ふても妹は中々きかぬ、やう〱かけまわつて二匹とつた。

兄様へ

名古屋　千石梅子

兄様、此頃何していらつしやるのちつとも御手紙下さらないのね、相變らず○○ですか、……おこつてはいやよ！姉様がね、兄様は此頃或る事でおこつていらつしやるんですつて、……ほんとうですか……うそでせう、わたしはどうしてもうそだと思ふわ、ある事つてなにか姉さんに聞いて見たけれど、そんな事はいゝから早く御きげんがなほるやうに慰めてお上げつておつしやるの、わたし何だかわけはわからないけれども、兄様がおこつていらつしやると聞いて、びつくりしてこんな御手紙書きました、さようなら。

笑話

○能く忘れる娘

三重　角田千代子

甲の母「どう云ふものか、宅の娘は物忘れが甚くて困ります、モー學校の日課なぞは度々能く忘れましてね、何でも娘は一時間ばかり前に習つたことでも、晝頃になりますと悉皆忘れて終ひますよ」、乙の母「其れはさうでございませうとも、手前どもの娘なぞは、貴女のお娘さんよりずつと年上でございますけれど、毎日何處かへ出て行つて、遲く歸つて來ます故、和女はまあ何處に今迄居りましたえと聞きますが、モウ居た處も何もかも忘れて終つて返答ができませぬよ」（乙葉）

○紳士の失敗

富山　富崎歌子

或る紳士の前に菓子を出してありました、とその家の可愛らしき子供が、だまつて菓子を二度取つて行きました、客「今度來たらひとつ驚かしてやらう」と、うつむいて居ましたら、果して足音がしましたから、今ぞと眼をむき口をゆがめておそろしい閻魔の様な顔を上げました、ところが、こはそも如何に子供と思つたのは初面會の主人公でありました。（同寛）

○年寄同志

京都　靜谷都子

むやすいおばあさんが二人ふと出合つて、「おや林様の御隱居様ですか」、「おゝこれは山崎様の御隱居様、相かはらず御壯健で、時にあなた様はおいくつで」、「ハイ今日は、あまり好い御天氣ですから孫を連れて清水寺へ參詣いたさうと存じまして」、「おやさうですか、まあお若う見えます事」、（芳逸）

○愛嬌もの

猪苗代町　宇月すゑ

母「お清ちやん、何ですか下駄をびつこにはいて」、清子「まあさうでしたね、どちらがびつこなんでせう」、（芳逸）

○二十世紀

下野　濱花

甲女學生「村田さん、今年は何世紀でしたかねえ」、乙女學生「まああなた、二十世紀ですよ、去年が十九世紀でしたから」、

○滑稽下女

愛知　廣登子

下女が奧様の留守を幸ひしきりにコクリ〳〵とやつて居ます處へ、表口で大聲、「おたの申します」、びつくりあはてゝ出て行つて手をつくと、いつものとぼけ聲が「茄子や南瓜はいかゞですか」、

○東京の伜

兵庫　高見喜野

爺「この金を東京の伜めへ屆けておくんなはれ」局員「町名番地は何所です」、爺「イナ、わしの伜め東京に一人しか行つて居ないで番地なんぞ何うでもよいだよ」、

○細君の儉約

福岡　今村きた

主人「百五十圓程呉服屋に拂ひをしたのは前の月だつたらう、夫だのにモウ又百圓云つて來て居る乎」細君「デモ、夫で私が儉約をし初めた事が明かに分るぢやありませんか」、

○氣の早い小僧

大阪　高橋とした

主人新しく塗りなほした壁を見て、「また子供等が樂書をせねばよいが」とつぶやきますと、聞いて居た小僧はたちまち氣をきかし、其の壁へ大きく「この壁へ樂書すべからず」と書きました。

讀者倶樂部

▲皆様は隨分いろんな面白い事や珍らしい事を御實驗あそばすでせうが、此誌上で少々おすそ分けをして下さるわけには參りますまいか。(筑後光子)

▲チョイト青年男女の體格比較をして見ませう、一體女子の早熟な事は皆様御存じで御座りませうが、之を男子の同年配と比較して見ますと一層面白いです、サテ去る四月に私地方の女學校の體格檢査の醫師の話に依りますと、十三四歳迄は女の方が丈が高いです、十五歳になりますと男が大分高くなります、十六、七歳になりますとズット高く超えて仕舞ひ、即ち三寸餘も高くなつて仕舞ひます、然し體量の方で見ますと十五歳迄は女の方が重いですが、十六歳を過ぎますと漸く男子の方が重くなり、ソレが十七歳になりますと實に驚く程差を生じて仕舞ふのです、即ち女子は十四五から十六歳迄に早熟してチヤント成人して仕舞ふらしいですが、男子は夫れからが大變に發育することゝなつて居る樣です。(播磨河中あさ子)

▲昨年頃からの本誌の御愛讀の方は内藤千代子さんの名を御忘れにはなりますまい、君の御麗筆を心の日記と心の秘密とで拜見して感心いたしましたら、その次に驚く手紙で何と評していいか、ことに六月號の逝く春を讀みまして益々君の平凡な方でないのを痛切に感じました、女らしくて、どこかシッカリした方でせうれ、私何だか御なつかしくて〳〵。(福井澤子)

▲夕ぼし樣の仰せの一日のうちの樂しみは私も略同じ樣ですが、都會と田舍で御座いますから幾分か相違があります、其の異つて居る點のみをあげて見ますと、私朝早く起きて姉や女中と共に料理をする時、琴に行く途中一里の間俳句や和歌など考ひながら行く時、夕方兄弟打つれて稻田を吹き來るそよ風に吹かれながら樂しく談話する時などが最も樂しい時です。(埼玉しぐれ)

▲前號クラスメイトと仰せられた方へ、仰在る通り私は仙臺の女學校を出ました者ですよ、あなたはどなた？たゞクラスメートでは分りませんわ、お名あかして頂戴、おなつかしいわ、私仙臺を出てからまる二年餘になりますよ。(小林明子)

▲甲賞と題賞された短文を讀んだ、讀み終ると賞品を見た、今度は乙賞のをよんだ、又賞品をみた、又もとの所をあけて丙賞も秀逸も讀んだその都度賞品の所をあけた、甲賞と乙賞とは三十錢違ひ、乙と丙、丙と秀逸とは各二十錢違ひといふことも承知した、――ふん是位の文なら私でもと思つたが、まて筆をとつてみるとなかなか書けん、始じめて甲賞の甲賞たる價値がわかつた。(東京桂子)

▲衣かつぎの女樣、誠に御同情に堪へません、私も十六歳の時より今年に至る迄丸十年の間髮が拔けまして誠に〳〵困つて居ます、元より醫藥は出來るだけの事はしつくしましたけれ共、何の効能もありません、婦人としてこれ位離儀な事は有ませんでせう、貴女樣の仰せられる樣な事も承りましたから色々氣を付て見ますが、少しもよい事は見つかりません、若し其内よき便りもお聞きになりましたらどうぞお知らせ下さいませ、お住居は何地で入らしやいますか、末永く御交際を願ひます。(播州明石近の者)

▲私は何が好きだと云つて子供程好きなものはありません、ルビーを白絹もて包んだ樣な皮膚の頰へ、眞赤なお友染の衣にトキ色のみ帶をダラリと結び下げ、まばゆい樣な白の西洋前掛けをして、紅葉の樣な手をかざし、花べんの樣な唇して、おぼつかない舌で何かいひながら、木の葉の風に散る樣な歩き方して遊んで居るさまは、實にか愛いとも神々しいとも、私は千代萬世まん〳〵年見て居てもあかないと思ひます。

(京都いく)

▲牛込の百合子さん、妾は貴女のお顔も知らん癖に貴女が何んだか懐しい様な氣がしてなりません、妾は貴女が毎度ながら文章のお上手なのには感心しました、妾は何度投書しても一度も出た事はありません、什麼か貴女の文章の秘訣と貴女の細かしいお住所とをお教へ下さい、お手紙を差上げたいですから。(丹波本郷莉子)

▲皆樣私は十五六歳のもの丶結んでゐる「まがれつと」の結び方と、ローマの結方とをしりません、どなたか後生ですか、教へて下さい、御願ひ申します。(稍筑の愛讀少女)

▲八月號短文欄にて御名文を拜見致しました埼玉の松本たか子樣、同じ姓名にて何んとなく御なつかしう御ざいます、誠に埼玉には私の親しい學友が居りますのでなほ／＼御なつかしう御ざいます、何卒誌上の讀者倶樂部にて御まじはり下さいませ。(茨城松本たか子)

▲皆樣の中にどなたか國民中學會發行の女學講義錄御持ちの方が御ざいますか、若しおありになれば全部おゆづりいたゞきたう存じます故、何卒失禮ですが讀者倶樂部迄御住所と御名前を御知らせ下さいまし、直接手紙にて伺ひたう存じます故。(本郷梢子)

▲衣かつぎ樣、ほんとに御無音申しあげます、私も幼い時はまるで昔のお姫樣の樣だと人からほめられましたほど長く多いいゝ毛で、これだけは人におくれをとらないつもりでをりましたが、どうしたのか去年の春あたりから病氣も何もせぬにどん／＼ぬけて少くなるばかりならまだしも、恥かしい位短かくなつてしまひました今はよんどころなく大きな入毛を入れて結つて居りますが、ほんとに髮のわるくなるのは御同樣いやでございますわねえ、私も假髮の工夫も何もしりませんけれど、御歎きのよしを承りまして、實に御氣の毒に思ひます。(四谷櫻子)

▲讀者諸嬢方に御願が御座います、私は小學校に奉職致して居る者で御座いますが、兒童に教へます、遊戲唱歌の材料に乏しくて誠にこまつて居ります、若しも皆樣の中に尋常科の遊戲唱歌教授法の本が何處に賣つて居りますか又價は何程ですか御存じの方が有りましたならばおそれ入りますが此誌上で御教へ下さいませ。(茨城女教師)

▲諸姉君たちよ、七月號の讀者倶樂部のうちに北米のモンテシノ市に居る米國人の學生から繪葉書交換を致したいと申してまゐりましたが、實はあの中には友の知人もあるので、私は一昨年から文通いたして居ります、英文などではなか／＼かけませんので、私はいつも日本字で書くので御座いますが、皆樣がたもどうぞどし／＼御送り下さいますやう御願申上ます、必ず返事は參りますから、日本字で書きましても其知人が居てやくしてやるのださうで御座いますの。(石川百合子)

▲羽倉みよ子樣、あなたは折り／＼鼻血が出て御困りなされますさうですが、さういふ時にはあのこんなこと申しましては御笑ひ遊ばすか存じませんが、「たらひ」に水を少こし入れまして、其中へ立つて足を冷やしますと、すぐ止むさうで御座います、御ためし遊ばしては如何で御座いますか。(大阪あい子)

▲子供と云ふものは大人の云ふ事を何でも皆實に受けますから、萬事氣をつけなければなりません、昨夜四歳になる子供を御湯に入れようと思ふて、さあ母樣と一緒に御湯に入りませう、と申ましたら、子供は今入る／＼と申て何處へかあそびに出かけました私は何氣なく早やくおいでと申して先に入りましたら、子供はやがて歸つて來ましたが矢張り今入るのだと云ふて決してはいる氣色はありません、そして度々私が申しましたらおしまひにはつい泣き出して、而かも今入るのだと云ふてちつとも入る樣子がありません、それで私は何事だらうと思ふて一人でお湯の中でかんがへて居りましたが、初めの内は一寸とも明かりませんでしたが、なる程大人がわるいのでした常々何か用事をして居る時は、お菓子でもくれと申しますと、たいがいの人は今やる／＼と申して其用事のすむまで待たせて置きます、それで子供は今と云へば少し後の事だとのみ思ひ込んで居るのでせうほんとうに私はおどろきました。(京城武藤ちり子)

新刊紹介

▲世界漫遊案内　坪谷水哉著

本書は水哉坪谷善四郎氏が去る四十年九月、世界漫遊の途に上りてより、月を閲する約十月、其の間人々の遍遊する所は勿論、餘り人の行かざる愛蘭、西班牙、土耳其、希臘、丁抹、諾威、瑞典等に至る迄普れく經巡りて、地理、歴史、風俗等を巨細に觀察し、歸來其の親しく歴巡して得たる豐富なる材料に基き、一年有餘の苦心を重ねて、漸く大成されたるものなり、君は由來旅行に就て特別の趣味を有して北は樺太より南は台南に至るまで日本國中足跡殆んど到らざるなく、而かも行く處として痛快なる觀察、輕妙なる紀行文ありて、興趣なか〳〵に盡きざるものありしは人の知る所、今や更に歐羅巴、亞米利加、亞細亞の三大陸を跋渉して此の著あり、其の世間有りふれたる漫遊記の類にあらざる事は喋々の贅辯を俟たず　先づ筆を横濱埠頭より起してぐるりと世界を一周する其の間に、船中生活の趣味情狀を初めとし、都會觀察、風光談、遊覽地見物、工場、農園の視察、各都會の繁昌記、名勝古跡の探檢等ありて、其の痛快の筆は出でゝいよ〳〵面白く、又卷末に附錄として掲げられたる海外旅行手びきは、著者の經驗に依つて出發前の準備より海外中の注意等を詳細に述べられたるものなれば、今後洋行せんとする者の一讀すべきは勿論、亦遊ばざるものもこの書によつて、歐米文明國の狀態の詳細を知るべく趣味と實益を備へたるものなり加ふるに挿入されたる百四十餘種の寫眞は、著者が旅行中に苦心して蒐められたる數千種の中より粹を拔きたるもの、而して其の印刷、製本、製版等は現代我國に於ける最上の注意を加へられたるものなれば其の精巧なる驚くべく此の種のものとしては實に空前の良著なり、（定價金一圓七十五錢、博文館發行）

▲實用花むすび　附うちひも　木内菊次郎著

其の收むる處は組其他結物の數數百種の多きに及び、一々圖を示して委しく説明を施しあり、孰れも著者が多年博物館、神社佛閣の寶物、或は古き繪卷物などに就きて一々取調べたるものの由なり、出所考證等もほゞ確實に近きが如し、然かし多くは一般に心得置くべきものを摘みたれば、普通家庭に具へて便利ならん、或は技藝を教ふる各種の學校の教師生徒の參考用としてもよろし、定價金五十錢、實業之日本社發行、

▲弔花小品　齋藤弔花著

小品叢書第四篇として出づ、紀行文あり、日記あり、叙情文あり、短篇小説ありて、孰れも百花咲き亂るゝの槪あり、美文に志す者の好侶伴ならん、定價金五十錢、隆文館發行、

▲兒童博覽會　みつこしタイムス臨時增刊

嚮に三越吳服店に於て開催せる兒童博覽會に就ての由來、狀況、及びこれに關する諸家の演説筆記等を集めて一册となしたるものなり、卷頭には數十頁の美麗なる寫眞版に繪を附して、其の内容も有益なる記事少なからず、定價金五十錢、三越吳服店發行、

▲二葉亭四迷　坪内逍遙・内田魯庵編

藝術家にあらず、又文士にさあらず、思想家にあらず、實業家にあらず、而して志士革命的詩人の毛色を帶びたる一種の人格二葉亭四迷氏一朝印度洋の波に消えてより、氏の交友知己は勿論、世間其人を知ると知らざるとを問はず、齊しく愕然として其の長逝を悼み、其の數奇の運命を嗟嘆せざるものなし、氏は何故にこの如く多くの人々より其死を悼まれしか思ふに其人物性情の上に一種獨特の資質ありしが故ならん今回氏の友人坪内内田兩氏相謀り普れく氏の交友知己に檄して其の追悼の文を募る、集めて完成したるもの即ち是れなり、これを讀むに文壇

知名の士は勿論政事、實業、宗教、教育其他各方面の人々いづれもこの不思議なる一大人格に就て其の裏情を披瀝し、讀者をしてそゞろに同情の涙溢るゝを禁せざらしむ、蓋しそのこゝに至るもの其人の德の致すところなるが故ならん、定價金一圓五十錢、易風社發行、

▲世界無錢旅行　押川春浪著

冒險界の一大怪人として怪名高き中村春吉猛士單身を以て全世界を旅行せんと企てたるは斯界の一大壯快事として天下青年者の血を躍らしたり、彼れ鐵の如き身體を以て三年有餘身を荒原砂漠、森林の間に曝露し、猛獸、毒蛇と戰ひ、寒熱、飢餓と戰ひ、凡そ人間界にあらん限りの困難辛苦、危險の數々を冒して首尾よく其の目的を遂し到るところ日本の怪人を以て迎へられ世界各地の人々を驚かしたるは眞に痛快の事共なり、今回押川冒險氏この顚末を記述して一篇の旅行記を作る、これを讀むに記事の壯快なる自から身の戰くを覺えしむるものあり、定價三十八錢、博文館發行、

▲花つみ日記　姉崎文學博士著

歐洲の日本と稱されたる。山水國、詩的風景に富める國として歷史上に物語の多き古ローマの國、イタリヤは、詩人、畫家、宗教家の多年憧憬するところなり、姉崎博士即ちこの美的國土に遊んで親しく其の風物に接し歸來その所感を記し題して花つみ日記といふ蓋し古ローマの天然、美術の紀錄、宗教、文明の評論として一讀すべきものなり、

▲芭蕉句集講義夏の卷　角田竹冷著

本講義は每月籟鳴窓にて開講せしものにして明治三十七年一月以降雜誌卯杖へ連載せる講義筆記の稿本を基礎とし、更に誤謬を正し、十分異說をも容れて訂正編纂したるものなりと云ふ本編講者には竹冷氏の外十數名あり、春の卷は刊行されたるが、尙は秋の卷以下は引續刊行する都合の由、同好の士の良參考書ならん、定價金參拾八錢、博文館發行、

▲通俗作文全書小說作法　田山花袋著

小說に對する著者の經驗感想等を秩序的に叙述したるものにして、初學者の參考に資する爲めつとめて平易簡明に說明されたり、其の內容を記せば、小說と作法、著者の經驗、初學者の爲めに、叙事抒情及び會話、ロオカルカラー、讀者と作者、其他數項あり定價金參拾五錢、博文館發行、

▲娘に與へたる母の書翰（後編）　堀內新泉著

著者が母より娘に與ふる體にして書きたる書翰文を集めたるものなり、前篇は數年前に春夏の部を收めて既に刊行されたるが、本書は其の續篇にして秋冬の部に當る、前篇に依つて略々其の內容は知らるべけれど、尙ほ其一般を記せば、第一信妻の任務を敎ふる書、第二信體育の大切なることを諭す書、第三信人の義務を敎ふる書其他二十餘信孰れも人間として、特に婦として心得ふべき大切なる事のみを收む、定價金五拾錢、實業の日本社發行、

▲後編トンキホーテ物語　佐々木邦譯

原著者は西班牙のセルヷンテス氏なり、本譯は其の抄譯本を意譯したるものなれば、之を讀みても未だ眞にドンキホーテを知るべからざる事勿論なるも、然も能く要を得て其の妙味を逸せざりし處は多とすべし、定價金四拾錢、內外出版協會發行、

本號口繪三色版に收めたる「夏の椽」は洋畫界の逸才高村眞夫氏の作昨年文部省展覽會に出品して優賞を博したるものなり。

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	……金二十錢
四册（三ヶ月分）	……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册 增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）	

郵税 一册 二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓半錢
半頁（廿二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十八行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●前金拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十二年九月一日發行 第九卷第拾壹號

編輯兼發行人 松原岩五郎
印刷人 山田英二
印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

電話 本局 三千百十番 三千三百八番 二千六百二十番 三千二百廿九番

(後付の二)

婦女必讀の大全書

第十一編 編物指南
女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十三編 教育お伽噺
少年世界記者 木村小舟君著

第十五編 家屋と庭園
內山正如君著

第十七編 女子作文法
遠藤ふみ子女史
松崎ふく子女史 共著

第十二編 婦人の生理と衞生
青山學院教授 牧野清子女史著

第十四編 女德の養成
前田長太君著

第十六編 魚鳥家畜の飼養
農業世界記者 鹿野化骨君著

第十八編 子女の教養
私立高等女學校長 棚橋絢子女史著

第十九編 家庭の趣味
文學士 大森兜山君著

◎第一章 緒言●婦人の特色●婦人の天職●良妻賢母●婦人と趣味●家庭問題の由來●昔の家庭と今の家庭(外七項)◎第二章……模範の家庭實例(九項)◎第三章……家庭に就きて(十八項)◎第四章……家庭の趣味(十四項)◎第五章……趣味に就きて(十三項)◎第六章……家庭に關する歌句(六項)◎第七章……家庭に關する格言と諺(四項)

第廿編 家庭遊戲法
高橋忠次郎君
松浦政泰君 共著

【第一編】室內遊戲の部●作字遊び●通信遊●軍師拳●遊蕩才●指環搜し●年中行事●百足遊び●文句綴り●旅行誅●一分間演舌●毀れ木像●毽撞き競爭●搜し物●文章綴り●十二支廻はし●懸寄せ●折物競爭●暗夜狩人●面資り●物盡し●釣り喰ひ●煎餅の喰ひ競べ……外八十項【第二編】室外遊戲の部=▲蒸葉遊び▲御馬遊び▲兎遊び▲水車▲手卷き▲熊と猿▲羽打ち▲場所取り鬼▲廻り鬼▲鐵道遊び▲池の鯉▲輪拾ひ▲南瓜割り▲隱れ鬼▲蛙の水入競爭▲友捕り鬼▲不倒翁……外廿五項【第三編】季節遊戲の部=◎春季遊戲(十六項)◎夏季遊戲(十四項)◎秋季遊戲(十四項)◎冬季遊戲(廿六項)【第四編】英語遊戲の部=◎考案遊び(十三項)●早口ことば(九項)●英字遊び(七項)●英語遊び(十八項)●英文遊び(十八項)●英文學遊び(五項)

第廿一編 書道手引
歌道書道專攻
大和會長 井田秀生君著

●總說=書を學ぶ必要●第一章=文字の始め△支那の文字(第一世紀古文時代…外八項)△日本の文學(第一世紀書の發芽時代…外八項)●第二章=書の學び方△書と他の學科との關係△書の流義と樣式△習字の用意△筆の執り扱ひ方●第三章=文字の部分解剖△書 部首、偏、旁、冠、繞、構及沓 掏●第四章=書法△楷書の運筆法(運筆の基礎外一項 △楷書結構法(文字の組立法外二項)△草書の筆法 草體の變化外二項)△行書の 法(眞行草各體の特徴外 項)△假名書法 普通假名外三項) △各書體練習法(筋肉練習、草書假名外二項)●第五章=書に就ての參考△墨道要說△書道名家の逸事△墨道雜話

日用百科全書拔萃目錄

裝禎 每編洋裝菊判紙數二百卅頁以上 口繪極彩色木版寫眞版挿入 **正價** 一冊 廿五錢 郵稅各六錢宛

●和洋禮式 全
▼茶の湯と生花 全
●實用料理法 全
▼家政案內 全
●裁縫と編物 全
▼育兒と衞生 全
●通俗書簡文 全
▼西洋料理法 全

▼作文自在 全
●圍碁と將棋 全
▼作歌自在 全
●秘術傳法 全
▼日常行爲法則 全
●易占及骨相法 全
▼果樹と蔬菜 全

發兌元 東京日本橋本町三丁目 振替口座東京二四〇番 **博文館**

(後付の五)

通俗作文全書

◀全部完成▶

記事論説或は紀行叙事等の雄編大作より尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の状況を見るに、百般藝術の駸々進歩するに反し作文の技のみ獨り退歩の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を教ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を稗補する所あらんとす。其の目次は下に列記す。

全部廿四冊洋裝四六判
並製紙數三百頁
正價一册三十五錢
郵稅一册六錢宛

- 第一編 大和田建樹君著 ●文章組立法
- 第二編 大和田建樹君著 ●書簡文作法
- 第三編 田山花袋君著 ●美文作法
- 第四編 天城安政君著 ●商業作文法
- 第五編 青柳篤恒君著 ●評釋 支那時文軌範
- 第六編 西村醉夢君著 ●紀行文作法
- 第七編 福田琴月君著 ●寫生文範
- 第八編 河村醉茗君編著 ●論說記事文範
- 第九編 西田敬止君著 ●女子消息文範
- 第十編 森田米松君著 ●書翰文範
- 第十一編 大和田建樹君著 ●日記文範
- 第十二編 石崎篁園君著 ●祝賀弔祭文範
- 第十三編 山川直五郎君編 ●中等學生文範
- 第十四編 生田星郊君編 ●明治時代文範
- 第十五編 堀江秀雄君編 ●言文一致文範
- 第十六編 太田才次郎君編 ●古今名家尺牘文
- 第十七編 武田櫻桃君編 ●古今名家文選
- 第十八編 河井醉茗君著 ●新體詩作法
- 第十九編 久保天隨君編 ●新體漢文軌範
- 第二十編 近藤正一君著 ●古今才媛文集
- 第廿一編 久保天隨君著 ●美辭類語集
- 第廿二編 窪田空穗君著 ●短歌作法
- 第廿三編 內藤鳴雪君著 ●俳句作法
- 第廿四編 田山花袋君著 ●小說作法

販賣用電話 本局二六二〇番　東京 本町 博文館　振替口座番號 東京二百四十番

新藥に就きて

最新發明 肺病。肋膜

獨逸ドクトル 高木醫學博士（醫事週報二一七號報告再錄）

新治療劑は本藥の諸結核に用ゆる度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥應用後は常温に復し患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を増進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者に付き其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）女子三年前發病遂に末期重症の**兩肺結核**に罹り咳嗽たん盜汗動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々咯血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽咯痰を輕減す服藥貳週咯血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某 卅一歳男 **肋膜炎**（咯血無し肺尖初期の疑あり）胸痛み食不振身體倦怠盜汗。咳嗽。頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	無効
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	全治
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

成績	患者	性	病名
全治	籠谷	男	兩肺結核末期
全治	宮本	女	結核性肋膜炎
微効	富田	男	氣管支加答兒及肺炎
全治	阿崎	男	右肺結核及腹膜結核
全治	神村	男	肺結核初期

斯の如き好成績は在來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名響の發明藥として報告する義務あるを信ず本劑は元藥一ポンド六十圓の高價藥なるに關らず一週貳圓二週參圓九十錢四週五圓七拾錢四週七圓貳拾錢に經濟の許す限りの藥價を以て分藥する者にて一の賣藥に非ず又効力多大にして在來の醫藥諸藥の如き長き服藥無しで全治す殊に**咯血**と共に豫防に可驚効あり又他藥と混服害なき故醫藥の傍ら服用妙なら ん本藥入用患者は東京神田竪大工町十三番地療養院製藥所**村尾明治堂**（振替口座東京壹四參壹九番）へ右料金添へ申込あらば至急送藥す吾人は患者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むると共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す

●又服藥希望なき患者も遠慮なく送料郵券二錢添申込あらば新治療法の書を無代貰ひ受け是非一讀あれ參考する處多からん

跡見花蹊女史題詠
東京女子美術學校卒業 鈴木松子女史著

家庭實用 新式美術造花

全一册洋裝菊判 石版着色美製本 正價五十五錢 郵稅六錢



本書の目的と特色

●本書の目的は家庭用、學校參考用或は獨學者の爲め拵へたもので内容豐富説明懇篤婦女幼童にも極めて了解し易く最も恰好の良書である●本書の特色は從來の造花書と大に其選を異にし植物學を基礎として著者多年の研究を著はしたるものゆゑ正確にして且最も進歩せる造花を拵へるに適します●本書は從來最も閑却せられた枝統又は葉の製へ方に最も注意し精密なる挿圖數百を揭げ丁寧に項目を分ちあれば頗る見出すに便利である●本書は通常の造花書と異り單に方法を示すに止めず何故に斯くするかの際どい理由を詳説してあります

◁發賣元 東京日本橋本町三丁目 博文館▷

女（後付の入）

女學世界
明治四十二年九月一日發行 毎月一回一日發行
第九卷第拾壹號
明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可

(定價金貳拾錢●郵税貳錢)